

異色ある新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

男色天国繁昌記

都會の隅に渦巻く驚異の波紋を看し得る

12月

記録 暴露 捕物 探偵 実話 犯罪 告白 探訪

奇譚クラブ

奇譚クラブ

十二月

定價九拾円



女の淫楽殺人



幾久藏 伶

軟派雜誌界の寵姫

奇譚クラス

新年号の威容!!

原稿募集

- 1 珍談奇譚 (枚数、五枚・半枚)
世に知られざる珍奇なる話。古今東西のものを扱います。エロチックでユーモアを含んだもの歓迎します。
- 2 探訪記事 (枚数、十枚・冊枚)
社会の裏面、特殊施設、都会の盛り場、温泉、観光地、農村風景、すべて興味本位の裏見聞、探訪記。
- 3 体験告白記 (枚数、二十枚迄)
驚異に満ちた特殊な体験記、又は異常な生活の告白記、その語は問いませんが、なるべく真実の語をのべてください。
- 4 軟派文戯 (枚数、二十枚迄)
軟派な文戯であればなんでも結構です。写真、挿絵、絵画があれば好都合です。同様のものはいりません。
- 5 暴露記事 (枚数、二十枚迄)
政治、経済、スポーツ、政治、その他あらゆる方面の暴露記事。エロチックな暴露記事も歓迎します。
- 6 變態読物 (枚数、二十五枚迄)
アブ・ノーマルな人物の伝記、変態性癖者の行状、異常な人物の行動を描いた読物、その他あらゆる変態資料の読物化。
- 7 笑話、小話、コント、漫画、挿絵
笑話、小話、コント、漫画、挿絵。挿絵は特に求めません。

閨房の木乃伊

異色短篇集(賄代・罰金)

小説永田町界隈

現地 現心怖の北海道

慰安婦部隊出征
呼子港の女船頭

狼親衣掛圓繪
俳優養成所のインキキ

諸国変人奇人めぐり

あばく

・だこのとつあん・悲願千本ぬき異聞
・男湯をのぞく番女・娼婦時代の思出

探訪報告記公衆電話をける女の後を

怪奇小説 餌物箱

力ツラを忘れたお嬢さん

上海脚 淫禍の果

セミドキニ 幽囚十ヶ月

印度宮廷秘史 娼婦ウトラヴァルナー 読物満載

爆弾娘魔窟へゆく・見上る寝業ナイロン土俵

断然読みごたえある異色風俗雑誌!



女裸れる龍衣

民間放送のスターを夢みた娘に
襲いかかるY映画製作者の魔手！

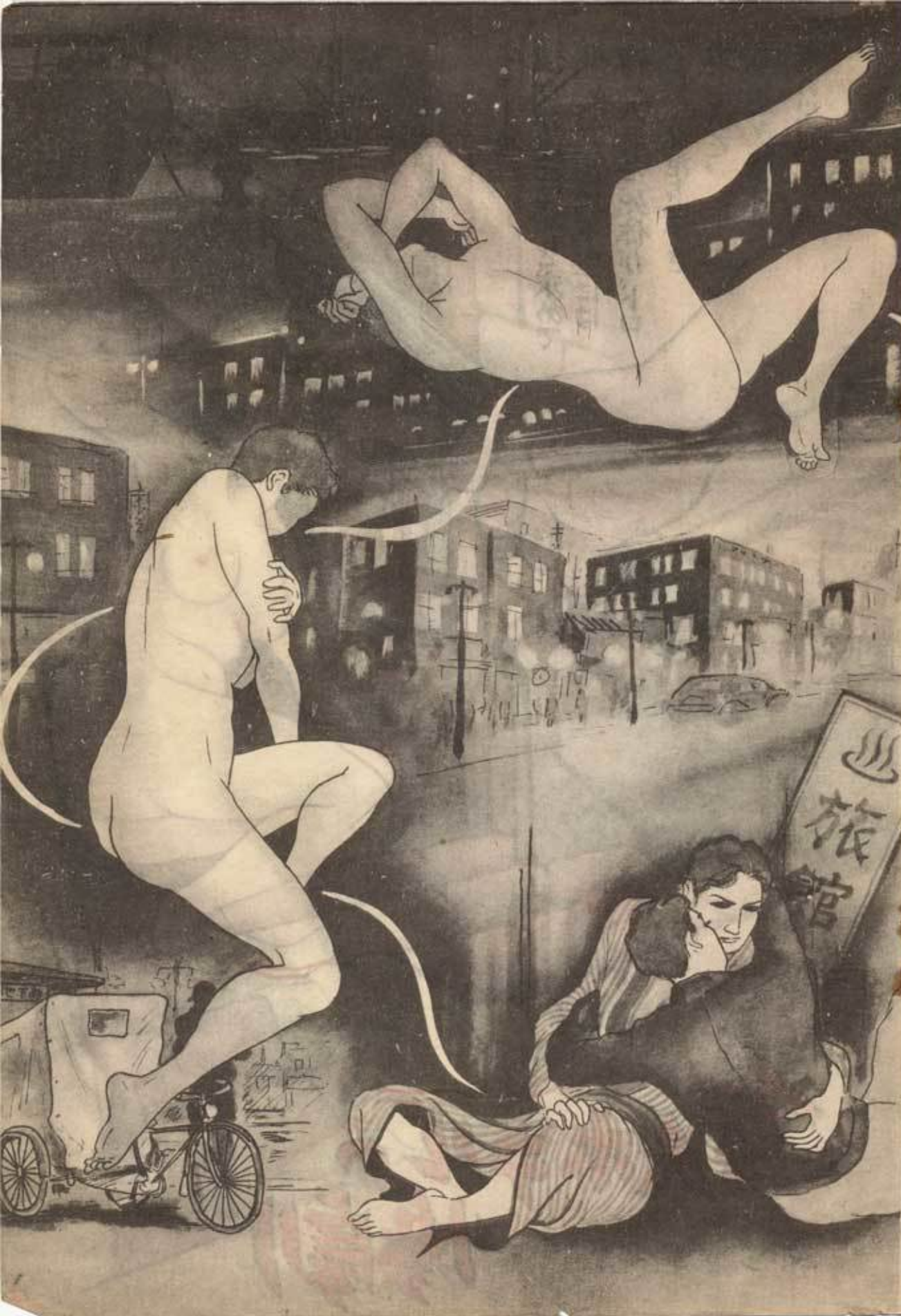
密室に閉じ込められた

彼女の運命や如何に

本誌二六頁「女体周波数」を
必見せられよ！！



玲子画



キヤーツ
彼女が逃げ場を求めて
飛び込んだ地下室には
桶に入れた死体がドロ
ドロと血泡をふき
出していた。
恐るべき食人
鬼の出現！

食人ホテルの 惨劇

京二 三

人肉市場



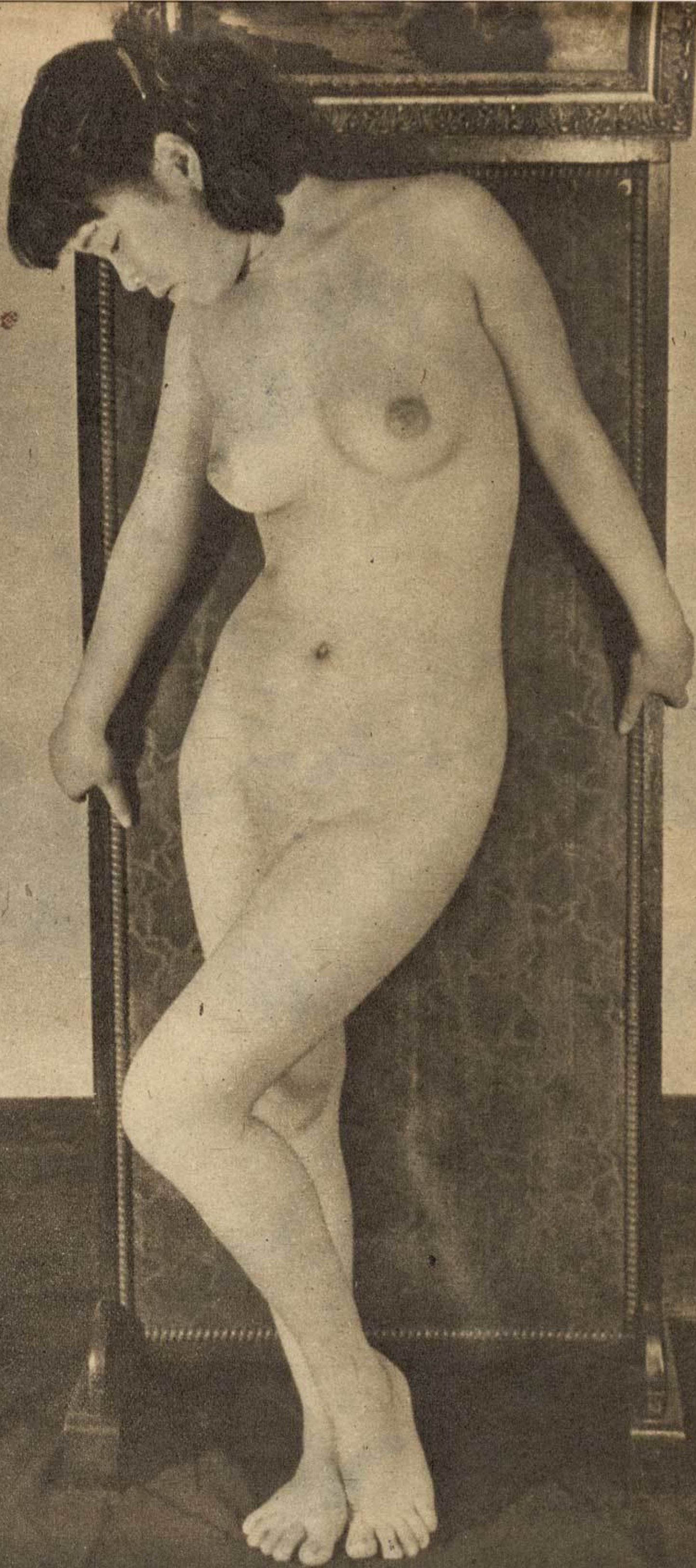
いけにえ
犠牲にされた女



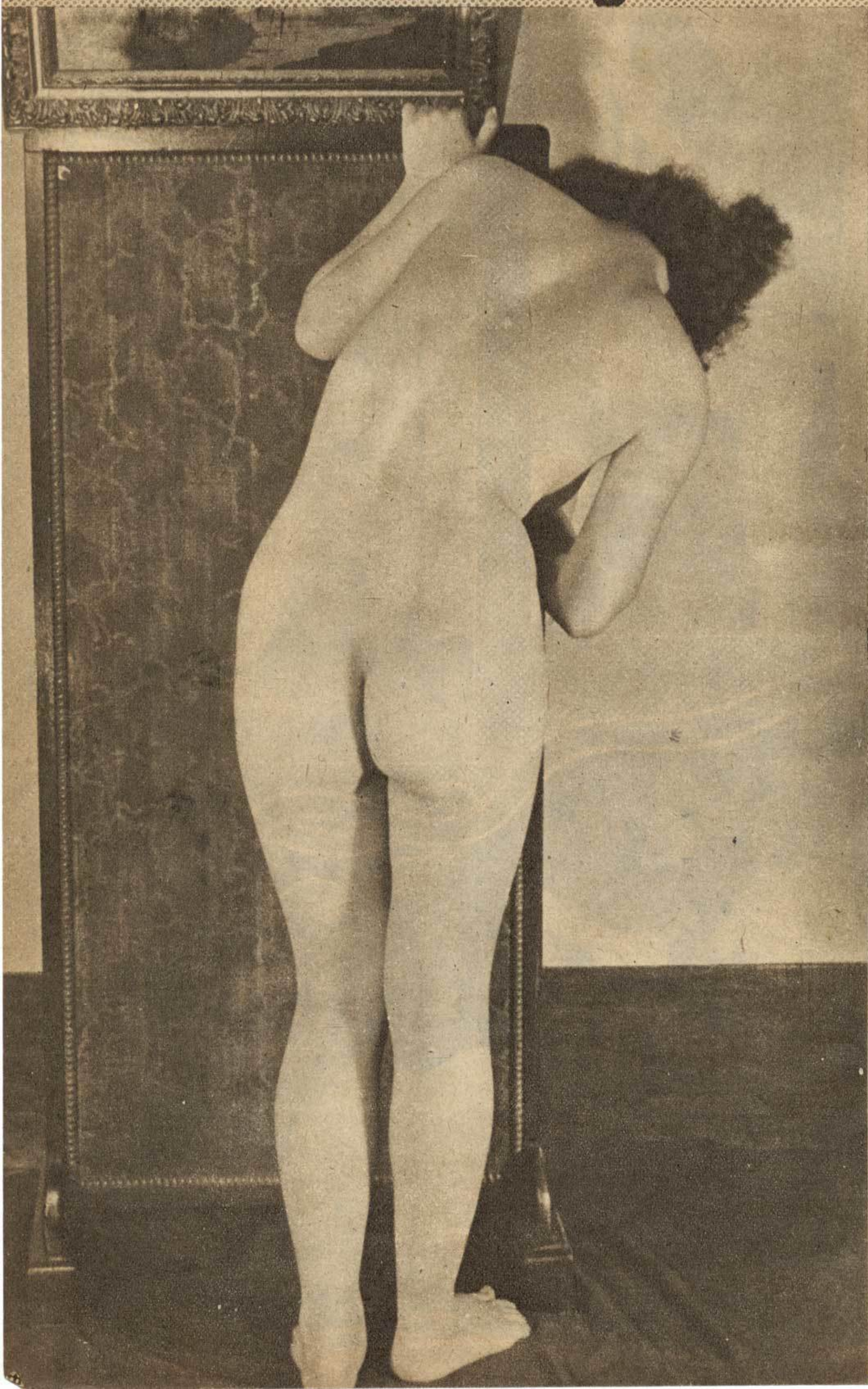


縛られた娘たち

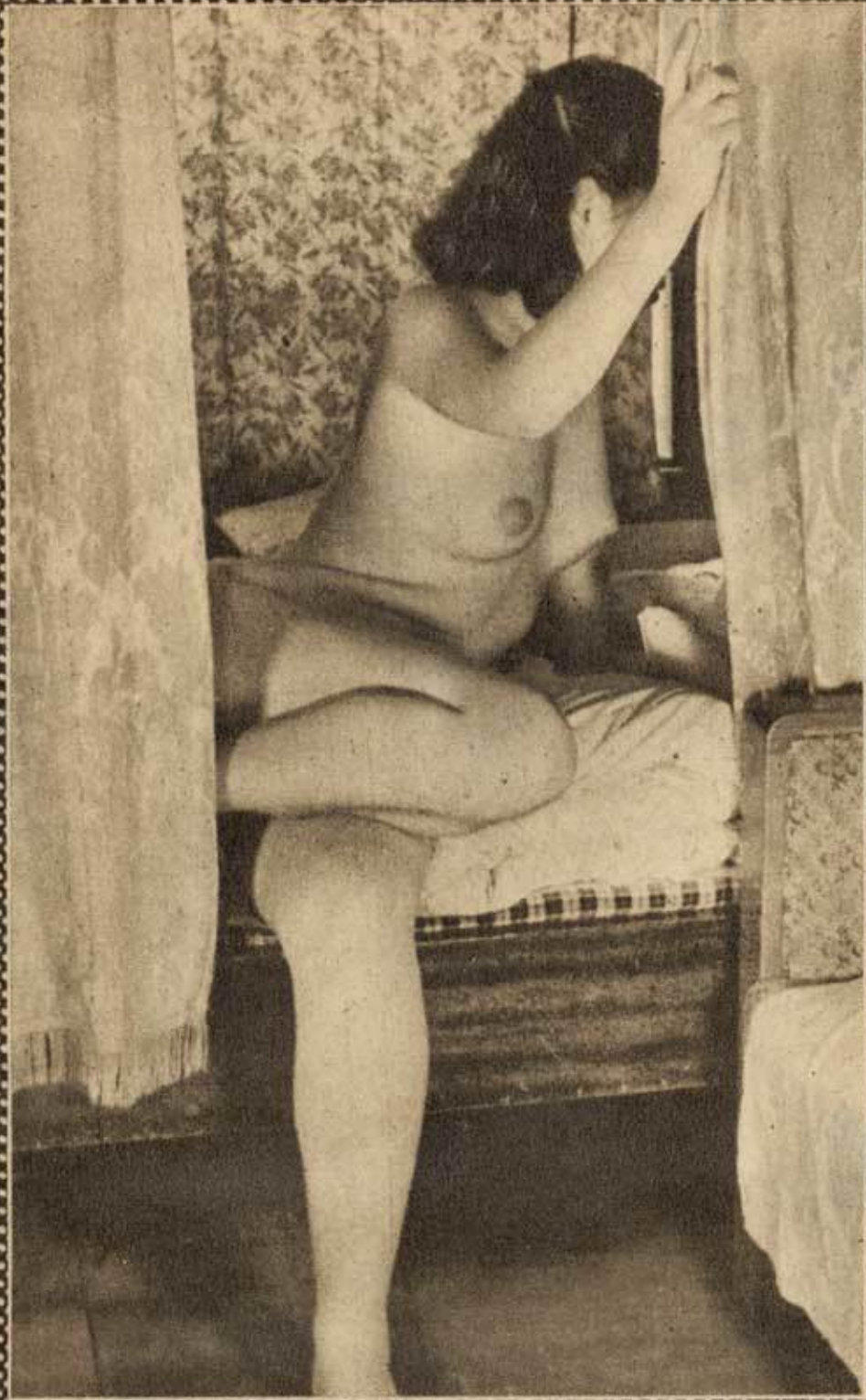
美しき商品の



裏と表



紅
閨
翠
帳
の
か
げ
に



三態娘の恥



今宵より心おきなく柔肌を
人に見えせむと思ひあつ物肌は



断然群誌を圧して読みごたえのある
軟派雑誌の王者!!

ボクの女歴を告白する

童貞仕末記

やるせない気持ちでボクは 足利学
お嬢さんの肉体に……

押れる 港三四郎 連絡船

連絡船の船中で 彼女の処女は遂にうは
われてしまった……家出娘と四十女の受難
ものがたり……

麻雀 賭博者と妻

金のかわり
に毒の肉体を
賭けて……

北川 春男

催淫草

催淫草を採集する山小
屋に 一人の女をめぐって
三人の男たちが……

北海広介

浮世からくり

桃色伝言板

を探る

伝言板にこんな秘密があ
るとは……



奇譚クラス



グラビヤヌードアルバム 人肉市場

天王寺公園の風紀調査夜草京介

微苦笑天奇抜心中実話集 葉山研一

浮きやうり

色伝言板を
桃伝探る

国鉄大阪駅+娼婦の宣伝戦
南海なんば駅+恋愛乙ゲーム
阪和天王寺駅+奥様浮気求縁帖
近鉄上六駅+求愛状の代筆
京阪天満駅+肉愛流転特別急行

53 88 60

事実小説 揺れる連絡船 港 三四郎
画 美濃村 晃

民間放 女体周波数 新水嶋吉
送異聞 画 七比古 玲子

変態 殺人淫楽症の女 緑 猛比古
繪巻 画 今 幾久 藏

薬草奇譚 催さい淫草 北海広外
草 画 山 幸 玄 木

時代艶 元禄浪花やぶ 天王寺 星七
ボクの女歴 画 今 幾久 藏

童貞仕末記 足利 学
を告白する 画 七比古 玲子

曲艶夢十夜一夜 二俣志津子
画 志乃田 よしろう

軟派小説 麻雀賭博者とその妻 北川 春男
画 加住 とし ち

敗戦秘話 曙は湖に似たり 井村 幸男
画 木 林 あ きら

怪奇小説 食人ホテルの惨劇 杉山 清詩
画 箕田 京 乙

古界獵奇研究會 神戶 日向路 旌
支部 画 須磨 じゅん

アフレ神さま大流行 大木 悦二
門 好 太 郎

戦後派ちんぴら悪業記 能登 一三
うちの隣りは競輪娘

姪まされに女学生 小宮 浩 四股を踏む娘等
女学生集団裸体写真事件 まきの加代 土俵 四股平

男色天国繁昌日記

男色誘惑者の手は伸びている…… 美少年の或る体験
口の中の悪魔に魅せられる 南里 文彦 稻生 伸一郎

性的倒錯者訪問記 鹿島 孝江

表紙 磯田 卓司・口絵 箕田 京・比尋 玲子 今幾久 藏 志乃田 よしろう

37 114 104 72 84 96 69 108 64 80 118 128 100 92 116 76

夢艶十夜

二侯志津子作画



男色天国繁昌記

男性に生れながら、男性しか愛することの出来ない
男色愛好者——

男性に生れながら、男性に愛されることによつて、
生き甲斐を感じる男色提供者、

男性を妻として同棲する性的倒錯者などかくれた男
色マニアの数は夥しいものがある。

彼等は男娼と違つて表面に出ないから、一般にはわ
かりにくい、本誌の鋭い探査の手は彼等の裏面を余
すところなく暴きさつた。

しかしこれは單に興味本位のルポルタージュではな
い。現在の世相の断面を描く一風物詩である。

發端

公衆便所の落書 を寫した手帖

私が靴磨きの少年、雪田伸吉を初
めて知つたのは、長らくの炎天続き
でバスが通るたびに砂ぼこりが舞々
と地面から巻き上つて、黒の革靴を
真白にする八月の末であつた。

サンマー・タイムの六時といえ
ばまだ陽が高かつた。関西線の汽車が
黒煙を上げて天王寺駅に滑り込む夏
の黄昏である。

私は近鉄ビルの東側に並んだ公衆
電話のボックスの中で、料金箱の右
の荷物置台に置き忘れられた手垢に

汚れた小さな手帳を見るともなしに
手にとつた。

細かい鉛筆文字が判讀し難い程乱
雑に書きなぐられてゐるのに目を通
すと、私は電話を掛けるのも忘れて
その文字の跡を追ふこと熱中し出し
た。電話は丁度話中のブーブとい
う新続音の合図があつた。

私を魅きつけたその手帳の文句と
いうのはそのまゝ、こゝに公開すれ
ば忽ち猥せつ罪に問われそうな文
句の羅列である。綿々と書き綴られ

た艶書のようなもあり、日記のよう
でもあつたが、しかし、細細によく
読んでみれば、艶書でも、日記でも
なく、丹念に書き集められた便所の
落書集であつた。

私は電話を掛けるのを思い切ると
その小さい手帳をポケットに放り込
んでそのボックスを出て、阪和天王
寺駅の方へ足早やに
歩いていった。この
小さな手帳一つが、
これから述べる男色
天国繁昌記の発端に
なるう等とは夢にも
考えないで——。

私は陸橋の中途迄
行き着かないうちに
一人の少年に呼びと
められたランニング
シャツにカーキ色の
半ズボン、セルロイ
ドの日除帽をアミダ
にかぶつて、円らな
瞳で私を見上げてい
た。その薄汚れた服
装の中にも、私が彼
に呼びとめられても
不自然に感じない程
彼には何か氣品が具

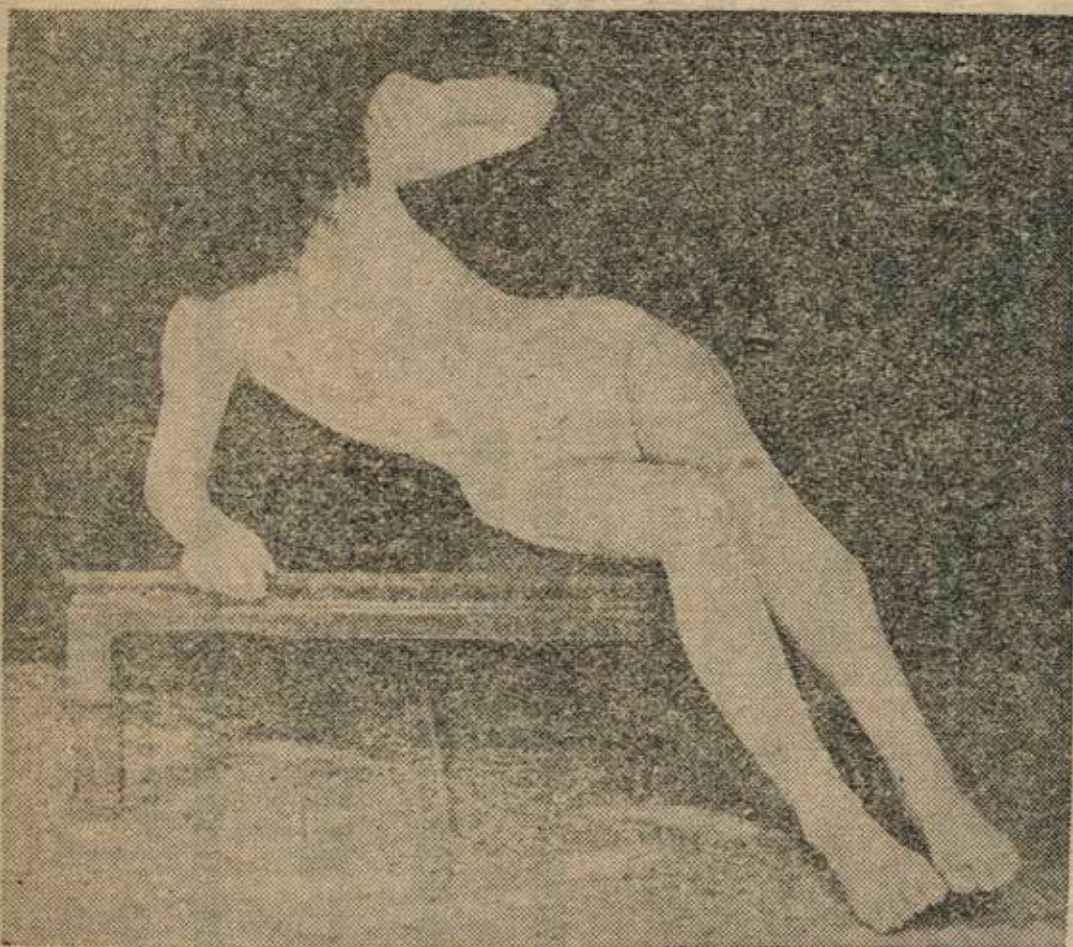
つていた。

私が立ち止ると、彼はその白い両
頬をほつと紅に染めながら、公衆電
話の中で手帳を見つけたのかつたと
尋ねた。手帳を置き忘れて、直ぐ氣
付いて取りにゆくと、そのボックス
から私が出て来たというのである。

この少年が雪田伸吉であつた。
私はこの手帳に大きな興味と好奇
心を持つていたので、二三の質問を
発したところから次の恐るべき告白
を聞いたのである。

南里 文彦

男色体験者は姿勢も女のように變化している



の 手 は 伸 び て い る



雪田伸吉

は語る

一、春の黄昏

その日は忘れもしません、三月二十二日の夕暮でした。朝からドンヨリと曇つて今にも降り出しそうなお天気の日で、暑さ寒さも彼岸までと言われたその彼岸のお中日の翌日なのですが、ジャンパーの襟を立ててもゾクゾクと寒気のするような日なのです。今にも降り出しそうな天気に行きかたの足も止まらず朝から磨いた靴の数は、数える

程しかありません。もう今日は暮れないうちに早く帰ろうと思つていた矢先なのです。今時珍しい横ボタンの黒キッドの靴が、目の前の磨台に載つたのです。いつもの習慣でその人の顔を眺める先にもう両手に持った布で靴の踵を磨き初めていました。顔を見なくともその靴の持主なら、三四度磨いたことがあつたので、靴を見ただけでボクにはわかつていたのです。磨き終つたボクの掌の甲へ一枚の百円紙幣がペラリと落ちてきました。慌てゝお釣を出そうとする手元をその靴の主はしやがみ込んで、押えたのです。「お釣りはいゝよ。それより私と一緒に来ないか、何か温かいものでも食べさせてあげよう」ボクは顔を上げてその人の顔を見ました四十位になるのでしょうか、紺の背広を突

靴磨き少年の告白!!

直そうにきちんと着こなした紳士でした。ボクはもう道具を仕舞つて帰ろうと思つていた位ですから一も二もなく、承知してその親切な紳士に促されて立ち上りました。

二、内気な性格

ボクは病身の母と二人暮しで僅かに焼け残つた曳船町の裏長屋に住んでいます。靴磨きによつて得る金額は贅沢をしなれば二人が細々と暮すには十分でした。ボクは生れつき内気で友達もなく、昨年新制中学を卒業して、この地下鉄の乗降口へたつた一人で磨き台を出しましたのも、同僚の沢山いる工場や、商店勤めが何か恐ろしいものゝように思えてならなかつたからです。

小説を読んだり絵を見たりするのが好きで友達と一緒に馬鹿騒ぎをしたり遊戯をしたりするのが何んとはなしに苦痛なのです。学校時代からもそうですが、その頃では、もうすっかり孤独だつたのです。

小説や絵によつて、現実から、かけ離れた遠くの彼方へ空想を走らすのがボク一人のひそかな楽しみでした。無口で必要以外に何にも言わないボクでしたが、靴磨きという商売には、それが適当していたのかも知れませんが、台の上に出された靴を只黙つて磨いておればいゝのです。まだ一度だつて強制して無理に磨がこうとしたこととはありませんでした。

三、孤獨の楽しみ

他人から見ますと、靴磨き等をしている割に真面目で大人しいこのボクにも、人には言えない恥かしい秘密の悪癖があつたのです。

内気なボクは、さつきも申し上げたように、大きな声で人を呼びかけることさえ、対しては言葉を交すことさえ、出来ない程恥かしがりやなのです。そんなボクが或る楽しみを見つけたということについて、想像を逞しくされるかも知れませんが、それは公衆便所の落書を読むことなのです。

地下鉄乗降口に位置を占めていたので便所は天王寺駅南口の東側にある公衆便所を利用するのですが、ボクはこの便所で始めて扉に鉛筆で書かれた落書を見たのです。短くて単語の集りのような稚拙な文章なのですが、薄暗い便所の箱の中で、うすれたその落書を読むことによつて、ボクの空想力は無限にひろがるのです。短かければ短いだけに、そのあからさまで生々しい語句がこよなく楽しい空想の材料になるのです。

それからのボクは、ひまさえあれば公衆便所を探して廻るようになりました。市営の公衆便所、あのミオツクシの下に番号を書いている。あれですね。その便所は、手の届く範囲はタイル張りになつていたので

者惑誘色男 天国色男

落書は専ら扉の裏面に集中されていきます。

大阪市内の便所という便所は殆んど廻りました。然し、やがてはこれを見たり読んだりするだけでは、つまらなくなつたので、それを手帳に書きとめて、靴磨きの間にでも懐中より取り出しては読み耽るようになつたのです。

あなたが拾われた手帳が、それなのです。

四、山添と

いう人

さて三月二十二日の夕方です。

ボクはその紳士に伴われてその陸橋の角の飲食店へ入りました。そこでライスカレーと卵うどんを御馳走になつたのです。外へ出ると陽はすっかり落ちて、駅のネオンがチカチカときらめいていました。

「一日、靴を磨いてどの位になる？」

と尋ねますので、三百円前後になりますと答えると、それ位の金ならあげるから、これから一寸つきあつてくれ、と言つて、ドンドン歩道を西へ歩いてゆくのです。

電車賃の五円を節約するため、ボクはいつも、その道

を歩いて曳船町へ帰りますので丁度帰り途なのでその紳士のあとへついて行きました。一人の友達もないボクには、その年輩の人が兄か父のように思えたのです。

その人が入つたのは、階切の手前を左へ下りた温泉のマークのついた旅館でした。裏通りになつていたので、家の中はひっそりとして、誰もお客はないようでした。二階の奥まつた一室へ案内されてその紳士と二人きりで向いあいました。

その入はいろ／＼とボクの身の上について訊ねるので、無口のボクですから問われたことだけ答えて、じつと自分の靴磨で汚れた黒い指に目を落していました。私はこんなちやんとした服装の人と向き合っていることさえ何んだか息苦しくなつてきたのです。

昨年学校を出たこと。十六才になること母親と二人きりのこと等を話しますと、明日の正午、ここへ来てくれないか、風呂は食べて来ないともよい。一日の収入は私があるのから、と言うのです。どんなようがあるのか聞きたい気持でしたが、よう聞いて返さないまま承諾してしまつたのです。

ボクの一人合点かも知れませんが、その人の語気には、拒絶を許さない力強さがあったのです。別れぎわに

「山添と言つて明日訪ねて下さい」そう言つて、ボクの手を百円札三枚握りました。温かい大きい手でした。

五、驚異の経験

次の日ボクは十一頃迄、いつもの場所で道具をひろげました。昨日にひきかえ大分お客がありました。駅前の大時計の針を見

て慌てゝ道具を服裏のオバさんに頼むと、その足で昨日の旅館へ行つたのです。

正面の階段から下りて来た山添さんは、

「風呂の前に風呂へ入つたらどうだ」と言い乍ら、女中からボクの浴衣を受けとつて、突き当りの浴室へ先立つてゆきました。

浴槽は箱風呂で二人一緒に入るのには無理な狭さでした

が、ボクがかゝり湯をしている時に山添さんも裸になつて入つてきました。

そして身体中を石鹸の泡だらけにして洗い終

ると、ボクの身にも石鹸の泡で包むようにぬた

くり廻すのです

頭から顔までが泡で一杯になつ

て眼を開けていることが出来ないのです。

湯をかけようと、手さぐりで桶を探しているボクの身体が、グツと横抱きにされて山

添さんの膝に載せられました。

眼は開けることが出来なかつたけれど、彼の手が泡だらけのボクの身体を洗いながら、あらゆる身体の隅々に至るまで匂い廻つてゆくのをまるで未知の世界をさまよう様な気でされるまゝになつていました。

部屋は昨日と違つて応接セット、立鏡、洋服ダンス等が具えられた洋室でした。東側と南側には地の厚いカーテンが掛けてありますので室は薄暗く冷たく沈んでいまし

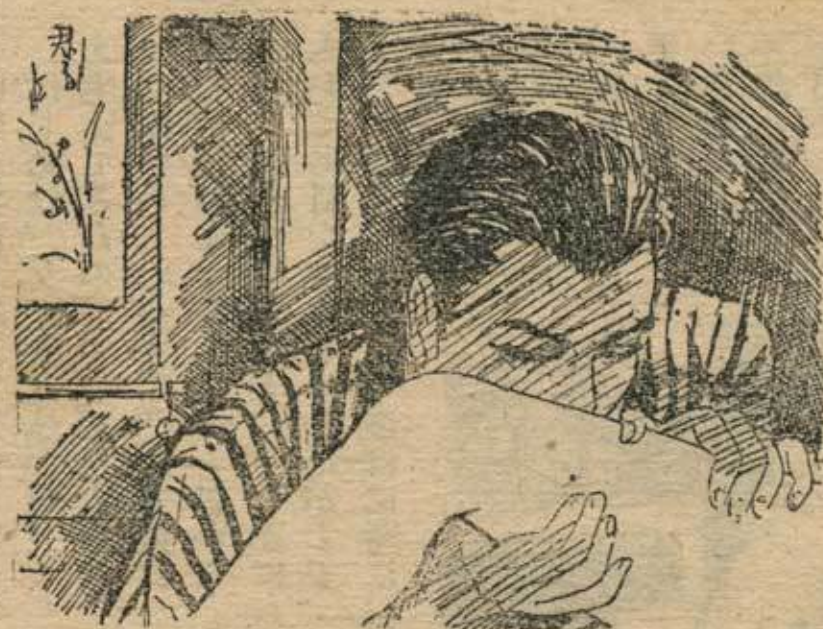
た。中央の安楽椅子に深々と坐つて、女中の運んできた風呂を二人で一緒に食べたのです。

さつきの浴室での事を思うと、ボクは顔を上げるのが何んだか恥しくて、うつむいたまゝ御飯をかき込んでいました。

この日が靴磨き少年であるボクの身の上に変化をもたらす日であつたといふ

ことを神ならむ身のボクには夢にも知らなかつたのです。山添さんが南側のカーテンを開けられるとそこは一間の窓口にすつぽりとはまつた大きなダブルベットがあり

ます。ボクはこゝで初めて公衆便所の落書に書き散らされてあつた文句の意味を山添さんから実際に知らされたのです。ボクも十六才ですから臆げながら、それらのことは知つていたのですが、男が男を愛するといふ事が、此の世の中にあるといふことが、山添さんの告白によつて判つたのです。



山添さんは、冷んやりとする蒲団の肌ざわりの中へ、ボクを抱え込んでこんな話をしてくれました。

「私は女を愛することの出来ぬ人間だ。普通の男が女に恋するように私は同性である男を恋い焦れる男なのだ。まだ人間の性という問題に目覚めていない君に、こんな事を言つてもわからないだろうが普通の男が商売女に飽きるように、私も商売にしている男娼には飽いてしまつた。一度はまだ何にも知らない無垢の少年を自分の愛人にしたたいと願つていたのだ。そして、君を見染めてしまつたのだ。不潔と思うだろう。嫌

悪を感じるだろう。然しまあ、私の言うことをよく聞いて、若し私の要求を辛抱出来るかと考えたら、聞いてくれないか、私は北浜に大きな会社を持つてゐるから、金の方は及ばずながら君とお母さんの二人位の生活費位は心配しよう」

そして、ボクはいつの間にか山添さんの手で蒲団の中で着ていた浴衣を脱がされていたのです。

六、女へなりゆく心

女というものに大きな憧れを持つていながらまだ女の肌には手さえ触れたことのないボクでした。それなのにボクの肉体は女として目覚めさせられ、そして急激に女としての意識を高められていったのです。

山添さんは最初、ボクら母子の生活費位の面倒は見ると言いましたけれど、逢う度に二三百円のお小遣いは呉れましたが、別にとりたてゝ纏つたものは呉れませんでしたので、ボクは相変らずアベノで靴磨きをしていたのです。

彼は時ともしにボクの靴磨きの台の前に立つてはボクを強引に伴つてゆくのです。靴磨き少年が時々洋服の紳士の後について電車の乗場へ吸い込まれてゆく姿を知らんになつた方があるだろうと思います。それは山添さんとボクの逢曳きの姿だつたのです。

洗面所で顔や手足を洗うと、そこでシャツを着替えて郊外電車で三十分一時間ばかりの郊外へ出て、落葉の重つた林の中や、又余り流行らない旅館で、誰も知らない二人だけの秘密の楽しみに耽るのです。彼は靴磨きをやめて自分の会社の給仕に

でも使つてやるからこ

というのです。然し外の事は何んでも素直にきくボクでしたが、この事だけは固く断りました。只

さえ人嫌いなボクは山添さんとのことがあつて以来最近益々一人でいたくなつたのです。否自己嫌悪にさえ陥つていました。会社等の集団生活はと

ても堪えられそうにもありません。地面に坐つて黙つて人様の靴を磨いてゐるのが自分に最も適当した職業だと思つております。それに今迄の女を敬遠する心が次第に強くなつて、もう今では女の人の靴を磨くのでさえ気が進まなくなつてきました。

どうしたというのです。よう。それに引き替えて山添さんを慕う心が日を追うて強くなつてきました。三日に一回か四日に一回、必ず忘れずに訪ねてくる彼を待てないくらいに強烈な慕情が兆してくるのです。

なんとした事でようし男でありながら男である山添さん慕うボクの心情シャツ一枚でも肌を汗がにじむ七月になつて

美少年の或る体験

診察を受けに來た少年

で、とうとうその夜は駅で明かすことにしたのです。……と美しい少年が云つた。

十六才、女にも見まほしい……という古風な形容が一番びつたりする島田雅行は、まつげの長い、うるんだような瞳をもつた色白の丸顔で、髪をのびしているせいかどうかすると少年というよりむしろ男装の美少女と云つた感じだつた。それが窓ぎわの診療台に腹這いになつて、むつちりと張つたきめの細い臀部に、やわらかな秋の陽ざしを光らせながら、傷をうけたその夜の事を次の様に私に話したのである。

島田雅行は語る

……何しろ神戸駅へ着いたのが十一時を大分過ぎてからなので、もう終バスもとつて出てしまつてたのです。

待合室は例によつて一ぱいでしたが、それでもどうにか空いた所を見つけてそこに腰をおろすと、私は汽車の中で読みかけていた雑誌をひろげました。

それから……どのくらい時間が経つたのか、ふと何気なく顔を上

げた私は、向い合つたすぐ前のベンチからじつと私を見つめてゐる鋭い視線にぶつかつて思わずはつとしたのです。それは薄茶色のレインコートを着た三十七八の身なり

のいい立派な紳士でした。はじめは、父のお友達かな、とも考えてみたのですがどうもそうではないらしいのです。でも他には心あたりもないし……と思ひながらその人を見返すと、さすがにあわてて目をそらしましたがすぐ又じつと、しかも今度はにやにや笑ひながら私の顔を見つめるのです。

何だか氣味が悪くなつて私はいきなり立上ると急いで待合室を出てしまひました。

外は美しい月夜でした。銀色の光に濡れた駅前広場の、もうネオンも消えた広告塔のまわりに三々五々とや



はり汽車を待つ夜明しの人影が黒く動いてゐます。私は大時計の下の円柱によりかかつて何という事なく月をながめておりました。

するとだしぬけに私のすぐ耳もとで、「きれいなお月様ですね」と変におしつぷしたような声がしました。おどろいてふりむくと、ああ、やつぱりあの人の人なのです。

きつと待合室から追かけて來たのでしよう。私はわざと黙つていました。するとその人は弁解するやうな口調で、実は自分には今生きてればちやうどあなたぐらいの弟があつた。あなたを見てるとその弟を思い出して……というやうな

事をくどくどと話すのです。私は、なあんだ、そりだつたのかと何だかうす氣味悪く思つた。私自身が今更おかしくなつてしまひました。

それからしばらく、美しい月の光の中で私達はいろんな事を話したのです。その人は福岡市の会社員で木谷

男色天国

今迄どんなに間があいても、一週間と訪ねて来ない日のない山添さんが、もう半月ばかりも見えないのです。

道行く人は、もうすっかり盛夏の服装になつていました。ハイヒールの若い女の白い脛には何んともなく嫌悪を感じるボクが、毛脛をむき出しにした逞しい三、四十台の男に、こよなき魅力を感じるのです。そんな男の靴が磨台にのると、念には念を入れてゆつくりと磨いてその感触を楽しむのです。中には気の短かい男は、早くしろといつて怒ることがある位です。

長い雨が上つたかと思うと、今度は毎日毎日晴天続きで、道路を吹きまくつた風は砂塵を捲き込んで、うっかり靴墨の瓶を閉め忘れようもなら真白に砂がたまるので、七月の末になつても、山添さんはボクの前に姿を現しませんでした。今になつて初めて会社の名前を聞いておかなかつたのを後悔しました。靴磨きを早い目に切り上げて高麗橋から北浜、今橋のあたりを歩き廻りましたが、会社の名前がわからないことに、雲を掴むかむような話です。勿論山添さんに似た人にさえ逢うことは出来ませんでした。

ボクのこんな激しい思慕をすて、おいて、彼は一体どこへ行つたのでしょうか。

七、便所の落書

もうボクを慰め楽ませるものは何にもなくなりました。連日炎暑の続く八月です。ボクは再び公衆便所の落書を読む悪癖をはじめました。

然し一度山添さんによつて、女の肉体へと無理に開花された身体には、そんなことだけでは、この悶々の心を満足させることは出来ませんでした。ボク自身、山添さんを慕う烈々の心情を鉛筆に托して、便所の壁に靡に書き綴ることによつて僅かに慰まられていたのです。それ大体、仕事の終つた夕暮から九時頃の間に行われました。

総タイル張の百貨店の便所なんかはボクの好む所ではありません。駅の構内、或は駅前のそれも木造のチャチな便所がよいのです。若しボクの言つた事が嘘だと思われれば、一度駅前の便所へ入つて見て下さい。きつとボクが鉛筆や釘で書き綴つた文字がある筈ですから。

八月の中頃、ボクは或る男と会つたのです。そこは公園の中でした。

そこでボクは、その山添さんに瓜二ツの男——確か浅井専吉とか言いました。——から次の様な話を聞いたのです。そして恐ろしい運命の悪戯を知りました。

さんと云い、社用で神戸まで来ての帰りだという事でした。そして、頭の上の時計がちょうど二時になった時、木谷さんがこう云いました。

「少し冷えて来ましたね。どうです。どうせ夜明けまで待たなきゃならないんだ。宿屋へでも行こうじゃないですか」

しかし私は、そのときもう家までのバス代だけしか残していませんでしたので顔をあからめながらそれを言つて辞退すると、

「いや、それは御心配なく、私がお誘いするんですから……」

と、とてもやさしく言つてくれるのです。それでとうとう木谷さんの言葉に甘えることになつて、あちこち一緒に歩いたあげく「月の家」という何だかとてもしやれた感じの家へあがりこんだのです。

六畳の、きれいな部屋でした。どてらに着更えて木谷さんがとつてくれた熱いそばを食べ、それから風呂に入つてくると、もう部屋にはちゃんと床がのべてありました。濡れたタオルを廊下の手すりに



掛けて部屋へはいると木谷さんは腕組みして何かしきりに考えこんでいる様子でした。

まさか先に寝るわけにもいかなので仕方なく私もそこへすわつて、ふとんについている糸くづなどをつまみとつたりしていましたすると不意に「君は……可愛い」とひきつたような声で木谷さんが叫び、同時に私はいきなり強い力で抱きしめられたのです。おどろいて、一生けんめいふりはなそうとしたのですが、駄目、

とうとうしまいはふとんの上面におさえつけられて身動きも出来なくなつたのです。目をむき出した木谷さんのまつかうな顔が上から私に迫つて来て、熱い息が私の顔に

ひつきりなしにふりかかります。私はほんとにおそろしくなつて「嫌ッ。いやッ」ともがきましたすると急に木谷さんの顔が大きく私の眼の中にひろがつて来て……次の瞬間、私は口がきけなくなつてしまいました。ぬらつとしたあの人の唇が私のそれを封じたので

す。私ははけなくなつて思わずぼろぼろ涙をこぼしました。いつのまにかしのびこんだあの人の舌がペロペロと私の口の中を気味悪く動きまわつて居ます。そして……それからもつともつと変なことがおこりました。

私はなさけないのを通りこしてもうただあきれてしまいました。これでは、まるで私は女だ。この人は私を女だと思つてゐるのだろ……気狂いかしら？ 私はあまりのことに声も出せませんでした。木谷さんの目がギラギラと異様に光つています。

パンツはとうとうはづされてしましました。

素肌がじかにふれ合つてなまあたにかい感触が腰のまわりにひろがつていきました。私は、はづかしさとか何か得体の知れない興奮とでむしようにからだがふるえましました。涙があとからあとから湧いて来ました。

それからどの位時間が経つたでしょう。

私は寝そべつたまま、起き上ろうとしません。なさけなくなつてなさけなくなつて、もう死んでしまいたいくらいでした。

「ごめんね」あの人があやまつてます。誰が返事なんか……私はだまつていました。

するとあの人が「くすん」と顔にしわをよせたかと思ふといきなり重い頭が私の下半身へ落ちかか

口中の悪魔

に魅せられる

(浅井専吉は語る)

その日は非番で、市営バスの運転手である私は、朝から裸でゴロ／＼寝ころんでいた。バットも一箱吸ってしまったし、新聞も隅から隅まで読んでしまった。

折角の休みを狭い室で寝そべっているのがつまらなくなつて、シャツをひっかけると、ブラリと外へ出た。市バスに乗ると、車掌の女の子に罪のない冗談を飛ばしながら終点のアベノ駅前迄行った。

近鉄デパートへ行こうとして歩き出すと目についたのがジョッキの、とてつもなく大きな看板である。私は思わず湧いてくる生ツバをのみ込んだ。立ち止つた足は中々前に出ない。とう／＼意を決してツボンの右ポケットに皺くちやになつた百円札を押えながら、その店の扉を開けた。

その直ぐ後で、まるで私の後を追うように中年の身なりのいゝ紳士が、同じ扉から入つていった。

奥から出て来た瘦せ方の女給仕が、一枚の名刺を私の前にさし出した。

「この人が、ちよつと、あんたに来てほしいつて——。」

「えッ——？」
と、訝りながら手にとつてみると、泉川誠吾とあり、肩書は墨で抹殺してあつた。

「特別室よ、御案内するわ」

と、のみ込み顔で行きかけるのへ、私はあわて、

「一寸、一寸待つてくれよ、一体、どんな人だい。この人——」

「アラ、あんた御存知じやなかつたの、五十前後の立派な紳士よ、先方じや、あんたをよく知つてゐるらしい口振りだつたけど——とにかく、行つてみたら判るわよ」

女給はそう言つて、サッサと歩いてゆく私は瓶に残つてゐるビールを氣にしながら仕方なく後についていった。

木箱を積み上げた物置のような通路を抜けると、特別室があつた。女給が扉を開けて声をかけると、中では立つ氣配がして、美髯をたくわえた上品な紳士が顔を出した。先刻、私の後から、あたふたとした様子でこの店へ入つてきた紳士である。

「どうも、わざわざお呼びたてしまして——」

つて来たのです。……

あッとおどろいてはねおきようとしたのですが、駄目でした。あの人の強い腕が私の上体をおさえつけていて動けないのです。

私は「いけない、いけない」と心の中で叫びながら、それでもだんだん変な氣持に落ちこんで行くのをどうすることも出来ませんでした。

夜明けまで、もう一度それが繰りかえされました。それからしさいには、迷惑をかけた罰だと云つて顔をふみつけてくれと云うんです。いくら何でもそんな事は……

と思つてだまつてゐると、いきなり私の足を抱いて犬のように舐めまわすのです。くすぐつたいのと氣味が悪いのとで、思わず引込めようとする、涙を流したり、おそろしい顔になつておどしたりするの、もう仕方なしに、なかばあきらめた氣持でされるまゝに任せました。

するとペロペロしたなめくじのやうな感触が足の方からだんだん上へあがつて来て……ほんとに犬みたいです。

それから今度は、私を四つん這いにさせて……ああ、もうはづか

「まあ、どうぞお入り下さい。」

「ハア」と固くなつて、恐る／＼中へ入ると私は立つたまゝで

「アノ、失礼ですが、何か、お人違いではないでしょうか、私、浅井と申しますが、貴方を、どうも、存じ上げておりませんので」

「イヤ／＼、使いがどんな風に申しましたか、実は、私も貴方にお会いするのは今日が初めてでして——ま、とにかくお掛け下さい。お話はそれからということに致しますよう」

私はわけの判らないまゝに、椅子に腰を下した。

「どうですな一杯、割にいけるウイスキーですよ。貴方も、まんざらではない口ではない。ハ、ハ、ハ、」

泉川は如才なく酒をついですゝめながらもう逃しはしないという眼付でジイツと私の陽灼けた顔を見据えた。私はもう何年

しくつて……ええそんなんです。……もう許して下さい。とても、とてもこれ以上お話しする勇氣はありません。

変態性慾つて云うんでしようかあんなのを……

別れるとき、もう一度逢つてくれつて、何度か／＼拜むようにするんです。でも、もちろん私は返事をしませんでした。一度も後をふりかえらず、走るやうな急ぎ足でバスの発着所へ行つたのです……傷は小さな裂傷と臀部その他下半身の咬傷、どれも皆大した事はなかつた。(終)

もの間、ウイスキーの匂いさえ嗅いだことがなかつた。眼の前のグラスの中に、陽の光を吸つて宝石のように輝いている液体のトリコになつていた。

私がだん／＼に落着いてきて、顔にも赤味のさして来たのを見ると、泉川は少し上体をのり出すようにして、

「ところで浅井さん、実は貴方と見込んで一つ折入つてお頼みしたいことがあるんだが——いや謝礼は十分に出すつもりですどうですか。頼まれては下さらんか——」

何かわからなかつたが、私には、もう断れなかつた。

「何か知りませんが、私で出来ますことでしたら——」

「では、御承諾下さるんですな」

と泉川は念を押してから「いや、それを聞いて、私も安心しましたところで大抵大丈夫とは思いますが、前もつて一度身体を見ておきたいんだが——」

男色天国

と妙なことを言い出した。

「身体つて、私の身体ですか？」

私は怪訝な面持で聞き返した。

「左様、どうですか、幸い此処には誰もいない。一つ裸になつて見せて呉れませんか？」

「ええ、そりや、お言葉とあれば……」

「そうですか、では早速見せて戴こう」

私はシャツを脱いで、上半身を露出した。胸毛の濃い自分ながら逞ましい肉づきだつた。

「立派ですなア」

泉川は暫く感歎したように見とれていたが、

「どうです浅井さん。ついでに下も脱いで全部見せて下さらんか、イヤ、かまわんからすつかり着物を脱いで下さい」

私が猿又一つになると、

「結構だが、浅井さん、ついでにそのいもも脱いで下さらんかな、いや万が一にもそんな事はないと思うが、

何も念のためお願いしなすよ」

流石にそれは一寸躊躇されたが、ウイスキーを御馳走になつた手前、私は思ひきつて泉川の言う通りにした。

「ウ、ム、奥に見事だ……」

これなら申分ない。顔も似ているが、恐らく身体もそつくりだろう……」

そう独言を言いながら、泉川は心から満足げに、何度となく肯いては私の全裸の姿に見入つていた。

二

深い樹木に囲れた泉川邸の応接間の中をさつきから行つたり来たりしている背の高い頑丈な身体の大佐の襟章が、彼の襟にいかめしく輝いている。すつかり見違えるばかりになつてはいるが、その精悍な横顔は、よく見ればまぎれもなく運転手の私の交つた姿に外ならなかつた。

泉川が入つて来た。立止つた私に近寄ると、

「ではよろしいですな、浅井さん。貴方はその軍服をつけている間、いや、この私の邸に在る間は、鮫島大佐なのです。お忘れにならんように。」

「ええ、ですが、本当に大丈夫なんでしょうねえ、もし見破られたら——」

「いや、大丈夫、だが、万一にもそのような場合には、私がいゝようにしますから貴方は安心していいのです。では、頼みましたぞ」

言い残して泉川は室を出て行つた。観念したように、私は窓の方を向くと、窮屈そうに立つたまゝで庭を眺めた。

と、ソツと扉が開いてガウンを着た病人のようにやつれて見える美青年が入つてきた。私は、直ぐには振り向きもせず、肩をいからせて、向うむきになつていた。

「アッ」と低い叫声を洩らすと青年は思はずよろ／＼とよろめいて、危うく椅子の背でか細い身体を支えた。

クルリと向きを変えた私は、ニツと白い歯を出して笑つた。蛹のような青年の頬にサツと血の色がさした。

ギョッ／＼と長靴を鳴らして、私は青年

★あんどこ・かつば★ 春田 一郎

「あんどこ、かつば」と言つて、絶対的禁慾生活に於ける同性愛と云つても実質は男が女の代用をする普通同性の肉体に切實に女を感じるのである。囚人同志の性愛に於て「可愛がる側」である。刑務所に於ける受刑者即ち男性の側に立つものを「かつば」と云い、「可愛がる側」が「あんどこ」と云い、「可愛がる側」が「あんどこ」と云い、之即ち「かつば、あんどこ」の性愛が露見してゐる。囚人の性愛に付て特記せねばならぬのは、それが普通世間の所謂男色と云うものとは異なる。男色は男の口から洩れる切ない言葉である。自然、囚人の性慾の心を買つたり、一人の「あんどこ」を纏つて二人以上の「かつば」が輪舞を演じる性愛は男色である。同性愛の多角関係も、普通社会に於ける恋の葛藤とその趣は全く同じである。刑務所に

に近寄ると、ふるえている薄い肩を、いきなりグイと鷲掴みにして「三谷ッ」と力をこめて言つた。「部隊長ドノ……」と言つたまま、青年は私の胸に顔を押しつけた。激しい嗚咽にゆすぶられながら、私は一度は消え去つた不安が、又ムク／＼と頭を抬げてくるのであつた。

半開きになつた扉のすき間に、泉川の顔が現れて、拇指で奥を指さして見せる。私は目で肯いて「サ、三谷、いつまでも泣いていないで、お前の室へ案内してくれ、ム、ム、」やさしく言われると、三谷青年は顔を上げ、涙の溜つた眼でニツコリと笑つて、扉に手をかけた。三谷青年の寢室へ入ると、今度こそ私はどうにもならない不安が、胸を締めつけて

くるのだつた。いつその事、此の青年に、何もかも打ちあけて、と思つたが、歓喜に溢れている彼の顔を見ると、その決心も鈍つてしまふ。それに泉川が呉れるといつた謝礼金のことも、考えないわけにはいかなかつた。

フト見ると、片隅のテーブルに、ちやんと酒の仕度が出来ている。まゝよと、クソ度胸を決めて、グラスになみ／＼と注ぐと、二三杯立て続けにあふつた。

「さつき、自分は、夢ではないかと思ひました。今もまだ、何んだか夢を見ているようであります。……」

青年は、うつとりと私を見上げながら、喘ぐように言う。

「ハ、ハ、夢なもんか。その証拠に、ちやんと、此処にこうして、俺がいるじやないか」

「はア、でも、本当によく御無事で……」

「ハ、ハ、俺は不死身だからな」
そんな事を言っているうちに、私は酒の酔いも手伝つて、だん／＼胆がすわつてきていた。

「俺は淋しかつた。判るだらう、三谷」
「はいッ」

三谷青年の瞳は、妖しく光り出し、唇は真赤に充血して来た。

私はグツと一息にグラスを傾けると、いきなり上衣の釦をはずし始めた。そうして瞬く間に素裸になると寝台の上へ仰向けにひっくり返り、ゴクリと固い睡をのみこんで眼をつぶつた。



三谷晶夫の所属する鮫島部隊は、終戦直前、南支の或る部落に駐屯していた。

夕暮近かつた。三谷二等兵が将校用の風呂場の横を通りかゝると、板囲いの中から不意に大きな声で「オイ、誰かッ？」と呼ばれた。

「ハイ三谷二等兵であります」

「ヨシ、そこを開けて中へ入れ」
「はいッ」

三谷は、恐る／＼蕤ののれんを上げた。囲いの中は意外に広く、隅の方に、甕の浴槽があり、流しには板が工合よく並べてある。出入口の近いところに、脱衣のための棚が釣つてあつて、鮫島大佐の下着が脱いであつた。

甕の中から、鎗槍のように髭だらけの顔を出していた鮫島大佐は、三谷を見ると一寸驚いたように眼を瞠つたが、すぐにニヤ／＼と相好を崩して

「三谷と言つたな」
「ハイそうであります」

「どうだ、いゝ加減だぞ、お前も一緒に入らんか」

鮫島は好色のな眼付をして、三谷を瞷める。三谷は身がすくんだ。
「オイ、何をぐず／＼しとる、命令だッ、裸になれッ」
そう言われると、是非もなかつた三谷は観念して上衣を脱ぎにかゝつた。

すつかり裸になつた三谷は、手拭を前に当てると、腰をかゝめて流しの上に乗つた。膝頭がガク／＼するようだつた。

「おいッ、俺が出る迄は不動の姿勢だ！」

不意にドナリつけられて、ビククリした三谷は、慌てゝ姿勢を正した。前に立てた手拭がフワリと落ちた。
「アッハッハ、ハ、ハ」

愉快そうに大声で笑うと、鮫島大佐は、ザ、と水しぶきを上げて乱暴に甕を出た。見るからに逞ましい六尺豊かな肉体は、全身が深い毛に覆われて、油のような華をたらしながらヌメ／＼と銅色に光っている。

どうにか無事に背中を流し終えて、ホツとする間もなく、鮫島は、今度は前へ向き直ると、

「よし、次は前だッ」
咄嗟にその意味を解しかねて、三谷が躊躇していると、

「間抜け奴、何をボンヤリしとるんだ、判らんのか、判らんなら教えてやる。前と云つたらこうするんだッ」

鮫島の赤黒い唇がゆがんだ。
「ウ、ハ、ム」と思わず呻いて三谷は股間を押えた。

「判つたか——」
鮫島は眼尻を下げて、赤くなつた三谷の

顔を見据えた。

三谷は只夢中だつた。

カッと西陽が射している流しの板に、鮫島は全身を放りたせながら呻いている。鬼のような部隊長が二等兵である自分の前に脆くも崩れて、手足をふるわしているのを見ると、三谷は何とも言えぬ快感に胸を躍らせた。

気がつくといつか陽は落ちていた。ムク／＼と起き上つた彼は

「三谷、お前は今夜から、俺の当番兵だ、フ、ハ、ハ。可愛がつてやるぞ」

と言つて夕陽に浮いた三谷の白い裸身をなめ廻すように眺めるのだつた。

そして、朝夕を鮫島と共にする中に、次第に三谷には、彼がなくてはならないものになつていった。

敗戦が決定的になると自分の立場がどう逆転するか位は、鮫島も心得ていた。三谷を連れると、いち早く駐屯地を逃亡してしまつた。

三里ばかり駐屯地を遠ざかつた畑の中の腐れかけた小屋が、彼らの当座の住居となつた。糧食は馬に積んで持てるだけ持つて来てあつたし、直ぐ傍の小川からは水を得られるので、当分は何の心配もないと、のんきに構えていたが、二人の身辺には、もう既に危険が迫つて来ていたのである。

翌日の午下り、三谷が身づくろいをして水を汲みに行つたあと、鮫島は甕の上に仰向けになつたまゝ、快よい微睡みにウツウツとしていたが、馬の激しい嘶きにハッ和我に返えつた。ガバとはね起きた彼が戸の隙間から外をうかがうと、手に／＼銃剣をきらめかした十名あまりの兵士が、殺気立つた面をして、此の小屋を包囲しながら

男色天国

ら迫つて来るところだつた。
どうする間もなかつた。戸が蹴破られて
跳び込んで来た兵士達にグルリと取りまか
れた。文字通り身に寸鉄も帯びない鮫島は
もう観念するよりないように見えた。木綿
のバジヤマのまゝで銃剣に威嚇されながら
戸外へ引摺り出された。
何も知らずに水を汲んで戻ってきた三谷
は、遠目にこの恐ろしい事態を知ると、総
毛立つて、木陰に身を隠した。

四

泉川は、一息ついて、卓上の煙草入れか
ら一本つまんだ。
「どうです。よろしかつたら——」
「イヤ、せつかくですが、私は今、ほしく
ありませんので——」

「そうですか、では——」
泉川は吸差しを灰皿へねじつけると、話
を続けた。

「幸い、その時、晶夫は発
見されずにすみしましたので
まア、命だけは別状なく帰
還して参りました。併しあ
れは身も心もすつかり恐ろ
しい病に取憑かれて居りま
した。
空襲であれの母は死亡し
ましたので、復員するとす
ぐ、伯父である私は、あれ
を手許へ呼び寄せました。
子供のない私は晶夫を我が
子のように思つて小さい時
から可愛がつておりました
し、あれも、私を信頼して

いてくれました。もと／＼丈夫な方ではな
かつた晶夫は、第二国民兵だつたのが、終
戦間際に召集になつて、戦地で苦勞したた
めか、復員後はひどく弱つてしまい、はつ
きりした病名もつかないまゝに、寝たり起
きたりの生活を送つておりました。
私にはどうもあれの病気が、肉体的なも
ののみとは考えられませんでしたので、或
る時、そのことについて質問してみたので
すが——私はまさか、あのようなおぞまし
い事を聞くとは思いませんでした。

あれは悪魔に憑かれてしまつたのでしよ
うか。……立派な男でありながら、男の肉
体を求めるとは、何んという浅ましいこと
でしょう。あれは、どうしても鮫島が忘れ
切れないと申すのです。そして生死不明で
羅致されていつた筈の彼を連れて来てくれ
と、駄々をこねる仕末です。

あの鮫島という将校に弄ばれて、その挙
句が可哀そうに気が狂つてしまつたのです
——晶夫は自分には先天的にそういう素
質があつた、只、それが眠つていたのを、
彼によつて覚醒されただけだと申します
が、私にはどうしても納得出来ないことで
す。

でも、とにかくあれの元氣を取戻してや
りたいと考へた私は、とう／＼とんでも
ない恥しいことを思ひつたのです。私は
毎日のように、鮫島によく似た人物を探し
廻りました。晶夫の持つていた写真をたよ
りに探すのですが、それは考へていたより
は、ずつと困難な事でした。

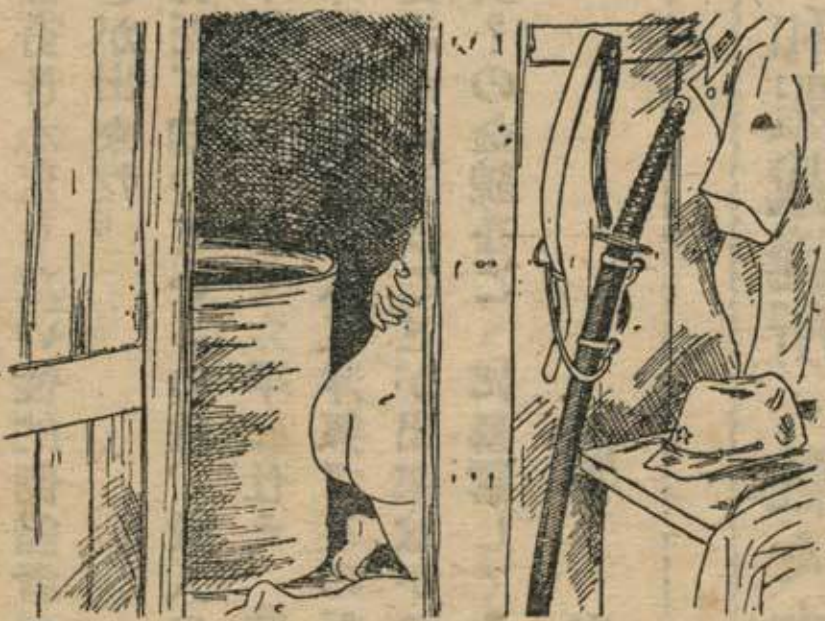
しかし、私は遂に成功したのです。私は
とう／＼あなたを、鮫島にそっくりのあな
たを発見することが出来たのです。」
そこ迄話し続けた泉川は、初めて気がつ

いたように手にした煙草に火を点じた。
「突然のことでお驚きになつたでしよ
う。又この不思議な話に變にお思ひになるでし
よう。然し、この哀れな三谷を助けると思
つて、何事も辛抱して下さい。あれもそう
永くはない身体だと思ふのです。時々熱に
うかされては、鮫島をしきりに恋しがつて
謔言にも何度となく名を呼ぶのです。三谷
のため、いや私の為にも、これから来て
やつて下さい」

約束の金を手にして、その応接室を出た
私は、数奇の運命に弄ばれた三谷という青
年が他人でないような可憐な心情が湧き上
つてくるのをどう
することも出来な
かつたそれは彼の
氣持からばかりで
なく、肉体に深刻
に印せられた三谷
とのつながりにあ
るとも言えた。

一日おきに、午
前、午後と交替で
半日、三日に一回
は一日の非番の日
がある私は、バス
のハンドルを握つ
ている以外は、泉
川邸を訪れること
にしていた。

晶夫は身代りの鮫島を与えられて、日増
しに元氣を取戻していつた。泉川はホツと
して私が訪ねてゆく度に、秘蔵の三十年物
のウイスキーを出して御馳走するのであつ
た。私は謝礼とか好物のウイスキー目当て
ではなく、もう此の頃では、三谷の白哲の



裸身が忘れきれなくて通つてくるようにな
つていた。

然し、それも永くは続かなかつた、晶夫
が風邪から急性肺炎を併発したのは数日前
だつた。ベニシリンやズルファミンの応急
手当も、弱り切つた三谷の身体には回生の
妙薬となることは出来なかつた。

不思議な運命から、男でありながら男を
愛することゝなつた三谷晶夫は、伯父であ
る泉川と鮫島大佐に扮した私に両手を握ら
れながら、二十五才の生涯を閉じた。

三谷晶夫の葬儀の日、私は泉川邸を訪れ
たまゝ、晶夫の遺言だと言つて、泉川が私
に手渡そうとした多額の紙

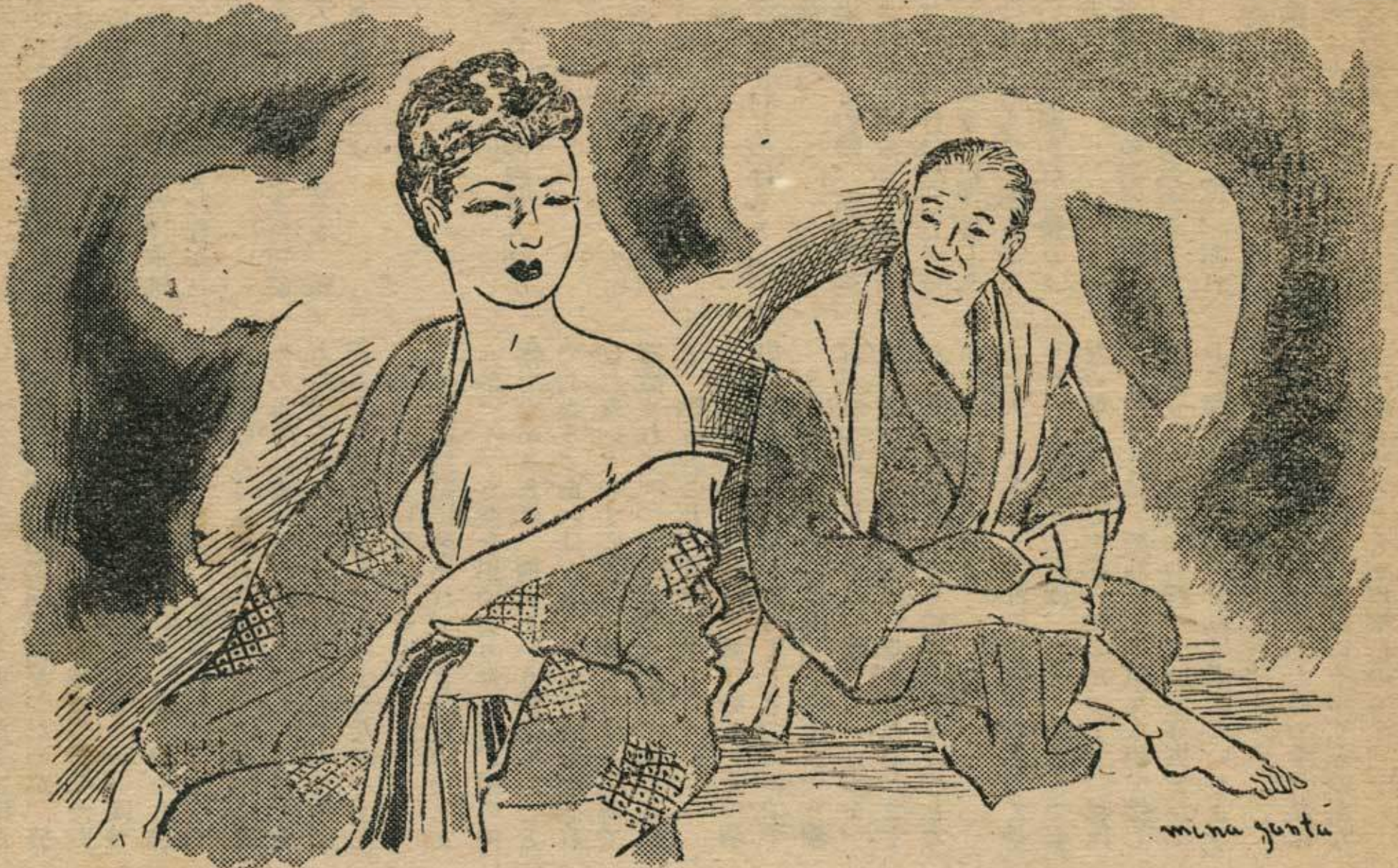
幣を辞退してもう二度とそ
こを訪ねることはなかつた
暫くの変則的な交情では
あつたが、彼に死なれて私
は初めて、彼を愛している
のが如何に強かつたという
事を思い知らされた。今日
はからずも、貴方を見て、
何んという理由もなしに強
くひきつけられるものがあ
つて、思わず呼びかけてし
まつたのだ。

浅田専吉はそう言つて、私
の手をとりました。公園の
木下闇です。こうして不思
議な運命に取り結ばれた彼とボクとがわり
無い間柄になつていつたのは自然の成りゆ
きでした。

後記

雪田少年が慕う山添という人物と、鮫島
元大佐が同一人物という証拠はないから、
その真偽はわからない。

性的倒錯者訪問記



男を妻にしている男、佐々太平氏を訪ねる

世間一般の人が誰もが女だと思つてゐる裁縫所の師匠早苗さんが、その實立派な男であるという事を聞いて、私は早速、その裁縫所の主人、男を妻にしている男、佐々太平氏を訪ねた。そこで私は怪奇きわまりない性的倒錯者の赤裸々な私生活の告白をきくことが出来た。

彼の妻を男だと知つてゐるのは、数人の上流夫人に過ぎない早苗さんは平常は女として太平に仕え、時折はその男性としての機能を發揮して上流夫人と浮氣するのだという。幸か不幸か太平の妻早苗さんに逢うことが出来なかつたが、太平氏の告白によつて彼女？の全貌をここに暴露してみよう。

鹿島芳江

佐々和服裁縫所 佐々太平の話

わしの女房は男なんですよ……ここだけの話ですがな。このことを知つてゐるのはわしと、町長の奥さんと公安委員長の奥さん、それに警察署長夫人位のもんですよ、まあ、女房の奴はそれだけは告白したと言うわけでその外木俣薬局の女主人とも……まあ、あまり追求しないことにしております。この道ばかりは別なものでしてな、洗いたてたらいくらぼんくらなわしでもやり切れなくなると思ひまして、目をつぶつて……え？、え、今でも三人の奥さんとは黙認と言うかたちで。あれはあれなりの方法で然るべく気晴しをやつていますがあれが

気晴しをしているのやら、奥さん達が気晴しをしているのだからわかりやしません。しかし、あの味を知りますと、どうも女などは気の抜けたビールみたいなので、何と言つてもうちの女房が一番ですね。あれもなかなか考え深くて、弟子のお針つ娘や女中などには、おくびにも色気を見せませんよ。すつかりお師匠で、際立つた奥さんぶりをかせています。

まあ、たつてのお望みでもありませんので一つ女房の昔の話でもつぎ合せてお聞かせしましょう。

男色天国 男性と結婚生活をする男

佐々太平の話は、方
言まじりで、話も前後
してわかりにくいので
小説体に私が書き直し
てみました。

(鹿島芳江)

一、女装の

男弟子

早苗のつややかな白い肌は
まったく女のようにきめが細
かく、まろやかに、弾みがあ
つた。名前からして女じみて
いて、太平は、ふと妙な錯覚
に陥りながら、新しく内
弟子に入ってきた少年の背を
流していた。少年と言つても
髪をカールにして少女と何等
変るところがない。意味もな
く弄んでいる手拭にからんだ
手付、指先にも先天的な器用
さがほのめいていた。と言う
よりは、一種の色気があつ
た。

彼太平も、最初は早苗を内
弟子にするかどうか迷いま
し、たじろぎもした。

と言うのは、佐々和服裁縫
所には、十七、八から二十二
三の娘達が七人も内弟子とし
て住込んでゐる。人口二万程
の、山峽の田舎町では、これ
程の仕立屋はめづらしかつた

娘達は近在の、どちらかと言えは富裕な家
の、嫁入りまでは何することもしない娘ばか
りで、太平も亦、選んで育ちのいい美くし
い娘を内弟子にとつた。その他、町の酒造
家の娘、町長の娘、医者家の娘等が通つてき
ていた。

彼はそれ程、町や近在の人々から信用さ
れていて、言つてもいい。男仕立は着くず
れがせぬ。と、古くから言い伝えられてい
る。彼がそれを具現しているかのようであ
つた。仕事が確かであること。彼の両足が
小児麻痺のために発育せず、立つて歩くこ
とも出来ないこと。醜男である証拠のよう
に堅造であること。瘦せた彼とは正反對に
象のように肥大している彼の女房阿知美が
確り者であること。等が、親をして、娘を
あづけてもまず……と思わしめるのであ
る。

こゝで男弟子をとることは、親達を不安
にせしめるし、信用問題である。しかし、
彼は男弟子が欲しかつたし、早苗にひきつ
けられもした。そして、少年の母由美と相
談をして早苗を女姿に仕立てへラ台の前に
坐らせたのである。確り者の阿知美も、早
苗を一週間程は少女と信じ込んでいた程で
ある。

半年を経た今では、早苗は膝を崩すこと
もなく、若い娘達の仲でも最も娘らしく、
しおらしくつた。

子供の居ない太平夫婦は早苗を自分達の
部屋で寝起させた。

太平は、打込んだように毎夜風呂を使わ
せ、化粧品も注意して選び、早苗の身を磨
きたてた。

太平夫婦の住居は裁縫所から廊下伝いに
裏庭を通つて四、五間離れた裏通りに近い

離れで、湯殿も裁縫所とは別にこじんま
りと建てられてあつた。

時には阿知美も早苗の身体を洗うことも
あつたが、それは太平の見てゐる前に限ら
れて、そのような時早苗は、耳の根から乳
のあたりまで赤らめて、それでも素直に胸
から腰から彼女の為すまゝに任せていた。
この底知れぬ素直さが、太平夫婦は言うま
でもなく、娘達も早苗に心を許してしま
うのである。

「早苗、こちらへお向き。」

と、早苗の肩を軽くおさえた太平は、ふ
と、異様な感情にふるえた。阿知美との、
受身な、絞め殺されそうになみへの反
撥が、彼の背筋を走つた。彼は、ふいつと
早苗を抱き寄せたい衝動を耐えた。早苗の
紅い唇にも、くくれた

顎にも、ひとを誘ひ込
む妖しさがたゞよつて
いる——性的倒錯をふ
り払つて太平は「馬鹿
ナ。」と、自制した。

と、銜いもなく、く
ねらして横坐りに、彼
の手を待受けている、
それは花だ。無惨な想
念が彼の心をよぎつ
た。耐えれば耐えるほ
ど、彼の自制心が崩れ
たつていった。それは
あながち、呉服屋の主



人に飲めぬ酒を強いられたばかりではな
かつた。彼の心は慾情でずくりとぬれてい
た。自分の醜さにひきかえて炎のあと一つ
ない、罐のような少年を、引き裂きたい。

虐めつけて、永い間の、卑下した、屈辱

の憂さを一思いに晴らしたい衝動が、突然
慾情にからんで、「あッ、」と驚愕の声を
あげた早苗を力任せに押倒した。

それは、開きつた阿知美の、ぶよぶよ
な感覚とは比ぶべくもない。新鮮で、強烈
な稚児の甘さである。

彼は満足であつた。男は妊娠する気使
いはないし、誰にも知られぬ秘密を持つこと
は、内心得意でもあり、初老に入つた不具
な男の言うに言われぬ快楽であつた。それ
は、卑しく、淫りがましかつた。

彼は湯槽の中から早苗を呼んだ。

早苗は、激動させられた意識も感情も、
肉体的な苦痛も静まつたらしく、湯にけぶ
つた電燈の光りの下に身を起して、白々と
身動きもせず居た。それは、等身大の石
彫細工の少女に似ていた。

「わしが悪かつたでな。堪忍
して、さ、ほれ奥さんが来る
でないか。」

太平の言葉は嘘でなかつ
た。廊下を踏んで脱衣所へ入
つてくる足音の量感が、阿知
美の肉体の肥大さ加減を想わ
せた。それは、少年と、不具
の男を合せてもまだ倍に近い
容積を持った、脂肪の塊であ
る。

早苗は、手桶の冷えた湯を
腰の辺りへ流してすらりと起
上つた。彼は、太平に背を向

けて、一言も発せず、女のように手拭を
使い始めた。太平は湯の中でその後姿を眺
め廻し、淫らな笑いを浮べた。

お、寒む。と、阿知美が冷い空気と共に
入つてきて、息を引いて正面から早苗を見

つめた。

「おや？もう出るのかい。」

彼女は一足毎に全身をぶよぶよと揺らし、早苗の両肩を押えた。

「ね、もう少し入つておゆき。肩がすつかり冷えているじゃないか。」

だが早苗は、手拭で前を

覆い、身をくねらして阿知美の手からすり抜け、脱衣所へ素早く姿を消してしま

つた。阿知美は、早苗の柔い動作の中に、今迄にない抵抗を感じて（おや？）

と、振返つた。早苗はもうそこに居なかつた。彼女は

手中の球を不注意に取落したように妬け気味にざぶざぶと肩から湯を浴びた。

「お前さん。今夜、早苗、少し変じやない？」

阿知美は、つつぶり湯に沈むと、じーんと足先にしびれる熱さを耐えて、眼を閉じている太平の身体を押しこくつた。

「それでもないさ。」

「そうかしら？虐めたんでない？」

阿知美の小さな細い眼が、光つて太平の表情を探つた。

「よせ、馬鹿な。」

阿知美の腕が彼を捉える。からむ。阿知美にとつて太平は、ひ弱な獲物にすぎなかつた。



で坐ぶとんの上にぼんやりと坐つた。しかし、耳をふさいでも甲斐がないとわかると（家出）と、言う言葉に如何にして具体性をもたせようかと、考え始めた。

冬は仕事に忙しくて、一と風呂浴びてから、又、十二時過ぎまで夜ナベをする習慣で、彼は、無意識的に

甲斐絹の襦袢の胸元を合せ、きりつと紫の細紐を

腰に締め直すと、怒りも嫌悪も、屈辱も、淡い諦

めと悲哀に包まれて、女らしい心に傾いて行き、

若し自分がこゝを出たら母が又どのような心労す

るであろう。母の苦悩を想えば、自分などの、これ位のつらさ、切なさ

は何程のことであろう。と、太平の仕立た矢絰の

縮緬お召を羽織つて鏡の前で襟を揃え、周囲を何気なく見廻す。そこに早苗の調度がある。姿見。ベビー算盤。机。スタンド。

花瓶。坐ぶとん。それ等は太平の豊かさを示していた。雨戸を閉切つてはあるが、庭をへだてて裁縫所から娘達のさざめきが、スタンドを点けて机の前に横坐りした早苗の許へまでかすかに、華やかである。

師匠夫婦の居ない気楽さの娘達は、これから風呂に入るらしい、と思つて早苗は、先刻の太平の行為が甦つてきて、鳥肌だち全身から血のひいてゆく想いが、彼をわななかせた。太平夫婦の音が杜絶えた、その沈黙が淫浪である。

彼は湯殿を出る時、不具者の執念深い淫らな視線を、女感覚で焼けるように背中

に感じていた。かすかな未練が、女の生活の中にあつた。が、明日からのことを想えば、すつぱり捨て切れると思えた。しかしこゝを出て何処へ行くかと云う段になるとはた、と行つまるのである。

母の許へは帰れない。彼はそう信じ込んでいた。彼は、自分の生いたちを、母の苦悩と屈辱の深さ程に知つていた。

母の家は村でも指折りの素封家であつた母はその家の一人娘で、或年、この地方へ流れてきた田舎廻りの芝居役者に誘惑されて名古屋附近へまで行き、連れもどされ

た。小説や話などではよく言われるが、実際にあつたにあらうことのものではない。この噂は近在の話題となつてしばらく絶えなかつた。それは由美が美しくかつたためもあつた。

由美は幾月も部屋に籠つて人前に顔を出さなかつた。

が、再び、驚くような噂が、まことしやかに、ひろまつた。——由美が子を生んだと言ふ噂である。

その赤ん坊が早苗である。名前は由美好みに付けられたのであるが、生立ちにふさわしい名前で、容貌は由美に似ていた。

早苗が生れてから、もう十六年経つてゐる。由美は、彼が生れた翌々年、二十一の時に隣村の地主の次男を婿にとつた。

早苗は幼い頃から女の子のように美しくくなよなよしていた。が、それは日蔭の花の美しくさで、醜かと思われる程無口であつた。七才の年に女として役場に届出た。

そして、学校は殆んど休んで通した。廊下を、両手と腰で身体を引きずりながら太平が通りかゝつた。いつもならさうつと障子戸を開けるところであるが、「具合

が悪かつたら休めよ。」と、声をかけただけで通り過ぎていつた。

早苗は、想いを破られて、はつ、と居ずまいを直した。暗示にかゝつたように押入れから綿の厚い絹のふとんを引出して敷き掻き替へて再び机の前に坐り、日記帳の頁を繰りながら、どこへ行こう、どこへ行こう。と、心であせつた。狭い町である。狭い村である。遊廊へ仕立物を届けに行つた日の記録がある。男の卑しい眼付が女感覚で書かれてある。

日記を無意識に繰つてゆくうちに、矢部千枝の名前が目止まつた。千枝は早苗が此の裁縫所へ来て一ヶ月経つた時、嫁入りのためにやめていつた。お通いのお針の娘であつた。背恰好のすうりとした、立居振舞のあく抜けした彼女に早苗の心がときめいてゐる。

まだその姿が、彼の醜の奥で生きていることに彼は気付いた。別れの時千枝に抱き寄せられ、是非遊びに来るように、と、甘い香りの息で囁やかれたそれは、また少年の感情で……今その時の胸のふるえを、処女のように嘔みしめた。早苗の心の動きは女のように、女らしい憤りと悩みを心から甘えられる人にすつかり打開けて、その時だけでも慰めてもらいたかつた。

早苗は、僅かな物音にも気にしつゝ、手廻りのものを素早く風呂敷に包み始め、阿知美が部屋へ入つてきた時には、自分の思ふだけのものを纏め終えて机の下へ押込んでいた。

「お前、今夜、何か、あつたかい。」と、声は優しいが、底に厳しいものを含ませて、早苗の目をのぞき込んだ。

「え？いえ。」

二、太平の妻阿知美

早苗は、湯殿から流れてくる太平夫婦の揉み合つたり、からみ合う声に耳をふさい

男色天国

「そう？。そんならいいけど。」
あつさりと、阿知美は立ちかける振りを
して、不意に、息も止まる程に早苗の唇を
吸った。早苗は、ぶ厚い阿知美の胸に抱き
寄せられて、色を変えた。
「……今に、あのいざりが、死んだら、思
い切り、可愛がつて、やるから……」
阿知美は再び、厚い、傷口に似た唇を早
苗の肌押し当てた。
早苗は、中年女の油濃い、執拗な、むき
つけない、苛めないいどみに恐怖した。
早苗は、失神したようにふとんの上に横
たわつたまま、阿知美の遠ざかる足音に耳を
澄ました。湯殿に娘達が戯れているらしか
つた。
早苗はすっかり身仕度をする、電燈を
消した。おかしなもので、化粧品等を多く
包んでいる自分に苦笑し、包を解いて金目
のものに包み替え、廊下へ、足音を忍ばせ
た。

裏門の脇に包を置いて湯
殿へ、娘達の裸形をめぐら
しくもなく見廻した。
早苗。こつちの風呂に
も入んな。
—— 帰りに、何か買つて
来るのよ。
娘達は屈託なく、そんな
言葉を早苗にあびせる。彼
は、気弱な微笑をした。彼
の心は男にならうとしてい
た。太平夫婦の裏と表から
の性のいとなみが、彼には
まだ生々しい。彼は、ふい
つと、泣き出したくなつ
た。もうこんなにして、若

い娘達の裸形は見ることは出来ない。性に
めざめた心が未練がましく尾を引いた。
裏門を出ると初めて早苗は、五日頃の月
の光に気付いた。寒さも思つたより厳し
くて、彼はショールを掻き合せて駅へ急い
だ。彼は、どこかで、この倒錯した生活を
振り切らねばならない。と、考えた。考え
る後から、この髪を切らねばならないのか
この絹の着物を脱がねばならないのか、と
女の心が執拗にからみつく。山峡の町の夜
は死の静寂さで、町をめぐる山々が、黒々
と、のしかるように迫ってくる。薄暗い
電燈が、闇の中に心もとなげに灯っている
田舎駅には、東海道本線と結ぶ最終列車が
そののみが唯一生き残っている巨獣のよう
に、煙を吐いて息づいていた。

早苗は、すべての妄念を断ち切るように
そそくさと改札口を出て、人影もなく寒々
しいホームを横切り、客車に駆け込んだ。
列車はながながしく汽笛を鳴らした。そ
の響は山にこだまして返ってきた。
車内には淀んだ光の下に七、八人の人
々が、睡むげに静まつていた。

三、千枝おねえさん

矢部千枝が嫁に行つた町も、早苗が逃げ
てきた町に似た城下町であつた。この附近
一帯で町と言われる聚落は、戦国の昔、こ
の地を治めていた大名が、隣国の不意の襲
撃に備えて小城を築いた小さな盆地に多く
早苗はふと、同じ町を歩いている幻覚に捉
われて身顛つた。が、町の雰囲気はどこと
なく違つていた。

町中に松の木立の繁つた一郭があつて、
そこが白山神社であつた。千枝は、この神

社の神官の許に嫁
いできていた。年
も十四、五は違つ
ていたが、早苗の
覚えていたのは、
父と娘程に違つて
みえる夫婦であつ
た。千枝夫婦は村
務所に住つてい
た。早苗は敷石を
踏んで境内へ入つ
て行つた。社務所
の雨戸から暖い光
りが漏れてきて、
（こゝに千枝お姉
様が居る）とは知
つていながら、早

苗は流石に戸を叩けなかつた。日頃の無口
がこのような時、不安をつのらせた。

いゝ考えも浮ばなかつた。彼は廻廊の埃
を払つて腰を下した。月は松樹の影から、
いよいよ芽え、いよいよ蒼く、冷く、鋭か
つた。早苗は、神社の境内であることも忘
れて樹木の間へ駆け込み……やはり女で、
ながながと、蹲んで用を足した。

廻廊へ帰ると気落がしたようにぐつたり
し、フェルトの草履を脱ぎ揃えて上り、両
膝を抱えた。早苗は眠りかけた。身も心も
疲れ切つて……時々身顛いをしながら——
早苗は肩をゆすぶられて、夢から覚め
た。

阿知美の重量と、氷るような冷めたい太
平の脚……はやはり夢で、千枝の顔が息の
かゝる程間近にあつた。

「……どうしたと言ふの？。うちの人気が
せいだ。と笑つて取り合わないの、私、

—— 佐々早苗さんの近影 ——



出てきたのよ。よかつたわ。でもまさか早
苗さんとは思わなかつた。」

大形に驚いたふりをしてみせて、ふい、
と笑い、すぐに又、元の真面目さにかえり
「どうしたと言ふの？」

早苗は唇を噛んだ。すると自然に涙が溢
れてきて胸がつまつた。耐えていた激情を
一気に吐出したように、千枝に縋りついて
「お姉様。お姉様と、その胸に顔を埋めて
鳴咽し、鳴咽しながら背を撫でている千枝
の感情を計つていた。

「ね、一とまず家に入りましょう」
早苗は、千枝の乳房を押分けるように首
を振つた。甘い感傷が流れた。

彼は千枝と、その夫の前の、或るとこ
ろはほかし、あるところでは誇張して、も
うお師匠の許へは帰らない。と、再び泣き
じやくつた。亭は暗澹として腕を組んでい
た。彼は家事や世間づきあいは一切千枝に

任し切つていた。であるので、此のような事態の前にどう処置していいのかまるであらなかつた。

千枝は太平を元々好いていなかった。親の言うまゝにその裁縫所へは通つたが、彼女はその一種の遊び場としていた。縫方も女学校時代の癖をそのまゝ押通した。で今、家計の足しに、と、仕立物をしていたが、苦痛であつた。彼女の心には、若しこのまゝですませるのなら、早苗を自分の許に置いてよい。と言う思いがあつた。それは、小さな打算もあつたが、彼女は何か言うことなく早苗にひかれていた。

「一応、今日は休みましよう」

千枝にそう言われ、ば亭もその気になるのである。(明日。ふむ。いい言葉だ) 彼はそこで始めて腕組を解いた。

四、訪ねて来た母親

早苗は千枝と枕を並べた。千枝は早苗の背を抱えて、深い眠りに入つた。早苗は千枝の乳房をひそかにまさぐりつゝ、眠ることが出なかつた。二十四の女の香りが夢の中のものであるのか、現実のものであるのか、眠りのうちにも起伏する豊かな肌にあふれても、早苗には定かでなかつた。ふつと、無惨な想念が、太平の行為の照返しのようにひらめいた。太平と阿知美の痴態が彼に教えた性のいとなみの、いとなみかけのものの欲を、彼は味つた。めざました千枝は、現実を疑つた。疑いようもなく、自分をつかりと捉え、深く結び合つてゐる早苗は、男である。女のように弾みのある肉体の中で、そこだけが過ましく、固く間

違ひない――

千枝は深い息を吐いた。それは、喜びのものであるか、悩みのものであるか、彼女自身わからなかつた。吐息は続いた。早苗が燃えてくる千枝を意識した時は、最早明方に近く、亭は、薄く口をあけて眠りつづけていた。

翌朝、千枝は何事もなかつたように朝の挨拶をして、頬を火照らしてどきまぎする早苗へ輝くような微笑を送つた。私、もうあなたをかえさないわよ眼でそう言う。

この日から千枝と早苗は社務所の奥まつた部屋でヘラ台に向ひ合つた。不倫。背徳。破廉恥。等々、それ等の言葉は、若い盲目な肉体の前に何の力も示さなかつた。

新聞の広告欄に「早苗、心配している。帰れ」の広告が再三出た。二度は由美の名で……そして、千枝の許にも……若し早苗の行方がわかりましたら早非共御一報を……。と言う太平の手紙が来たりしたが、それ等は千枝の手によつて早苗の眼にはふれることがなかつた。

早苗は、新聞も読まず、雑誌も読まず、ただ千枝の眼の色を読んだ。千枝の――女の肉体を読んだ。それが彼のつきることのない研究目標であり、喜びであり、生命であり、一日の総べてであつた。彼は千枝の中に深く浸み込んで、千枝も亦、一時間と早苗を離していらなくなつた。言うまでもなく、風呂にも共に入つた。神宮亭はそれを少しも怪しまなかつた。怪しむ筋合いもなかつた。早苗は、千枝の豊饒な肉体をむさぼつて、いよいよ蒼く透る肌になつていつた。

千枝は、良人を完全にあざむきおゝせ

ると、わかつてからますます心が暗く重くなつていた。彼女は早苗と共に、何処か遠くへ行つてしまいたい、と、切望し始めていた。

由美が白山神社へ訪ねて来たのは丁度そのような時であつた。三十五の年よりは五つ六つ若く見え、玄關の部屋に膝を突いた千枝は、嫉妬めく心をそのまゝ表情に現わした。彼女は由美を早苗の母と信じることは出来なかつた。めぐらんで、必死に、早苗を奪われまいと念じた。誰がなんと言つても渡すまい。彼女はそう思いをきめると、きつぱり

「はい。早苗さんはいらつしやいます」

由美はほつと肩を落した。地味な和服の似合う憂愁に、更に苦悩を重ねた彼女は、母の落付きを持つていた。

「私、お差しい話ですけども、おみくじにもすがりましたの。早苗が居なくては、生きて居られませんか」

千枝はいよいよ表情を強ばらした。

「私もです」

由美は、その語調に胸を衝かれた。女だけの持つ本能的直感で、この若い人妻と早苗の不幸を洞察した。彼女の深い傷痕が生々しく甦つてきて、声を呑んだ。

「……生憎、今日は留守でして……疑うようですが、本当にお母様でいらつしやいますか？」

由美は黙つて肯いた。千枝はまじろきも



せずに彼女を見た。彼女の背を見た。そこに早苗を幻覚した。千枝は由美と早苗が最も親しいものであることを否定することが出来なかつた。(どうしても早苗を渡すことは出来ない。それは、手を切るより、足を失うよりつらい切ないことだ。たとえ早苗の母でも、彼を渡すことは出来ない。早苗は私の命だ。身体にたとえれば……いや、具体的な何物でもない)

由美は、理性を失つた千枝を悲しく眺めた。彼女は出直そうと思つた。興奮している時は誤解を生むものであるし、話がまとまる筈はない。明日来よう。

由美は、早苗の所在が明らかになつただけでも心が明るんだ。由美は何も言わずに帰つて行つた。

千枝は部屋に帰ると、針を持つたまゝぼんやりと空間を見つめてゐる早苗を見た。

「早苗。家へ帰りたくなつたの！」

早苗は慌て、針を持直した。

「どうしたつて言うのさ。お母さんのおっぱいが欲しくなつたんでしよう」

千枝は、由美の容姿にも態度にもひけ目を感じて、炎のように妬心が全身に燃えひろがるのを止めることが出来なかつた。彼女の心の均衡は崩れた。それはもう、早苗が居ても居なくても同じことで、崩れた姿勢は止めどもなく傾き傾いた。一これから旅行に行くのよ」

男色天国

五、瀬越君江

千枝は東京行の切符を買った。一応東京へ出て、そこから温泉へでも行き、心のまゝ二三日早苗と過してから飲むつもりで、睡眠剤を買った。早苗は一切に無表情で千枝に従っていた。千枝は、修業旅行に行く女学生のように嬉々としていた。早苗には、そのような千枝がめづらしかった。彼はそれを、慾情の転形だ

「どこへ、ですの？」
「どこでもいいじゃないの！さ、洋服を着るのよ」
千枝は早苗を引立ててむしるように着物を脱がし、自分も素早く服に着替えた。早苗には、たゞなるようにしかならない。と言ふ觀念がいつしかしつかりと彼の性格の根底に根を張つて、……もう、どうでもよかつた。その場で快樂を得ること。それだけで沢山であるのだ。人生とは何か。それを彼は、性慾の充足。と、割り切つた。それが満されない時人生は不幸である。そのやむ時、人生は終末を告げる。そしてこゝに千枝と云ふ人生の泉があつた。彼の掌にも、足の指にも慾情の触角が鋭敏に生きていた。しかし、太平によつて残された傷痕は、彼の心身から消え去つていなかつた。

彼は忙しく手廻品をトランプにつめ込んでいる千枝の姿を眺めながら苦笑した。

と思つた。

東海道本線に乗替える頃、早苗は酔つて吐いて、本線に乗つた時は千枝の胸に抱かれてうつらうつらしていた。千枝も心が張りつめていた。顔色が蒼白であつた。——一体、何のために家を出たのであろう。

そして、これからどうなるのか。それは全く彼女の知つたことではなかつた。全身の重心を自分にかけているこの女装の青年を振り捨てたらどうであらう？それにしても彼女は深く溺れすぎていた。彼の柔い髪を愛撫している間にも、慾情はたえずこみあげてくる——早苗の夜の技巧の長けたのを彼女は認識していた。彼のテクニクに他愛もなく無我の境へ誘へ込まれてゆく自分を腹だたしいと思うことさえあつた。彼は寄りかゝつて額で乳房をかすかにゆすつてゐる。千枝は激してくる感情を指先から放散せようとでもするように、早苗の髪を撫ぜつづけた。と、自分が先刻まで死ぬつもりであつたことを思い出して、冷々としたものが背筋を流れた。若い生命を自から断つなど、何と馬鹿げた事だらう。生きるのだ。東京でなら何をしたら生きていけるに違いない。と、この男はやはり私が飼うことにしよう。毎日磨いて、良い餌を与えて、飾つて、飼おう。

東京へ着いたのは夜であつた。千枝は、女学校の同級生であつた瀬越君江の住つてゐる上目黒のアパートを訪ねた。君江は留守であつた。二人は行く当てもないので、狐のような顔をした、かさかさ乾いた感じの管理人の部屋で君江の帰りを待つことにした。管理人の深谷は四十台の若さで、すつかり禿げていた。彼は空襲で妻子を失つ

男色体験者 染田 玄

私が昨年の秋以来、男色る少年から貰つた手紙にはをテーマとした実話小説を私を小説の主人公に、そして、三篇発表すると、雑誌で自分をその相手の少年に社氣付で、全国の男色同好なぞらえて、どうしても私者からの夥しいファン・レの所へ来たいという熱烈なターを貰つて私自身驚いてもので、二度三度手紙のやしまつた。最初は一々返信りとりをしてゐるうちに、を書いてゐた私も、それが益々熱を上げてくるので私数百という数に達した時ははもう煩しくなつて、暫く遂にサジではなしに、筆を返事を出来ないでいると、投げてしまつた。

いろ／＼話を聞いてみると十四の年から港町へ上陸してくる船員に可愛がられてと／＼病みつきとなつたそう、最初は大変煩悶したそうだが、私の小説を読んで元氣づき、相手の船員が北海道へ行つたきり帰つて来ないので、意を決して私を訪ねて来たのである。現在、彼、おせいという名で最も若手の男娼として支那服を着て街角に立つてゐる。

その中で九州の或る港で私の家を訪ねて上阪してき血洗いをしてゐた十六になつた。

たことなどを問はず語りながら、せんさく的な眼色で二人を見廻した。早苗はその目を、太平の目と同じだ。と、感じた。

「わしは手相を見るのが名人でな、このアパート中の人達はみんな私のところへ来ますよ。どうですお嬢さん。一つ……」

火鉢をへだてて彼は全身でにじり寄つてくる——早苗は身をくねらせて脇を向いた。

千枝はその動きの情感の盛上りに胸の裡で吐息した。深谷はそつと唇を濡して、早苗の手をとつた。早苗は身を固くした。

君江は十一時を過ぎて帰つてきた。寝静まつた空気をふるわせて、鼻歌まじりにビシリと玄関の戸を閉めた。深谷は早苗の手を離した。

「君ちゃん。御氣遣だね。御客様だよ」
「何言つてんだい今頃。帰しておくれよ。」

私は淫売じゃないんだからね

「へッへ、とても帰せない方なんですね」

「ふん」

君江は、管理人の部屋をのぞいて、眼を光らせた。

「なんだ。千一坊か。と、こちらのお嬢さんはどこのお嬢様なんだい」

千枝は口ごもつた。

「ふん。何でもいーや。あたいの部屋へ御いでよ」

君江の部屋は階段を上つたすぐの六畳であつた。千枝は君江の言動から、ふとも敷放し、食器も今朝のまゝ、衣類もさぞかし乱雑に取散らされてあるだらうと想像していたが部屋にはチリ一つなかつた。ただ机の上に原稿用紙が乱れてあつて、まだ文学少女であるのかな、と、千枝に想わせただけである。

君江は夜具を引出してその上にどすんと

腰を落し、

「どうせ私の処になんか頼ってくるんだから、理由も聞かないよ。その代り、東京つて処は住むところでなくて戦うところだつて言うことを覚悟するんだね。まともに働いたつて生きてゆけないんだからまあ四、五日ゆつくりと東京を御覧な」

と、笑おうとして、ふと、早苗の瞳にあうと、笑いをひいて火照つた頬を撫ぜ、照れ臭そうに別な笑顔を作つた。

(男だ)

君江は更めて千枝と早苗を見比べて、冷えた茶をついだ。彼女はすべてを読めたよるな気がした。しかし、何としても、夜勤を續けている身体は疲れ切つていた。彼女は無電機の部分品を作つていた。指が節くられて、理想への道程は出発と同じ長さにあつた。

ふとんは一組しかなく、三人は押し合い秘かに、互いの身体をさぐる思いを抱いたまゝ寝入つた。

六、佐多マユミ

亭が馳けつけてきた時、千枝はもうこと切れていた。君江の部屋へ来てから四日目の朝である。嫉妬と、憤怒と、絶望と、苦悶と……遺書はなかつた。検死も済んで、それは厭世自殺に落付いた。死の原因を知つてゐるのは君江と早苗だけである。そして、早苗の悲哀の表情の底には、冷やかな金属を想わせる冷酷さがあつた。君江は、その底の深い無情さに、ひそかに身ぶるつた。彼の行為の激しさ、肺腑にまでしみとほる性のそれは情熱でないことを、千枝の

枕元で泣いてゐる早苗に見た。彼の柔らかな、なよなよしい腕にからまれると、この小僧が、と、吐の中で拒んでみても、不思議と開かれてしまふ魔術師のような手練とその後に来る、苛めない、嵐の息止みもないような激しさに吹きつけられると、脳髓も臓腑も火となつて、炎となつて、全身が燃えたぎつてゆく恐ろしさを君江は味わつた。小柄な、量感のない、女のような早苗の前に、少くとも肉体に自信のある彼女は、口惜しいけれども負けた。と、牌を投げた。

君江は自分の好奇心を悔いた。が、打伏して泣き崩れてゐる早苗を見ると、怒る気にもなれないのである。そして、早苗を自分の肉体に縛りつけておこう。と、思い直すのである。この男を放しておけば次々に悲劇を生んでゆくに違いない。と。

亭に次いで千枝の両親が、少し遅れて阿知美が馳けつけてきた。阿知美が来た時には、早苗も流石に動揺し、脂肪の塊の前にたじろいだ。君江は興がつて阿知美と早苗を見比べた。

阿知美は早苗だけしか見ていなかった。他の一切を無視した。人々は彼女が何のために此処へ来たのかわからなかつた。

阿知美は身をゆすつて乗出した。「……な、早苗。一応、裁縫所へもどつておくつせ。頼む」

阿知美はあくの強いアクセントをつけた。

「お師匠は病氣でな、もう明日にも知れぬ容態だぞ。」

彼女は一言毎に身体をゆすつた。「お師匠もいい跡取りが欲しいと言つていたところでもあるし……」

早苗に少しの反応もないのが阿知美をあせらせた。君江は次第に興味深く顔を輝やかせて阿知美と早苗を見比べた。ひよつとすると、この脂肪の塊も早苗に参つてゐるのかもしれない。若しも……と、君江は想像の中で阿知美と早苗を取合せてみて、笑い出しそうではなかつた。

母の由美が早苗を迎えに来た時、早苗はもう君江の部屋に居なかつた。君江の友達でダンサーの佐多マユミの部屋に居た。

マユミは、今朝君江が連れて来た美しく少女は何者だろう、と考へてゐた。寝返りを打つて肘をつき、煙草をくわえてマツチを捜しながら、もう一時間も火のない火鉢の前にしおらしく膝をそろえてゐる早苗を、なかなかいい玉だ。と、無遠慮に眺めまわした。

(君江のS?。ちよつと抱いて、可愛がつてみたいね。)

早苗は、火鉢の灰を眺めながら、そのよるなマユミを、マユミの肉体を、そのボリユームを、頭の中で計つてゐた。マユミも時をまたず、めくらむ程に生命の火を掻きたてられるであろう。性の歡喜にすべてを焼きつくされるであろう。

マユミはマツチを探しあぐんで早苗を呼んだ。

再び佐々太平の話

この早苗つて言うのがわしの女房でしてな、はあ、

阿知美はお産で死にました、あゝ肥えて

いる女は妊娠しないと云われていますが、そももばかりゆかんようすな。勿論あれも早苗のたねを宿して死んだんだから本望でしょう。え?、芳江さん。そう言うもんじやあないがな。わしは早苗のことを一度雑誌に書いて貰いたいと思つていました。なあにかまやせんかまやせん。ドンドンお書きなさい。んだがお前さんも、虫も殺さんよりなお嬢さんでようこんな話に興味を持ちますな、わしはこう見えてもまだ三十前ですぜ。へッへ、よかありませんか、わしでは。話ならまだいろいろありますよ。早苗は二、三日前から留守です。何処?つて、それはまあ言わん方がいいでしょう。泊つていらつしやい。なあに、知れやしませんが。どうしてもいけませんか。じゃ、握子、御子だけでもとらして下さい。わしはお嬢さんにすつかり……へッへ、古いせりふですか。いや、どうも。じゃ、御免して下さい。

× ×

× ×

私は陰気くさいじめじめした、そのくせだつた佐々裁縫所を出ると、やつと伸々と明るい気持になつた。

佐々太平氏の世にも奇怪な話に酔つて一心にメモを取つてゐた私も、彼の妙に粘つてこい変な誘いにハツとして、個人としての生理的な女にかへつた。

早苗さんという彼の細君に逢つて話を聞けないのは残念であつたが、それは又次の機会に譲るとして、特にせがんで彼女?の写真を貰つてきたので、これを誌上に飾つてもらふことにしよう。

(性的倒錯訪問記終)



国鉄大阪駅



国鉄

大阪駅

娼婦の宣傳戦

本誌特派

丹波二郎

伝言板桃色探訪の依頼を受けた

私は、退勤時を待ちきれず机の上をかたずけるなり、社を飛び出した。地下鉄で淀屋橋から梅田迄、そこは大阪の表玄関、大阪梅田駅――

北は北海道から南は九州まで日本全国の地方の香りを運んで、毎日吞吐される数十万の乗客が渦巻

くR・T・Oの看板の下の人の群。

私はす早く中央出口の前の伝言板の前に立つた。日時、要件と書かれた漆黒の立派な塗板には、生憎と今消したばかりか、何にも書かれていない。六時間以上経つたものは消すことがあります、という備考をそのまゝ実行したものらしい。まだ少し時間か早や過ぎる。足はスバルや腰々堂の方へ向く、時を費すために用もないのに陳列棚をのぞいたり、読みたくもない雑誌をと

魔都大阪の横顔プロフィール その秘密の觸手は主要駅の傳言板にうごめいている。
人は單なる路傍の閑文字として看過しているが、その裏に潜む幾多の謎。本誌はその本態を探るべく、五人の特派記者を、派遣して、この人生縮圖のコースを辿つた。
見よ！ 赤裸々な人の世の姿を……

りあげて、頁をべらべらめくつたり、なんとはなしに時を過そうと思つた、けれど、待つ間の時計の針の動くのろさ。
「ちへえッ、しやくだなあ」

と呟きつゝ、ふらふらと駅構内へ戻つてきて伝言板の前を通りかゝつたとき、白墨を手に入れている、詰襟の少年を見て、色



KのNさん、阪急の西入口まで来て下さい
ピンクのハンカチ——。
年齢に似合ぬませた字を伝言板に書きつ
けて、にやりと笑いを残して、少年はさつ
さと伝言板の前を立ちさつた。

「太平製麻KのNさん、Nさん」
私はNさんという言葉を何度も口のなか
で繰り返した。Nは丹羽の頭文字であり
社では自分のことをNさんと呼んでいる。
けれど、あの少年にも見覚えもないし、ま

して、ピンクのハンカチなどになんの縁も
ない、だがひどく媚しさを感ずる文字で
ある。Nさんがはたして自分をさしている
のかどうか、そのへんのところは判らな
かつたが、これなら、どうやら色気がありそ

南海難波驛

戀愛ゼット・ゲーム

本誌記者

長沢啓士

黒の学生服、銀鼠色の背広、赤いガーデ
ガン、紺のベレー帽、七彩の雑沓が目くる
ましく行きかう南海本線の始発駅ナンバ……

「ずいぶん待つたでショ」
「うん、ピースを一箱吸ってしまった!」
「ママが出かけたあとから、飛びだして来
たのヨ——」

会った彼女は幸福であるけれど——ホー
ルの中には、五時間も待たされたというよ
うな青年が、セツパつまつた顔つきで、そ
れでもマダ諦めきれないで、腕時計を見た
り、ホールの大時計を仰いだり。
多種多様の人々が。思いの感情を白
墨に托している駅前伝言板——。

「サキへ行ッテ、アスコデ待ッテイル
——P子へ——T生」

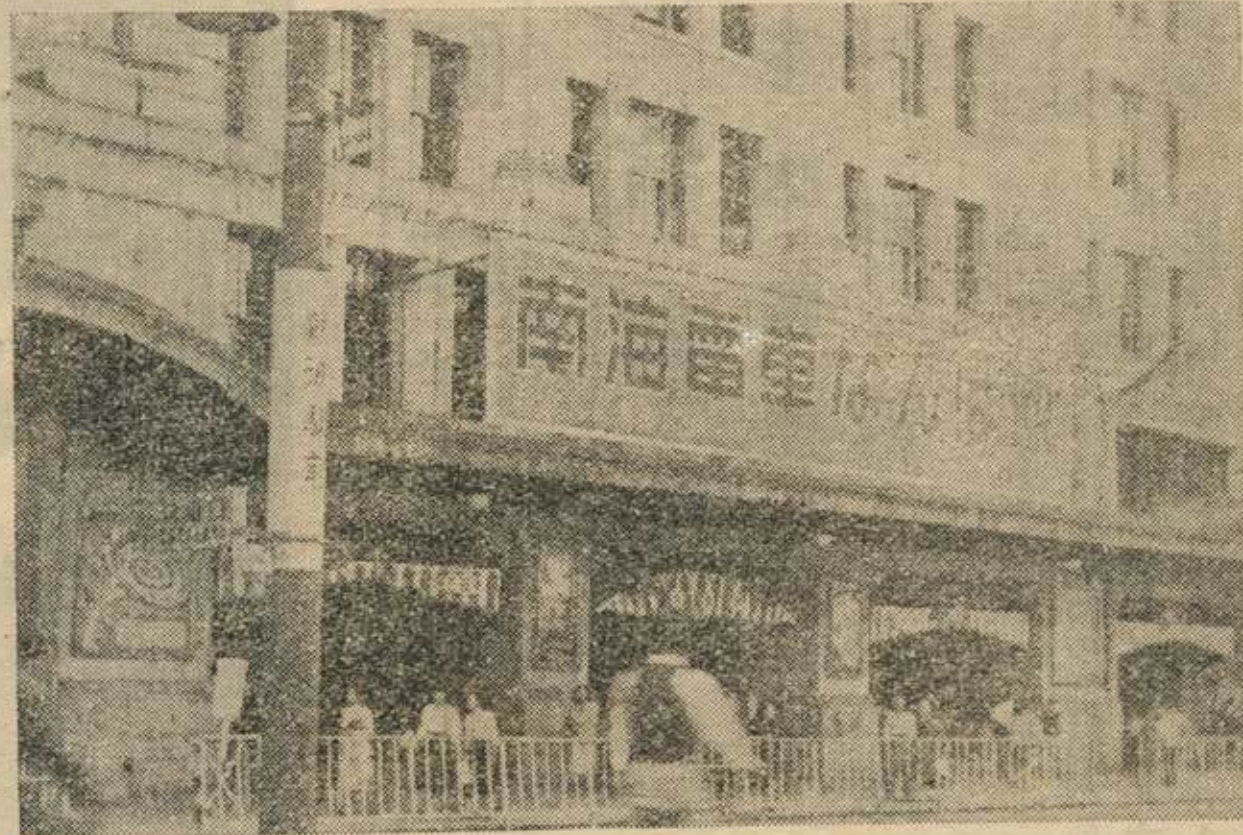
「待ちくたびれた。蛙がなくからかえ
る。——N子さんへ——竹」

こういう種類の伝言文句のとなりに
すらすとした女文字で

「今までお待ち申しました。アトラス
でお待ちしております——英夫さま——
夢子」

非常な達筆、黒板に書き慣れた字で
ある。——夢子というのは、女教員で
もあろうか。

さて、次の日も難波駅の伝言板には——
「今までお待ち申しました。アトラスでお
まちしております——英夫さま——夢



南海本線難波駅

子」

と新しく書かれてあつた。

その次の日も、同じ伝言板に——。

「今までお待ち申しました。アトラスでお
待ちしております。英夫さま——夢子」
これで、三日続けて同じ伝言板へ同一の
伝言である。おそらく、夢子という女性

今うだ。ちやうど、桃色伝言板探訪には恰
好の事件だと、阪急西入口まで行つてみる
気になつた。

入波に押され、阪急の方へ足をむけると
年甲斐もなく胸が高鳴つてきた。ピンクの
ハンカチのもつ、エロティックさが妖しく
体内を駆けめぐる。

赤信号を幸に眼を阪急前に走らすと、そ
れらしい姿の者はみつからなかつた。やは
り人違いだと思つと、急にがっかりした、
と同時に自分の甘いひとのよさに腹が立つ
てきた。

「帰ろ、馬鹿馬鹿しい」
くるりと踵を返したとき、

「Nさん」

と呼びとめられた。

「待つてよ、逃げちやいやよ」
躰当りでくるように、若い女が、私の腕

へ飛びこんできた。シクラメントの匂いが
ぶらんと鼻へ来て、私の官能をそよりたて
た。

「君は？」

「あらッ、もうお忘れになつた」

「知らないね」

「わたし、それッ太平製麻の庶務課につと
めていた、羽山紀子」

「ほう、君が……」

私はあまりにも変化の甚しい羽山紀子の
顔をまじまじとみつめた。

「変つたでしやう」

「で、伝言板はやはり僕が目標だつた?」
「そうなの、丹羽さんが愛妻家ときいて、
ちよつといたずらしたのよ。でも男つてや
はり誰でも浮気ね、丹羽さん、どうッ、わ
たしと遊んで下さらない」
「商売人になつてゐるんだね」

日で三日間も、英夫という男からスッポカされたのであろう。

すげなくされれば、される程いや増しに燃上がるのは女心であらう。驚いたのは、その次の日も同時に、

「今までお待ち申しました。アトラスでお待ち申しております。英夫さま——夢子」

という伝言板の走り文字、今日は筆跡が少し乱れたのは、彼女の心の悩みの激しさを物語るものではなからうか。

それにしても四日間も待ちつづけるというのはなんと執拗な女性であらう。

三

さて、その次の日も夕方七時頃。同じ伝言板の傍へ近づいてみると、

今日は意外！

「今まで待った、アトラスに行っている——夢子さん——英生」

これは乱暴な男文字である。

さしも執拗だった夢子も、連日の待ちくたびに英夫という男性を諦めたのであろう。一方、英夫という男は、夢子の燃えさかる真情に動かされて、昨夜この駅へ来て見たが、夢子は見えない——。そして、伝言板の教えるとおりに、アトラスへ行つてみたのであろう。

しかし、あまりに時間が経過したので、夢子の姿はそこに見えなかつたに違いない。今更に、女の真情に打たれた彼は、今度は自分のから誘いの伝言を書いたのであろう。そして来てみれば、今度は自分が、彼女のさんざん味つた憂き目を見ることになつたのであろう。その証拠には、次ぎの日の伝言板の片隅には男文字で

「今迄待った、アトラスへ——英生」と書かれてあつたのである。

恋愛の熱度というものは、双方平均するときはないとみえる。

夢子が燃えたとき、英夫は冷やかに——

英夫が燃え上ると、夢子が冷静になつた。

伝言

板に

現れ

た恋

愛シ

ソ

ム

は、

まだ

見ぬ

男性

英夫

と女



性夢子とのこの逢引シーソーゲームに、大変興味を持つた。

だから、次の日も

「今まで待った、アトラスへ——」

という男の悩ましい走り書を見ると——アトラスという喫茶店へ行つてその男の顔を見てやろうと決心した。

ネオンの花が華麗に咲き爛れているとある横丁——訪ねあてたのは、さうやかな喫茶店であつた。

深々としたボックスには、客が満員。

床屋の前を通ればバリカンを持つて追いかけられそうな髪長い青年、ヤケに派手なネクタイの紳士、強度の近視鏡をかけた

学生、など——。

果して、どの男が英生に概当するのか、僕は二杯目のブラジル・コーヒを飲み干したのである。遂に人待ち顔の英生なる人物を発見することは出来なかつた。

次の日の伝言板を見た僕は、また人待ち顔の英生//の顔をゆつくり観察してやろうという激しい好奇心で、アトラスへ出かけて行つたのである。

しかし、この時も「英生」を見出すことは出来なかつた。

四

その次の日。僕は意地になつて、いつもより早い目にナンバ駅へ出かけた。

遂に「アトラスにて待つ」と伝言板に書いてある//英生//を発見したのであるが、意外！それは喫茶店アトラスのコックである。

「何んだ、君なのか！」

と思わず叫ぶと、

「ヘッヘッヘ、こう書いときますと、お客さまが来て下さるんで！」

コックは白い割烹衣に下駄ばきのまゝで英生、と書き終ると白墨のついた指を前垂れで拭いた。

「ところで、あの夢子という達筆の女の人

は一体誰なの？」

「夢子といふやすのですか、あれはウチの

ママのことでござえやすよ。ヘッヘッ」

僕はあきれかえつて、足早やに去つた。

夢子というのは、アトラスのママとは

チェツ、馬鹿にしてやがる。

「ええ」

「じゃあ、あの伝言板の少年は……」

「わたしの、ボン引きなのよ、いゝお客さまを、あのちんぴらが、とつかまえてくれるの……課長級の人物ばかり」

私は、紀子のまだあどけなさが消えていない顔をみつめた。

「と言うと、僕は課長級ではなし、まづ光

栄のいたりというところだね」

「Nさんは特別よ、製麻にいたところからあなたは好きだつたのよ……ねえ。スベツシ

ヤル・サービスでいくわ。ショート・タイムでもいゝわ」

「よし、君の光栄ある誘惑に感謝の意をさ

げよう」

阪急前の人波をおしわけするようにして、

梅新の方へ私は紀子の姿の後を追つた。

さて、私の命ぜられた伝言板桃色探訪は

紀子の出現によつて俄然色めき立つてきた

しかもその相手たるや、昔馴染の女事務員

しかして現在ではソウソウたるプロフェッショ

ナルのナンバー・ワン。その男を操縦する

技巧たるや、完全なる結婚とあまとりあの

奥義を駆使して、まさに刮目して待つべき

ものがあるであらう。

彼女の爛熟した肉体を味わうことが出来る

のも役徳の一つと考えて、胸をワクワクさせながら来た所は、梅田新道交差点の西南

永楽町の裏通り、表はシモタ屋風ながら、

中へ入ればイキな待合風。こゝが彼女が課

長、重役級を手ダマにとる愛のネグラである。

今宵は平社員である私が、高級社員並の

スペシャルサービスをして貰つた手前、彼

女から聞き訊した御得意の芳名だけは、公

開しないでおく。

(了)

阪和 天王寺驛

奥様浮氣求縁帖

本誌特派
佐々木直



「長らくお待ちになつて……」
ひどく艶のあるなまめかしい声に、ふり返ると、えん然と笑う三十女の、あだつばい姿がそこにあつた、私は眼をまたゝいて、不審そうに女の姿を見あげ見おろし「人違いでしよう」と言おうとしたとき、その口を封じるように。

「駅の伝言板に書いてあつたので急いで来たのよ、まあ……どうしてそんな変なお顔をなさるの……佐伯さん」
の女の言葉に、私は立ち読みの本をばさりとおいて、再び女の顔を見直した。天王寺駅の伝言板の前に立つて、隅から隅まで読んでから、これからの行動の予定を立てるため売店の雑誌部で立読みをはじめて十分も経たない間の大変化に、私は啞然としてしまつたけれど、探訪記者の手前いまさなら人違いだ等と言つて、この千載一遇の機会を捨て去る程駆け出しではない。
「時間におくれて、もう黒潮列車は出

てしまつたでしよ、予定を狂わせてすみません。けれど白浜まで行かなくても大阪市内にもいゝところがあるわ、ねえそこへ案内してちょうだい」
私はこう言う女に手をとられて、駅の待合室前へ来た。

えゝまゝよ、佐伯とか言う男になつてやれ……女の発散する媚態に、私は臍内をかくまはる欲情に負けてこんな不貞不貞しい氣になつた。

「笑子さん」
「危険だと思つたが、私は頭に泛んだ名を無雑作に言つてのけた。」
「まあッ、わたしの古い名、まだ覚えていらつしやつたの、笑子、と言つたのは、メトロ時代だつたわ、うれしいわ、さあ、わたしがいゝところへ、御案内するわ」

腕を組むようにして駅前並んだタクシーに乗り込んだ。自動車はアベノ街道を南へ走つて、上町線の東天下茶屋を西へ、聖天山の丘陵の前で停つた。



きしめた。これだから探訪記者も悪くはない。
女は着物の裾を乱して、燃ゆるような緋色の下着から、白い足を惜気もなく出して私の欲情をそゝりたてた。こんな女が、どんな性質の女であらうと、このまゝでは別れられない魅力が、臍じゆうをかけめぐつた。

あわや、落花狼藉、昂奮の絶頂にきたとき、私の陶酔がにわかに冷え、理性が心を交えた。こんな場面には慣れない安サラリーマンのおびえかも知れない。私はいきなり女の腕をはねのけた。
「僕は佐伯というひとではありせんよ」
「お人違い？」
「僕は君を知らない」
「わたしもよ」
女は少しも騒がずに言つて、またえん然と笑つた。

「こゝにしましょう」
戦後の建築にしては、わりとがつしりした旅館の前になつて、笑子は妖しく笑つた案内された奥座敷、かたどおり酒になつた。
「二人だけの世界にいたしましょう」
まつわる女の腕に、酒の酔も手つだつて私は陶然とした氣になり、女をぎゅつと抱

「帰りましょう」
私は探ぐりの打診を入れてみた。
「あと腐れがなくていゝじやないの、なにも遠慮することはないわ」
女は再び白い腕を私の首にまきつけて、いつかな離さなかつた。
「ねえ、驚いた？ あたしのやり方、でも夜の女でも美人局でもないから、安心してつきあつて頂戴！ 失礼ですが御勘定はあたしが持つわ」
いよゝ面白くなつてきた。
そうと素性がきまれば私も満更嫌いな方

でもない男である。腰を落ちつけて飲み直すという事になった。私は俄然元気が出て来た原因の一つに、彼女が勘定を持つてくれるという一言にあつたことは確かだ。飲めばまだ四五本は十分飲めるという処で遠慮したのは、後に残っている興味の世界に対する探訪の役目が自制心を起したもののらしい。

酔つたふりして、襖の近くへ倒れてそれとなく開けた隣りの控えの間は、絢爛たる閨房の褥。予期したことなく、久しぶりの熱燗の日本酒の味。ほつてりとした三十女の白い素足、それに此の赤い掛蒲団である。

私ならずとも此処で尻込みするようなら

男ではない。若し仰せつかつたお役目が無いならば、この得体の知れない貴婦人と後腐れのない歡樂の夢を楽しんで、女体の中に溺れてもいゝ筈だが、いくら鼻の下の長い私でも大役をひかえては、そうもならない。

「その前にあなたの正体をはつきり知らしめて下さいよ」

私は背広の上衣をとつたまゝで、緋の掛蒲団の上に寝ころんだ。私の横にいざり寄つた彼女が告白した所は、とんだチャタレ夫人だつた。それから後のことは、私の役目がすんだから、まア勘弁して貰ひましょう。

近鉄 上六驛

求愛狀の代筆

本誌記者

棚橋 明

ラッシュ・アワーの渦まく夕方六時、近鉄上六駅の伝言板には、今日はいくとう上玉がない。たつた一つこんなのがあつた

ババ明日三時三越にします道夫

伝言板に「ババ」は目立つ。これなら見落すババもなからう。効果百パーセントだ。「三越にします」というのは言うまでもな



なくなつた——凡そ、そんないきさつが、この十四五字、僅か一行の文句の中に十分察せられるのである。

ババと呼びかけているからには、道夫はその子であろう。然し人の中で公然とババと呼ぶからには、どんなに大きく見積つても十才以下の子供の書いた文字としては、どうやら大人っぽいのが変だ。

変なことは考えると、まだ、沢山ある第一、子供が父親と駅で会見するということからして、普通の家庭の規準からして変ではないか。二十才以上一人前の男の子なら家を出て独立しているということもある

が、十才以下の子が……この伝言板の文字は、考えれば考えるほど変であり獵奇的である。推察すれば、父子でありながら同じ家に住めない境遇、そしてそこから感じられる一珠の人生の哀愁だ。よし当つて見よう此の伝言文の裏にはどんな人生の姿が横わっているか？

私は翌日、高麗橋の三越へ行つたことは勿論である。道夫君は女ではない筈だ。十才以下の子供を目当てに休憩室を全部探したが、結局、男の子は三階の休憩室にたつた一人発見したに過ぎない。

過ぎないというのは、悲しいかなこの男の子は、求める道夫君ではなさそうだということだ。四才位。どうやら歩ける位のこの男の子が主人公道夫であるわけがない。あの文句を書くからには十才以下、どんな天才児でも八才以下ではあるまい。

もう三時だが、時間に遅れたのかも知れない。とにかく一服だとソファに掛ける。と、かの四才君、チヨコチヨコと売場の方へ出て行こうとする。並んで掛けていた二十二三の婦人がそれを見て、「道夫さん、道夫さん」と呼びとめた。

オヤ、オヤ。

私の探訪意識は俄然緊張した。と、その時だつた。

「ヤ、坊や、待つたかい」

四才の道夫君の頭を撫でながら休憩室に入つてきた紺のウールの背広に、懷中時計の金鎖を胸に提げ、革の折靴を抱えた三十二三の青年紳士。これこそ、待つていた目

「昨日は失礼いたしました」

と女は言う。

「いや、僕の方はいつでも……」

伝言板の文句のこと——会見日変更の件らしい。してみると、あの伝言板の文字は

道夫君ではなく、道夫君と一緒に来ているこの女が道夫君の代筆をしたものらしい。いや実は道夫君なんかはどうでもよかつたのかも知れぬ。とにかく若い男と女だ、少し風向きがエロくさくなつてきた。

「昨日の朝、速達を頂いた後で病院から返事があつて直ぐ来いというのでしたから、昨日はどうせ先生をお待ちしていても、四時という向うからのハガキですし、ゆつくりは出来ませんでしたので、それであんな——」

伝言を書いて今日に変更したんだナ。

病院からどうのと言つてゐるし、パパ君を先生と呼んでいるし、その先生は黒革の折靴を持つてゐるし、このパパ君はテッキリお医者さんに相違ない。

「内科の橋博士に用事もあつたし、先週の日曜にK病院へ行つたんだが君がいなかつたので、どうしたのかと……」

「よしましたの——」

「婦長に聞いたが、どうして？」

「あの、やはり……、ですから今度S病院に運動して見たんですけれど」

「はいれるかい？」

「ええ、明日から勤めることになりましたの」

「それはよかつた。お祝いにメシでも食べよう」

パパ先生は立ち上つた。二人を連れて食堂へ行くらしい。わかつた。この女は察するところ病院の看護婦らしい。

病院で研究や臨床見習をするインタインの医者

の卵や若い医学士の中で立ち働きのだから、いろ

／＼と誘惑があつてうるさいのだらう。この美貌

ではネ、無理はないよと私は同情する。いや然し

このパパ先生だつて、三

四年前に大学を出たての時、実は見習生中にこの

看護婦と出来た、そしてこの道夫君が誕生したつ

て寸法に間違ひあるまい。私のロマンチックな空想はそこ迄発展した。

食堂の入口に早廻りして待つてゐると、道夫君はパパに買つて貰つたらしい玩具の飛行機を持つて、パパとママのまゝならぬ心の底の悩みなどには全く無頓着でいとも朗らかにパパとママの先頭に立つて食堂へ入つていつた。三人水らずの親と子は楽しそうに何やら頻りにバクついてゐる。

「坊や、こんどはいつパパに御馳走していただけるでしょうね」

ママはそう言つてチヤとパパの顔を見るその言葉を翻譯すると、坊やでも御馳走でもない、こうなる。

「今度はいつお目にかゝれましょう。いつまで私達はこうして人目を忍んで逢つていなければならぬでしようか」

と、ママの目はそう訴えてゐる。

「ね坊や、もうじき、毎日一緒に御馳走が食べられるようになるさ」

パパはママの方を見ないで言つた。

「早くそうなれると嬉しいわね。道夫さん」

ママは下を向いてそう言つた。ママの目頭には露のような涙がぼとりと浮いていた

パパの両親がきつと二人の仲を許さないのだらう。両親のすゝめる縁談を頑強に拒絶しているのかも知れない。しかし、近い将来に両親を説服し得る見込みが立つてゐるのだらう。私は二人の祝福を祈つて引き上げた。

京阪 天満橋驛

肉愛流轉特別急行

特派記者

坂本和美

淀川沿いに大阪平野の真只中に横切つて直接京都の心臓部、四条三条に連つてゐるというのが、この京阪電車であるという宣伝文句ではないが、宇治川ラインから比叡山、琵琶湖と行楽シーズンには、超満員になる線である。

然し仰せつかつた伝言板探訪には、いさゝか他の駅と比べて荷が軽過ぎる。腕が鳴つて仕方がない、どうせ張切つた所で恰好のネタがなければやむを得ない。

まあ、ゆつくり御興を据えてと待合のベンチで居眠りを楽しんでいるところ等を、編集長にでも発見されれば明日から早速クビだ。商売、商売と発奮して、伝言板の前に立つとふと眼についたのがこれだ——

澄子さん、構内食堂で待つてゐる 清

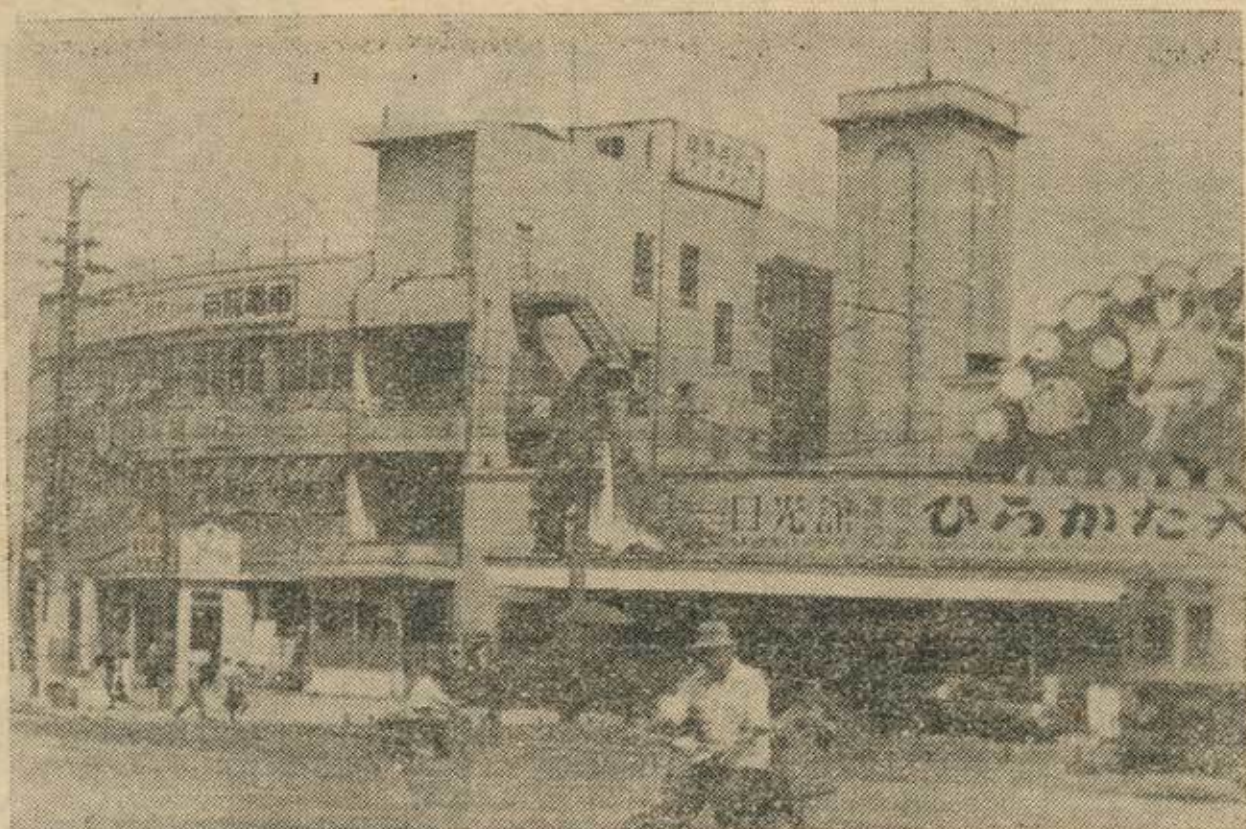
構内食堂というのは、勿論この駅の構内にある食堂という意味だらう。して見るとよそ迄追つかけて行かなくとも、この駅の内だけで万事僕の使命が果せるというものだ。残暑とはいへ、この暑さには大いに助かる。即ち称してお誂い向きというやつである。

待つてゐる、清——。キヨシと読むと男性、キヨと読めば女性、しかし女性ならば待つてゐるなんてイバつたもの、言い方は普通はしない。——待つてゐます。又は友達なら、待つてゐるわ、位である。だからこの清——は多分いや殆んど男性だらう。清君か、清一君か、清太郎君か清吉君か、と

いう所だろう。

も感じはどうも若い者同志らしい。

与えられた探訪目標は、桃色伝言板を探ぐるである。若い男と女、これならば何ん



いけない、こんな事では仕事にならぬ急いで駅構内の食堂へ飛び込む。屋前なので見渡すかぎり一杯の人で、一寸見当がつかない。こんな時には入口に立つて、先づ下ッ腹に力を入れて気を落着けて、然る後物色するに限る。

と、ずつと隅の方のテーブルにビールのジョッキと睨めつこしている二十七八のアンチヤンがいる。ウイスキーなら舐めるといふこともあるが、ビールをチビくちと舐めて、蚊の小使位づつ飲む奴もあるまい。それなのに彼は一杯のジョッキを百年計画で飲もうという決心のように、ゆつくりとチビチビ時間をひつぱつて飲んでいる。待人ありのシルシだ。

ビール君の近くへ陣どつて、そこで女の給仕に手を挙げて「ジョッキ！」真似をしたわけではないが、アルコール分を要求するのは親代々の遺伝で仕方がない。こんな時ばかりは社費でおまびらにメートルを——いや、これは内密、内密。

第六感はいライものだ。ビール君こそ、わが求める清君に違いなかつたのである。何故と云つて、間もなく、澄

子さんが

「待たしたわね」

と、やつて来て向きあうと

「あたし、何にしようかしら、焼飯貰つて

い？ 清さん」

と言つたからである。

「どうだね、勤めは、楽しいかい？」

「ええ」

「辛いこともあるだろう？ いやなお客にからまれたり……」

「ええ」

「どつちなんだい？」

「どつちも、だけど、うちでクスボつてるよりも……」

「のんきかい？」

「のんきでもないけれど……」

「おつかさん、心配してるぜ」

「……」

澄子さんは十九か、二十か、場末の色町の社交喫茶の女給といったカッコウだ。家を飛び出して来たものらしい。水の通つたワンピースに下駄ばき、まだ十分金廻りがよくなる所迄来てないらしい。

恋人同志の逢曳かと思つたが、この調子では少々見当がはずれたらしい家出娘をその親から頼まれて引戻しに向いたといつたところ。娘が清さんと呼んでいる所を見ると近所の知合いか、幼馴染か、イトコでもあるか？

彼はジョッキを追加注文した。彼のビール代も

僕と同じように自弁ではなさそう。全権派遣費として澄子さんの親元から出ているらしい。その追加が羨ましい。いかに社費とはいへ、僕にはジョッキを追加する余裕がない。いや、第一こつちのメートルが上つてしまえば、肝腎の仕事がオジャンになる。

「で、新聞見なかつたかい？ 尋ね人の広告。ホラ、これだ。——澄子帰れ、円満解決さす——帰つたらどうだい、チャンとお



つかアさんもこんなに折れて、澄ちゃんの望み通り、山本君との結婚を許すつてるんだからね」

清君がポケットから取り出した新聞の小さな切抜きには見向きもしないで、

「でも、もう遅いわ」

「どうして？」

「あたし、もうあの人のことなんか思つてやしないわ。」

「だつて死ぬの生きるのと騒いだじやないか？」

「フフフ、そりやそうよだけど、社交喫茶に勤めて、いろんな男の人と接している……」

「まだ別ない人が出て来たというのかい」

「ええ、それに、もうあたしの身体は何人も男を知つてしまつてゐるの」

「へえ、早いトコいつてしまつたなア」

そんなことは、澄ちゃんの耳には入つていないさつきから、ずつと斜向うのテーブルで日本酒を

チビくちやつている背広服の三十四五、色白くキリツとした男の顔を、横眼でチラッチラッ盗み見ている。

「な、何とか言いなよ、澄ちゃん」

「ね、ちよいと、ホラ、あの男、長谷川に

似ていない？」

「チエツ！」清君、眼を白黒——。

アプレ娘の浮気には、かなわんで。僕もサジを投げた。

「澄ちゃんのお母さんと、山本君とやら、あきらめしやんせ」だ。

大阪天王寺公園の風調査紀



夜草京介



夜の公園は何が行はれているか？

大阪の代表的公園といわれる、北の中之島が、水にめぐまれた公園であれば、南の天王寺は、樹木にめぐまれた公園である。

そして、此の二つの公園は、それと異つた性格をもっている。例えば年令や服装を見ても、中之島のアベックは如何にも相思相愛風の様子であるが、天王寺となると、一見して意気投合組の享楽派であることが頷ける。

つまり、中之島が東京の宮城広場であれば、天王寺は浜離宮のそれに似通っているのである。四十ぐらいの、あまり風体の良くない男と、二十そこらの田舎娘くさい男女が、何かボソ／＼と

囁きながら、天王寺公園の薄暗いしげみの中へ消えて行くのはよく見掛ける図である。

田舎から都会にあこがれて来た小娘が、はじめて新世界の繁華街へ見物に来て、映画に夢中になっている時、暗い隣りの客席から、突然男に手をにぎられた途端に、それを手厳しく拒み得ない娘は、数時間後にはお茶を誘われて、附近を神妙に散歩しているかと思ふと最後はハンを捺したように、必らず公園の樹陰へ消えて、カンタ／＼に軀を与えてしまふのである。新世界の一角には、此の手で十数人の処女を奪い、さん／＼弄んだ拳句、附近の飛田新地の社交喫茶

へ売り飛ばして甘いしるばかり吸つて渡つていく色事師がとても多い。彼らは、金がある中はトバクにふけり、なくなつてくると次の獲物を求めて、雑沓の中から手頃な女を狙うのである。

映画の看板にジツト見惚れている娘がいて、
「娘さん、あんた職を探してるんと違いまつか？」と、なれ／＼しく声を掛けて、相手がモジ／＼としておれば、もう彼らの術中に陥つたと言つて過言ではない。
「職を探してるんやつたら、丁度うちの知り合いに若い娘はんが一人欲しいやけど、行つて見まへんか」
見も知らぬ行きずりの男から、親切な言葉をかけられた娘は、相手の真意が分るはずもなく、一途に好意に甘えた気持で、男の言

うまゝに連れられて行くのが公園のベンチなのだ。田舎育ちの小娘が、都会に出て職に迷つてゐる時美しい着物一枚あれば、早速月収二万円のカフェーに働けるといふ喜びが、盲目的に男の要求をも入れてしまふのである。

暗い公園の隅に新聞紙を敷き、男の命ずるまゝの姿になるまで、時間にして十分とかゝらない。それも、何の予防も処置も施さないのだから、要求を入れた娘の肉体には、一カ月後には、キツトその夜の兆候が現れる。しかしその時には既に、女は接客婦として取引されており、いや応なしに醜業の世界に身を転落しているのである。所轄警察署も、此の種の悪質の人身売買には、嚴重な取締りをもつてのぞんでおるので、ひと頃ほど検挙されなくなつてゐるが、そ

れでも当局の目を掠めて、巧妙に婦女子を誘拐している輩が、いまだに後をたゞないのである。

終戦当時は、「売春公園」と言われるほど夜の女が客を連れこんで、大ッぴらに露天営業を展開し、辻瀾に一步踏み込もうものなら、思はずその場に立ちすくむことも度々であつたが、現在は街娼の姿は非常にへつてゐる様子で、専ら素人女の独占地といつた観である。だいたい天王寺公園に来る男女は、前にも言つたように、近くの新世界附近で知り合つた仲が、最後に公園を利用するのであつて、實際的に簡易ホテルの代用をつとめてゐるのである。

したがつて、此の無料ホテルを利用する男女の階級は非常に多種多様である。
女は、事務員、娘、人妻、女店員、女給、ダンサー、女学生。その何れもが、新世界、または阿倍野附近の繁華街で意気投合した上、どちらから誘うともなく、散歩に入つて来るのであるが、アベックの大半は、暗い場所へ暗い場所へと道をえらんでいる。

なるほど暗い場所なら、どんな大胆な真似をしていようと遠慮はない。明るい太陽の下では、立派な紳士であり、淑女である彼らが、いつたん薄暗い木陰に入ると顔をそむけたくなるような、露コッなポーズで抱き合つてゐるのだ。こんな傾向は、戦後六年になる



をそむけて、白い太腿をいそいでスカートでかくそうとする。

若い独身の警官が、宵の口の公園の巡廻はやりきれないと言うのは、偽らぬところの感じであらう。ところが反面には、これを見たさにわざわざ公園でひと夏を過す浮浪者たちもあるのだ。彼らは、風は街に出て紙屑、空ビンなどを集めている。バタ屋で、一日の収獲を現ナマに換えると、粗末な食事で腹をこしらえ、街で拾ったタバコの吸さしを啜えながら、夜の生

這いとなつて忍んで行くのである。地理にくわしい彼らは、アベックの集つてくる木蔭は、よく知つてゐるので、日が暮れかゝると、既にそれぞれの場所を専有して、まるでワナにかゝつてくる獲物でも待ち構えるかのように、身を伏せて待期しているのである。

長い間、慾望を満すこともできない浮浪者たちは、目の前の男女の情事を目撃して、せめてもの本能を慰めるのであるが、結果は彼らに、決していゝ影響はあたえない。生々しいアベックの構図を臉の裏にえがきながら、敷き残された新聞紙の上で、自慰をやつてゐる浮浪者たちは、物珍らしいこと

ではない。

この夏、公園の南側の隅で、十四才になる少女が強姦された事件があつたが、犯人はやつぱり公園の浮浪者で、発情の動機は、逢曳を盗見した直後の亢奮からであつた。

丁度その日は日曜日で、動物園は朝から人出で賑つていたし公園も弁当もちの人たちで、夕方になる頃までかなり混雑していた。

で被害者の少女は姉に連れられて一緒に動物園に見物に来たのだが中途で姉の姿を見失ひ、帰るにも電車賃がないので途方にくれて公園に来たのである。十四といつても、少女は年に似合ぬ大柄な身つきなので、スカートの浮きあがつた円い腰の線は、もう立派に成長した女の尻であつた。

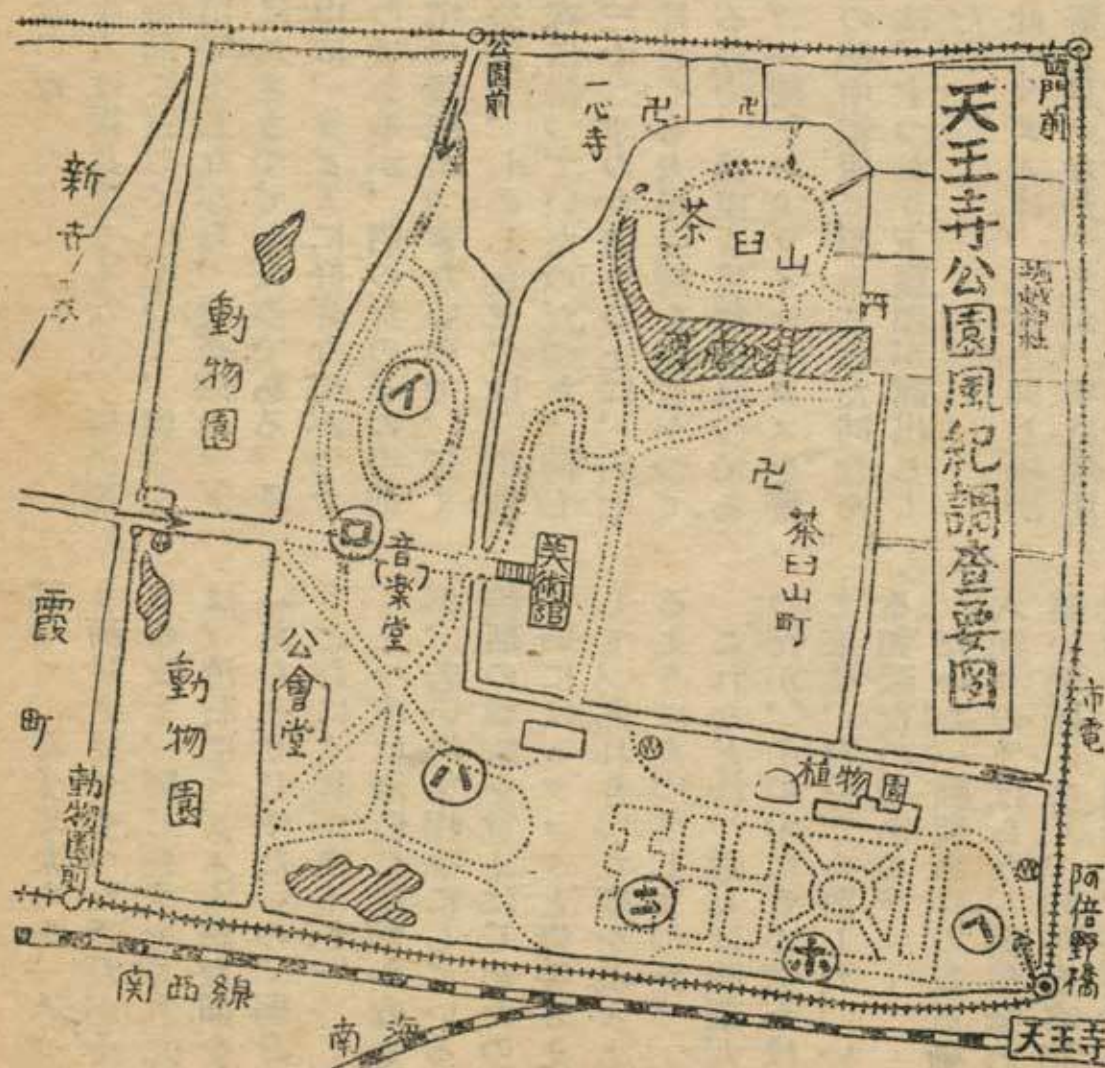
暴行を加えた浮浪者が、少女の沈みきつた様子に悪心をおこして言葉たくみに近よつて行き、凌辱したのは、それから数分後であつた。日の暮れた公園の中から、一人の少女が逃げるように出てくると、顔は真ッ青となつて、赤いブラウスの胸がほころびていた。

大騒ぎとなつて、すぐに警察に連絡されると、早速警官が駆けつけて来た。しかし、肝心の少女は泣くばかりで、一言も答えようとしないので、仕方なく附近を調べて、残つた警官が事情を訊くと、泣き泣き暴行を加えられたことを話した。

一方、附近を調べて見ると、少女の言つた通り、南側のアベックの使つた新聞紙の上に、どす黒い血が流れていて、明らかに凌辱の痕がみとめられた。少女は此処で電車賃をやると言われて、無理や

地図の説明

- (イ) グランドの芝生は、夜ともなればこの上もない天然のシトネである。
- (ロ) 街娼が佇む恰好の樹が多い道の両側は特に暗くあやしい。
- (ハ) 両側には木立で街燈がなく、男娼の集団客引場所である。
- (ニ) 藤の棚の下ベンチはアベックの無料休憩所である。
- (ホ) 電車道に沿つた樹下闇は時々電車のスパークに驚される。
- (ヘ) 見晴し台には、恋愛第一歩の上品なアベックが並んでゐる。



とあり、ズロオスのゴム紐もちぎれていた。

夏の公園では、よく強姦事件が起きていたが、中には、強姦とも和姦とも区別しがたい、非常にやゝこしい事件もある。

これも公園を我が住家とする、真面目な浮浪者の源さん（本名、



輪女をよろこぶ人妻

以下源さんの話――。

少女暴行の浮浪者が検挙されて一カ月した頃。近來にもめずらしい旱天続きのため、繁華街の新世紀は強制停電で、宵の口から街燈も消えた闇の中を、四五人の土地のナン派たちが、どやどやと公園に入つて来た。

彼らが公園に来る目的は、闇にまぎれて女に悪戯をするためである。若いアベックがいるのを見つけると、潮どきを見計らつて、きわどいところへ闖入して行つたり男の方を脅して置いて、女を囲んでからかつたり、逃げて行つた現場の品物の中に、思う壺のゴム製品や薬品が落ちていると、手柄顔に集めてエツに入つていいる輩なのである。

勿論彼らには縄張りがあつて、無断で勝手な真似は誰にもさせない。その道にかけては強者の夜の女たちも、彼らには一目置いてくるほどで、せつかく客を食えて来ても、場銭を出さなければひどい

坂口源太郎から聴いた話である。源さんは、空襲で家を焼かれ、

妻子を失つて以来、ずつと独り身でバタ屋を正業としている好人物であるが、なにしろ、終戦から今日まで、公園の隅で暮しているだけあつて、こと公園に関する限り彼の知らぬことは何ひとつない。

目に遭う。夜の女たちにしてみれば、彼らは眼の上のコブなので、お茶をひいた夜なんかはサーピスのつもりなのか四五人の男をたて続けにロハで遊ばしてやることもある。

最初は源さんも、好奇心心から覗いて見たそうであるが、女はまるで軽い体操でもした後のように平然としてチリを払つて立上つていたというから実に驚くべき能力である。

話は元にもどるが、天王寺のナン派には、相当色情的な奴がいて、一時間の中に三人からの女と関係して、まだ春情を覚えるという旺盛なのがある。彼らは、どちらかといえば、若い女より男を知つた人妻の方をよろこび、巧みなテクニックに陶醉したがっているのである。男を知っている女と



関係して、若い女と関係すると、とうてい経験の点では人妻の比ではない。ナン派の与太者はそれをよく知つているので、勢い肉ずきのよい人妻を狙う。人待ち顔の逢曳の人妻を発見しようものなら、めつたと迷さない彼らである。良人に内密で浮気をしている弱点を掴んでいるので、言う通りにならなければ、不貞をバラすぞと脅迫して、簡単に芝生の上に転がせてしまふのである。

ところで、源さんの目撃した輪姦事件というのは、相手の奥さん柄なのだつた。主人は復員後まもなく、経済違反で刑に服していたので、奥さんは留守をしながら、喫茶店のマダムにおさまつていたのである。その中に、マダムに好きな男ができたのであるが、店の女の子の手前自宅で逢曳もできないので、近くの公園で、しめし合せては、不倫の恋に酔つていたのだつた。何しろ三十二才の女盛りの上に、約七カ月近くも夫婦生活を遠ざかつていたので、逢曳も自然猛れつである。一度そのクライマックスを警官の懐中電燈に照らされた時なんかは、すつかり下腹部が露出していた。

此のマダムは、二度と同じ場所に姿を見せなかつたが、実は場所を変えて他のところで逢曳を続けていたのである。その現場を、とうとう与太者たちにかぎ付けられてしまつた。動物園よりの鈴懸けの下で、せわしく肉体をあらそつているところへ、与太者たちが不意に襲い、寝ている男女を取囲いたので、とても狼狽した二人は、ホウ／＼の態で逃げたのである。翌日、マダムは与太者たちに呼び出された。四五人のナン派は、短刀直入に要求したのである。「誰にも言わない。そのかわり言うことをきけ」。

近々、刑務所を出る管の良人に知られたくないために、マダムは黙つて、与太者たちを一人、ひとり満足させてやつた。だがその翌日の夜も、同じ要求をされた時には、流石にマダムも厭な顔をして「あんまりじゃないの、弱身につけこむにも程があるわ」と一応は素直には領かなかつたが、若い男を相手にしている中に輪姦の興味を覚えはじめたのかしまいにニッコリと微笑さえ洩らして、熟れきつた軀を易々と与えるようになってしまつた。これなどは、最初は強姦だつたのだが、その中に女の気がほぐれて来て、自分から許した、いわゆる和姦なのである。だいたい強姦事件の起る場所は人通りのまばらな、薄気味わるい暗い場所が多く、昨年女事務員が凌辱された箇所は、今までも五六人の犠牲者が出た所で、神出鬼没的に女を襲つて、ポイと姿をくらましてしまふので、警察もほと／＼手を焼いているようである。犯人はほとんど手口が同じで、常習犯である。後から矢庭に首筋を締めつけ、声の出ないようにした上で、手荒く貞操を奪つて行くのである。「女は馬乗りになつてしまふと、観念したのか抵抗しませんでした」。



公園では幾組もの初夜がある

源さんの、とつて置き話の話を訊こう。

「あれは、此の春のことでしたよ。二十七八才の男が、酒に酔つて女を連れてやつてくるなり、酒代をはずむから、絶対に人の来ない場所をおしえてくれと言ふんですよ。そこであつた、北側の樹の蔭をおしえてやつたんですが、女の方は恥しそりにして、一向顔を見せなんだ」

「それで、覗きに行つたの」

「面白そうなアベックだつたんでネ。しかしほんとうに初夜だつたらしい」

「どうしてそれが判るのです」

「話しとるんだ。結婚式はすぐだが辛抱できんと言つてゐるんだ。同情したガネ」

源さんの言う通り公園で初夜を結ぶ男女は少くない。結婚式を目前にひかえながら、それまでが待ちきれない男はホテルの代用に公園をえらび、カンタンに夫婦の歴史をつくるのである。

朝になつて、初夜の褥を調べると、処女にケツ別した肉体



の証拠を、チリ紙に染めて捨ててある。青い雑草が、人の形におし潰されていたり、タバコの吸殻が半分ほど残つてゐる跡を見ると、その夜の男女の顔が、急に見たくなつてくる。

公園の清掃婦が、山と積まれた塵芥をより別けると、中から出てくるものゝ大部分は、無造作に使われた避妊用の薬の外箱、置き忘れたゼリー注入器などで、小さな薬局ができるほどある。

「こんなもん使つたら、チヤンと見えんところへ、捨てくれたらえゝのに」

中年の清掃婦は、さも汚ない物にでも触れたように、箒の端で、ゼリー注入器の頭をコッソリと叩く

だが、これなどはまだ良心的な方で、ひどいものになると、使つたコンドームを木の枝にぶら下げて帰つたり、それかと思つと、わざと植物園の方まで持つて行つて池の中に抛り込むのがある。何もしらぬ子供が噴水のまわりにブワ／＼と漂ふ、胴の細長いクラゲへ目掛けて、小石を投げているところなんかは、天王寺公園でなくては見られぬ奇観だ。

タンゴで有名な南米のアルゼンチンでは、謝肉祭の夜に、数千人の処女が喪われて行くと言ふ話だが、天王寺公園の一年間には、果して何人の処女が喪われているだろうか。

最近、「ワイセツ行為容疑」で職務訪問された女の中には、なんと女学生が数人も入つており、しかも身許を調べると、いづれも有産階級の子女となつてゐるのは、注目に値する事実である

彼女たちは、既に性交の経験をもつてゐるものもあり、どうすれば子供ができないかといふことも、チヤンと知つてゐる。

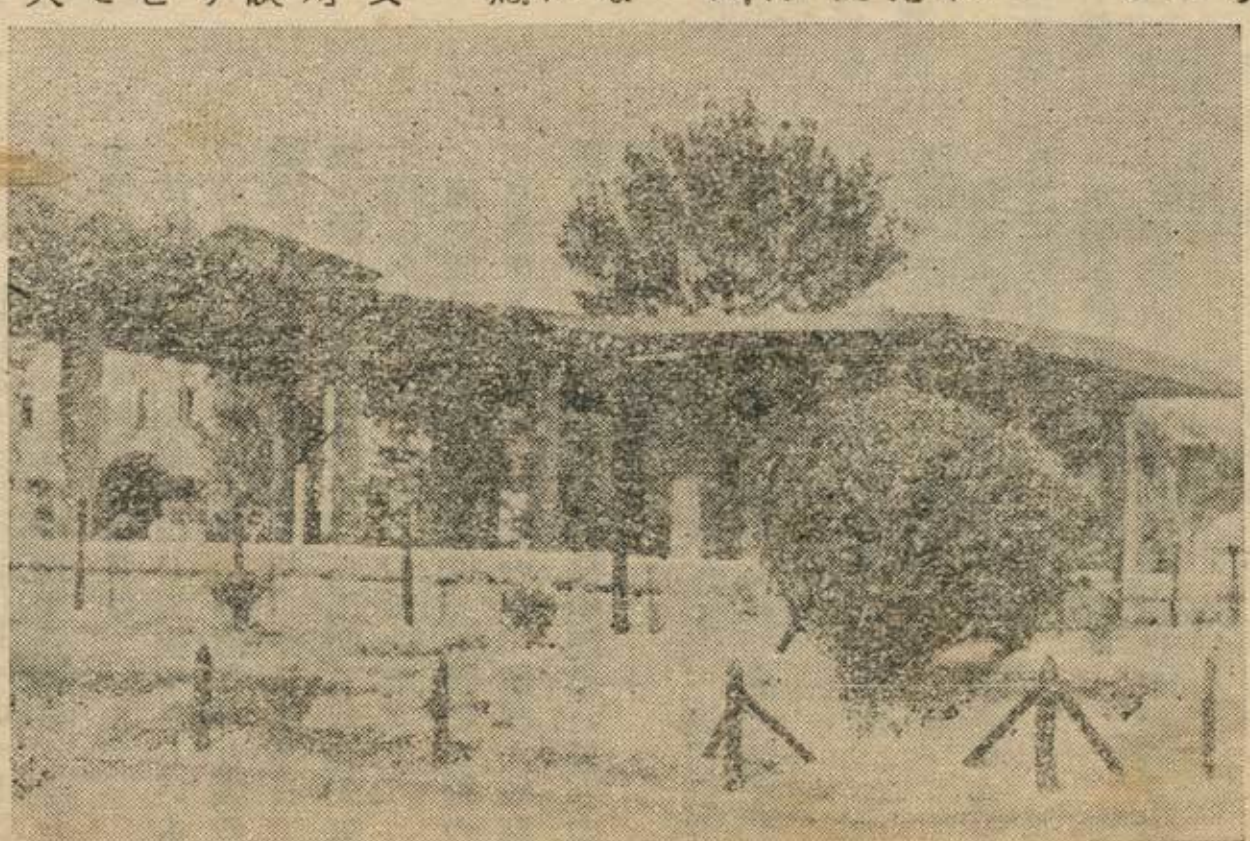
公園の公衆便所の中で某高校生と風紀を案じていた女学生なんかは、調べてみると、家庭が貧乏しく、ひと間に親子が雑魚寝してゐて、両親が夫婦の営みをはゝからなかつた／＼めだといふ。親に

してみれば、まだ子供だと思つてゐるのだらうが、女学生も十五、六になると、漠然とながらも知つてゐるし、またそれに対する慾望に燃えはじめ年頃なのだ

公園で、男と遊んでいる女学生は、ほとんどが無軌道で、性交とまではゆかないにしても、それに近い、紙一重の行為を皆やつてゐる。

警官も最近では、女学生たちの行動に対しては鋭く監視の眼を光らせてゐるようで、怪しいと思つと片ツ端から取調べてゐる。それでも尙大胆な女学生たちは、男の学生と一緒に遊び、相当きわどい恰好で寝転んでゐる。

乳を愛撫させたりするのは、まだ生やさしい方で、どちらも自慰を許し合つてゐるのさへあるから驚く。性交の経験のある女学生はたいてい前戯をやつてゐるし、服の中には、避妊薬を隠して持つてゐる。不審尋問にひつかゝつた時は、あわてゝそれを捨てゝ逃げるが、中味を調べると半分は使用しているのだ。



しさに売春をやつてゐた女学生があつた。男には処女だと言つて誘ひ、一般のパンパンより二百円も高く軀を売つて、映画を見たり、コーヒを飲んで遊び廻つてゐた。係官が性病容疑のために、念のため検診すると、案に違はずひどい性病をもつてゐて、ズロースは排膿でべと／＼になつてゐたといふ。

(おわり)

北川春男
加住とを画



「はいそれだ！それ、それ、清一色でトイ
トイ親マンだ。」
と向い側の太沢の太い声が、ひびいたか

と思うと、器用な手つきで牌を勢よく倒した。

宵から始まつた戦は、四^{スリー}莊^{チャン}目の南戦で、
長い冬の夜も、サラサラと牌をかき交ぜる
さわやかなリズムに乗つて刻々と夜の時間
を刻んで行つた。

月給取りだつた。一年位前から麻雀を覚え
ると、面白いのでこり始め遂には自分の安
月給を補う為に麻雀賭博に手を出し、始め
は会社の同僚達と一点一銭二銭と安くして
やつていたが、この頃ではそれが何んだか
物足りなくなり一点五十銭の本式賭博に手
を出すようになった。然し

なんとやつても、一年やそこの修業で
これを商売にしている遊び人に勝てる筈が
なかつた。

会社の同僚達とやつていた時は、運八分
で屢々勝つ事もあつたが、ここに通い始め
てからは勝つたためしがなかつた。

だが、彼はあくまで運を信じていつかは
必ず勝つと思ひ込み、今夜で六遍目、それ
までに一万三千円近くも負けていた。

彼にとつてこの金は決して生やさしいも
のではない。果ては友達から借りたり妻の
着物を内緒でもち出したり、今日は今日で
散々馳けづり廻つてやつと工面した金が五
千円ばかりポケットに入つていた。

向い側に位置する大沢は、所謂この街の
ゴロツキとまではいかないが、遊び人で麻
雀で食つてゐるような、色の浅黒い苦み走
つた四十男である。

テラテラと油ぎつた顔をして、高く刈り
上げた頭にはハチマキをしめ、立て膝をし
て威勢がよかつた。

こんな男に、利根が勝てる筈はないので
ある。麻雀はやはり腕が八分なのだ。

右側がサン映画劇場宣伝部の酒好きで女
の道楽の中田。

左側が鉄工所をしている坂井。

この二人とは、今日で三遍目の顔合せだ
つた。

大沢は、一回戦で少し、しずんでいたが

二回、三回戦と持前の腕を發揮し、それに配牌もよく一人でどんどん勝つていた。

利根は、大沢に親のマンガンをほり込むと、今までいつになく勝つてすつかり氣をよくしていたのが、精神的に打撃をうけてその後は一人でホリ込みを引き受けているようなものだつた。

それにあせつてくるといけなかつた。小さいアールシャール（百点）で上ろうとして、それでも四、五回上つたが、たまに大きいのをホリ込んでともななかつた。

大沢は、調子づく鼻唄まじりに冗談など飛ばしその度にぶい電燈の光をうけて金齒がちかりと光つた。

利根は、目が血走つて黙々として語らず夜がぼろろと白みかけて来た。

だが、勝負はたけなわである。

九時頃になつて、中田が大きくあくびをしてのび上ると、坂井が

「もう、やめようじやないですか」と言つた。

丁度その戦いが終つた所だつたので、大沢もすぐさま同意した。利根も不本意ながら、こつくりうなづいた。

勿論大沢がトップだつた。

中田が少々プラス、坂井の負け高は割合少なく、仲の好い二人は勘定を済ますと、さつさと出て行つた。

利根は、今までにない一万六千点という負け方で、金にして八千円、それに持合せの金に大分不足している。家に帰つたつて

払う見込は全然ない。その上借金だらけだ

「利根さん、この間お借したのと両方で一万二千両払つて戴きたいんですがねえ」やわらかいが、凄味のある声で大沢が言つた。

「実は今五千円しか持つていないんだけどこのあと又借りにしておいてくれまいか」

「借りに？」大沢の眼がざらりと光る。

「今度又何んとかして払うから」

「冗談じゃないぜ、あなたの言う事はもう信用出来んからな。今こゝでちやんと耳を揃えて返えして呉れないか」

「大沢さん、いくらなんでもそりや無理だ。ねえ、今度きつと返えすから今日の所はまあまあ……」

「そいつは困まつたなあ、だけど利根さんあなたに払えるあてはありますかな」

「……」

大沢は、利根の顔を穴のあく程、じいつと見つめていたが、ふと何か思いついたように口を歪めてにやりとす氣味悪く笑うと、

「所で利根さん、ものは相談ですがね、これは中田さんから聞いたんだけど、あなたの奥さん別ビンだつてね」

「えつ、うちの章子（しょうこ）がどうかしましたか？」

利根は、ぎくりとする。

急に、家で一人待つてゐる妻の章子の顔が頭に浮かんで来た。

「どうだろうね。残りの金はまだ帳消しに

してあげてもいいが」

「と、言いますと」

「あなたも存外勘のぶいひとだね。つまりだね——どう言つたらいいかな。——はつきり言えば、その奥さんを今晩一晩だけ……」

「えつ！大沢さん、そんな馬鹿な事を——」

利根は、始めて大沢の言う意味を知つてあつと驚いて言つた。

「ならねえつて言うんですかい。そんなら今こゝで払つてもらおうじやねえか」

大沢は、氣味の悪い程ゆつくりと落ち着いて言つた。

利根は、しどろもどろである。たゞ、もじもじとしていたが、払うあてもなく借りる事もならず途方にくれた。

沈黙が流れた。

「よろしい、章子はどうか分かりますんが、約束しましょう」

利根は、われながらびつくりするような声で言つたが、その語尾はかすかに震えていた。

そう言つてしまつてから、しまつた！章子にすまない、と思つたがもう遅かつた。

「さすがはインテリだ。話がよく分かる、じや今夜七時、京橋の待合「たむら」へ頼んだよ」

と言うと、大沢はのつそりと立ち上つて部屋を出て行つた。

利根は、あとに一人残つてぼんやり考え込んでいたが、すぐそこと立ち上ると、徹

夜で真赤にはらした目をして、重い足をひきづりながら我が家への道をたどつた。

二、

夫の利根が毎夜麻雀で家に寄りつかなくなると、妻の章子は二十八才と云う爛熟し切つた女体の狂おしいばかりの情熱のやり場を失つて一人寝のやるせなさをもてあました。

夜、床に入つてからだを温まつてくるといけなかつた。からだを思い切りつねつてみたいような焦燥と、乳房の底でむずかゆいような疼きを覚えるのであつた。

元來あまり丈夫でない利根は、この妻の烈しい生理的要求に一種の驚きと恐怖を抱くようになつていた。

章子は、以前利根と同じ紡績会社に勤めて、そのナンバーワンと噂されていた位的美貌で利根とは恋愛結婚だつた。

だが、結婚してみると、熱すのも早やつたが、さめるのも早かつた。

利根が麻雀にかこつけて家を開けるようになると、いつも章子は泣いてそれをとめるのであつた。然し、利根としても、毎日の生活に追われてろくに化粧もしなくなつた章子にも、少しは楽な目をさしてやりた

いと云う思いやりがないでもなかつたので今日こそはと心にきめて出掛けて行つた彼の方にも、言い分はあつた。

「たゞ今、」

「あら、お帰りなさい」

朝餉の仕度にかかつていた章子は、乱れた着物の裾をかき合わせながら走り出た。

利根は、毎日の労苦でげつそりやつてゐるがどこか美しさを留めている章子の顔を正視出来なかつた。

麻雀！それは麻薬のように彼の心をむしばんでいったトバクに自分の妻をかけた彼はどんな報復を受けたか意志弱き男と美貌の妻とを描く世相裏面小説。

「おなかすいたでしょう。今御飯にするわ」

利根は、涙が出て仕方がなかった。

「ああ、自分にはこんな美しい妻があるんだ。それなのに大沢なんか、と思うと後悔の念がどつと喉を切つてあふれ出したあの一件をどうして言おうか迷つた。」

ごろりと畳の上に仰向けになると、煙草をくわえてマツチをすつた。うす緑の煙がぼうつとのぼるのをぼんやり見つめていた

「ねえ 章子」急に口を切つた。

「なあに」彼女は、美しい目を輝かせながら、側へしなだれかかるように寄つて来た。

「俺、もう麻雀は止すよ。それでね……」

後の言葉にぐつとつまつた。

「まあ、うれしい、それほんと」

「ああ、それでねえ……」

利根は、煙草を灰皿にもみ消すと、思い切つて大沢との約束の一件を語つた。

「ねえお願いだ。俺は明日から会社へは真面目に出る。これだけは目をつむつて聞いてくれ。ねえ、章子」

利根は起き上ると、半分泣き声で哀願した。

章子は、その間中ただ黙まつて、眉一つ動かさずじつと一点をみつめながら、聞き入つていたが、思いつめたように

「あなた！ あんまりだわ！ あたしいやいや！ いやよ！」

と肩をふるわして、ヒステリックに叫ぶと、わつとその場に泣き伏した。

利根は、何故かほつとしたが、同時に又狼狽した。そして迷つた。おどおどした。

だが、章子はしばらくすると、むつくりからだを起すとけろりとして

「あなたがその気なら、ええい、わ、あたしその大沢さんで方に、あたしのからだ任せるわ。それでいゝんでしよう」

と、早口に言ふと奥へかけ込んで行つたあまりあつけないので、利根はぎくりとして益々狼狽した。

そして、女の気持が分からなくなつた。不安と焦燥がぐつとこみ上げて来た。

その晩、章子は売り尽して一つしかない晴着に着かえると、利根の前に「あなた、どう？」と言つて立ちどまつた。

久し振りにぬつた口紅が妙に利根の官能をゆり動かした。そして、楽しかつた章子との恋愛時代を思い浮かべた。

「章子、なにもよそ行きの着物まで着なくたつて、普段のいいじやないか。」

「でも、いくらなんでもそれじや。」

女の気持がますます分からなくなつた。

あゝ、これが今までの夫に対する妻の復讐であらうか。そうだとすれば、これ程残酷な復讐が又とあらうか。

女に出来る最小にして最大の復讐！

「じゃ、行つてくるわ。」

ガラ／＼と玄關の戸をあけて出て行つた後に残された利根は、むしやくしやして部屋中を歩き廻つていたが、妻のタンスをかきまわしていくらかの金を探し出すと、近所にある屋台店に飛び込んでカストリをあふつた。

今頃は、もう大沢の奴にと思ふと、仲々酔いが廻つて来なかつた。

すべてが後の祭りだつた。

妻は、悠々と今までの夫に対して、復讐をとげているではないか。

あまりにもみじめな敗北であつた。ぐつと酒をあふつた。

星のきれいな夜であつた。

三、

「あなた、只今！大沢さんで、さつぱりした割合いゝ方じやないの。この御土産買つて載いたのよ。ハイ。」

章子は、何んだかうきうきとうれしそうにそう言いながら、右手にもつた大きな紙包みを差出した。

この町一流の風月堂の菓子包みだつた。

「それじや、やつぱり大沢の奴に。」

利根の目が凄く光つた。ゆうべは一睡もしなかつたのだ。

「あら、あなたの命令じやなかつた？あなたがしよげてるの見てられなかつたのよ」

「馬鹿！」

利根は、そうどなるとその菓子包みを土間にたゞきつけた。

しかしそれは妻への怒りではなく、大沢へのどなりであつた。

利根は、章子の腕をぐいつと掴むと、荒々しく勝手場にひきづり込んだ。

「あなた！何をやるのよ」

「うるさい！だまつてろ」

利根は、怒り立つた顔で妻の着物の帯をばらばらとはずし、着物と長襦袢をひつたくるようにはぎとつて一条まとわぬ素裸にする、ザ／＼と井戸の水をかぶせて、タオルでその美しい肌の上を所嫌わず、ごしごしとこすり始めた。

「さあ、大沢との垢を洗い落すんだ！」

利根は、気狂いのように叫んだ。

章子は、ぶるぶるつとからだを震わして、

見なき方の相談所

米田産婦人科

院長 米田徳次郎

大阪市西成区西萩町
地下鉄花園駅下車西側
電話 〇六〇六二番

「いやよ！さむい！はなして！」

と叫んで夢中で利根の腕から抜けた。

「バカ！逃げる気か」

利根は章子の乳房をぎゅつとひとつ掴んで引き寄せると、又こすり始めた。

「野蛮人！」章子は叫んだ。

こすつたあとが赤くそまつた。

章子は腰をしつかり抱きすくめられて、どうすることも出来ず、すつかり観念して

されるまゝに任かせていたが、

「あなた、そんなことしなくともいいわよあたしあそこでお風呂に入つて来たもの」

と、あざけるようにゆつくり言つた。

「えつ！ぢや大沢と二人一緒にか」

利根は、途端に手を休めてにらみつけた

「そんなこと、どうだつていゝじやないの」

章子は、やつと解放されて、着物をひろい上げながら言つた。

からだだが、ぼうつとほてつていた。

四、

その日から、利根は麻雀屋へも行かなくなつた。会社へも毎日毎日出て、残業もしたり休日出勤もしたりしたが、今まで友達

にも相当借金があつたりして、生活は苦し
くなる一方だつた。

「章子とのあの一件があつて以来、彼は何
んだか妻のからだがきたならしいように見
えて来て、夫婦関係も絶つていた。」

「思えば、自分から出た事ではあつたが、
章子のあの日のうきうきした態度が、何ん
となく気に入らなかつたからだつた。」

然し、章子は別に暮しが苦しいとも不平
一言いわず、あれから、いつもの烈しい生
理的要求を彼に求めないのが不思議だつた

利根は、妻がこの頃、いやに化粧するよ
うになつて、からだ中から今までにない色
気を発散しているのに気付いた。

又晩飯のお菜に時々安月給では買えない
ような上等のものがそえてあり、銚子が一
本ついている時もあつた。

利根は、何気なく気を付けていると、ふ
と思ひあたることがあつた。

「もしや、章子の奴、自分のあせた愛
情に満足しなくなつて、俺が会社へ行つて
留守中に、大沢の奴と妙な関係を結んでい
るんじゃないだろうか——そう思うと、嫉妬
でからだ中が、かつと熱くなるのであつた

「章子、ちよつとこつちへおいで」
「はい、何か御用なの」

「お前、この頃新しい洋服着ているじや
ないか。買ったのかい。俺の月給では、そ
んなもの買える筈がないんだが、どうした
んだい」

利根は、妻の顔をのぞき込みながら言つ
た。

「ああ、これね、これはヒ、ミ、ツ。嘘よ
フ、フフ、あたしのヘソクリで買ったの」
「うそつけ！」利根の平手が飛んだ。

「貴様！ 大沢と畜生！」

「大沢？ それがどうし
たのさ、何が悪いの、あ
たしだつてまだ若いのよ

もともとあなたが悪いん
じやないの！ あなたつ
たら、あなたつたら、あ
たしをロボットか何かの
ように大沢に押しつけて

おきながら、フン、あな
たは馬鹿よ、女のデリケ
ートな感情を理解しな
かつたからよ。洋服も何
かも買つてくれたのは大
沢よ、驚かなくつたつて

いいわ。姦通さしたのは
あなたですからね。あた
し今はつきり言うわ、愛
情と性慾は又別よ。然し
あなたには、その愛情す
らないじやないの、あた
しだつて人間よ。」

章子は、いつにない烈
しさで利根にくつてか
つた。

「じゃ、やつぱり。姦婦
！姦婦！ 出て行け！ もう俺の妻じやな
い。」

「フン、男つて勝手なものね、自分の都合
のよい時だけ、ぺこぺこ頭を下げて、えゝ
出て行くわ。こんな家二度と帰つて来てや
るもんか」

と言うと、彼女はさつさと出て行きかけ
た。

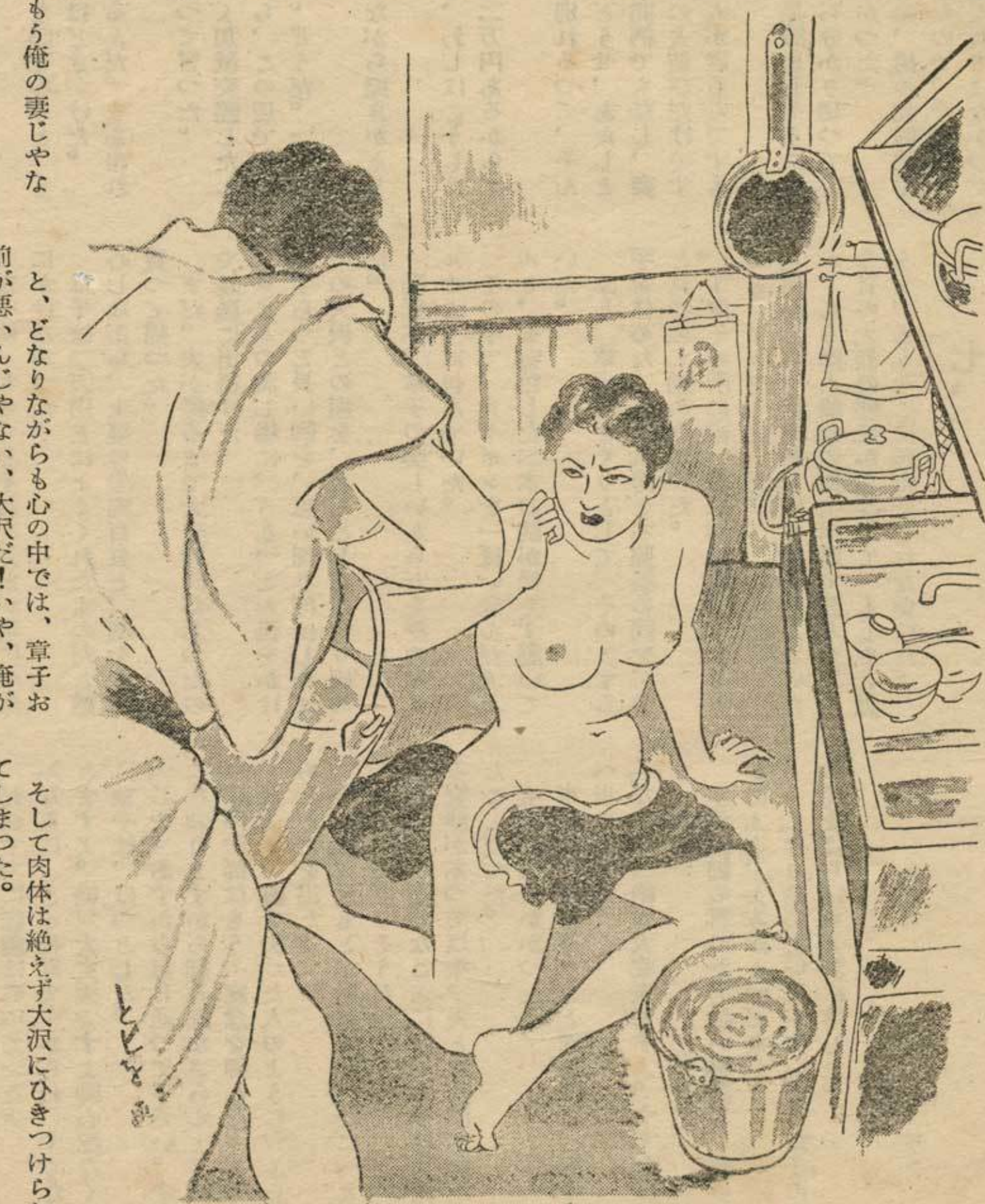
利根は何思つたかつと立ち上ると章子の
襟首を掴んでひき倒し、
「何処へ行くんだ！ バカ！」

と、どなりながらも心の中では、章子お
前が悪いんじゃない、大沢だ！ いや、俺が
悪いんだと、わめきながら泣いていた。

この事があつて以来利根と章子の間には
益々深い溝が出来て、寝室も今迄通り別だ
つたし、あまりしやべらなかつた。

五。
章子は、大沢との交渉があつて以来彼の
変態的な、たくましい身体を忘れる事が出
来なかつた。

そして肉体は絶えず大沢にひきつけられ
てしまつた。



大沢は、夫の利根が少しも持ち合わせて
いない四十男のねばりと一種の魅力をもつ
ていた。

章子は最近ずつと夫と肉体の交渉がない
のを幸に誘われるまゝにちよちよいとあ
の始めにあつた待合々たむら々に出掛けた

その逢引は、きまつて利根が会社に出勤
した留守の風なかに限られ、向かいの雑貨
店に大沢が電話をかけて寄こした。

そして、真風の待合の一室で、大沢と章子の情痴絵巻がくりひろげられた。

章子は、利根の貧弱な神経質なからだが大沢のと比較してみたりした。

然し、肉体と物資には、大沢にひきつけられているが、心は決してひきつけられてはいなかった。

やはり自分には、利根と云う絶対的な夫があるとかたく自覚し、自分が何か新らしい時代の女性のモラルを開拓して行くように、むしろ得意に思い、別に悪いことをしているとは、此頃ではあまり考えなかつた男の我儘勝手を見せつけられているので尙更のことだつた。

大沢は、いつも帰りがけには、分厚い革の財布を取り出して章子に百円札を幾枚かあたえたり、時には指輪だとか何とか、わざわざ買つてもつて来てくれる事がよくあつた。

章子は、その与えられた金で、帰りには利根の好きなものを買つた。

思えば、妙な夫婦関係だつた。

利根は、この頃では、家にいる時なぞ、じつと独りで考え込んでいたし、章子に対してあれやこれやと、うるさく言わなかつたが、又別れようとも言わなかつた。

章子も、別れなくなかつたしやつぱり自分の夫は利根一人だと信じていた。

六、

章子と大沢との逢引は、大体二週間に一度の割で、こんなことがずると三ヵ月位も続いた。

成日のこと、利根をいつものように、玄関に送り出して部屋の掃除をしていると、「利根さん、お電話ですよ」

向かいの雜貨店のおばさんが、玄関の戸の向こうから呼んだ。

「はい！どうもすみません、只今！」

章子は駆け出した。大沢からだつた。

すぐ来てくれという事だつた。

章子は、いそいそと出かけた。

「よう、すまん、すまん」

大沢は、朝つばらからちびりちびりと、酒を飲みながら、入つて来た章子を上眼使に見た。

章子は、その食慾そうな顔を見ると、もう着物の帯に手をかけてほどこかけた。

「今日はな、ちと話があるんだ。まあ坐れよ。」

大沢が、それをさえ切つて言つた。

「なあ、もうお前ともいゝ加減交際したしそれに利根も可愛想だから、この辺できつぱり別れようじゃないか。どうだ。」

「え？別れるつて」

章子は帯をしめなおしながら聞きかえした。

「そうだよ。いつまでも、わしはこうしておられんからな。こゝに二万円あるから、これをお前にやろう」

「大沢さん、あたし達は別れるつて、そんな大げさなものかしら。どうせ、あたしとあなたとは夫婦約束した間柄でもなし、妾というわけなし、たゞの火遊びだけですよ。あたしは利根つて人が居るんですもの」

章子は、こんなことが長続きしそりもないという事は、初めから分かり切つていたので、別に驚きもしなかつた。

それに利根との一件以来、男の我儘勝手を充分見せつけられていたので、今更男を責めてわめくような野暮な女ではなかつた

「じゃ、このお金遠慮なしに戴いてまいりますわ。お達者でさようなら」

章子は、畳の上に投げ出された二万円の札束を無難作につかんで、ハンドバックにつめ込むと、すつくと立ち上つた。

章子が、あまりにもあつさりしているの

で、大沢は少々面喰ひ、じつと盃を飲み干したが、何故か、にたりとす気味悪く口を歪めた。

章子は、ちらつとそれを見たが別に、気

にかけなかつた。

章子は二万円とはよくくれたものだと思心しながら、上等の牛肉百匁と、酒を少々買つて帰つた。

まだ、夫が帰るまで大分時間があつたので銭湯に出掛けた。

タイルの流し場に、ざあつとお湯をかけてすらすらと長い脚を、思い切り伸ばし今までの大沢との垢を、ごしごしとこすり始めた。

湯気が、章子の美しいからだを夢のベールのように包んでいた。

その中で、シャボンを一ぱい含んだタオルと、薔薇色した二本の腕が絶えず動いていた。

ふと、章子はぎくりとして、そのこする手を休めた。目は乳房と右脇腹の間をじつと見つめて動かなかつた。

丁度その所に赤い斑点が出来て、おさえとコロコロしていた。

「何かしら」首をかしげて考え込んでいたが、ある婦人雑誌の衛生講座で読んだ事や今日の大沢の態度から推して、もしやと思ふと、もうそこに居たたまれなかつた。

七、

「奥さん、梅毒第一期ですよ」

宇津医師は、章子のからだを丁寧に診察して、血液もとつたりしてから、ぼそりと言つた。

「えゝつ！ほんとですか」

章子は、氣も狂わんばかりに驚いた。

それで、大沢の奴、あんなこと言つて、何もかも知つてたんだわ。二万円も薬代のために。章子は歯ぎしりしてくやしがつた

だがすでに悲劇は終つていた。

「なあに、ごく初期ですからね、すぐなおりますよ。絶対大丈夫ですよ御心配なく」

章子は、ほつとした。

「じゃ、あすから毎日通つて下さい。すぐになおりますから御心配なさらんように」

宇津医師はもう一度念を押した。

章子は、魂を失つた人のように、ふらふらとそこを出た。

今にも、足もとが崩れて地べたにへとへと、へたばりそうだつた。

不幸中の幸いなことには、章子は大沢との交渉があつて以来、夫との交渉がなかつたことだつた。

もう夕方近かつた。

章子は、電車通りをとぼとぼと、家の方へ歩き出した。

「なあに、絶対大丈夫ですよ。すぐなほりまずから」

宇津医師の言つた力強い言葉が、頭のかにふと、よみがえつて来た。

一しきり冷めたい風が吹いて、章子の髪の毛をばらばらと額に落した。

・完・

食人狂の惨劇

詩清山

繪 二 京 田 箕



てしまつたの
です。

そしてその
死体は、私の
家の地下室に
ある、漬物桶
に隠してしま
いました。そ
れは、これか
らお話を進め
るにつれて分
る事ですが、
兄の食糧にな
るのです。

お、恐ろ
しい家。呪わ
れた血統。そ
うした妄想狂
人を父に持つ
兄も又、悲し
い狂人なので
す。兄の方は
嗜癡症とい
う激烈な症状
を呈します。

始めに少しお断りしておきますが、お食
事前の人、気の弱い方はこれからの私のお
話は、お読みにならない方がよいのではな
いでしょうか。

さて、そのコブログニーですが、汚物
を平気で食べるのです。寧ろ欣喜してバク
バクと食べます。

但し、自分のものは何一つ口にしません
が、特に私のものを喜んで食べるようです
例えば、大便は勿論、小便も喜びますし、
風邪を引いた時などは、青痰をかんだ紙を

早速拾い上げて、ペロペロと舐め、庭に吐
いた痰に顔をすり寄せて行きます。

「この間も私に経血のあつた日でした。便
所へ海綿を突込んで、血の交つた便を吸わ
せ、それをコップの中へギュツと絞つて飲
み干してしまつたのです。」

どうも胸の悪くなるような烈しいお話で
大へん恐れ入りますが、まあ大体そう云つ
た風な狂人なのです。

でも、兄は私の身体中を舐め廻しますが
決して危害は加えません。父の方は非常な
惨忍性異常性格ですが、決して私には手
を出さないばかりか、私には絶対服従しま
す。父も兄も私がいと、とても淋しがりま
すし、私以外にはこの二人を世話出来ない
のです。

二

さて――

盛夏八月。孟蘭盆も近付いたある日の事
西の空に嫌な雲が出たかと思ふと、忽ち強
い陽光を隠して、電光雷鳴が四周をつんざ
き、滝のような豪雨が襲つて来ました。

お風呂の火を入れていた私は、急いで洗
濯物を取入れに裏庭へ走つていつた間に、
表に誰やら来客がありました。

「奈美江、誰やらお人が見えたで」

父の呼ぶ声に行つてみると、雨に降られ
た若いアベック。

「あら吉岡さん――」

その女の人は、私の顔を見るなり吃驚し
たように言いました。女学校で同窓だつた
小川敏子さんなのです。

「まあ小川さんやないの。さア、もつと此
方へ入つて一服おし、雨に降られて困らは
つたやろ」

一

醍醐三宝院から杣道を一里、滋賀へ出る
までの山中に、ぽつんと一軒建っている。
茶屋でも旅館でもない奇妙な家、それが私
の家なのです。

父と兄と私の三人暮らし、その二人の狂人
を生計世話しなくてはならないのが、悲し
い私の宿命なのです。

年中、配給物を取りに行く外は、外出す
る事も出来ず、不幸な父と兄を常に監視し

て、とうとう私も、二十三にまで成つてし
まいました。

父は被害妄想狂というアレで、平常は別
に何も変つた事はないのですが、一たび発
作が起ると、非常に惨忍な人間になつてし
まいます。山犬を生きたまま引裂いたり、
平気で臓物を剔出したり、いゝえ、実はこ
の間も、この山に居る女の浮浪者を、とう
とう殺してしまつたのです。

それは誰にも言えない秘密ですが、石で
脳天をカチ割つて、脳味噌を全部抉り出し

「こゝが貴女のこととは、ほんまに奇遇やわ」

敏子さんも喜んで、すぐ男の人と一緒に家の中へ入つて来ました。

「中島さん。うちのフィアンセ」

敏子さんに紹介されて、その人も軽く頭を下げました。大して男前でもないけれど男らしい好感を受ける人です。それは、私が文化や都会から隔絶して、こんな仙人生活を続け、異性に飢えているからかも知れません。

雨は暫く止みそうにもありません。私達は久しぶりの友人との邂逅に女の長話を始め、その間中島さんは庭を見たり煙草をふかしたり、珍らしい床の軸を見たりしていました。が、その時兄が茶碗に何か入れて運んで来ました。

「ゆつくり遊んで行つて下さい。醍醐まで行けばバスがあるし、何なら奈美江に送らせますから——さ、お茶の代りに一ついかがですか、吉岡ホテルの特製、栄養価は充分ありますよ」

そう言つて二人に勧めた茶碗の中を見た時、私は思わずハツとしました。さア大変な事になったからです。

その中に浮いている黒いもの。それは浮浪女の腐爛死体から取つた腹腔の溜溜血漿！二人は何も知らず、その茶碗を口へ持つて行こうとしたので、

「兄さん！」

私は兄を一喝して、その茶碗を奪つていました。

「今夜は特別料理でも作りましょう」

何が何やらさつぱり分らず、ポカンとしている二人を前にして、兄はその腐液を飲み干すと、さつさと奥へ立つて行きました

思わず嘔吐の出るような不快さ。

「お兄さん、何処か御病氣？」

敏子さんは、兄の不審な挙動にもう気付いたらしい様子なので、私は困つてという表情と一緒に、人差指で頭の所に左廻りの輪を書いてみせました。

「そう。それはいけませんわね。そんなら中島さん。丁度え、所やから祈んであげたらどお。ねえ奈美江さん。この人ね、神靈術を研究して、祈禱で万病を祓うてくれるのやわ。何なら祈んでもろたげよか」

私は、やはり俗塵に育つた為か、あゝした怪しげな降霊術は、理解も信用も出来ません。が、丁度それを聞いていた父の方が、すつかり乗氣になつてしまつたのです。

「それは有難い事や。そんなら早速俺も頼もうか。俺も時々頭がフウとしますのや。あの光雄の方は食人症というて、人間の肉を食いますのや、さい前茶碗に入れて来たのは、乞食女のはらわたどしたんやで」

「お父さん。何言うてんのや！」

敏子さんは、まるで信じられないような顔付で、吃驚して父の顔色を見ていました。とにかく祈んでおくれやすか」

やがて父と兄は、床の間の前に坐らされクソ真面目な顔して、怪しげな祈禱を受けました。

中島さんは次第に熱してくると、睨を逆吊らせ、口角泡を飛ばせて、何やら分らん呪文を繰返し、手を振り、おろがみ、狂然として禱り続けます。その氣狂いじみた態度を見てみると、滑稽というよりも、馬鹿々々しさを通り越して、何か空恐ろしい無気味さを感じました。

「それ、神様がお降りなされた——神様がお降りなされましたぞ！南無何たら大明神様——」

夢中で手を振り続ける姿は、教養ある二十八才の青年と、誰が受取れましよう。時代錯誤を超越したこの狂信痴態。或はこの人も氣違ひなのかも知れませんが。祈禱が終ると、父も兄も大喜びで、すつかり気分がよくなつたと、中島さんに三拝九拝の態たらくです。

「とにかくお風呂が沸いていますさかい、汗流しておくれやす。その間に何ぞ御馳走でも作らせませうさかい。いや、心配しやあらんでも、人肉料理は食べさせまへんさかい」

「もうお湯は沸いてますさかい、構へんかつたら、二人一緒にお入りやすな」

無理にすゝめられて、中島さんと敏子さんが、一緒にお風呂へ行かれた時から、あの惨虐は序幕に入つたのです。

三

戸外は嵐、食人ホテルに集つた狂人達の地獄の果で演じる大悲劇！

敏子さんは一寸羞しがつていましたが、裸になると、中島さんと一緒に浴室へ入つて行きました。その間に、私は湯加減だけ聞いて台所に行き、料理の準備を始めたので、その現場は目撃しなかつたのですが、いつも私が経験があるので、充分その想像は出来るのです。

眼の中に立つたような火柱と巨雷一撃。すぐ家の近くへ雷が落ちたのです。その恐怖と驚愕が、恐ろしい狂人達に衝撃を与えあの発作を起させたのです。

そうなると、もう兄さんは、私と敏子さんの区別がつかなくなり、いつものようにノコノコと浴室へ入つて行きました。

驚いたのは敏子さんです。唯でさえ、異性との混浴で羞しいのに、不意の闖入者の出現。キヤツと叫んで中島さんに縋りました。が、兄は邪惡な中島さんを突きつける恐怖に戦く裸女を抱えて、湯に濡れた身体を雀躍りしながら、所嫌わず、ペロ／＼舐め出したのです。

顔、胸、お腹、太股——

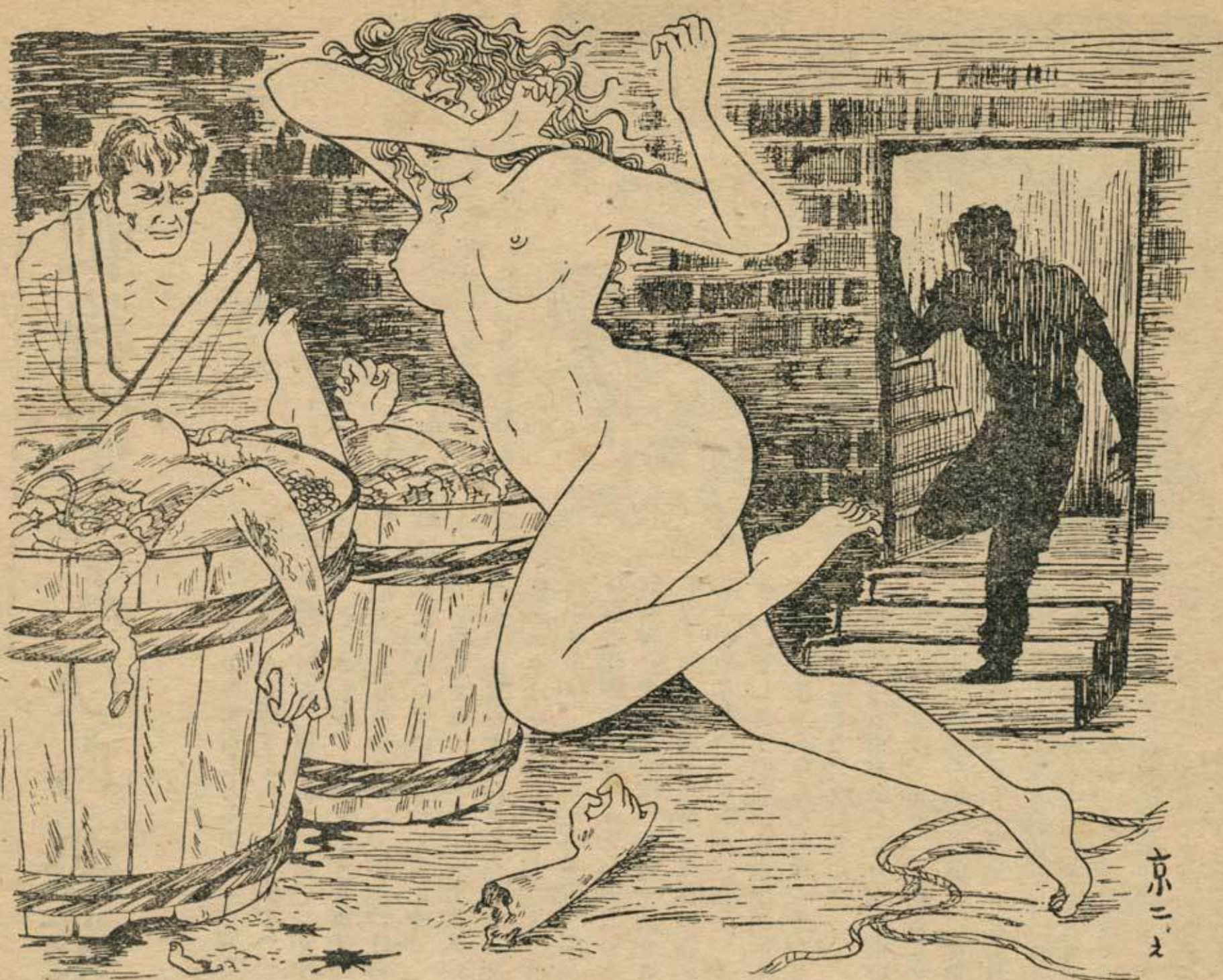
何も知らない敏子さんは、それこそその無気味さに、生きた心地はなかつたでしょう。あの猫族のような舌で、特に刺激の強い部分などを強く吸いつけるように舐めて来る時、私なら、痺れるような官能の動揺と、烈しい性の昂奮に、恍惚として身を委せるのですが、サフォー淫に似たこんな変態性慾の一極致は、勿論敏子さんに分りそうな筈がありません。

接吻より激しく唇に喰付き、眼も頬も舐め廻し、哺乳のように乳房を吸い、或は浚え出すように臍の周囲を舐め、又或は温い太股の谷に顔を埋めて、身をふるわせながら愛吸を続けるうちに、とうとう堪りかねて敏子さんは、悲鳴と共に裸のまゝでお湯場から飛出したのです。

そうすると今度は、兄は中島さんに迫りました。そのあまりの氣味悪に、中島さんも真裸で、湯殿から逃げ出しました。

しかし、執拗な兄は、尙も二人を追いました。二人は逃げ場に窮して偶然地下室への入口を見付けると、そこへ逃込んだのです。そして、暗い階段を降り、濕っぽい空氣の蒸れるその石室へ入つた時、一体そこでどんな光景を目撃したでしょう。

壊れた漬物桶が三つ、床の上に転がっていて、そこからハミ出している奇怪なものそれこそ、この連日の暑氣に、もう殆ど腐



京ニ

更に御丁寧に首をヘシ折り、手足をむしり取っているのが、発狂した父だったのです。そこへ飛込んで来た一組の裸体の男女、生きている若い美しい人間。父はたまらなような喜びの声をあげると、二人の方へ向き直りました。

おい、この世の相とも思えぬ大恐怖！二人は全身の毫毛を逆立てて、その場にふるえ上つてしまいました。

父が、目茶目茶になつた腐爛死体を、二人の方へ投付けると、一度ぬるツと剝けたドロドロの死骸が、敏子さんの頭の上へ落ちて来て、キヤツと言つたまま、その場に氣を失つてしまつたのです。

獣鬼と化した父は、猛然と敏子さんの白い身体に飛びきました。

あゝ、恐ろしい大惨劇！父は敏子さんの両足を握ると、べりべりと半裂きに始めたのです。それが悲しい敏子さんの最後でした。中島さんは唯ワアツと言つて顔を蔽いその場にヘナヘナと坐つてしまつたきりです。

これから楽しい青春を産んだであろう敏子さんの肉体は、股から下腹へ、メリメリと引裂けて行つたのです。ドツと血を噴き子宮が飛出すと、父はその手を止めて、今度はいきなり敏子さんの眼の中へ指を突込み、どろどろと噴出した脳漿と一緒に眼の玉を掴み出してしまいました。

それから父は、ボキボキと指をヘシ折り肘を膝に当てて、メリツと手を反対側に折つてしまいました。ヌツと白い骨が突出すると、父はさも満足げに、ニーツと妖笑したものです。

それから更に、乳房を強引にムシリ取り足で踏付けて肋骨を踏み折り、最後には脳

天を碎いて、脳味噌をゾロゾロと掴み出してしまいました。

おい神よ！人間がなしたこの大惨劇を、狂人だからと許し給うや。夢多き乙女の生命を奪い、まだ動いている心臓をヘシ潰しまだ生きている血管や神経をねじ切つて、しかも超然と所業に満足する悪鬼羅刹、この世からなる大地獄絵図！

しかも更に、この父の大蛮行を見ているちに、兄も又欣然としてその屍に武者振りつき、さも美味そうに眼球をしやぶつたり脳味噌の御馳走に舌なめずりしたり、やがては乳房の脂肪をくらい、臀部の贅肉を喰い尽し、太股の筋肉にかぶり付いて、漿液の芳香と、血液の美酒に、すっかり酔いしれていたのです。

父が碎いてやつた裸女の肉塊血漿を、その息子が、ベチャ／＼と咽喉を鳴らして、飽食し続ける大光景を、どなたが正常な神経で、御想像が出来ますか？

私が不審を感じて、予感に誘われるまゝに、地下室へ降りていつたのはその時でした。

あゝその余りにも凄惨劇烈なる有様に、さすがの私も、氷で心臓を絞めつけられたような、非常な戦慄に襲われて、その場に足も身体も凍んでしまつていました。中島さんはこの大恐怖を目撃して、既にこの時発狂してしまつていたのです。

真裸のまゝで祈るような恰好で、何かあらぬ事ばかり口走つていました。

四

「奈美江、又一人、僕は人を殺してしまふたな」

暫くして発作が鎮まると、父はとても饑

つている小犬と女の死体でした。
物凄い臭気、まるで塩辛のようになった
臓物。それに真黒に群つている屍蛆と蠅、

白く覗いている骨、蛇のようにうねつてい
る腸管——その正視も出来ないような死体
を、自分ですら腐肉と血にまみれながら、

逆三角形の世相縮圖

門 好 太 郎

戦後派ちんぴら悪業記

一、頭を割られた

美人女学生



このごろの若いアンチヤンいうたら、もうむちやくちやでござりますがな。さいな、講和会議で、どうやら又日本から兵隊を置かんならんらしいさかいに、手まわしのえ

ゝように、今から稽古しとるのんかも知らんけれどや、人を殺すぐらい、平氣のへいちやら。強盗かて、強姦かて、あいつがやるなら、オレモやる、ちゆうような調子でやつてしまひよるのやさかい、手がつけれへんがな。ほんまにこまつたもんや。

ちよつと数えてみてもやで、九月に入つてからでも、世間で大さわぎしたアブレ犯罪がつぎさまに三つも起つて、それがみんな十六から十八までのちんぴらの仕業やがな。ワシらみたいな

氣の弱いオッサンは、なんや尻がこそぼりて、夜道もうかく歩けんがな。そやさかい、ワシが、きらいできらいでしようのない生命保険にかて、半泣きで入らんなんのやがなえらい損害やで、ほんまに。

ワシの肝つ玉がでんぐり返つたいちばんはじめは、ホラ、北野高校の神崎徳子さんゆうえらい美人の女学生を、野球のバットでボエンとお見舞して殺してしもた林田勲ゆう十七のちんぴら事件や。あれが九月九日の日曜のことやつたやろ。可哀そうなんは殺された女学生や。バットで頭を割られて、まるでザクロが裂けたんみたいな血みどろで死んでや、

しかもほりこまれたんが、教壇下の紙屑だらけの塵箱やがな。ほんまに殺生や。それもや、殺された原因が、恋の叶わん遺趣ばらしともいうなら筋が通るけどや、なんでも、日曜日学校へ来て三階の教室で自習してたら、よその学校の男生徒がノソノソあがつてくるやないか。

「あんた誰やのんどこへ行かはる？」
「ぐらいいは、この頃の女の子は氣が強いさかいいうやろかいな。そしたら、
「ワイは高津高校のもんや、屋上へ昇るねん」

「だまつて昇つたらあかんやないの」。
こう云うたら、とたんに
「なんかしてけつかる、女のクセになまいきぬかすな」

いきなり、バットで頭をボカンと割つてもうたんや。よつぽど癪にさわつたんやろつていて、ボカンノと三べんもやで。ぎやつともすつとも言えるもんかいな。まあ考えてみいや、あの日は高津、今宮、市岡北野四高校夜間部の合同野球大会があつて林田は高津の選手として来てたんや、それがスパイクを友達に貸したとか借つたとかで口論して氣がムシヤクシヤしとつたんらしい。屋上へでも昇つて氣晴らしするつもりやつたんやろ。

愧に耐えないといった表情で、すっかり萎げてしまふのです。

「恐ろしい事やわ。今度という今度こそ、うちも一体どうしたらえゝのや分らへん」
「自首しても、儂が狂人なら、発作中の殺人なら、法律は咎めてくれへんやろし——やつぱりこんな恐ろしい人間は、自分で自分を葬つてしまふより、仕様がないうろなア、そりやないと、お前が可哀想でならん」

その時父が、あんなにも深く、真剣に自殺を決意していようとは思つてなかつたのです。

所が、とうとう死肉の毒にでも當つたのか、あれから間もなく、兄が猛烈な腹痛と間代性痙攣に襲われました。眼は釣り上り、激しく吐血して、非常な重症である事は一目で分るのですが、医師を招いて診断させるのが私はコワかつたのです。それは、この家で演ぜられたあの狂的な大殺人が世にバレてしまふからなのです。

しかし、兄の症状は急激に進んで、たとえ私が醍醐まで医者を迎えに行つても、恐らく間に合はなかつた事でしよう。

七転八倒の大苦痛から、やがてチアノーゼと虚脱症状に入り、末期的な痙攣を起して一時間も経たないうちに断末魔の呻吟を残して、薄幸の兄はこの世を去つて行つてしまいました。

その枕頭で続いて父も私に何度も何度も謝罪しながら、劇毒をあふつてしまつたのです。

後には、愛人を眼の前で虐殺され、遂に発狂してしまつた裸体の中島さん一人。まだ腐肉に埋もれているあの地下室で、何やら訳の分らぬ事を呟いて、懸命に祈り続け

その腹の虫の居所のわかつたときに、女学生に一本やられて、かつと逆上したらしいんやがな。林田ゆうのんは、おふくろが頭が妙になつて死んだゆうさかい、いくぶんは氣ちがいの遺伝やろけど、相手は若い美人の女学生やで。たいがいの若いもんやつたら、

「エへ、えらいすんまへん」

とかなんとか頭をかい逃げて出すもんやなんぼ、かつとのぼせたかて、男は美人の女に会うたらナメクジに塩や。見てる間にトロトロと溶けてしまふわいな。さあ、それをや、相手の頭をいきなりバットでドヤすとはこらなんたるこつちやいな。

警察かて、はじめは、徳子さんが学校でも評判の美人やつたさかい、こらテツキリ不良が強姦しそこのうて殺しよつたんやないか、と睨んだらしいけどなあ。

阪大で徳子さんの死体を解剖してみたら、テンとその形跡がみあたらん。上からみても下から調べても処女膜健在や。そやさかい、急に捜査方針変更や。しんどいことやつたやろ、同情するわな。

まあとにかく林田が早うつかまつて泥を吐いたさかい、なんでもない単純殺人やとわかつたんやけど、もしまからへんだら犯人がなんで殺したんやらチョツと見当がつかなんだやろなあ。なんでも、美人の女が殺されてたら、誰でも一番はじめにピンとくるのはアレをやられてへんかゆうことやろ。強姦して殺されたら、すぐ判る証拠が、ちやんと残つとるさかいなあ、血液型調べたり、容疑者のんをケンビ鏡で検べたらたいがい一ぺんにあたるらしいで。わるいことは出来んもんやでなあ。

二 福原で泊つた

運ちゃん殺し

女学生撲殺事件の犯人が奈良で撃つたんが十二日。その三日後の十五日には、神戸の運ちゃん殺し。殺された運ちゃんは新井さんゆうて三十越えたおつさん、殺したのは、西本朝夫ゆうて、ふしぎなことに、女学生殺しの林田と同じ年の十七やがな。どないしよつたんやゆうと、雨ふりで十五夜のお月様がかくれていやはつたあの晩の十一時すぎ、神戸三宮の大丸PX前で通りかゝつたタクシーをひろうて、

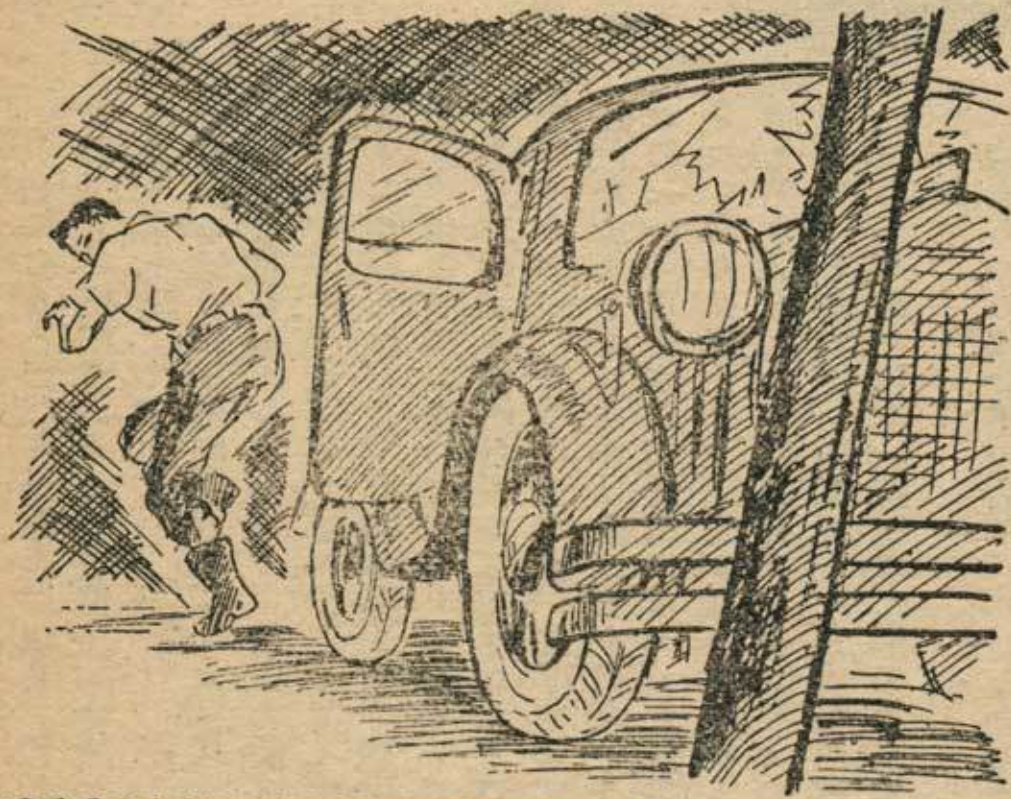
「御影までやつてんか」

「よろしゅおます」

ボタンと扉をしめて、シューと走り出したのが発端や。暗い夜道を御影中学校の辺まできたときに、ゴメンヤスとも云わずに、肉斬庖丁で、運ちゃんの右肩をザクツと突き刺しよつたんや。たさるかいな、血を吹いてがつくりハンドルに倒れかゝるやろ。そしたら、客席から運転台へ乗り移つてゆうくとブレーキをかけた上、こんどは胸を抉りよつたんや。運ちゃんぎやつと一声で即死や。

それから、運ちゃんのポケットに入つてた現ナマ五千円ほどを盗んで、死体を道路へホリ出して、こんどは自分でハンドル握つて逃げよつたわけや。

悪いこと出来んもんや、素人の運転やさかいたちまち千鳥足で、四五丁行つたら、どこぞの電柱にごつんと衝突、そのはずみに他人さんの家の板塀にメリ込んでにつちもさつちも行かん。



「えらいこつちや」

と今度はタクシーをぬけ出して、逃げ出しながら、血のついたシャツ、ズボン、サルマタまで脱いで、フリチンの素裸で走りよつたんや。あの辺は人気のない戦災地やろ、追はぎがよう出るとこや。一軒あつた古着屋をたゞき起して、

「おつさん、えらいこつちや、今そこで追いはぎにやられた」

とごまかしてなさつきの運ちゃんの金から千円ほど出していろんな古着買うて着よつたわけや。え？なんやて、フリチンの素裸で逃げるのに、金をどこへ入れとつたゆりのかいな？それはやな、この西山いう男、ゴムの長靴はいて、その中へ入れとつたわけや。

えゝか、ようおぼえとき、金を持つて人

ています。

父や兄が彼を殺さなかつたのは、発作中にも潜在意識が働いて、彼が狂信者だつたと記憶していた為か、或はあの狂的状态は女性に対してのみ働くのか、そこまでは遂に分りません。

私は、いつか保健所の人が持つて来たネオメツソとかいう強力な黄磷殺風剤を、今日の中島さんの夕食の中へ一チューヴとも全部混入しておきました。あれを飲むと、全身の毛が脱け、皮膚という皮膚がヌルヌルに爛れて剥げ落ち死んでしまふのだそうです。

それを見とどけたら、地下室に石油を撒いて、幾つかの狂死体と共に、この食人ホテルは焼いてしまします。

そうしたら私はどうなるつてですか？ 跡から発見される死体の数から計算してごらんないよ。男が三体、女が二体、アベック客が一組あつたとしてね。分つたでしよ？

ふふふ……これで私の話は終りなんです、やはり遺伝なのでしよるか。本当は私が氣違ひなんです。今迄の話は、全部私の嗜虐妄想が空想した作り話だつたんですよ

おわり

笑話

●トレニング●

A 君細君が民間放送の女アナウンサーに就職したつて言うじやないか、それでももう勤めて居るの？

B まだだ。今日も練習の最中だよ、裏の井戸端でね――

気のない夜道をあるときは、はいてる靴の中へ金をしもうもんや、なんぼ追いはぎがポケットを探りよつても大丈夫やさかいに……

古着で身ごしらえしよつてから、行きよつたんが、名題の福原や。いわんでも判つてゐるやろけど、むかしの福原遊廊、つまりいまの言葉でいうたち特飲街。そこへ泊りこんで女を抱いたんや。腰の抜けるほどやつて、九月十六日の風、お日様が黄色に見えるようなトボけた顔で、故郷の兵庫県印南郡の田舎へ高飛びするつもりで兵庫駅へきたら、もう水ももらさん非常警戒の網が張られてあつた。

「こらあかん」

と悟つて、須磨署へ自首して出た。これで運ちゃん殺しの一幕終りや。殺してから十七時間目ゆうさかい早いもんやなあ。なんでこない早うつかまつたかい。うたらやな、ほら、逃げるときに、フリチンの素裸になつたゆうたやろ、あのときシャツやサルマタといつしよに、白い上つぱりもはかしたのが運のつきや。白い上つぱりいうたかて、お医者はんや薬局のおつさんが着るだけやないで、他にそんな着る商売があるやないか……、白いコック帽着てやで……、そや……、牛肉屋のおつさんや若い衆が着てるやろ。運ちゃんやんの殺された傷は薄刃の肉斬庖丁、捨ててあつたんが牛肉屋の上つぱり。しかも、ごていねいに、その上つぱりに店の名が書いてあつたら、すぐこの牛肉屋か判るのあたりまえやないかいな。

西本の運ちゃん殺しの原因はけつきよく遊金につまつてたさかいらしい。牛肉屋の若い衆やさかい、毎日牛肉のかわりに生き

た人間をサバいたりしたら、むちやくちややがな。運ちゃんをサバいた金もつて、福原で女にサバいてもらいよつたんやさかいまあ、おんべこやけれどなあ。

三 眠り薬で

イカれたのは

こんどは大阪と神戸の真ん中の伊丹で起つた話や。ほれた女に、睡眠薬の入つたまんじゆう食わして、友達二人と輪姦しよう



とした呆れたちんぴらがあるねん。そないに眼をしろくろさゝんかてえゝがな。さいわい、女があやしいとおもうて、まんじゅうを食わなんださかいよかつたけどなあ。三人のちんぴらの本名は言われへんさか

い仮名にしとこか。そやなあ、まあ、管田秀美(十九)森田勝(十八)芝野俊(十六)とかりにしとくで。

管田の隣りに川田花子さん(十八)ゆききれいな娘さんがいるねん。(娘さんの名も仮名やで)。近所の工場へつとめてる女工さんやねんけどな、評判の美人や。管田ゆうのはこまつたやつで、ヒロポンを一日十本も二十本も打たなシンボたすらん不良や。そいつが、よりによつて、花子さんに猛烈なモーションをかけつたわけや。アホらしい、花子さんが管田にボエンと鉄食わしたんはあたりまえやがな。タデ食う虫も好きふ〜というけれどや、鼻ツマミの不良で、しかもボン中毒のニキビづらに言ひよられて誰が色よい返事なんかするもんかいな。

納まらんのは管田の方や。かつたいのサうらみてこのことやろ。

「オニヨレ、いまに見てクサレ、いややゆりても、エエことさゝずにはおかんさかいに」

といきり立ちよつたんや。どないして、花子さんをイテコマシタロと、ひまなもんやさかい、ヒロポン打つては考え、ニキビ潰しては思案しよつたわけや。男やつたら男らしい腕づく、力づくで、ほれた女をモノにしたらえゝねんけれど、下手したら強姦罪になつてブタ箱行きやがな。花子さんの肉体は欲しいし、ブタ箱はこわいし、ないチエをしぼつたあけく、

「うん、そや、エエぞ〜」とニヤ／＼しながら、さつそく悪たれ坊主仲間の森田と芝野に相談をかけたんや。「わいの片棒かついだら、二人にもエエことさしたるで」

「どないするねん？」
「花ちゃんはまだんじゆうが好きやろ」
「そらそや、女は誰かてアマイもんが好きなや」

「それがつけめや、花ちゃんにまんじゆう食わすのや」

「ふうん、まんじゆう食うたらズロースぬぐか?、えらいかんたんやな」

「ドアホ! まんじゆうで女がつれたら、わいはあしたからまんじゆう屋になるわい」

「ほな、どないするねん」

「つまりやな、まんじゆうに眠り薬を注射しとくのや」

「はあ、それを食うたら花ちゃんがたちまちグウ／＼寝てしまいうことやな」

「そやがな、あとはどないしても、気がつかへんで」

「そらえゝ方法やけど、やつてしもうてからあとで、花ちゃんがおこつて警察へ訴えたらどないするねん?」

「心配いるかい、つまりやな、花ちゃんをひつぱり出すのは、なるべく暗い晩にするねん、まんじゆう食うて寝てまゐつたらこつちのもんやろ」

「ふん」

「もしもやで、あとで花ちゃんが眼さまして泣いたり喚いたりしたら、口どめや云うてこれを握らして、三人ともバツと逃げてしまふのんや、どや、エ、智慧やろ」

管田の相棒の森田がニヤ／＼笑いながら一番気の弱い芝野の眼の前に出したのは、

百円札大に切つて十枚ほど束ねた新聞紙だつた。

「この上へ本物の百円札を一枚乗せとくのや、暗闇やつたら千円ぐらいあるように見えるやないかい!」

「で、この呆れた悪たれ坊主どもの計画はあつたか？、いんや、みごとに大失敗花ちゃんを怪しんでまんじゅうを食はず、女一人をとりまいて、男三人がさかいでるところを巡察の警官にふんづかまつてしまつた。」

いず伊丹署で、軽犯罪法、薬事法違反容疑で大目玉を食わされてるという話やそうな。これが九月十一日のこと。一週間たらない九月十七日、こんどは真風間、大阪南区高津六番丁の質屋のおぼはんが、十六のちんびらに眠り薬でイカれた珍事件が起つてゐる。イカれたゆうても、相手が五十越したおぼはんやさかい、こつちから頼んだかて、アノ方は大丈夫やがな。イカれたのは現ナマ二万八千円、カメラ一つと腕時計二つ。

十七日の朝、おぼはんどこへ金を借りに來たちんびらがあつたんや。なんでも近所の自動車の助手とかいうて、いすゝで四五回質入れにきた男やさかい、おぼはんが心安く、「わて、今日はなんや頭痛がしまんね、肩はこるし、気分がわるうてなあ、蓄膿症やろとおもいまんねん」ともらしたらこの男、一ぺん帰つて、三十分ほどしてやつてくると、

「おぼはん蓄膿症やつたら、えゝ薬があるねん、これを飲みいな」

と白いセロハン包みの錠剤をくれたんや人間て病氣のときに親切にしてくれるとうれしもんやで。おぼはん、よろこんで、「さよか、こら大けにえらい親切な人や」とさつそく六粒ほど飲んだんや。

「おぼはん、どうやねん、ちよつとにがいけどより効くやろ？、効かんよりやつたらもう四粒飲み、うちのおふくろかて、いつ

もこれ飲んで治してるんやで」
そない云われたら誰でも安心して飲むがな。五六分したら、おぼはんはなんやら胸がムカ／＼して來たんや。

「ちよつと奥で横になつてきまつさ」

そういうて、奥座敷へ入つて横になつたらもう、フワ／＼と夢心地で、いつの間にかやがグウスラ／＼白河夜船やがな。

「おぼはん、あんた、なにしてはりますねん、この真風間に店をあけつ放しにして寝てはる人がおまつかいな！」

しばらくして、はげしくゆすぶり起こしてくれたのが、お隣りのおかみさん。
「さいいな、わて、ほんまにどないしてたんやろ」

と寝呆け眼をこすりながら、ひよいと店の奥の土蔵を見ると、ぎつしり入質品のつまつてゐる土蔵の扉があけつばなし
「えらいこつちや、泥棒が入つてましたんやがな、せがれ、せがれを呼んどくなはれ」

大さわざで、すぐに南署へ届け出たけれどあとのまつりや。土蔵に納めた金庫からさつきいうた現ナマ二万八千円、カメラ一つ、腕時計二つ合計五万円ほどがアラふしぎや、煙のように消えてたというこやがな。

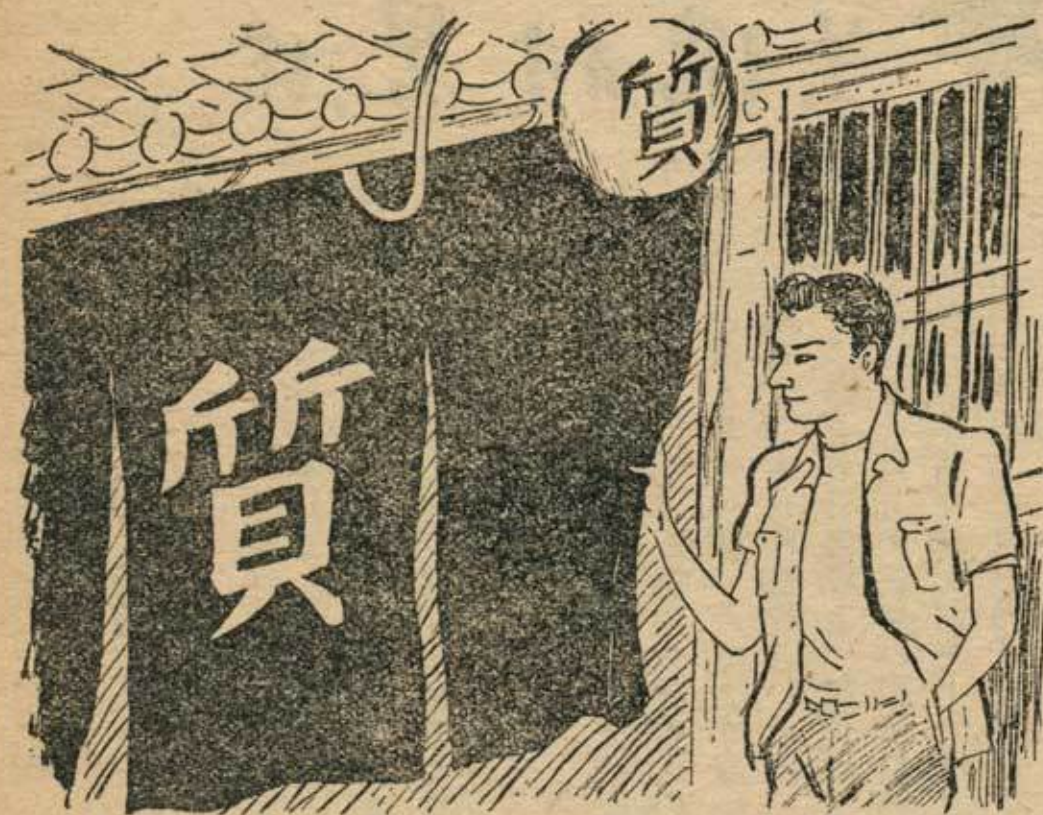
おぼはんにうまいこと眠り薬を飲まして、ハイさよならと逃げうせたちんびらは、後野正吾（これも仮名でごめんやす）ゆう十六のアプレボーイ。

伊丹のまんじゅうにくらべて、さすが悪たれ坊主でも、大阪の方がずつとアクメケしてやり方が上手やないかいな。そやけど、これは強盗になるねんで。空巢ねらいとちごうて、刑務所に入るの

が長いや。えゝか、ようおぼえときや、眠り薬を使うて女をイテコマしたり、金や物を盗つたら、強姦罪、強盗罪になるねんで。

女を高手小手に縛りあげ、ピカ／＼光るピストルやら、ドスをつきつけてやつたらむろん強姦やし、そないして金や物をとつたらいわんかて強盗やけれど、眠り薬使うたかて同じことや。こゝのとき、まちがえたらあかんさかい、よう聞いとときや。

それから一つ云うとくけれど、新聞によう「麻薬強盗」やとか書いてあるけど、こんな眠り薬やとか、手術するとき医者を使うクロホルムやエーテルやとかは、ほんまは麻薬とは呼ばへんねん。麻薬ゆうたら、モルヒネやとかコカインやとか、ほれ、よう密輸で挙げられるあれをいうねん



クロホルムやエーテルは麻酔薬がほんまの名前やし、アドルムみたいな眠り薬は催眠薬ゆうのが本名や。アダーリンやとかカルモチンやとかもやつぱり催眠薬やねんで。

このごろの新聞記者はなんにも物の名前を知らんさかい、催眠薬も麻酔薬もごつちやませで、モルヒネやコカインみたいな麻薬々々と呼んどる。アホかいな。但しやで素人がクロホルムやエーテルを嗅がして昏睡させたり、アドルム、アダーリン、カルモチンを飲ましてねむらせたりしたら、それだけでも薬事法違反にひつかゝるで。そんな危いもん使わんかて、ほんまに惚れてる女がどうしてもゆうことを聞かなんだら、一ぺんに利かせるえゝ薬があるねん、どや、教えたろか。あつははは。教授料に特級酒を一本はりこまんかいな。

昔からよう言われている。惚れ薬として有名なあのイモリの黒焼やと思うかも知れんが、そんな非科学的なものやあらへん。もつともつと根拠のある効果顔面というヤツや。もつとも南方の土人が使う惚れ薬というのもエライ効くものらしいナア。

なんでも日本から出稼ぎに行つた男が、向うの土人の女に惚れ薬を飲まされて、グニャグニャの骨なしみたいになつてしまつて、すつかり女の尻に敷かれてしまつて話や、なにしろ、その方の本場やさかい、アレをかけられたらどんな道心堅固な居士でも参つてしまふや。

あゝ話が横道へそれてしまつたが、肝心のその惚れてる女に言う事を聞かず薬やが残念なこと、もう時間がないよつて、又今度の機会にしまひよう。

船絡連る

せんくらくれん

本州通いの連絡船に乗り込んで家出娘の前には、餓狼のような船員が待ちかまえていた。



港三四郎

美濃村晃、絵

特別休憩室

夜の小松島港を、西の風が吹きまくっている。

特飲街の女たちでもあろうか、純白のハンカチを、つましましもなく振廻して酒に酔ったデツキの男たちを見送りにきているのが、弓子には、異国の風景を見るようだつた。

四国三郎の愛称をもつ吉野川の上流に生れ育った彼女は、十八歳六カ月のこの冬まで、一度も本州へ渡つたことがない人口千足らず、大きな建物といえは、生徒が八十人ほどの分教場と、村長以下小使まで入れて七人しか吏員の居らぬ村役場しかない、小さな我が村を——けさ暗いうちに脱け出してきた弓子だつた。堤防の土手を走るように三時間歩いて町の駅へ出た。汽車に乗つて四時間半、それも人目を怖れる家出娘と、旅馴れた者に見透かされぬであらうかと、実に永い時間であつた。やつと港について切符を買う時、乗船名簿を書きなさいと、係員に云われてドキリとした。

備付けの鉛筆で、すら／＼書いていく人たちに、とう／＼しまいまで残されてしまった。たまり兼ねたか（行先）は大阪、（姓名）酒巻弓子、（年令）は十九……と係員が早口に訊ね乍ら代筆してくれたが（用件）はと訊かれて、即座に返事が出なかつた。

乗船名簿が、普通には沈没などの不慮の事故のためのものであり、警察の職務質問などとは異なることを知らない彼女は、家出の後ろめたさを、こ

ゝで追いつめられた気がしたのである。

「早くしないと、席がなくなりますよ——これは形式なんだから」

そう云つてくれたので勇気が出た。

「あのう……大阪の親せきへ」

と答えた。すると係員は事もなげに（私用）と書流した。

（住所）は……これも、今度は気安く五里はなれた町の名が突嗟に出た。後で考えると、それは今朝汽車に乗つた駅のある町の名であつた。番地もいゝ加減に云つた。

コンクリートの埠頭を、潮風が身を切るようであつたが、弓子は、逆に身内の火が赫々と燃られる感じだつた。

本州通いの連絡船一千屯のおきなみ丸が物語りのお城のような威容で、弓子に襲いかゝるようであつた。

タラップを登ると、下甲板の通路にまで荷物と人が塊まつていた。

三等船室の降り口へ辿りつくと、船室からなまぐさい、すえるような、むつとする人いきれが吹き上げてきた。

その匂いだけで、もう船室へ降りていく気がしなくなり、風の当たらない下甲板の通路に、年末近くが多勢の船客と同じく、うずくまつた弓子であつた。

「ねえちゃん、僕たちの休憩室へおいでよ……子供連れの奥さんも休んでるぜ、さ早く特別だよ……」

突然、耳もとで若い男の甘い声がした。何かゾクツとして弓子が振返ると、頭をきれいに分けた、白の詰襟上衣に黒ズボンの船のボーイが、忍び寄つてしやがみ込んでいた。

ジャラン、ジャラン……

ジャラ、ジャラ、ジャラアン！

出帆のドラの音に思わず弓子は腰を浮かした。

「女ばかりいるんだ、安心して来な！」

ボーイが弓子の風呂敷包みに手をかけるようにした。

また一トきわ高くドラが鳴り、光のレコードが歌い出した。それを伴奏のように、ボーイに従って、弓子は歩き出していた。

ね、い、ぢやないの

おきなが丸は、いったん北東へ緩やかな針路をとり、西南へ舵を変えて港外へ出ると、ぐつとまた北北東へ進むのだ。

その頃から小松島港の灯が船尾と直線のはるか後方に浮上がつて見える。

ボーイの後に尾き乍ら、弓子は、だん／＼遠のいてゆく港の灯の、その西の黒い山影にある徳島市……その未決監にいる愛人に、心の中で、最後の別れを告げる。

（十吉さん！あなたが忠造さんを殺したのではないことを、わたしは信じています、でも村の人たちは、わたしを見ると人殺しのかみさんになるンかと、ひどく／＼云います。両親も、あなたと一緒にさせないと云うのです、裁判であなたが無罪とさきまるまで、私は大阪へ出て働きます。

生れて始めて連絡船に乗り、大阪へ渡る私を、どうぞ見守つて下さいね……）

手なぐさみの花札（コイ／＼）で、十吉にイカサマを見破られた馬車曳の忠造は、村一番の酒乱者だつた。（若僧に見つかつたのが口惜しい、もうこれから村でバクチはやれない、やれない位なら死んでやる）と、十吉の家を血相変えて飛び出した忠造を（阿呆！）と追いかけた十吉の情が、却

つて酒乱の彼をつけ上らせ——河原から石

津の、通称牛の爪岩へ跳び移つた忠造の腰へ、十吉が伸ばした手が間に合わず——そのまゝ吉野川の深瀬に転落した——河中へ落下の際の窒息死を検屍されたが、恰度、

迎えにきた忠造の女房が、堤防の土手から夜の遠目で、十吉が突き飛ばしたと証言したのが検事起訴の訴因となり、一応裁判の結果を待つことになつたものゝ、近村にまで響いた器量よしの弓子が、十吉の復讐

で、誰れにも夜這いを許さなかつたのを、高慢ちきな娘と反感を持たれていたので、祝言前のこの事件を悲しげに云いふらす……山間の村の狭量な風評に、とう／＼負けた彼女だつたのである——。

（あなたのお嫁になるまで、決して、ダラクしませぬわ……）

屏を引緊めて、振返つたまゝいつまでも港の灯をみつめていと

「愚図々々せんと、早よこんかいな！」洗面所と便所の、ほの暗い通路の角で、低く叱るやうに、ボーイが云つた。

端麗な顔立ちだが薄い口元が卑しげに見えた。併し、

（子供連れの奥さんもいる……）と、さつきの言葉を思い出したのと、港外へ出た船の動揺は、ゆるやかではあつたが、それだけ始めての身には、足許が浮き上がるやうな、気持ちの悪さで、泳ぐやうに弓子はボーイのはうへ行つた。

案内されたのは、頭がつかえるやうな三畳ほどの部屋であつた。

薄暗い部屋の中に毛布をきて寝ている、都会風の束髪を結つた四十女とその傍の八ッ位の女の子をみると、弓子は、ほつと安心した。

「さ、こゝでゆつくり休んだらいい、この奥さんも大阪だ、一緒に起してやるからね

それから……、若し誰れか来て……何か訊いたら気持ちが悪くなつたから休ませて貰つたというンだよ……」

ボーイが扉をしめて出て入つた。しばらくそのまゝ立つていたが、流石に夜明け前村を出た疲れを休めたかつた。

静かに部屋の隅へ寄つて、風呂敷包み二つを枕許に置き、鉄板に白ペンキを塗つた壁のほうを向いて、横になつた。

世間知らずの他愛なさ云おうか、海老のように身体を曲げたまゝ、傍にあつた一枚の毛布をかけて……そのまゝ寝入つた弓子であつた。

どの位、時間が経つたらう？ふと、なまあた／＼かい空気が弓子の五感を、揺するやうだつた。

はつと、本能的に毛布をおさえたが、異状はない。おそろ／＼顔を二寸ほど廻して奥さん風の女のほうを薄目で見た。

女の子と、その女の間の、毛布が一本山盛り上がつてゐる。

「ね、奥さん、いゝぢやないの……かあいそうと思つて下さいよ、僕は、まだ、ひとり者なんだよ……ね……」

水をねぶる猫の舌の嚼きに似たそれは、たしかにさつきのボーイの声だ。

弓子は、毛布の中で、じゆうんと、自分の身体が、固くなつていくのが分つた。

「ね……もう、さつきから……、こんなになつて……ね……同情してくれても、いゝぢやない……奥さん！」

「阿呆……となりに、可愛い娘はん、寝ては

るやないか……」

「大丈夫……家出娘は、くたく／＼に疲れて白河夜舟さ……それに、あとから……」

「常習犯やな、おまはン等……まあ好えわ……もうこないなつたら、寝られヘンさかい……」

「あゝ臭さ！奥さん、まだ酒の気ぬけしめヘンな……」

「ぜいたく云わんとき……それより、子が目あけたら困る……電気消えんのかいな……」

符合したやうに、暗い燭光の電燈が、音もなく消えた。

……扉を細目に開けて、さつきから部屋の成行きを窺つていたらしい、もう一人の船員が忍び込んだ。

弓子は部屋の隅に跳びのいて、銘仙の着物の裾も固く坐り直した。

新しく入つてきた男は、息を殺している風呂敷包を、膝に抱え込んで、弓子の心臓の音は激しかつたが——ボーイと奥さん風の気配は、それよりも凄まじかつた。

闇の部屋に目が慣れると、左手のや／＼高い所に、丸い舷窓があつた。

白い波頭をのせて、蒼黒い波のうねりがその舷窓に、ぶつかつてゐる。

全く波頭が見えない時は、船がぐうツと左に傾いた時だ。

サイダーの泡のやうな波頭が、舷窓の下になるときに、光る砂のやうな星のある空が覗けた。

船が右に傾けば遠い星空が舷窓に映るのだ。

左に、右に、ゆつくりした、船体のローリングを示し乍ら、連絡船は、刻々と進む

弓子は、びつと舷窓に祈つた。

(十吉さん！)

だが、何というボーイと奥さん風の女のこの……であらうか。

堅く風呂敷包みの上から、膝を抑えている我が手が、次第にしびれていくようだった。

古綿が崩れるように、五体のしまりがなくなっていく……。いけない！

(十吉さん！……)

急に舷窓が見えなくなつた。後から入つて来た男が、(そこに立ちあはだかつている私は、夜這いの村の若い衆に、一度だつて負けなかつた！私は強い筈だ！十吉さんのほかに、せつたいに！……)

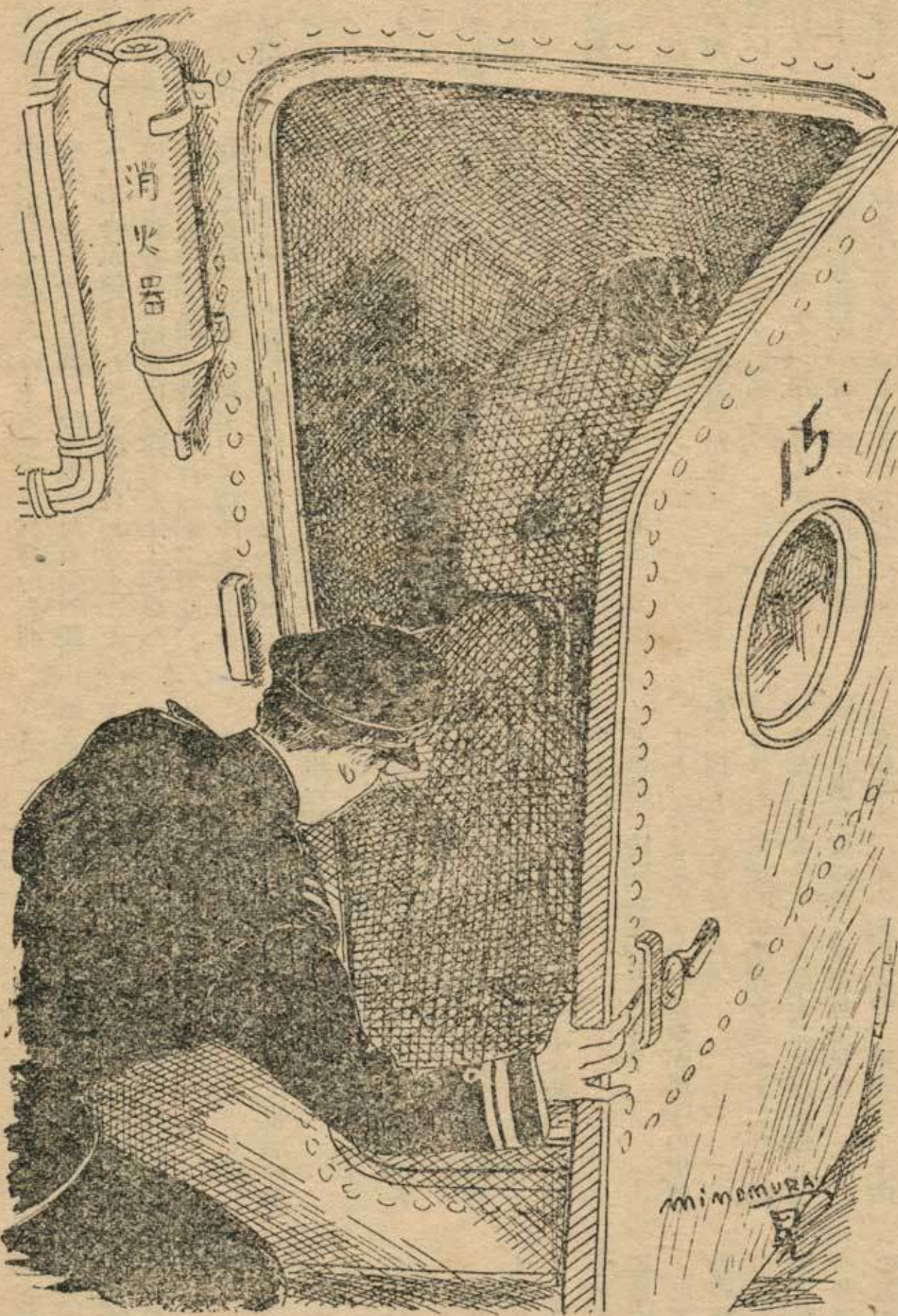
だが、膝の風呂敷包みは、いつの間にか二つとも、ころげ落ちていつた。

都会へ出るんだからと、穿いて来なかつたモンペが悔まれた。

しかし、悶えもだえて……一緒に死に倒れるのではないかと思われ、眼のあたりの……が、弓子の理性の最後の一片を、引きちぎつて、もみくちやに、桃色の渦巻きへ抛げこんでしまふのであつた。

……やがて……がつちりした男の胸を、払いのけた弓子は、舷窓に背を向けて、しく／＼と泣き出した。もう彼の妻になることは出来ないのだ。

処女性は、与えるものであつて、決して奪われてはならないものである。与える相手が獄窓にいたからとて、それは、奪われた弁護にはならないのだ。



もはや、十吉に捧げるものを失つた弓子は、泣くのをやめた。奥さん風の女を、ちツと四十女は、くらげのように横たわつていた。

それを見ると、急にこの女が憎らしくなつてきた。

考えてみれば、子供連れの奥さんもいる……その言葉が、こゝへ弓子を来させた安心感の最大のものであつた。

にもかゝらず、奥さん風の女の軀は、彼女の処女の肌まで、女体の旋律を震わしたのである。口惜しいと思つた。

どんな顔をしているか見てやりたかつたが……それは尚、自分の方が恥かしい。

何分か、いや何十秒に過ぎなかつたかも知れない——まだ十分身づくろいもしない弓子の傍へ、今度は、ボーイが寄つてきた。

さつきの男とは違つて、しなやかな感触だ。本能的に一度は身をすくませたが……何と、四十女は、いまさつき、弓子から身を起していつた男のために、ボーイの乱した毛布を払け直している……。

あゝ南海の本州通い、連絡船の暁は、誰がために、斯くもおそいのであるか？ 丸い舷窓に、師走の月が、まだ暗い。

後家も生娘も！

暁け方午前四時、船が神戸へ着くと、七分通りの客が下りてしまつた。

その混雑の隙を窺つて、弓子と四十女——風早キヌは、あの特別休憩室から、広々とした三等船室へ、移された。

弓子は、キヌの軀から、獣の影が、けろりと消えているのにびつくりした。

細面の上品な顔立ちが、やゝ青白んでいるだけであつた。

折箱から五目すしを出して、女の子に食べさせ、弓子にもすゝめた。

(あんた、ひどい目に合はつたな) キヌの眼が優しく、そう云つてるようであつた。

弓子は、キヌに対し、憎しみより好奇心をより強くもつた。……の経験が、絶望の一步手前まで、弓子をつき落していたからであらう。

キヌは正宗の四合瓶を持っていた「娘はん、あんたも少し呑みいな。過ぎたこと、クヨ／＼したかて、あかへんが……」

「大阪天保山まで、あと二時間あまり……どうせ浮世は、色と酒だんね……。」

湯呑茶碗で、キヌは、グイ／＼と呷つた。

「ねえは、あんた……い、行くとこないのンやろ……う、うちの、い家へお越し……わて、いえでは、こないに……酒のまんよつてな……」

昨夜の酒を朝酒が呼んで酔を早くしたのか、キヌはもう呂律が廻らな

い。そのまゝコロリと横になつて弓子の返事を訊くでもない。

「父さん……は？」

田舎訛り丸出しで弓子は女の子に云つた「うちの父ちゃん……今日も来る……異国の丘に……や。死んではるかも知らんへん、ねえちゃん」

子供は歌うように答えた。暗さのないのが却つて、あわれであつた。

「うちとてなア、一本五円の串カツやさんですワ……。ジャン／＼横丁の、さつき……五月と書くンや……ねえちゃん来てくれはッたら……学校休まんかアえ……しうち、うれしやけどな……」

話をしていくと、ます／＼人懐っこい女の子であつた。

クルリと、起き上がったキヌが、いきなり弓子の耳へ口を寄せ

「あした、ほんまにゆンべ、生娘を……」

低いが囁みつくように訊いた。

どぎまぎして紅くなつたが、えゝと流石に声にならない返事をして、下を向いた。

「畜生！畜生や、あいつら……」

キヌの蒼白な顔に、生きた虫のような青筋が、稲妻のように走つたり消えたりしたかと思つと、さつと立ち上がつて、階段めがけて駆け出した。

「母ちゃん！」

女の子が追つたが、もう間に合なかつた。下甲板へ上つたキヌは

「船長！事務長！」

狂つたように、金切り声を出したが、忽ち船員たちにつかまつて

「奥さん、どうしました！まあ／＼」

と、炊事場のような部屋へ押し込められた。直ぐ一等航海士の制服を着た当直士官

が部屋へ入つてきた。その顔をみると、みんなの手を、急に振りほどいたキヌの両腕が、わな／＼と大きく痙攣した。

そのまゝ、士官へ掴みかゝろうとして、キヌは、その場に失心した。

——女の子と一緒に下甲板へ出た弓子はうろ／＼と通路を捜し廻つたが、キヌの姿は見つからなかつた。

まだ暗い海から、ひゆう／＼と冷い風が切り込んでくる。

売店と赤い電気が点いている通路の角へ出た時、弓子はその筋交いの白壁に、木の名札が掛つているのを、何気なく眼にとめた。

当直士官 一等航海士 間 修三

さかだちのキヌ

……わては酒のんだら、男ほしくなりまッね。そいで、わては……まあわれから畏れに怯つたンよッて……ボーイや、間を恨むとこおまへン……

けど朝ンなッて、つく／＼その娘はンミ

ると、全くなのおぼこ、生娘と書いたるよな澄んだ顔してはるやないの……

コラしもたと自分のこと忘れて、その娘はン気の毒になりました。するとわての子供がその娘はンにより懐いてな……話がまた、おぼこいもンや……

こんな可愛い娘はン……ひよつとしたら一生台なしになるやも知れン、畜生、酒呑みの後家も、生娘も、うぬらアわきまえあらヘンのか……

とかあッと、わての糸切り歯が泣き出しました。

そないなると、わて疳べきが起きまッねん。

船長か事務長に、恥をさらけ出して、ボーイと間をクビにしたろ、と思ひました、……ほしたらその間が、当直士官の服を着て……ぬうツと、顔みた時の下厚釜しさ……

わては、一年立つた今でも、あッ時の気持ち、よう覚えてま……

とどのつまりは、わての思い通りに、間もなく二人はクビになりました……

そこで娘はんを引取り、その日から酒断

ちのキヌを、宣伝して、知つた人にも、わてに酒をすゝめんよう、われから頼ンました。

もとはと云えば、わての酒からですよつてな……

おほほ……、酒だちのキヌが、いつの間、さかだちになりました、やろ……おかげで、エロ気分でお越しの方も仰山おますわては、エロ話は結構呑まいでも、熱ありま、おほほ……

え？その娘はンだつか……それあまり聴かんといておくれやす……わて罪ほろぼしに、納まるとこへ納めました。——婿はンの名は十吉という阿波の人やろつて……あッたはン興信所だつか、よう知つてまッなこゝに盛つた蜜柑、これ四国の、その若夫婦が送つてくれはつたンですよ……。まあなッせ、女子は、酒呑んで船に乗つたらあきまへン。え？乗せて貰つてまた乗せるのが欲張りやて……そう／＼、そうだな

(了)

(小話) 四帖藩張守遺言

偶然ならずや

いざという時、日本の女が男より遙かに好きで情熱的であるという事は、決して過言でない。

見よ。彼女らは便所へいくたびに紙がい。そして用いるたびに、何を思い出すかは、改めていふまでもあるまい。

搔ゆいストリップ

某ストリップ劇場の楽屋の便所へ忍び込

んで、覗いていた男を捕えると、細い竹筒にノミとシラミを派山つめて吹き飛ばせる仕掛を持つていた。

舞台の女が股間の一番始めに穿くものを脱いだ時、穴から吹きかける積りであつたという。——話を聴いただけでストリップバ

ー達は股をモゾ／＼させた。

見せたい娘気質

或る洋装店で、売つても儲からないサービ

「何しろそいつは、少し明るい所では、パソンのあたりまで、透けて見えますんで」と店員が他の物をすゝめると

女の腰巾

「結構よ、私が探していたのは、そういう布地だつたの」

女の腰巾が広くなるに従つて、話の範圍も広くなる。腰巾が狭いうちに、話の巾が広いのは淫乱の素質がある。何故なら、自慰では絶対に腰巾は広くなならないからである(S・M)



志津子
しろう

尻をまくる藝者

渡舟場に数人待つていた
そこへ町の芸者が二人急い
でやつてきた。と、椅子に
腰掛けていた学生服を着た
青年が二人の芸者を呼び止
めた。

「水が浅くて舟が出ないん
ですよ」

芸者達は困った顔をして

青年を見た。

「一寸裾をまくれれば渡つてゆけます」

二人の芸者は裾をまくつた。そして、道
の真中で川を渡る様子をした。私は、はは
ア、催眠術で無戯をしているのだな。と思
つた。

「深い深い」

青年の声が芸者達に投げかけられる。

「そこは深い」

二人の女は、真剣な表情になつて、着物を
腰までまくり上げた。

私は青年に向つて「助けに行きなさい」
と、囁いた。青年は「そこは深い」と言い
ながら起上つてズボン脱ぎ捨て、やはり
川を渡る様子をしながら、むつちりした肌
白い尻を夕陽に照らされている二人の芸者
の後を追つていった。見ている人々は、耐
え切れなくなつてどつと笑つた。笑聲で青
年も芸者達も、すべてが一ぺんに霧散して



しまった。



享樂と戯れる一夜

私は素裸で泳いでいた。振返ると、背後
には何も無い。背でも無い、黒でもない。
すべての観念を超えた無である。そして、
その巨大な、無気味な無が私を呑もうとし
ている。私は夢中で泳いだ。森も、家々も
堤も、流れも、すべてが私の背後で消えて
いた。

気が付くと、私の前にも右にも左にも多
くの男女が夢中で泳いで

いた。そして、力尽きた
者は何も残らずに消えて
いった。それは、死の恐
怖以上のものである。死
は何か残つた。

骨。煙。灰。墓。――

中には抱き合つたまま
消えてゆくものもあつた
すべてが裸である。一糸
も邪魔になるからである
一人の男が私に泳ぎ寄
つた。

「僕と消えませんか？」
私は答えない。



處女の見る夢は紅色の燃ゆる情熱の夢か、そ
れともほのかな桃色のべールに包まれた温か
い愛情の夢か？ 赤裸々に繰りひろげられた處
女の艶夢十夜一夜

「一瞬の生を享樂して僕と」

私は男の胸を突いた。男はうらめしそ
うに悶えて、消えていった。その時男の手が
私の足にふれた。そして、その手首が私の
足に残つた。

他の男が泳ぎ寄つた。私はその男もはね
のけた。男の髪が手にまつわりつた。更
に他の男が泳ぎ寄つて消えていった。私の
身体に至るところに男の肉体の一部がはり
ついた。女の殆んどがそうであつた。女達
はそのようにして、男の執念を四肢につけ
たまふ泳がねばならなかつた。それで女と
云う女は、無のすぐ前に疲れ切つて泳いで
いた。

私も次第に疲れてきた。享樂を！。享樂

を！と、男達の声が耳元を
かすめる。私は、享樂とは
どんなものか知らなかつた
しかしどうせ間もなく無に
なるのなら、男達があんな
に切なく求めている享樂に
浸つてから無になろう、と
言う氣になつた

「……享樂を……」

私は肯いた。男は、私の
四肢にへばりついていて他
の男達の執念をはらいのけ
て、私の身体を荒々しく掴
み、呻いた。

「……素晴らしい。あなたは

美しい。おゝ乳房……何と言う甘美な……

私の股は引裂かれ、きつつけられ、凍痛が全身をはしつて、私は思わずあッ。と叫んだ。……こんなのが享樂、と、ちらつと思つただけで、私は何もわからなくなつてしまつた。

や3夜

はづかしめ受けぬ

夢の中でも私は小町娘であつた。小野小町も歌人であつたので、私も和歌を習つた。そしてすぐに上達した。

町の青年達は私を恋した。恋文が私の文箱に入り切れなくなつた。私は満足であつた。

そのうちに一人の青年が私に恋して自殺した。すると他の青年達も自殺し始めた。町の人々は、私が町を歩くことをやめて欲しい。と、言つた。あなたを見染めて自殺をする青年がふえて、やがて青年が町に居なくなるからだ。とのことであつた。



私は町へ出歩かなくなつた。すると、窓の下を青年達がたえず通りかゝつた。恋歌を口ずさみ楽器をかき鳴らした。しかし私は、セックス・アツピールには全然つんぽであつた。青年達と言わず、老人も子供も私の姿が見られなくなつたために更に自殺がふえた。父母は、嫁にやればいい。と、私を六十三才の町長の嫁にすることにしが、結婚式の夕方町長は心臓麻痺で死んでしまつた。

町の女達は嫉妬の女神に、どうにかしてくれ、と、哀願した。女神は私を素裸にして、生身のまゝ町の四辻の元將軍の銅像のあつたところに立たして、慾情するものは誰でもいつでも凌辱し、慾情を満してもかまわない。と町の人々に告げ、私には、お前がはづかしめを受けたら元の人間にかえることが出来るのだ。と、囁いた。

しかし、誰も私をはづかしめようとする者が居なかつた。それは既に、町には子供も青年も老人も、男と云ふ男は一人も居なかつたからである。

私は、女だけの町の四辻にいつまでも素裸で立つていなければならなかつた。

や4夜

地獄の一輪車責め

私はエンマ大王の前に立たされた。男達には鞭を与えられているが女にはそれがなかつた。だから鬼共は女が来るのを喜んだ。

私は、こんな豊かな肉体をしているし美しいから当然天国へ行くべきで、地

獄へやられる理由はない。と、大王に抗議した。

大王が言うには、お前は美しい容貌と豊かな肉体を持ちながら一度も男に肌をゆるそうとしなかつた。このことは大きな罪悪である。これを見よ。と、私に鏡をつきつけた。鏡の中には、私に恋いこがれて自殺した老若の男達が血の池で藻掻いて浮き沈みしていた。私は、それは自業自得なことで私の知つたことではない。と、あくまで言い張つた。

大王は怒つて、極刑にせよ。と、鬼共に命じた。

青鬼が一輪車を持つてきた。その腰掛けるところには男の物が立つていた。私は無理矢理それに乗せられたが、乗つてみるとそれは私にびたりとあつて、かえつて何とも言えぬ快さであつた。

一輪車は独りで走り出した。そして血の池の周囲を廻りだし池の中から多くの手がのびてきて私を池の中に引ずり込もうとした。が、私はこゝでも娑婆に居た時のようにその手を払いのけた。すると、払いのける度に、びたと快かつたそれが大きくなつた。

私は耐えた。耐えた。耐えた。が遂に耐え切れなくなつて必死にそれを引抜き自から血の池に飛び込んだ。すると、幾百と言ふ男の手が私の肉体のあらゆるところを掴んで、再び一輪車に押上げた。一輪車は池を巡り、亡者は手をのびし、それはボーチヨウし、私は苦しみに呻き身悶えた。そして池に飛込む。押上げられる。押上げられ

る。ボーチヨウする。ボーチヨウする。私はおいおい泣き出した。それでもボーチヨウする。あゝ。

や5夜

黒いズロース

照夫が怪我をした。と、知らされて見舞に行つた。彼は腕も頭も繃帯して、向うをむいて寝ていた。「どうしたのですの？」



と、言ふと、彼は鼻つまり声で、聞かないでくれ。と振返りもせずによつきら棒に言うのだ。

「いいわ、聞かないわ」

私は、つん、として立去ろうとした。と彼はあわてて語り始めた。

花火の夜だつたよ。僕は水中花火を見るために筏の上に坐つていたのだ。僕の前の筏に一行に紡績女工達が、スカートをまくつて、丸太の上にハンケチを敷いて坐つてゐるのがやがてわかつた。僕の傍を人がた

えず通り、筏がびたびたとゆれるんだ。僕は靴を脱いで水の中につま先を入れ、一人の娘の尻にひよいと水をはね上げて知らん顔していた。娘は振返つてスカートの尻をなせたよ。しばらくすると又僕は他の娘の尻にひよいとやつたのだ。ひよい。とね。誰がやつているのかわからないらしいので花火もそつちのけさ。すると一人の娘が起上つて僕の方の筏に乗り移つて、その拍子に僕の肩へ手をかけて、わエ、遊ばない。と、囁やいたのだ。こんなのは大概ただですむのだ。いや失礼。僕は色魔じゃないよ。

僕は娘の後から岸へ上つて人の群を分けて歩き、河原を通り抜け、小山へ登り始めた。坂が急になつて人影がなくなつたのだ。うまい穴を知っているんだな。と、僕は思つたね。娘は相変らず先へ登つて行くもう頂上に近かつた。娘が急に振返つてあんたでしょう。と、僕をにらんだ。まるで猫のような眼だつたよ。僕はえ？と空とぼけたんだ。と、黒い濡れた布が僕の顔にびしやりと覆い被さつて何も見えなくなり足を踏外して崖から落ちてしまつた。その時の黒い布は確かにズロースだつたね。と、照夫は振返つた。彼の鼻の頭が赤くすりむけていた。が、それは恋人との喧嘩のあとに違いない。

ワ6夜

ツンドラの悲劇

ニコライ・クレムニョーフは、エリザベータを射殺しなかつた。棒切れのように凍



つた雪の上に転つたのはベルネルだけである。

クレムニョーフはかなしみのこもつた声でエリザベータに言つた。

「あなたは、こゝに居てはならない」彼の頭の中には十二名の学術研究部員の生命があつた。そして、エリザベータもその一員であるが、そして、この春までに、この北の果の孤島クレムニョーフ島には一人残らず餓死しなければならぬ食糧しかなかった。そして来援の望みは九十九%ないエリザベータは手をよじり合せて泣いた輪番で十二名の妻になつてもいいから。と羞恥に真赤になつて哀願した。が、クレムニョーフは岩のような心を持つていた。彼は、探險員の三分の二を、氷つた海の上を、シュピーツベルゲンへ向つて出発させた。生き残つてシュピーツベルゲンに着きヨーロッパに來援乞ふの打電をしたのは十二名中ボーリス・ラチーノフだけであつた。

エリザベータは、妻を追出したサモエドの話を思い出した。その妻は百露里離れた隣りの部落をさして歩き、凍えて死んだ今彼女の眼の前には、巨大なシュピーツベルゲンの山々がそそりたち、その向うに二十一名の同僚の生命を奪つたツンドラがあつた。

「あなたがこの小屋に運び込んだ防寒具や其他のものはあなたに差上げる。私にはそれ以外何もしてやることが出来ない」決定的なことだ。エリザベータは荷物を持つて氷原を歩き出した。クレムニョーフは、遭難船スベルドルフ号で作つた宿舎へ向つて行つた。

エリザベータは泣くまいと歯を食いしばつた。はじめて生の喜びを知つて一時間とたつていない。雪の上に流れたベルネルの血が、鮮やかに氷原に幻覚されたベルネルがスキーをかついで前を歩いて行く。まるで風のように明るい月のない夜だ。

「ベルネル。」

エリザベータは持つてゐる物を落して両手をのびした。幻覚が消えた彼女は氷の上に両膝をついた。そして身をよじて肚の底からおいおい泣いた。ベルネルのスキーが眼前に歩いていった。スキーだけが歩いていった。エリザベータは泣きながら起上つた。そしてあの衝撃、喜び、男の体臭を生々しく想い出しながら凍つた海の上を歩き始めた

ワ7夜

待ち消える女

私はグリルで彼を待つていた。コーヒー

を五杯飲んで、フルーツを五回注文した。彼は来なかつた。そして店が閉つた。私はグリルの出入口に立つて夜の東京を眺めた。新橋もこの辺は淋しく、ハイヤーも通らなくなると、北極の氷山の中に居るような錯覚に捉われた。

遠くから登音が近付いて来て、私はほつと人心地がついた。しかし、登音が彼のではないと知ると、心は更に深い闇の中に落込んだ。男は私の手を取つた。私は男の方を見なかつた。男は舌打をして去つていつた次の夜も私はそこでをうして彼を待つていた。男達は、私が何等抵抗しないと知ると、代る代る私を侵していつた。朝、私の足元におびたぐしい白濁した粘液の水溜があつた。

次の日もそうである。その次の日も……そして、私の身体は次第にすぎとほるようになり、水溜りの乾いた日はなかつた。

彼は来なかつた。そして、今でも私はそこで立つていた。最早や、私の姿は全く見えなくなつて、意識だけが彼を待つてはつきりしてゐた。私は、男達がまるで小用でも足すように射撃するのを無感動に眺めつづけた。何といやらしい、醜惡な滑稽な恰好だろう。と、心の中で唾を吐きながら。

ワ8夜

或るボートの風景

私と彼は荒川でボートに乗つていた。彼がオールを握つて漕いでいた。

彼は、男が溺れた時は俯向きになつて浮び、女に仰向きに浮ぶ、とか、溺死体は不思議と全裸体となつてしまふ。とか、その

ようなことばかり喋っていた。

「東京湾へ出てみようか?」

と、彼は私の返事もまたずに漕ぎ下り始めた。彼は慾情に燃えているに違いないかつた。ズボンのそのあたりがそれを物語っている。しかし、私は知らぬ顔をして岸を眺めていた。

「あの辺が鳩の街かな」



しかし、私は

答えない。流れに

手を入れて水をす

くつたり、バラッ

ルをくるくるまわしたりしていた。

彼の顔色が急に青白くになってきて息が荒くなつた。彼は唇を噛んだ。私は、彼があまりいやらしいことを言いつづけるので代つてやろう。と言わなかつた。二人で漕げば又、乳房を探ろうとするに違いない。私は純潔を失なわぬうちに、このへんでグツト・バイしようと思いきめていた。

彼の顔色は益々悪く、全く血の氣を失つて力もなくなつた。

「どうしたの?」

「いや、何でもありません」

「代りましょうか?」

「いや、いいんだ」

「そう?。でも、顔色悪いわ」

「いや……」

彼はがつくりと、オールを手離した。

「どうしたの?」

「いや何でも」

「胸?」

「いや」

「お腹?」

「いや」

「頭が痛む?」

「いや」

「一体、どうしたつて言うのよ」

「本当に……何でもありません……」

そう云う口の下から、彼は額に油汗を流して呻いた。

私は彼を舟底に寝かせてシャツの胸を開いた。バンドをゆるめた。彼は益々呻いた。

私は処置方法もなく、たゞ呻きつづける彼を眺めた。ポットはぐんぐん流れた。

彼は突然起上つた。そして、どうするすきもなく彼は流れに飛び込んでしまつた。

彼は女のように股間に手を当てた勢で岸に引揚げられた。その手の下の鼠蹊部が紫色に赤ら光つて腫れあがつていた。私は、彼が水に飛込んだ氣持がわかつたような氣がした。

彼は息を吹き返すと直ちに病院に運び込まれて手術をした。その時彼の陰毛を剃つてやつたのは私である。



八方鏡の部屋

私は鏡の部屋に居た。上下四方すべて鏡である。言ひまでもなく

素裸で、私の姿はそこに八つも九つもあつた。見ようと思えば自分の肉体のどこを見ることも出来た。私は、オットー・ワ

インゲルの理論が正しいか否かを試しているのである。そして女性と男性とは全く異つた種類であることを確証した。

男は一時間と鏡の間に居ることは出来なかつた。彼等の半数は氣が狂い、半数は自己の罪を告白して神に許しを乞うた。

しかし私は、こうして

三日も四日もあらゆる方面から自分の肉体を眺めていてあかないのである。沈黙に耐え得るのである。私に恋人が出来たら私は彼を一日十分の割でこの部屋に入れようと思つた入ることを拒む男は恋人にすまい……

しかし、私にはまだ恋人が居なかつた。私は自分の肢体を眺めながら静かに自分を慰め始めた。



いた。或るアマゾンの女王は捕虜に恋して狂つた。私はそんなことはすまい。と、心に誓つていた。

自から生きるためには、自からの種族の繁栄のためには、敵に対して冷酷にならなければならぬ。そして、私達の敵はすべての男である。アマゾンが

右の乳房をそぎ落とすのは男に勝つための、護身の、繁栄の、悲願である。ふくらみかけた乳房を乙女は、男への恋情でおさえるのではない。

宮殿は完成しつゝあつた私は城壁に捕虜を埋め込むことを思いついた。捕えてきて、瘞え切るまで凌辱し、送り返す。その送り返すことをやめてしまつた。

この春、宮殿近くまで攻められた時城壁から血が流れた。敵はそれを見て攻撃の手をゆるめた。その隙に

私は一息に盛返して、更に十六名の捕虜を得て敵を追散らした。まづ、最も遅く、最も男らしく精力的な捕虜が私のために用意される。私は彼等に騎乗位をとる。男の意志は一切拒否する。私は子を産む。それは男の子供ではない。男に子供があろう筈はない。十数名の精子は絶対に一つの卵子の捕虜である。撰択権は卵子にあつた。幾億の精子の群の中の一精子を如何にして弁別するか?。私はかつと目を見開いた。

と、同時に目が覚めた。現実を書くまい

アマゾンの女王

壮麗なアマゾンの宮殿が完成に近付いて

戦後派かみさよおふはやり アブレ神様大流行



一、夫婦和合が
御本尊

右に双葉山、左に吳清源という
ジャーナリズムの寵児を二人も引
きつれて、敗戦日本に君臨しまし
た爾光尊様はいまどこでなにを
してごさることやら。双葉山は相
撲を引退してしまつたし、吳清源
はぶつくり手を切つて、藤沢庫之
助九段との天下分け目の対局に備
えているし、その他戦後の新聞の

大木悦二
曾根三太郎

三面記事を書かせたアブレ神様方
のその後はどうなつたのか？。朝
鮮の戦争やら、桑港の平和会議や
らで、世間の関心がすっかり薄れ
たやうで、あの終戦後の混乱当時
ほど世間の魅力を感じなくなつた
のかとおもつたら、どうして／＼
とんでもない。ます／＼もつて商
売繁昌金持つてこいの盛況ぶり
で世間の眼が外れたのをかえつて
さいわい、次々にニューフェイスが
生れて、いま／＼でよりもつと根強

く、信者の数もぐんぐん増えてい
るのが実情だ。

これにおどろいてふるえ上つて
いるのが既成宗教の坊主や神主ど
もで、なんぼ怨敵退散の御祈禱を
しても一向き／＼めはないし、宗教
は自由という新憲法がある以上、
昔のやうに「恐れながら」とお上
に泣きついて、大本教や人の道教
を弾圧してもらつたやうなわけに
は行かず、これじや飯の食い上げ
じやとあわてふためいているのが
哀れである。

なんしろ、終戦までは、日本全
国で公認された神道が十三派、仏
教が二十八宗、合せて四十とちよ
つとの団体だけだつたから、天下
泰平で、ノン氣にナムアミダブツ
を称えたり高天ヶ原へ幣をふつて
れば食つて行けたのが今じや増え
も増えたり、約十四倍の五百九十
三団体。これはまあ公認された本
家元祖の類だが、その後内輪もめ
やらお家騒動で分裂したり、全国
至るところで有名無名の神様や仏
様が、ニョキ／＼雨後の松茸みた
いに殖えたものだから、非公認の
宗教団体と来れば一体何百、何千
あるかの見当もつかないという。



公認されたものを内訳してみ
ると、神道系が二百二十五、仏教系
が百十五、キリスト教系が三十九
その他が百十四以上という。府県
別に見ると、一番多いのが東京、
次が大阪、あとは京都、愛知
兵庫、神奈川、岡山という風に、
人口の多い府県ほどアブレ宗教の
数も多い。

それにしても、なぜこんなにア
ブレ宗教が歓迎されるかという
やつぱり、もつぱらアブレ人種の
感情にびつたり合うからで、一番
わかりやすく短刀直入な「陰陽
和合」つまり「夫婦の円満和合が
幸福の第一じや、これこそこの世
の天国じや、極楽じや、この他に
はござらんぞよ」とばかり、ダン
スを教えてくれたり、あの方の突
行方法まで微に入り細に亘つて、
パンデベルデの「完全な結婚」以
上に教えてくれるという有難い神
様もある。これにつゞいては、生
活の苦しいのをどうやつたら手輕
に救われるかをコンセツト丁寧に説
く手が多い。「むつかしい文句は
要らん、とにかくお前さんの根性
を叩き直してわしの方の神様を信
心なされ、そうすれば貧乏や病氣

や災難はたちどころに解決するわ
い」という調子。昔の神主や坊主
みたいに、在りもしないアノ世だ
の未来だのと七むつかしい高慢ち
きな説教なんぞは一切並べないの
が何よりの強味だ。

男女の和合、貧乏や病氣や災難
の解消が教義だから、これにとび
つかぬ者はない。色氣の慾氣のな
い人間はないから、アブレ宗教に
は善男善女が、いやが上にもあつ
まるという結構な仕組みになつて
いる。坊主や神主がこまり果て、
手のつけようがないのもあたりま
えだらう。

二、箱根のお光

ささま

アブレ神様の全国ナンバーワン
はなんといつても、箱根の世界メ
シア教会だらう。前には観音教と
云つていたが、こゝの教祖の岡田
茂吉じいさんは今年たしか六十七
か八になつてゐるが、精力絶倫の
傑物で、「箱根、熱海一帯にこの
世の天国を築くんじや」と宣言し
てバリ／＼布教に努力している。
一時は全国で信徒の数が十万近く
なり、熱海の町は観音教のおかげ
で持つてゐるといわれたほどにな
つたが、出過ぎた杭は打たれると
いう諺通り、このじいさん、去年
の五月にどえらい大げさな失敗を
やつてのけて、警察に挙げられた

「脱税、農地買収法違反、自治法違反、医師法違反、伝染病取締法違反、軽犯罪法違反、団体等規制令違反」と七つもの容疑でひつかつて、いますつたもんだの紛争中だが、このおさまりはどうなることやら。脱税だけでも十億近いという噂だが、じいさんは大枚の保証金を納めて釈放してもらっている。去年の秋、箱根の神山荘（七年がかり、工費一千万円という）で釈放祝兼秋季大祭典をはなぐしくやつてのけたから平気なもんである。じいさんの教義というのは、わしの腹中にある玉からはありがたい放射能が出ちよるこれで以てよろしくの邪悪を払いあらゆる難病を治すんじや」というケツタイなもので、何をアホらしい、人間の腹の中にまさか原子バクダンがあるわけじやあるまいしと常識で考えても、全国十万人の信徒は本当にじいさんの腹の中にそんなバクモノみたいな玉が実在すると有難がつているのだから手のつけようがない。とにかくじいさんになにかお筆先を書いてもらつた紙片を身体につけておれば災難を免がれ、病気が治るんだそうで、じいさんは禿頭にハチマキ、毎日毎晩全国から殺到する注文に応ずるべくせつせとわけのわからんお筆先を書きなぐつてゐる。

いつそのうち、石版刷かオフセット刷で大量生産すりやいゝんだが、さすがにじいさんもそこまでの営業はやる勇気がないらしい信徒の中に女連中の多いことはもちろんだ。子宮癌だのコレラだの不妊症だのつて難病には、じいさんのお筆先は特によく効くとか、効かんとかの噂である。いつたいそんなのにはお筆先をどこへ貼るんだらうか。

三、靈友會のヒ

ス婆さん

世界メシア教会と対抗するアプレ宗教の一方の旗頭は、東京麻布にある靈友會本部だ。こゝの教祖は、小谷キミという五十前後のヒステリーばあさん。教義は別にむつかしいことはないが、日蓮宗系統で、御利益はやつぱり色氣と慾氣に至極アラタカラしい。大体日蓮宗系統つてのは、関西より関東に多く、例のテンツク／＼のウチワ太鼓でおなじみだが信徒の数は全国で六十万くらいあるらしい。靈友會も、この間、岡田のじいさんがしくじつたように脱税事件で挙げられ、ついでに麻薬やら金塊の隠匿まで牢獄式にでてきて、ドガチャガの大さわぎだつたことはみなさんも御承知の通りだ。警察で油をしぼられて、たちまちかん／＼におこつた小谷のヒス婆あさん、吉田白足袋と負けず劣らずのワンマンだから肝癪の入つあたりを發揮して、靈友會の大幹部連中と大立ちまわりの内輪ゲンカをはじめてしまつた。破門だの、脱退だのと云えばシカツメらしいが実のところ、裏長屋のヒス婆さんとノンダクレ爺さんのケンカ同様「こんちきしよう、出て行きやがれ」

四、牛乳屋と焼

イモ屋

「なにを、くそばあ、たのまれ たつて居てやるか」

のつかみあいとそつくりだ。で追い出されたり、後足で砂を蹴つた連中が、あつちこつちで新しい教団をデツチあげた。東京代々木には妙智會、大阪、川崎、仙台等には仏所護念會、妙道會、德行會、法師會等の名前で、ダン呼、ヒス婆あさんに反旗をひるがえしたのも、さすがアプレ宗教らしい信徒はどうしたかというところ、それはそれで、自分々々の好きな会へちやんと納り、その後各会ともども／＼増えているんだから、靈友會系統としては分裂したおかげで全体としては却つて信徒がふえたという珍妙なことになつてゐる。こゝもダンゼン女の信徒が多いことはいうまでもない。

牛乳と焼イモの宗教団体だが、これがバカあたりにあたつて、信徒は全国で十萬あるという。東京附近はもとより、関西や九州くんたりから押しよせる信徒が毎日一萬を越えるさわぎである。なんしろお賽銭が一日に二十萬円、百二十圓の本殿に入りきらないから、空地や広場にテントを張つて溢れ返るといふ盛況だ。

ところがこの立正交成會の信徒というのがこまつたことに、肺病梅毒、悪性の皮膚病つてな人のいやがる難儀な連中ばかりで、毎朝毎晩市電やバスで続々押しかけてくるもんだから、迷惑千萬なのは近所のサラリーマン階級だ。中野区や杉並区というのは、御承知の通り、丸の内や有楽町や日本橋界隈へ勤めるインテリ連中がたくさん住んでいる。アプレ宗教には無関心だし、衛生觀念が発達しているから、苦情の出るのもむりはない。

ねじこまれて弱つたのは区役所や警察で、宗教の自由という点から立正交成會に文句をつけるわけには行かず、といつて、交通機關を伝染病で汚されてはこまるし、市立杉並保健所ではその調査や予防やらで、テンテコ舞いの大さわぎだ。

まあ、それに懲りたのかどうかわからないが、交成會の方では、新らしく四千萬円も投じて三千名を収容できる道場を堂々と新築す



るやら、すぐ近所に、株式会社組織で蒸風呂を作つてサービスするやらに大童である。そのすつたもんだのさわざと別に、集つてくる信徒相手に、飲食店やら土産物屋やらクダモノ屋やらが、バタ／＼と百軒あまり出来上つて、信仰の御利益のお裾分けを有難く頂戴してホク／＼の態だという。

五、賣春兼業の

皇道治教

アブレ宗教つてやつはどれもこれもたいてい夫婦和合を教義の第一条に掲げているが

教えてるだけじゃ御利益がわからん、一つ盛大に実演しようというあきれ返つた教団が、とう／＼横浜に現われ、警察から大眼玉を食つてゐるのがある。

横浜の日枝町にある皇道治教というのがそれで、本部は静岡県にあるが、こゝの教祖の木船伝三というおつさんは、例によつて例の通り、アブレ宗教につきものの脱税事件でゴタ／＼の最中。それはまあいゝとして、このおつさんのおかみさんのもとという五十八のばあさんは、風紀取締条例違反容疑、つまり売淫媒合で横浜市警察で調べられてるのだからあきれるというのは、このばあさん、去年の一月頃からパンパン十六人に



御本殿を貸して、一晚二千円から七千円の宿賃をとり、今年の五月ごろまでに合計二百数十万円を稼がせ、おまけに、約六十万円をピンハネしていたそうだからたまらない。要するに、風間は亭主の教祖が大いに夫婦和合を信徒に説教し、ほどよく夕方になつたら女房の副教祖が、パンパンをあてがつて、実演させたという。まことに至れりつくせり、かゆいところに手の届く御町噂なアブレ宗教である。信徒も信徒、風間かしこまつて御幣なんかで清めてもらい、夜はその御本殿でパンパンを抱いて寝られるんだから有難うて涙がこぼれたろう。それもパンパンが十六人、それ／＼男をくわえて広い本殿で競争で夫婦和合の実演

をやらかしたのだから、全くそのざこ寝の状況たるや、この世の天国、極楽だつたらう。

皇道治教の信徒は全国で、二十五万あると自称しているが、その教義が実に愉快で、なんでもかでもすべてこれ現世第一主義。どうしたら税金をビタ一文払わずに商売できるかを教えてくれるのだからありがたい。

つまり、これは、宗教法というもののに、「法人である宗教団体が布教のために営む事業には税金を課さない」とある抜け路をうまく逆用すればいいのだ。

皇道治教に入つて、何とか幹部の名前をもらえばいい。つまり信徒即ち宗教法人の一員が布教の目的で事業を営むわけだから当然税金はかゝらんといい、実に巧妙で合法的な解釈がなり立つわけだ。

事業はなにをしてはいかんとは宗教法には書いていない。だから、皇道治教に加入していたら、旅館待合、喫茶店、ダンスホールなんでもござれ、布教の目的のために宗教法人が営むんだから一切免税ということになる。

だから、このごろみたいに税金攻勢がひどくなれば、その合法的脱税のために、商売人はあらそつて皇道治教の信徒に入る。なんともうまいからくりになつてゐることよ！

所轄の名古屋国税局でも三年ぐ

らい前からこの合法的脱税にはもちろんのこと気がついてる。だから、なんべんも手をつけてはいるのだが、型式上ちゃんと宗教法による法人届出がしてあるし、どうにもならずいまだにブラックリストに乗せてあつても、徹底的にギヤフンと参らせる手が打てないおかげで、皇道治教の信徒は、脱税のできる魅力にひかれて、どし／＼増える一方らしい。片一方に金儲け、片一方に夫婦和合の実演もさせてもらえる宗教は日本広しといえども、おそらくこれが唯一だろう。

五、泣くのが本願

アブレ宗教の珍談奇談を、関東に独占させるのは片腹痛いというわけではないが、大阪にも、眼玉を白黒させる珍教団がある。

その名は「泣く宗教」。

名題の飛田新地からちよつと西の方、南海電車の「萩の茶屋」駅から近いところに看板を出している清霊会教団というのがそれである。

管長さんと呼ばれるのが、高松豊太郎といつて、三十四五のなか／＼男前のおつさん、教祖というやうな宗教臭い呼び方はまつびらごめんだと、いささかつむじまがりのこの若い管長先生が祭つてゐるのは、護王大明神。京都に護王神社というのがあつて和氣清麻呂

公とその姉の仲虫を祀つてあるから、多分それに因縁があるらしいとおもつたら、まさにそのものズバリで、やつぱり御本尊は清麻呂公らしい。

今年の春に誕生したばかりのホヤ／＼と湯気の立ちそうな赤ん坊教団だから、御神殿がこじんまりした平家建の一室であるのは致し方がないし、表の看板に並んで、「指圧、電気光線治療」と管長さんのアルバイトをはつきり書いてあるのも致し方がない。

「いゝかね、無我の境地に在つて行に励めば祖先の霊を呼び起す祖先の霊とあんたの霊がびつたり一致して親近感をおぼえ、祈りの法悦境に入れば、われ知らずありがた涙が胸の底から溢れ出すつまり信仰の極致において流れ出す涙こそ清浄且つ最も尊く美しいもんじや。汗と涙ちゆうもんは、医学的に見ても、皮膚の毛細管をひらいて、体内に溜つとる汚物や熱を発散させるんじやから、科学上もえゝに決つとる、どうじや、判つたかね」

白鉢巻に紫の行衣をまとつた管長さんがうやうやしく宜うけれどこつちにはチンプンカンなんのこつちとやら判らない。ともかく神意にそむいて罰があたらないうちに、せまい御本殿の一番隅つこにひつこむことにした。

何が始まるのかと片唾を呑んでゐると、やがて御簾の垂れた正面



三木部と

の神棚に向つて、管長さんが先頭に座りあとは、白の鉢巻に白の行衣を着た信徒がずらりと五十人あまり威儀を正して真四角に座りこんだ。こゝも信者は女六分男四分の割合らしく、全部で六百人を越す盛況だという。

おどろいたことに女の信徒に若い仇な友人らしい美人が多いことで、これはどうも飛田新地に近い関係かららしい。料理屋や酒場のおかみらしいおばさんも多い。バーマネントや東髪や日本まげの上からきりりとハチマキをしめているが、どこやらに脂粉の香りがするのちも変つてゐる。

祈り方は双方の腕を水平にあげ掌を合せてぐつと力をこめ、ハン

ニヤハラミタを合唱するのだ。眼は閉じる、この合唱が五分、十分二十分と続くと、次第に声が高く平家建のせまい本殿の中が、むつとする人いきれと熱気に充ちてきて、隅にいる私は息がつまりそうだ。三十分もすると、行が最高潮に達したのか、五十人あまりの白衣の肩がぶる／＼昂奮でふるえてくる。ひよいと横顔を見ると誰もかれも、眼からポロ／＼涙がこぼれ、額や頬からはポト／＼と汗が流れはじめた。

ハンニヤハラミタの合唱がいつのまにか、ワアワア、ウオーンとありつたけの声をふりしほつての泣き声にかわつてゆく。涙と汗の湯気がもう／＼と、まるで風呂へ

入つたよりに部屋中たちこめる。管長のいう法悦境というのはこのことだろう。ところで一向不信心のこつちはさんねんながらとんとその法悦境とやらに入らない。アホらしいやら、おかしいやら、女というもんは、あの時だつて法悦に入つて泣きよる、いまみたいな声で寝床の中で女を泣かせたら男の本望やがな、なんて考へてゐるんだから、護王大明神の清麻呂公の御利益も一向ないらしい。

行が終ると、パンパンと拍手を打つて一巻の終り。そろ／＼席を起ちながら

「あゝしんどかつた」

「そやけど、えゝ氣持だしたな」

「わて、なんや、ふうと氣がゆくようだったがな」

と汗びつしよりのハチマキをとり、行衣の胸をひろげて風を入れる女信徒を見ながら、私はニヤツと意味深重な微笑を浮べた。

「又いつでもお訪ねなさい、あんなにもおい／＼ありがたい法悦の涙がわかるじやろ」

男前の管長さんに言われて、私はお辞儀してたずねた。

「どういふ病氣が治りますか」

「……わしの方は、世のインチキ宗教のように病氣治しを売物にとりません、ありや詐欺ですがなとにかく、わしの方は行によつて祖先の靈と」

いや判つた、判りました。つまりりですな、涙によつてもろ／＼の邪悪とあらゆる病氣を洗い流し、心身ともに清淨無垢になることが本願なんですな。

ほうほうの態で清靈会本部を逃げ出した私は、すぐ東の方に、ピカ／＼とネオンが明滅する肉体の街飛田新地があるのに氣づいた。どうもアブレ宗教というやつはどこか肉体を売る女等と一味通じろらしい。

ほんとうに健康な心身を持つてゐる立派な人間なら、アブレ宗教

放送コント三題

伊勢みどり

1

夫「ラジオ体操は健康の為に一番良いんだ。今日から断然やるよ」

妻「まあ、続くか知ら」

三日後

妻「さあ、あなた、ラジオ体操の時間よ、早く起きなさいよー」

夫「うーん、睡眠は健康の為に一番良いんだ！」

2

夫「ベツベツ、おい、こんな料理が食えるかい一体何処でこんな料理法を覚えたんだ」

妻「今日のラジオの料理の時間よ」

夫「こんな無責任な料理法を放送するなんて、よし、放送局へかけ合つてやる」

リリリン！（電話）

夫「モシ／＼放送局ですか、今日の料理の時間は一体何の料理の作り方を放送したんだッ、全然食べられないぞッ」

局「すみません、丁度停電で鶏の餌と言ふ処が放送出来な

がつたんです」

3

子供「へモシ／＼あなた、ねえあなた

世界の中であなたほど私の好きな人はいないどうしてこんなに好きなのか」

妻「あなた、子供があんな歌を唄っているのかすわない」

夫「うん、あれは今に鐘の鳴る丘以上に有名になる歌なんだ」

妻「そうかしら？でも下品な歌ね、一体誰が作ったんだしやう」

夫「俺が作ったんさ、今日の童謡の時間に一等当選作品として発表される筈なんだ」

（ラジオ）童謡懸賞当選発表の時間でございます。一等、風の鳴る丘、菊山一子さん。

二等、港の舟、波野高子さん。三等お陽さま高いな、大空晴子さん。以上三名の方にそれぞれ賞金を贈呈致します。

妻「あなた落選じゃないの」

夫「チエッ、審査員は助平だ女ばかり当選させやがつて」

／＼蠢いている。

いくら警察が取締りにけんめいになつてみたところで、アブレ宗教やパンパンやおカマが根絶しなくなるはずもないし、結局、終戦後の世間全体が精神異状を来たしてゐる証拠なのだらう。

やれ／＼こまつた世の中であると、私は嘆息を洩らした。（終）



心中奇態實話

葉山研一

接吻心中事件

国際観光都市である栃木県 日光

町は、またの名を自殺の名所地とも云う。高さ四百尺の岩頭から滝壺の中へ飛び込めば絶対にその死体は浮かばないという迷信を信じて、明治

年間の当時の第一高等学校生徒、藤村操が人生哲学の涯は厭世観を抱きかの有名な岩頭の辞を樹木に刻みこんで先鞭をつけて以来、民生委員、派出所監視員の目を逃がれて自殺者後を絶たぬ華嚴の滝はじめ、中禅寺湖の投身自殺、旅館また山林内での服毒自殺、抱合心中等が続出した。

ところが、これは未だかつてない接吻心中という珍らしい事件が京野旅館内に起つて、いやが上にも世人の好奇心をあふつてゐる。

事件の真相はこうだ。

本年五月の二十九日午前一時半頃であつた。日光町京野旅館。突如、あたりの寝静まつた静寂な空気を打破つて、

「う、う——う——」

と、わめくような、うなるような鈍い声が連続的に二階の客間から洩れてきた。寝呆け眼をこすりながら階下の女中が目覚ますと、今度は

はつきりと聞きとれないが：

「く、くるしいッ……」

呻き声に泣き声がからみあつて、じつと聞き耳をそばだてれば、階上は何か騒々しい異常な気配である。長い間の経験から、

「何かあつた……」

ピンと不吉な予感が胸へきて、女中が二階へ駆け上ると、うめき声の出所は前夜投宿した男女二人連れの梅の間からのものだった。たしか宿帳には、東京都中央区京橋一ノ三河合理髪店内稲村春見（四二）千葉県二宮町前原町六〇七小林豊子（二一）と記入されている筈——

「どうかありませんか——」

息せき切つて駆けつけるなり、襖を開けて

「あッ！」

女中は其の場にギクリとして立ちすくんだ。淡いスタンドの灯に照し出された梅の間内部の様子とは？

男——稲村は口を真ッ赤に染めて呆然として夜具の上に座つてゐる。

女——豊子は、口中からぶくぶくと血泡を吹いて夜具の上をのたりち這いまわり、髪は解けて乱れて苦悶

の真ッ最中だ。さらに、兩人の寝巻といひ畳と限らず、六畳の間には血潮が点々として染められ無気味この上もない。

女中は悲鳴をあげて階下へ逃げかえつた。

「えッ！昨夜ネコツク（番頭用語で泊つたの意）梅の間のガマズレ（ヘアベック）が心中を計つた？」

「なにッ、ガタ（男）は元氣だが、ガマ（女）は血だらけだ？そいつは大変だ。すぐ警察へ連絡しなきやア——」

宿の主人、番頭

が起きる。日光町署に急報する、同宿人が騒ぎを聞いて起きた頃にはやくも日光町署では、神田司法主任外係官が同家に出張、調査を開始した。

そのプロセスを簡単に要約すると同夜、兩人が接吻した時、男が女の舌を噛み切つたことが判明した。係官の訊問に対し稲村は可愛さのあまり噛み切つたと答えている。



噛み切られた舌は、男が布団の下に、かくしておいたのを発見、女は附近の亀田医師の応急手当を受けてその場で、舌の接吻縫合を行つたが生命はとり取める模様。なお、稲村は豊子が手術中、隣室に飛び込み西洋カミソリで、咽喉を掻き切り自殺した。

一方被害者豊子の苦しい息の下からの陳述に依ると二年前から兩人達

は前記河合理髪店に勤務しているうち、互いに互いを深く理解しあう恋人になつた。無論稲村には妻子があつたが、二人の愛情は肉体的なつながりを持つ処までに発展していたが豊子には最近、新しい恋人が出来たので、稲村に別れ話を持ちだしたところ、

「僕は君と別れることはとても出来ない。それでいて、今日まで妻子を棄てることができなかったことは、君に対して何んとも申し訳ない。しかし、君が恋人と別れてくれるならこの際、僕もきつぱり妻を離縁しよう。そして、僕は結婚しよう」と、云う返事だつた。が、そろそろ稲村に倦怠を覚えていた豊子は、

技奇笑苦笑

「お互いの幸せのために——」
また

「奥さんが可哀想だから——」

の、一点張り、稲村の言葉を
受け容れようとはしなかった。同じ
年代の若い恋人を知った豊子にして
は四十男の稲村の存在など最早、問
題外だったに違いない。

「そうか、やつぱり君は僕と別れた
いと云うんだね」

悄然と稲村は云った。

「じゃ、仕方がない。別れてやろう
その代り——と云つちやなんだが、
別れる前の想い出の一つとして、一
晩日光へ遊びに行こう。それで、そ
の翌朝から僕達二人はもう路傍の
人だ。赤の他人だ。ねえ、この願ひ
だけは承知して呉れないか」
男の涙ぐんだ顔を見ると、豊子も
つい情にほだされたか、幾分、可哀
想な気持になつて、翌夕、日光へ稲
村と訪ねたのだつた。そして、その

夜、とんだ御難にあつたわけである
亀田医師談

「珍らしい事件だ。接縫縫合したが
二時間以上を経過していたので接縫
するか、どうか疑問だ。男はちよつ
との隙に、頸動脈を切つてしまつた
ので、手の施しようもなかった」

神田司法主任談

「女は心中の意志は少しもなかつた
と云つてゐるから、男の無理心中だ
つたと思う。男の自殺の原因は、心
中の失敗と責任を感じた為だろう。
噛み切つた舌をていねいに紙でつ
み、自分の寝床へ入れておくなんて
グロの極みだ」

この事件——その昔の阿部定事件
を想ひ起こさせるエロ・グロに充ち
たものがある。これもアプレ派の無
理心中らしいが、こうなると如何に
好いた同志でも、うっかりキスも
できないことになる。

棺桶心中事件

東京都江戸川区上一色町九〇二田
戸順太郎（二四）という男。本年四
月、上野公園内にて知りあつた自称
秋田県由利郡下浜村阿久津澄子（二
一）を自宅に引き込み内縁関係を結
ぶとともに、母親みつ（五六）さん
と三人暮らしを営むまではよかつたが
順太郎は近所きつての親不孝の怠け
者で、数年間というものの家財の売り

喰い生活を続けた上、六月、内妻澄
子の発狂、医療費やら生活費やらに
急速に追われながらも、一向、稼ぎ
に出る様子もない、息子順太郎の横
着加減に、七月上旬、母親みつさん
はあきれはて家出。
簞笥の底をはたいて最後に残つた
毛布を一枚三百円で売り払つてから
順太郎は、「生まれたからには、遅



招待？にあずかろうと頑張つたが、
とうとう空腹にたまりかね、八月二
十三日、順太郎は江戸川区小岩町新
生高等学院から自転車一台を窃取し
たところを、折からパトロール中の
警官に見えられ追跡されたが危うく
逃走。葛飾区細田町無職土山盛男（
二三）に二千元で売却、腹ごしらへ
の上、自宅に舞い戻つたが翌々日、
棺桶の中で夫婦抱き合つて眠つてい
るところを小岩署に御用！
なお、内妻澄子は井上病院に収容
手当を加えたが飢餓の疲労から絶命
した。

順太郎は取調べの係官の前に、
「今度こそ決心を固め、餓死心中を
計るつもりだつたんですが、再び死
ねずに生きかえつたことを残念に思
います」

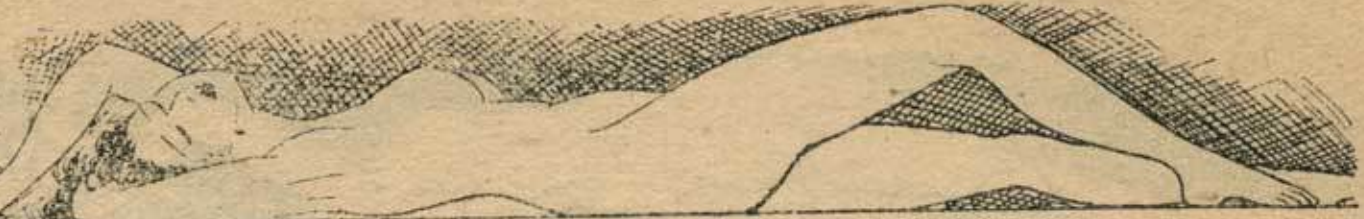
——とは、とんだ笑えぬナンセンス
取調べの係官もアングリ口を開いた
まま棺桶心中とは、はじめての由、
あきれかえつていた。嘘のような話
である。

五十男の同性愛心中

東京都品川の某医学博士が、庭外
に二十一才の女子医学生から五十に
手の届く大年増に至る迄の女四名を
妾とし桃色遊戯にふけて、家事を
省りみぬ留守中博士夫人が看護婦と
同性心中を行いジャ・ナリズムを騒
がせたのは昨年の秋のことだが、同

性心中は女だけにあるのだと思つた
ら大間違ひ。妻子どころか孫まであ
るオジイさんが同性心中を計つたと
いう、珍妙なトピック・ニュース
八月三十日午後二時頃、宮城県鳴
子温泉小笹附近でアドルムを服用、
昏睡状態になつてゐる二人の男を、

心中実話集



通りがかりの部落民が発見して鳴子町署に届出、沢村病院に収容したが二人とも生命はとりとめた。

鳴子町署の調べによると、栃木県宇都宮市宿郷町「瓢箪屋」こと料理店主田中五郎（五七）と宇都宮市大町会社員菊池和夫（二三）で、一昨年正月の夜、田中が大町通りで酔い倒れているのを菊池がなにくれとなぐ親切に介抱、それ以来、足繁く二人は交際しているうちに、すっかり意気投合してしまつたものだが、まもなく、

「僕の五郎さん」「俺の和夫——」

と、云う親しい間柄になり、昨年春新婚旅行？気取りで鳴子温泉に來たが、それ以来二人の仲は積極的に深くなり、逢う瀬を重ねているうちに最近の金詰り、税金関係から生活苦に陥り、

「生きて行く張り合いを失つたから死んでしまふ」

と田中がもらせば、「五郎さんが死んでしまつたら、僕こそ生きていく張り合いがない。死ぬなら僕を道連れに——」

そんな訳で心中行となつたのだが一寸、二人の心を解しかねる。学生



間のSやBなら一応話がわからぬことはないが、田中には妻君と四人の娘、また二人の孫まであるのである。オ田中をして、オカマを抱いて寝る変態男と同一視してよいものかどうかといささか疑問の点がない訳ではない尤も彼は、

「あの夜、酒に酔いつぶれている処手厚く介抱してくれ、その上、家まで送つてきて呉れた和夫と、機会ある度逢つている中、何か親切な和夫に自分の娘より以上の可愛いらしさを私は覚えました」

——と、語つてはいたが……

鳴子署からの急報を受けて、妻君が引取りに來たが菊池と別れる時などは劇的なシーンを演じ、関係者一同をビックリさせたという。

「手当てを受けて正気にかえりますと、二人はお互いの名を呼びながら抱き合つて泣いて

いるんです。別れる時などもつと凄かつたわ。まるで恋人同志のそれよりも激しく愛情の交換をしているのよ。見ている方で羞かしくなつてしまつたわ。男にも同性愛ツであるものなのね」

と、沢村病院の看護婦さんは顔を

あからめながら語つていた。

ストリップ三人心中

老いらくの同性愛心中のむかうを張つた訳ではあるまいが、今度はアプレ派のストリップ三人心中というネバー・ハッブな事件が栃木県日光町に発生、接吻心中事件以上に世間を騒然とさせている。が、これは戦後の若い世代の中からビク・アップされた数々の悲劇の中の一つでもある。

八月三十一日午前十一時半頃、北海道函館市旭町の団体旅行者一行が日光町中宮祠より東へ中禅寺湖沿いに白樺林の小道を千五百メートル程行つた時である。一行の中の一人が放尿をしようと草むらの中へ一歩分け入るなり

「わッ！」

と、いつたまま血相変えて飛び退けた。

「レッ、死んでいるッ」

「えッ……」

好奇半分に、一行は若者が飛び上つた草むらの中へ入つていくと、

おお……

あたり一面に草は乱れ、三人の若い女が、それも苦悶中にそうなつたのか裸に近い恰好で、二人はうつ伏せに、一人は大の字になつて息絶えている。

「それッ！」



と、いので元氣な若者が二人、中宮祠バス・ステーション前の派出所へ急報した。この報せを受けた派出所からは日光町署へ、また事件をすぐさま県刑事課へ報告すると共に、署長以下捜査官の一行が現場へすつ飛んできた。

さて、これから調査に入るわけだが、プロセスのアウト・ラインだけ述べてみると、遺留品のケースから発見された遺書によつて東京都台東区芝崎町二丁目劇団、（あけぼの座）踊子津川京子（二一）同妹踊子津川ミチ（一九）同妹学生津川春代（一七）の姉妹三人は、三十一日朝、

来光、前記場所にて青酸加里心中を行つたものであることが判明した。

彼女達には、両親はなく前記京子春代が浅草ロックでストリップバーをつとめ、末妹の春代が台東区千束町の某私立高等学校に通学していたが長姉の京子は「あけぼの座」の文芸部員村上正一と恋愛、結婚することになつて、劇団を退団。妊娠六ヶ月の身体を自宅にて休めていたが、たまたま恋人村上に新しい恋人が出来二人は大阪方面へ駆け落ちしてしまつたのである。また、次姉のミチさんは過労から肺結核に犯されていることが最近判明、互いに前途を悲観した挙句は末妹春代さんを道連れに無理心中を計つたのである。

死んでいた末妹春代さんは、その後の調査によると湖水にて水泳よぎをし、陸へ上ると、すぐ姉さん達からすゝめられたサイダー（青酸加里入り）を呑み、七転八倒の苦悶中、附近の笹などによつて、全裸になつたものと判つたが、いちぢは「天国に結ぶ恋」の二の舞（あの事件のヒロイン八重子は仮埋葬後、痴漢の汚辱を受けた疑念がもれた）ではないかと騒がれた。勿論、検屍解剖の結果は、そういうことはなかつたが、次姉のミチさんは性病にも感染していることが、ついで乍ら判明した。

恋の踊り子涙でくれて華やかな舞台の蔭に秘められた愛慾絵巻を如実に物語つていと共に、この事件：アプレ少女の心理をも無言の裡に示している。

おしおとこ 啞男ペテン心中

なんといつても日光は自殺心中の名所であることは事実である。雨が降ろうと風が吹こうといかなる日も、事件皆無である日は先ずあり得ない。北は北海道から南は九州、日本全国到る処から死神を追う者は日光へやつてくる。自殺志願者多い日には、二十名から保護するというから、したがつて仲々珍妙な事件にもぶつかつてくる。これもその一つのストリップ三人心中のあつた八月三十一日夜十時ごろ、日光町中禅寺湖

畔イタリヤ大使館別荘に救いを求めた啞の女があつた。この女は広島県深安郡広瀬村北山無職三島幸子（三七）で二十七日、愛人である岡山県後月郡井原村洋服仕立業滝本洋平（四七）と心中を目的に来光、同夜大松屋旅館に一泊、宿泊料千七百六十円を支払わず翌廿八日午後一時ごろ同町立木観音で服毒心中をはかり、翌廿九日覚醒したが、死んでる筈の男が傍にいないので急におそろしくなつて、驚き慌て湖水に飛び込み自



殺を計つたものの死に切れず卅、卅一兩日附近をさまよい卅一日夜十時ごろイタリヤ大使館別荘に救いを求めたものである。

日光町署では女に不審の点が多いので筆談で取調べを行つたところ、意外にも九月一日午後一時半までに自分の長男武良ちゃん（一〇）同女愛子ちゃん（六つ）の兩名が殺されている旨を自供したので、驚いた同署では女を同行、現場といわれる同町田母沢橋上流三百メートルの地点を調査の結果、無惨にもくさむらの中からハンカチまうのものと絞殺されている二児を発見。女は広島県深安郡廣瀬村北山ネーム商浜田隆夫（四四）の妻で、殺された子供は浜田との間にできたものだとし立て果して逃亡した男との共謀かどうかは不明だが署では男も関係あるものとみて調査を開始、男は廿八日、日光駅から岡山県福山駅までの切符を買つてゐる事実を突き止めた。雲隠れした恋人の滝本は九月二日岡山県友町警察署に殺人容疑で逮捕され、指名手配のため日光町署に移送、係官の筆談取調べに首をふり手真似をしながら一々当時の模様を自供、取調べの係官を啞然たらしめている。

滝本は八月廿三日浜田の妻幸子と浜田の長男武良ちゃん（一〇）同長女愛子ちゃん（六つ）を連れて家出熱海、箱根を遊び回り廿六日来光、同夜大倉屋旅館に一泊、翌廿七日輪王寺、東照宮を見物して途中参道で、幸子と二人で二児を絞殺心中しようと相談、同日、前記場所にて幸子が愛子に滝本が武良に睡眠剤を飲ませ、すやすやと眠り始めたのを見て愛子、武良の順に滝本がタオルでつぎつぎに絞殺、草むらの中にほうり込み、同日中宮祠大松屋旅館に何くわぬ顔をして一泊、翌廿八日、同所立木観音裏山で服毒心中を図つたが、女だけが服毒、滝本は服毒すると思つて逃亡したものである。

なお、滝本は妻でなく、浜田さんの近所で洋服仕立業を営んでゐるうち幸子と恋仲になり、幸子は浜田の家が複雑で家庭不和が絶えず、遂に恋人滝本にだまされて心中するつもりだつたと云つてゐる。

ペテン心中とは、女も女だが男も男。先の接吻心中と共に、あなおそろしく、たじたじとならざるを得ぬ奇抜なホット・ニュースである。

殺人淫楽志の女

緑 猛比古

江戸時代異色責め模様



一、男と遊ぶのが何に

より好きな女

見越しの松に黒板塀——。他人目にも粹な妾宅構えのその隅田の寮は、おときの放縦淫虐の限りをつくすに恰好の隠れ家だった。

明けて二十六の年増盛り——。脂の乗り切った肉を持て余して、明け暮れ狂った情痴に飽くこともない。

十七の春、柳橋で左様をとつてから丸一年——。生来の多情からこの稼業にはおあ

つらえ向きで、男を欲ばすコツを呑み込んでからというものは、自身の肉体の満足と相俟つて、おときは真底から、この稼業に夜毎精魂を打ち込んだ。

二十才で旦那が出来て落籍されると、神田明神下で、習い覚えた三味線の師匠を始めた。仇嫌つばい眼元に、整った色白のきりようは、口の大きさを補つて、人怖じしない気さくさが妙に親しみを感ぜさせるので、若い男達は恥かし気もなく、朝の早くから盛花踏んで押しかける始末。

旦那の徳三郎が三日に一度、五日に一度と顔を見せるのが待ち遠しく、逸る肉慾は

ときの淫楽性はもう奔馬の如き勢いで、ガムシヤラに男から男へ慾情のはけ口を求めて渡り歩いた。

よくも飽きが来ないと呆れる程次から次へ男が出来て、数えて見ると旦那と別れてから早いもので五年の歳月が色情の波に押し流されて、今更二十六才の年齢を振り返つて彼女は、いつしか己れの男を求める想念が、単なる性慾だけでは満足出来ず、相手の男を傷つけ、苦しみ、悶えさす事に依つて、強烈な興奮を覚え、異性を虐待し、酷使するその残忍性が、彼女の血を湧き立たせ、絶大な快楽を感じる異常な性格に変わ

抑え切れず、いつか通い稼古の若い衆の誰彼なしに情をふりまいては、益々なまめかしく、妖艶さを増していった。

余り浮気の激しさは、いつしか旦那の耳に入つて、体の衰えを感じて今日此頃丁度いゝ機とあつさり別れ話に持ち込んだ徳三郎に、待つてましたと許り手切金二十両貰つて別れると、お

ている事を自覚した。

惚れッぽく、飽きッぽいおときは、新しい男が出来ると、その男の面影を、肉体を幻に描き、男のたくましい体を傷つけ、泉の如く奔る血潮に転々と苦悶する男の凄まじい姿態を想像しては、どきつい慾情に心を疼かせ、その流れ出る血潮を吸る己れの姿を心に浮べては、名状すべからざる快感に溺れた。その幻覚がいつか嵩じて、彼女が隅田の寮に男をくわえ込んで、その怖ろしい惨忍な実行に移していった頃から淫性な魔性は不気味に底知れず拡がついてた。

二、若い裸の男の悶えるのが堪らない

如月の氷の様な夜風がハタ／＼と障子をならす身を切られる冷たい夜だった。

激しい契りの終つた後、蕩然と軽い疲労感に身を委ねていた静馬は、ソツとなまめかしく囁いたおときの言葉に、うぶに頬を染めると、女の云うがま／＼に素裸になり、眼の醒める様な紅の扱帯で両の手を後ろに縛られ、両脚を博多帯でぐる／＼巻きにされると、ドンと一突き青畳に転がされた。

おときは櫓ごたつの上にポツチャリとおとがいをあてゝ、チビリ／＼と盃を舐めながら、有明行燈に照らし出された男の裸体を射る様な眼でジ／＼と見つめている。透間洩る風は裸の身に耐え難く、静馬はガチ／＼と歯を鳴らして、女に見まほしい白い肉体に鳥肌立てゝ苦しげにうめいていた。慾情の果ての冗談のつもりが、いつかな扱帯を解く気配もなく、身に沁む寒さは一入つのる許り——。

「お、おときさま——。早く縛めといて下さいませ。私は凍えそうです——。」

若衆の静馬が身を切られる思いに情なそうにたえぐに叫ぶのを、ひんやりと無情の眼を向けた儘、おときは満足に頬に現わして、大きな口を開けるとさも愉しげにゲラゲラ笑った。

「フフ、お前さんの粹興じやないか。最初にお厭だとお云いなら、私しや初手から始めないよ。フン、いゝ若い衆が泣き出してどうしたのさあ——。それとも辛抱出来ないのかい」

「でも——、この儘放つておかれたら私」
「苦しめばいゝのさ。もつとももつと苦しむんだよ」

男の哀れな苦悶の姿を看に、おときは盃を重ねて行く。又一しきり風が吹き荒れてゐる。ガタ／＼戸障子の震えるのが耳触りなのか、さつと勢いよく川面の障子を開いた途端、河風が激しくゴーツと吹き込んだ夜更けの凍てついた寒風を裸身に受けて、暁の星の消える頃、静馬は苦悶する氣力すら絶えて、死人の様に冷えきつてビクリともしなかつた。

ほつれ毛を撫で上げて、冷たい頬を静馬の胸につけると、おときは手元も危なつかしく、いましめを解いた。そして——、冷めたい裸体を抱きしめると、狂った様に、手、足、腹へと熱い唇を押しつけていつた

三、油責めで氣を失つ

た美青年

おときに新しいカモがかゝつた。世の裏を知らぬ碌彌というはたちそ／＼の美青年で、おときの淫情に惑わされて、夢心

に隅田の寮に忍び込んで来たのである。桃の節句の夜、菱餅の並んだ雛壇は、場違いに稚ない景色を部屋に溢えていた。男の肉慾を満足させただけでは、淫奔なおときの慾情が納まらなかつた。甘つたれた声で彼の膝にもたれると、

「ねえ——碌彌様、私の云うことなら何でもウンと聞いて下さいます……？」

「ウン。何でも……」

碌彌は嬉しそうにコックリうなづいた雛壇の前のなまめかしい夜具に横たわつた碌彌の体を横眼にぬすんで、おときは箱枕の抽出からスル／＼と絹糸をとり出した。そつと男の首をとると、無言の儘で絹糸で締めた。悦楽のあとの蕩然とした氣分で碌彌はなすが儘だつた。碌彌を仰向きにして体の自由を束縛すると、彼女はつと手を延ばして、雛壇の油の満たされた燈明皿をとり上げて燈心に火を点じると、平然と碌彌の掌と掌の間へ挟んで、その腕を高く彼の顔の上に捧げ上げた。不安な彼の眼付きに挑戦する様に、おときは大きな口を一杯に開けて悦しそりに笑うと、さも心地よげに盃を執り出した。

まもなく碌彌の髪は乱れて、脂汗が顔面に浮び上つた。白晳の顔は紅潮して、必死の腕は辛うじて油皿を支える。少しでも掌を傾むければ、忽ち熱した油が容赦もなく顔面にふりそゝいで大火傷をせねばならぬ。捧げた両の腕は紫色にふくれ上つて、今にもグラリと揺れて熱油が顔へ流れはすまいかと危うまれた。碌彌の血の氣の失せた顔に、不覺の涙がスーッと一筋尻を伝つて落ちる。魔女にかゝり合つた後悔がヒシヒシと身に迫つて、刻一刻意識の失つて行く脳裡は、ひたすら油への恐怖に満たされて

いた。

「おや、泣いているね。もつとお泣き——男、男つて云うけど、揃いも揃つて何て意氣地なしなんだらう」

碌彌の血走つた形相も、おときにとつてはこの上もない快楽の対照とし映らなかつた。

ものゝ小半刻も終つたかと思われた頃、物頼そりに手を延ばすと、碌彌の捧げた油皿をヒョイととり上げてもとの雛壇に置いた。男の手は化石の様に硬直した儘降りなかつた。腕首に喰い込んだ絹糸をパチリと鉄で剪ると、凹んだその部分は見る／＼紫色に痛々しくふくれ上つた。碌彌の額に手を当てたおときは、ゾーツとする笑みを浮べて、

「おや、どうやら氣を失なつたらしいよ」
そうつぶやくと、邪慳に碌彌の髪をグイと掴むなり、端麗な彼の顔をふところに抱え込んで、氷の様な冷めたい白酒をツツと口移しに唇に注ぎ込んで、ビチャ／＼平手で彼の頬を叩き続けた。

四、マゾの男なら尚可

愛い、

幫間ほうかんの翫入を喰え込んでから、おときの加虐的淫樂は一層その度を増した。幫間という稼業柄から翫入は、女に馴られ、虐められるのに慣れていた、というより、卑屈な稼業がその事を余儀なくされて、いつしか嗜虐的行為によつて無上の快楽を覚える様になり、好んで女の馴りものになつて飲んだ。サジズムの女とマゾヒズムの男とは好一對の肌寒い様な蜜行振りに酔い痴れて飽く事なく、隅田の寮は夜毎淫風がたゞよ

うて、爛れた情痴に更けて行つた。

「今夜はちつと痛いけど、辛抱出来るかえ——」

「へへ……」

「畜生／＼そのヘラ／＼が無性に私のカンに触るのさ。覚えておいで——」

「へへへ。おときさん、今度は何といきますかな——へへ……」

翫入の自由を奪つて、男の肉体に猥らな悪戯をしかけて愉しんでも、行為そのものが普通の男なら忽ち怖気づくところを、翫入はエヘラ／＼と性懲りもなくとぼけた顔で笑つていた。それがおときの淫性を余計に刺激して今日此頃、拷問に近い肉体的苦痛を与え続けていた。もうおときの部屋は攻め場に変貌して、細い棒にシユロを巻いたのや、細引、太繩、滑車があちこちに不氣味に転がっていた。

「覚悟おしよ……」

恥をつり上げて形相すさまじく、その癖大きな口でニタリ／＼笑いながら、おときは例の如く翫入を素裸にして縛り上げた。突然、夜叉の様に顔をひきつらせて彼の肉体をビシリ／＼とシユロ棒で、これでもか／＼と殴りつけた。見る／＼生傷に荒れ果てた翫入の肌に数条のミミズ張れが浮き上つて、苦しげに悶きながらも彼は眼尻を下げてニタ／＼と笑つていた。女の尻に敷かれて息がつまりそうになりながら尙且つ悔いた様子は見えなかつた。それが翫入の最後のあがきだつた。

恐ろしい淫樂の夜が白みかけた。鬱陶しい梅雨晴れの朝——。正体なく眠りこけるおときの傍らに、芋虫を転がした様に素裸の翫入は急所を金火箸でグサリと突き差されて蒼白い屍顔にウッスラ満ち足りた笑み

を満ちて冷たくなつていた。おときの加虐性のつのつた果ての、初めての犠牲者だつた。

止め度なく頬を濡らせておときは築山の蔭で、せつせと穴を掘つていた。

五、男ばかりか女も責めてみたい

内心如夜叉のもとでは、下働らきの女中も一カ月ともたなかつた。血色のよい相撲女がやがて暫らくすると、幽鬼の如く蒼褪めて、おときのすきを窺つては風の如く逃げ去つた。

近頃絶えて久しく男も寄りつかず、いかおときの寮が恐ろしい伏魔殿との噂が立つと、おときの媚態、艶姿にも恐れをなして、若い男はおときの顔を見ると避けて走つた。加えて、夜な夜な築山に亡霊が出るのと云うので夜更けて隅田の寮の近くを通る人すら稀だつた。おときは焦々とあせつた焦れば焦る程身内が疼いて、独り寝の間に転々と悶えた。その挙句、彼女はこれで何人目の女中のおさいを部屋に呼んだ。

初夏のたそがれの頃はいい事——。

「いやに体が凝つて仕方ないんだよ。一寸揉んどくれ」

「はい」おさいは怖る／＼、夜具に身を横たえて四肢を延ばすおときの側ににじり寄つた。腫れ物にさわる思いでそつと手足を揉み始める。

「あッ、痛い／＼お前この主人を女と侮つてひねり殺す気かえ——」

ガバツと形相をかえる。

「滅、滅相もない」

「いゝわけはきかないよ。お前が私にどん

なもみ方をしたか。今私が揉んで上げるから、こゝへ横におなりッ——」

「あの、御免なされませ。きつと氣をつけます故——」

「黙つて横におなりつたらッ」

かん／＼きにこめかみがビリ／＼震える逆らい切れずおさいはおど／＼と横になつた。おときはその股の辺りを力一杯グイとひねる。

「あッ、痛ッ——。御無体な……」

「何——何が御無体なのさ。それともこの主人の私に楯つく気かえ。えゝもう腹の立つ」



今までたまりにたまつた淫虐のはけ口を見出した様に、おときはギラ／＼眼を輝かせる。いきなりおさいの胸倉を掴んでベリ／＼と着物の胸元を張き裂いた。ぼつちり色ついた乳房が覗くともう前後の見境もなく、ガツと咬み切れん許りに歯を立てた。己れ自身の行為が拍車をかけて、唯わけもなく興奮をたかめて行く。ヒーツと悲鳴が静寂をつんざくとおときは益々いきり立つた。狂つた様に傍らの物尺をとり上げると、おさいの体をとこさきらわす殴りつけた。キヤーツと逃げ出そうとするのを逃がしてなるものかと、ずる／＼黒髪掴んで

引摺り戻し、もがくところを着物を剝いで淫楽の性を残るところなく露呈した白い手で、針差しの大針をつまみとると、チクリ／＼と胸から腹、股へかけて突き始めた。悶えるのを尙も突き立てる。息も耐え／＼にぐつたりなると、ホツと紅蓮の吐息と共に手を止めた。おときの性的興奮は、惨忍性の増す度に彌が上にもつのりふくれ上つて行くのである。哀れにも氣を失つたおさいの女体を見下して、何と思つたかおときは手に持つた血染の大針に糸を通すや、おさいのそれを無惨にも縫合し始めた——。

数日後——。病氣とかで姉の許に送り返されたおさいの肌には全身血がふき出て、青黒いあざが数十となく白い肉体を蔽つて二眼と見られぬむごたらしさだつた。

奴婢の弱さは、女主人に逆らい切れず、悲惨にも嘲りさいなまれて、あたら青春の肉体を朽ちさせたのであつた。

六、昔契つた男なら憎さが百倍

数年振りに、かつて柳橋で起請誓紙を交した男長吉に、永代橋のたもとでばつたり出逢つた。火の見櫓も暮れなずむ灯点し頃——。懐かしさが急に蘇がえつて、旦那に落籍される以前、物狂わしくおときに女の歡びを教えた男の、あの時分の様々の痴態が早くも胸を疼かせる。

おときはいそ／＼と隅田の隠家へ長吉を誘い込んだ。差し向いの盃のやりとりもいっしかり崩れて、おときは昔恋しく長吉の胸に凭れてうつとりと、この時許りは常日頃の血腥さい所業も忘れて喜びに浸つていた男の手がツツ女の胸の中へ延びた時ハツと

した様に、

「あのう長さん——。御願
いがあるんだけど、ちよい
とでい、から、あんだの二
の腕見せちやくれなにか」

「おいらの二の腕を……
？」

とけさんそうにめくりか
けると、

「そうさ忘れたのかい。あ
の時彫つた刺青さね。まだ
その儘にあるのかい——」

六年前、惚れたはれたで
お互いの名を刺青した時の
おときいのちの六文字を男
の腕に見たいと思つたのだ
つた。今もおときの二の腕
には昔の儘に、長命と少さ
く青で二字彫られてあるの
を憶い出し、もじつく長吉
の袂をぐつと押しあげると
おときは薄く清えてその上
に、おしんと新らしく三文字、鮮やかに最
近彫つた青々しく眼に飛び込んで、おとき
はグツと息をのんだ。

「へーん、長さん。私しやこんなに長さん
大事と未だ忘れもせず、肌身離さず大事に
温めているのに、あんだのおときは殺され
ちまつたんだね。ほ、罪科ないこの私を
ね——」

と毒々しく大口開いて笑う。長吉は返事
のしようもなく黙つていたが、昔の色事に
今更何を云い出すかと、

「おときさんは徳三郎の旦那に身請けされ
たし、おらおときさんをあきらめて、忘れ
様と消したんだ、悪く思わないでくれ——」



おときはそれに答えず、長吉にさとられ
ぬ様カンザシを抜きとると、
「そうかい——。でもこのおしんさんとや
らは、あんだの様な人に思われて仕合せ者
だよ。綺麗に彫れてあるね。もう一度見せ
て——」

長吉が何気なく「そうかい——」とぐつ
と二の腕をつき出した刹那、グサリとカン
ザシにおしんの三文字目掛けて突き立てら
れて、根元までズブリと這入る。鮮血がバ
ツと飛び散つた。アツと長吉がもがいて逃
れ様とするのに追つかぶせて

「何さ、何さ——。え、いこの邪慳な——」
血に狂つた陰鬼の形相で、グツと二の腕

のカンザシを抜
きとるや、長吉
の顔目掛けて再
び根元も通れと
突き出した。二
の腕の痛みに避
けそこねて、カ
ンザシは右脇の
下にぐざりと突
きさゝる。ワツ
と顔を押えてパ
タリと倒れる上
に馬乗りになつ
て滅多矢鱈にあ
ちこちと突きま
くる。血汐はな
まめかしい秋屏
風に飛散し、行
燈を紅に染め、
牡丹の花片の様
に絹夜具に点々
としたる中に

血にまみれて長吉は苦悶に呻き、最後の虫
の息をとぎれぐに吐いて延びていた。
「ホホホ……、いゝ気味なこと——」
血汐に濡れた手を虚空に振り上げて、高
らかに狂声をあげると、不気味な笑いをま
き散らして、血の滴るカンザシを拭いもせ
ずだらりと下げた儘、おときはフラ／＼と
隅田の寮を素足の儘つんのめつて、黒々と
流れる隅田川のほとりを陰獣の様に辿つて
行つた。

(附記)

江戸時代の刊行本「忍草」の、おときの
行状のラインアップはざつとこんなものだ
つた。其の後、近隣の噂から遂に暴露し、

四十日間と云うもの逃れ／＼だが、秋の末
つ方秩父郡の下名栗村で捕えられ、江戸送
りとなつて罪状を聞かされたが、仲々に白
状せず、立合の役人も散々手固摺つた。余
儀なく拷問にかけ、縛り上げて一打ち打た
した処、急に癪がさし込んだ模様で氣を失
なつた。再三再四日を延ばしては吟味した
が、いつもこの調子で癪を起して氣を失な
う仕末。遂に考えて石を抱かせたところ三
枚目にて遂に恐れ入つて白状した。いくら
加虐性のおときも、伊豆石の目方十三貫
長さ三尺、巾一尺、厚さ三寸を三枚も抱
かせられてはたまらない。今迄の打ちの時
には直ぐに氣絶する方法で、責問を逃れた
けれど、石を抱かされては氣絶する訳にも
行かず、かつて男共に与えた苦痛を思い知
らされて、稀代の淫婦も参つたらしい。

十一月末の暮六ツ——。裸馬に乗せられ
て引廻しの上、牢内に戻り斬首された。浅
草小塚原の晒場所に梟されて数日と云うも
の、この毒婦の顔を見んものと、人々はつ
めかけた。薄化粧の顔を含んだ顔に、唇の
大ききのみが目立つて、今にもあのおとき
の嬌声が聞えてくる様で、それからと云う
もの江戸の男は一時、口の大きな女を警戒
する様にすななつたと云うことである。

サジズムの男性は多いが、女性には案外少
ない。異性又同性を殴打、鞭撻し、咽喉を
締め、髪をちぎり、兇器で肉体を傷つけ、
暴力を加えて残酷行為を働らくことによつ
て激しい性的快感を覚える変態性慾者おと
きは、かのオスカ・ワイルドの「サロメ」
劇中、ヨカナンの鮮血に染つた生首に接吻
し、掻き抱く、悲劇の主人公サロメ姫にも
匹敵する加虐性淫業者であつた。

怪奇実話小説

古界獵奇研究會神戸支部



日向路雄

画須磨としゆき



国際的獵奇都市！

これ程神戸の性格を適切に表現した言葉は他にないであろう。

私は東神戸、六甲山麓にある一古アパートに居住している独身の青年で、地方新聞社に、広告、文案の助手といった仕事を持つていた。

初夏のあけ方の爽やかな眠りから覚めると陽はすでに高く、今朝は鳴らぬようにしてある枕元の目覚し時計を見ると、十時少し前を持っていた。まだ起きるのには少し早いようである。一週一度の休日には思い切り朝寝の快味を楽しむ事になっている私は、又布団をかぶった。

それからどれだけ眠ったのか廊下を歩く軽い足音をうつつに聞き乍ら、パサッという音に再び眼を覚ました。頭を上げて音のした方へ、ぼんやりした視線を投げると、入口のドアの下に、雑誌でも入つていそうな大きな茶色の封筒が落ちていた。

管理人の娘三枝子が、投げ入れて呉れたのであろう。

「ハテ、何だろう？」

と軽い疑問好奇心が、けだるい体を起き上らせた。手にとつて見ると、宛名は確かに私の名が書かれてあり、ひっくり返して差出人を見ると、松田春男という私の記憶にない姓名がペンで書かれてあつた。

不審を抱き乍ら封を切つて中を見ると、それは一冊の便箋にこまごまと綴られた手記のようなものであつた。読み初めた私は、その内容の奇怪さ、ひしひしと迫る妖氣にねむけも空腹もろ

ち忘れ、引きつり込まれるように夢中でむさぼり読んだ。

突然で誠に失礼とは存じますが、これがお手許に届く頃には、すでに私の生命は無い事と思ひますので、最初で最後の書面を差上げる事に致しました。

もうお忘れかも知りませんが、私は去る三月の初め深夜の元町で二人の暴漢に襲われ、危いところを貴方に助けて頂いた男です。あの節は誠に有難う御座いました。何一つ御礼も致さぬまゝお別れするのが心残りではありません。あの時無理を申して頂戴しました御名刺で、新聞社にお勤めの事を知りましたので、若し、このつまらない私の一文が記事としてお役にでも立てばと思ひ、拙い筆を執つた次第です。生来文章の下手な私が、急いで書きましたので、文が後先きになつたり、又意味の不明な点が多々ある事でしようが、何卒御判断下さい。

さて私は大阪でも指折りの豪商と知られたH・Mの妾腹に生れた男で、幼少から物質的には何不足なく育ちました。いろんな出来事や、その後の事情は省略しますが、終戦になる少し前に母と家を焼かれた私は住み慣れた大阪を後にして、母の形見である宝石箱をしつかり抱えたまゝ、着のみ着のままで、飄然と神戸へやつて来たのです。私は父であるH・Mに愛情どころか憎しみに似たものを抱いていた程ですから、頼るところという気持もありませんでしたが、頼るところによると、H家も焼け果て一家焼死したという事でした。その時私は二十六才でした。

相当高額の権利金を出して、山手の加納町にアパートの一室を見つけ、新しい生

活を始めたのです。新しい生活というのを聞えが良いようですが、生活能力の皆無な私は、母の形見の宝石を売つてはその金で只毎日をブラブラと無為にすごすだけのことでです。

でも宝石箱の中には、ダイヤモンドをはじめ種々の宝石がぎつしりと入つていて、かなり贅沢な生活が続けても、当分は何の心配も無いと云う安心感がありましたので終戦後の混乱期も私にとつては呑気な日々でした。現在迄に二人の女と同棲しましたが、どちらも永くつづかず、幾つかの宝石が姿を消し、不満と不愉快な思い出が胸に残つただけでした。私にとつて女というものは至極扱いにくい、厄介な存在でした。今でも女には烈しい嫌悪感を抱いています。しかし私が男である事に間違いなく、人並みな性慾を持っていますので、そのはけ口には悩みました。

金とひまにあかして、いろんな所へ出入りしているんな事をして見ましたが、心から満足を感じた事は只の一度もありませんでした。

何か？何か？と新しい珍奇な事を求めた末に考え付いたのが、精巧な人形のことでした。

顔見知りの人から須藤という人形師を紹介され、彼に製作を依頼しました。金を惜しまなかつたので、約三ヵ月後に彼が仕上げた人形の出来の良さは、すっかり私を喜ばせました。

その人形の素晴らしさは、これが人間が作ったものなのかと、ただただ永い時間、我を忘れて惚れ惚れと見とれた程でした。

私はこの人形にのみ子という名を附けてすべての愛情を注ぎました。和服、洋服は

元より服飾品、化粧品その他を惜しみなく
買い与えました。それは恐らく、今迄本当
の女に持った執着よりはるかに大きかった
と云えましょう。

私は毎日るみ子との情痴の世界に浸り
ました。勿論このるみ子は等身大で、生き
た人間のように温かい体温が保てるよう
なつてゐるのです。血こそ通つていませ
んが、特製のゴムや特殊の材料で出来て
眠り人形のように、寝かすと自然に眼を
むるという精巧の上もないものでした。
るみ子との平和な明け暮れ、私は他に何
が必要だつたでしょう。彼女のそばに
ただで安らかな満足感が胸に漲るの
でした。

ところが、この幸福な生活をかき乱す
のが現われたのです。

確か三月の中頃だつたと記憶していま
す。元町で貴方に救われた日から十
日程後でした。私は誰一人友人という
ものを持つていませんし、全然郵便物な
かに縁のない私のところへ、一通の封
書が舞い込んで来たのです。

一見なんの奇もない封書でしたが中を
めると、世界獵奇研究同好会神戸支部
の差出人で、会員募集広告が入つて
ました。ところがこの会の所在地が全
然印刷されてなく、希望者は指定の日
時に指定の場所へ来れ、と場所と日
時を指定してゐるだけなのです。好
奇心と興味を煽動せずにはおかぬ
そのビラの文面を幾度となく読み返
し乍ら、私はハット警戒心の湧き上
るのを意識しました。どうして私の
名を知り、そして私の趣味まで探
つたのかと、心の中までみすかされ
た。ような無気味さを覚え、それを
破つて燃やして仕舞いました。

しかし、それから数日後に又同じ封書が
訪れたのです。

薄気味の悪いものを感じ乍らも、私は
何者かに魅入られたものゝように、封
を切り眼は文面に吸いつけられていま
した。それを何度となく読み返しま
したので、その文句を覚えていま
す。

廿世紀の驚異／原子と共に完

成さる科學の勝利／

／肉体と精神の分離／の苦心

の研究ついに結実／

日本初公開

実験台上に横わるは絶世の美

女／

親しくその眼で見られ 後

世の語り草とせられよ

今こそ入会の好機この機を

逸して悔を千載に残すな

れ／

SRK

世界獵奇研究

同好會神戸支部

入会希望者は入会金千円を所持
せられ来る三月十七日三角公園
に集合せられよ。

こんなものだつたと記憶していま
す。幾度も読んでゐるうちに、私の
気持ちは確かに動揺しました。燃
え上る好奇心とそれを抑制しよ
うとする心が胸の中で烈しく戦
い、迷つて仕舞いました。

結局私は指定の日のその時間に三角公園

へノコノコと出掛けて行きました。
一年近くも続いたるみ子との生活にも倦
いていたのでしようか、心の底ではも
つと強烈な刺激を求めていたのかも知
れませんが、六時過ぎに三角公園に着
きました。都心であるのに余寒が厳し
い故か、あまり人通りもなく、何と
なくうらぶれた夜の歡樂街の舗道に
立つて、寒さを避ける為に外套の襟を
立てて、足踏みをしながら待つてい
ました。

その時です。私が肩をポンと軽くた
たかされたのは……ふり返ると、そこ
に私より幾分背の高い男が、黒く長いマ
ントの様なものを頭からすっぽり冠
つて立つてゐるので、私は思わずビク
リとして男の顔を見上げました。が、
仮面をつけていたらしく只白く高い鼻
だけが印象的で記憶に残りました。
「御案内しましょう」男は呟やく
ように言ふと、マントの下



らニユツと手を出して夜の街の一角を指差しました。その方を見ると、夜空に寒々と枝を伸している街路樹の下に黒い乗用車が駐車していました。私はまるで催眠術にかかったもののように、フラフラとその男の後にしがたい車のクッション腰を下していました。

「会の規定ですから」

私はその男に眼かくしをせられると、まるで監禁でもされるような錯覚におち入り不安と恐怖の様なものを感じ、又一方では烈しい好奇心と、スリルを楽しむ心が胸の中で渦巻き、一刻も早く目的の場所へ着き度い気持で一杯なのでした。なんと矛盾した話でしょう。

車が何処を走っているのか見当もつきませんでした。幾度となく左右にカーブしかなりの坂を登った感じがして車が降りました。手を引かれて少し歩くと、立止った男が眼かくしを取除いて呉れ、もうそこには八帖位の洋間の中でした。

「一寸お待ち下さい」

指差されたソファに腰下ろすと、男は室外へ去り、入れ替りに銀盆に洋酒の角瓶とグラスを乗せて若い女が入って来ました。その女も仮面をつけていて、私にも一つの仮面をそつと無言で差出すのでした。

私に寄添うようにして給仕する女と酒をしばらくチビリチビリやつていますと、先刻の男が入つて来て

「どうぞこちらへ」

と先に立ちました。ホロ酔いの足を踏みしめ男について廊下へ出ると、男は一番奥まつた部屋のドアに手をかけ、

「どうぞ」

一步その部屋に足を入れた私は、アツと小さな叫びをあげて仕舞いました。何も部屋が美しいからではなく、又そこに醜惡な怪物を見たか云うのでもありません。私を驚かせたもののそれは部屋の片隅に置かれたダブルベッドに横たわっている裸体の女の美しさでした。女は昏々と眠っている様子で、あつさりしたカールが、白い額に惱ましい影を投げ、恰好の良い眉がすつきりとした感じを与え、眼はとちていましたが、長いまつ毛が印象的で、高すぎぬ可愛い鼻の下に蠱惑的な赤い唇が鮮やかに浮んでいると云う、これ程整った顔立ちの女を今迄見た事がありませんでした。いくらか酒の酔いも手伝つていたかも知れませんが、矢張り美しいのです。現に今でもそう思っているのですから……

又、美しい肩の線の流れ、こんもりとふくらんだ胸の乳房、均整のとれた四肢、雪の様に白い肌が、電燈に反射して只もう眩しいばかりの美しさでした。

「如何です！眠っている様に見えるでしょう。ところが違ひのです。これが体と意志を分離された女です。今夜は初公開なのです。どうかどうしたのか会員が集りません。如何でしょう？よろしかつたら此処でお遊びになつても構いませんよ！但し一時間だけに限ります」

私は飛び立つ想いを押え乍ら

「じゃあそうしようか」

とつとめて平静に答えました。

「五千円頂戴致し度いのですが」

私は言わぬまゝに内ポケットから札束を取り出し上の空で彼に手渡ししました。

「では時間が来たらブザーを鳴らしなすから」

男がそう云つて姿を消すのを待ち兼ねたように私は女に近寄りました。女の顔を近々とのぞき込み乍ら、私はふとるみ子の事が頭に浮びました。

そしてこの女もるみ子の様な人形ではないのかと丹念に調べ初めました。しかし矢張り人形ではありませんでした。豊満な胸はしづかに波打っていますし、若い女特有の匂いが素肌からはのぼりと漂つて来るのです。うつとりとなつた私に、更にもう一つの疑問が湧いて来ました。

眠っているのではあるまいか？

そう思つてゆすつたり、つゝいたりいろいろ試みましたが、何の変化もなく、完全に意識のない女である事が解り、堪らない程嬉しくなりました。

さまざまな状態でいろんな愛撫を加え終えた私はホツとして腕時計を見、もう時間のない事を知つたのですが、眼は未だ彼女の美しい素肌に吸いつけられていました。

再び眼かくしをされ三角公園迄送られ、アパートの自分の部屋へ帰つても猶、興奮がさめず、彼女の素晴らしい肉体が眼の前にちらつくのでした。

意志通りになる意志の無い女、私は永い間探し求めて得られなかつたものを得た喜びが中々寝付かれませんでした。

もうるみ子なんか何の興味もなくなり、一週間後と定められた彼女との逢瀬の日の来るのがどんなに待遠しかつた事でしよう彼女との逢瀬が度重なるにつれて、彼女への愛情は益々深まり、そして彼女を独占したいという気持が段々強くなりました。あの美しい彼女の肉体を他の男もと思ふと堪らなくなり、極く最近の或る夜、あの

男に、金は幾らでも出すから女を譲つて呉れ、と交渉しましたが即座に拒絶されました。

魂の無い女に魂を奪われた男……とお笑いでしようが、私は一生懸命でした。それなら一週に一度と云う鉄則を除き、一日置き位に逢わして呉れと頼みましたが、それも無理だ、と云うのです。

あの女は特殊な科学的方法で意志を分離してあるのだから肉体の疲労が多く、その回復に充分な静養と栄養の補給を要するのだと云うのです。だから今迄通りにして呉れと言われて見れば、仕方なく諦めるより他にとるべき道はありませんでした。

ところが或る土曜の夜、蓄積された一週間の欲情を彼女の体にたたきつけ、ぐつたりとなつてアパートへ帰つたのですが、私にとつて正に致命的な大事件が待ちもうけていたのです。しかし私がそれを知つたのは翌朝、つまり五月二十七日の朝の事でした。

ポケット・マネーが残り少なくなつたので、例の如く宝石を金に替えようと思ひ、隠していた宝石箱をとり出した迄は良かったのですが、ふたを開けた瞬間、私は思わすアツと驚きの声をあげ、眼の前が真暗になつて仕舞いました。

燦然と輝いている筈の、数々の宝石が忽然と姿を消しているのです。宝石箱の中は空っぽで、何ひとつ残つていないのです。私はぼんやりとして仕舞つて、しばらくの間は考える事すら忘れ果てていました。

それから二三日というものは、私の頭の中には絶えずその事だけが浮び、警察に届けようかとも思ひましたが、届けてもそれが返つて来そうにも思えませんでした、届け

に行くという元気もありませんでした。昨日の夕方、出掛ける時迄はあつたのですから、確かに留守中に盗られたのに違いありません。私は夢遊病者のように街を歩き乍ら、これから先の事をしきりに考えていました。

働いて生きてゆこう、という気持もおこりません、働く事に自信もなく、無力な私に何が出来るでしょう。いろいろと考えに考えたあげく、誠につまらない男である私は自殺する事に決めました。

私の短かい生涯の最後に歓喜を与えて呉れたあの女を道連れにして……

私は人形のるみ子をつつそり処分し、身辺を整理し、身の廻りのものを手離して、彼女との最後の逢瀬に要する金をこしらえ計画の準備にかかりました。

先づ血の色のような赤い染料と一箇の水枕、それにゴム管を買いました。その黒いゴム管を水枕に取り付け、水で溶かした染料をその中に入れ、それを服の下にかくして、私はあの迎えの車に乗るのです。そして知らぬ顔をしてゴム管の一端を車外に出し、染料の液を道に落とし、三角公園から自動車が停る間の動きを緊いで見ようと思つています。

勿論私がそれを見るためではなく、あなたや他の人々に知つて戴く為です。そして私は歓楽の頂点に、彼女の口の中と自分の口の中へ、一番早く、且つ適確に死ねる青酸加里を流し込むのです。その実行も数時間後に迫りました。

今私はいろんな感激にふけつていますがどうせ私なんか大した感激なんかはないのですが、では貴方の御健康と御幸福をお祈りして、ペンを置きます。

六月二日

松田春男

私は読み終つて、この哀れむべき男に對して言うべき言葉を知らなかつた。

しかし、文中の肉体と精神を分離云々という事には少なからず興味を持つたが、

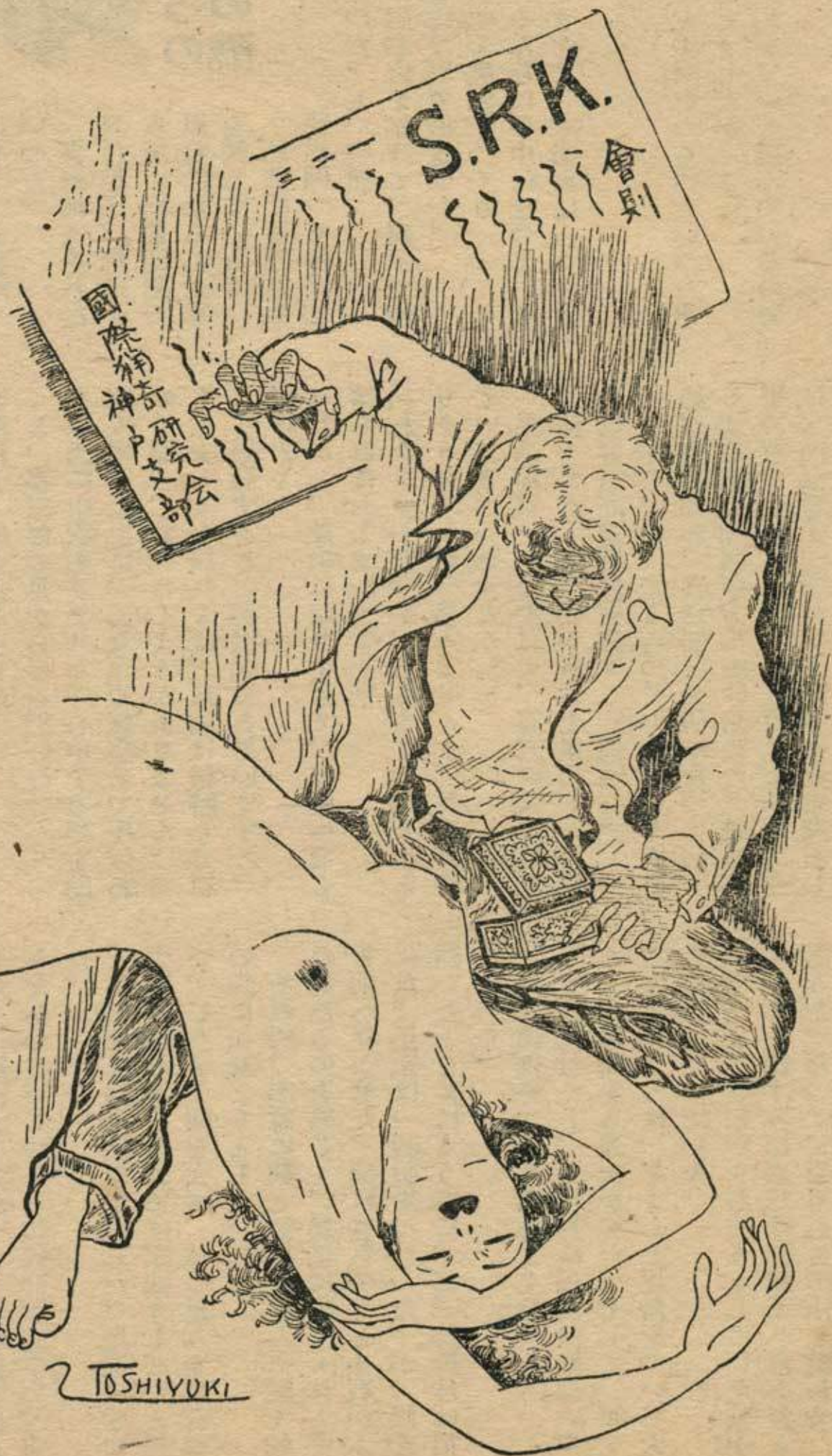
果してそんな事が可能な事であるのか？という疑問を持つた。

宝石の盗難、その他種々の点に、贅しい

推理を働かせた末に、私は一つの結論を得た。私は起き上つて顔を洗い、パンと紅茶だけの簡単な朝食とも風食ともつかないものを済まし、服をひっかけ、あの手記を持つて、I署に勤務している親友の若手敏腕刑事である木村を訪ねた。

彼は丁度、運良く署に居ておそ目の風食をとつてゐる所であつた。

「今朝、何か変つた事件がなかつたか？」
彼は一寸考へて、
「うん……事件という程でもないが、血が点々と、いや調べたら染料だつたがな、三角公園から初まつて、加納町迄続いていたよ、とんだ人騒がせだよ！今夜の夕刊にで



るかも知らんよ、ひよつとするとね、大分騒いでたからな」
矢張り、あの男は計画を実行したのか、と異様な思いにとられ乍ら、
「しかし三角公園から初まつてゐるという事がどうして解るのだ？」
「それは見れば解るさ、落ち具合でね、自転車か或いはもつとスピードの速いもの、自動車の上から落ちたものだね、あれは」
「ふーんそうか、じゃあそれに対してどんな見方をしているんだ？」
「そりだ現在のところでは別にどんな考へも持つていないね、何かの過失か、又は単なる人騒がせではないのかな」

弁当を喰い終えた彼は平静に答へ乍ら、ポケットから煙草を取り出した。
「実はこんなものが無い込んだのだが……」
私は少しばかり得意になり乍ら、あの便箋を差出した。
彼は美味そうに煙草を吸い込み、煙を吐き出し乍ら、黙つて読み始めた。
彼はそれを読む間ずっと無言でいたが、読み終ると複雑な表情を顔一杯に浮べ、もう立ち上つていた。
「ありがとう……直ぐ出掛けて見よう……」
「どこへ？」
「加納町だ！結果はまた改めて報告するとしよう、待つて呉れ」

あつけにとられてボカンとしている私を残して、彼は足早に刑事部屋を出て行った。その日から二日目の朝、私が社の机にかぶりついていると、彼から電話がかかって来た。

「木村だ！君に報告するのを忘れていたがあの件な！もう片附いたよ！」

「ホウ……それは早かつたなあ」

「ウン、あの問題の何とか云う男はな、松田という男のアパートのホン近くなんだよ！」

「フンそれで！」

「まあゆつくり聞けよ、松田という男が宝石をとられたと言つたね、その犯人は誰だと思ふ？」

「さあ？」

「松田が何時も宝石を売りに行つていた三宮の坂本という宝石商がその犯人だ！そしてその坂本の居宅が加納町つまり赤い点々の終点なんだ、解るか？」

「うん、解つたような気がするが、そいつはもうあがつたのかい？」

「あ、既に全部自由してるよ！みんな彼が綿密に計画した芝居なんだよ！肉体と精神



雄大な山ふところ 中にも人と人との醜い争いがあつた

くくひきつゝ、たが、電音を忍ばせて、近寄つていった。喜三郎はそれに気付かず、民造から聞いた催淫薬の原料になる乙女草を探している。民造は喜三郎の後へ廻つて伸ばした足をそつと握つた。と、突然「アッ！」喜三郎が声を挙げて、両手で崖の淵を支え、蒼白な顔で振り返つた。民造は、あわてゝ笑顔をつくり「喜三郎さん、そんなに夢中になつていては落ちてしまいますよ。本当にはらくさせる」「すみません」喜三郎はやつと笑顔をつくつていった。「どうです。ありましたか……」

脚下は千仞の谷だつた。民造は暗い谷底を見降していると、吸込まれてしまふやうで思わず二三歩身を引いて、喜三郎の方を見た。喜三郎は十間程離れた場所、腹這いになつて崖際に生えている乙女草を探していた。

「どうも、この辺が臭いと睨んでいゝのですが」

の分離なんて不可能な事だよ、あの女はね特殊な強い麻酔をかけられていたのだよ！君聞えるかい？」

「あ、あ、そうか、そうだろうなあ」

私は自分の素人推理がいさゝか違つていたのを認め、苦笑し乍ら、氣になつていゝ事を聞いて見た。

「あの松田と問題の女は？どうなつた」

「あ、あの松田は自分の望み通り、ではな

い、死んだよ、女はびんびんしているよ、一味五人と共に、こゝへ連行して来ている坂本が穴から松田の行動を見ていたらしい

「わたしもそう思ひますが……しかし、余り熱中しているの、落ちてしまわな

と思ふ、足を支えましたよ」

と、喜三郎の足から手を引いた。

「本当に申訳ありません。心中する処を助けて載いた上に、乙女草の採集まで手伝わせて戴き、お礼のしようがありません。でも、少しでも採れれば、私達は結婚して新しく出発することが出来ると思ひますと、つい……」

「しかし、夢中になりすぎて、谷底へでも落ちればおしまいですよ」

「わかりました。が、どうもこの辺りにありそうですから、済みませんが、足を持

つて下さいませんか」

民造が頷いたのを見て、喜三郎はくるりと体をかえして、崖から体を乗出した。民造は喜三郎の足首を荒々しく握つた。

やがて、持つてもらつていゝという安心感がある為か、喜三郎は大胆になつて、ずるずる重心を頭の方へかけ始めた。民造が手で持つていただけでは危険になつた。今は、民造の手一つが喜三郎の生命を左右し

な、松田が小さい薬瓶のようなものを取り出し、それを女に飲ませかけたので、急いで部屋に飛込み、後から鈍器で松田を一撃のもとに撲り殺し、庭の一隅に埋めたといふ次第さ」

「そうか！」

「おい！君も魂のない女に夢中になるなよアハハ……」

受話器の中から彼の明るい笑い声が響いて来た。窓外のビル街は明るい初夏の陽光を浴びて白く輝き、受話器を握つていゝ私の手にじつとりと汗がにじんでいた。完

ている。民造はえたいのしれない興奮を胸に感じた。支えている手がぶるぶる震え出した。下腹に力を入れても、その震えは止らなかつた。じつとり額に汗が滲んで来た。

喜三郎は尙も体を乗出した。民造は手に力を入れたが、これでは永続きしないと思ひ、じりじり膝を立て、体の重みを喜三郎の脚にのせようとした。

その時、不意に胸と頸にぐわんと鋭く物のあたるのを感じて、民造は慌てゝ体と手を前へ浮かせた。顔にざらざらと小石がふれた。民造は一瞬眼をつむつた。が、眼を開いたときにはもう既に、喜三郎の体は消えていた。

（喜三郎はやつぱり落ちてしまつた）

そう気付くと、やにわに民造は四這いのまゝ、崖側から遠去かつた。そして、腰を抜かしたように、どすんと尻餅をついて大きい息を吐いていた。

今まで、喜三郎を殺そうとしていた彼がふとしたはずみに喜三郎が崖下へ落ちたと思ふと、却つて、恐ろしさが体を震わせた

民造は永い間、痴呆のような眼で山脈の向うに沈んで行く夕日を見つめていた。がやがて、ふら／＼と立上ると、後も見ずに微かに影をつくり出した山路を夢中で駈出した。

二

民造が小屋へ辿りついたのは、それから随分経つてからであつた。はや、小屋は黒い影に覆われていた。彼はどうして辿りついたのか憶えていない程疲れていた。

小屋は民造とろすのろの清吉がこの山へ乙女草採集に来て建てたもので、いたつて粗末なものだつた。しかし、彼等にはそれで充分だつた。

それは風間乙女草を探しに山をかけずり廻つて来て、部屋一杯敷つめられた乾草の上に疲れた体を横たえ、他愛なく眠込んでしまふからである。

彼等はあと半月程の間に乙女草を探し出して、それから催淫薬をつくつて一儲する積りだつた。この計画をしたのは民造で、彼が詐欺容疑で未決へ入れられていた時同房の男から乙女草が催淫薬の材料になると聞いた。幸いその男が麻薬製造罪で刑に処せられたので、彼はその男より先に一儲しようと思つたのだつた。

それに、その男の話では、乙女草がどの山にもなく、特殊な或地方の山にだけ生えしかも、崖ぶちに生えていて、数が少く、採集に非常な危険があるということであつた。

その事が、性来山師的な民造にとって、非常なスリルを感じさせた。

民造は疑いが晴れると、すぐさま、村へ帰つて、同行者を秘かに物色した。そして

打算的な考えの結果、水車小屋で働いてゐるろすのろの清吉を雇ひ、或夜、こつそり二人で村を出たのである。

民造は小屋の前で、暫く胸の静まりを待つて中へ入つた。奥の壁に吊下げた石油ランプの炎が小刻みに震えた。その下で、放心したように体を投出してゐる初代を見た時、喜三郎は崖から落ちたと咽喉まで出掛かつた言葉を危ふく飲み込んだ。

乾民造は草をかき／＼踏んで、初代のそばへよつて行き、落付いて

「清吉はまだですか」

と、声を掛けた。すると、初代はアツと微かな声を立て、身を起すと

「マア、驚いた。民造さんなの」

と、民造を見上げて、指先で眼をこすつた。

なんだ、眠つていたのかと思うと、民造はちよつと腹が立つた。

「清吉はまだ帰りませんか」

「清吉さん、清吉さんはさつき帰つて来て水を汲みに行きました」

「御苦労だな。しかし、大丈夫かな」

「大丈夫でしょう。清吉さんは体は大きいし、力が強いもの」

民造は頷きながら坐つた。

清吉はろすのろと呼ばれるだけに、何をさしても、見てゐる方が齒がゆくなる位のろのろしてゐるが、力の強いことは村でも評判だつた。水車小屋でついた米を俵に入れて運ぶのに、二俵両肩に乗せて運ぶ程の男だつた。

初代は民造が坐ると、身じろぎして、スカートの裾を引張つたが、ふと、顔を挙げると羞かしそりにいつた。

「大村はどうしましたかしら……」

民造はどきんとしてあわて、初代の視線をはずし、暗い部屋の隅を見つめながら

「途中で別れましたよ。」

なんでも昨日、乙女草が有りそうな処を見付けて置いたからつてネでも、もうお帰りになるでしょう」

初代は安心したのか

北海広外 峯玄太西



壁にもたれて、静かに眼をつむつた。少し乱れた髪に乾草が点々と着いてゐた。ランプの光に照されて、二人の影は乾草の上と壁に黒く大きく浮いてゐた。

民造は手を差出して、初代の髪の乾草を取つた。すると、驚いて初代はぱちりと眼を開いて、警戒的に民造を見た。

民造は笑つて

「ホラ、乾草が……」

と、つまんだ乾草を見せた。初代は慌て、頭へ手をやつて髪をばさばさ揺つた。

それを笑顔で見ながら、民造は、腹の中で今夜こそ、この女をものにしてやろうと思つた。



を忘れて身内を火照らせる。時には武者振りつきたくさえなつた。しかし、そんな気持の間へ喜三郎が何時も出て来て、邪魔をした。一日々々と経つにつれて、初代の存在が乙女草採集以上のものに思われた。

（邪魔な初代の男、喜三郎は死んだ。もう誰にも遠慮があるものか。清吉は阿呆だからなんともこまかせる）

永い間、女の肌に触れなかつた民造の体は喜三郎という邪魔者が死んだことで急性性的に燃え上るのを覚えた。

今までは、金を儲けることで一生懸命だったが、半月程前喜三郎達が親の許さぬ恋にこの山で心中しようとした処を助けて帰つて来て一緒に生活するようになってからは、民造はひそかに初代を注意するようになつていた。初代は女学校を出たばかりの年頃で、民造のように玄人ばかり相手にして来た男にとっては、確かに大きな魅力だった。びち／＼と新鮮な果物を思わせる体つきを見ていると、彼は四十に手の届く歳

が初代と人生の再出発をする資金に手伝わしてくれと云い出したとき、民造は拒んだ自分達以外に乙女草の秘密を知っているものがおられては困るからである。しかし、よく考えてみると、喜三郎を亡きものにして、初代を吾物にするには、いゝ機会だと思えたので、彼は二人に乙女草採集の危険を強調して、喜三郎だけ手伝わせることにした。そして、喜三郎殺害の機会をねらっていたが、遂に今日、殺そうとしたときは果さず、殺意を忘れた時に却つて喜三郎を谷底へ落してしまつたのだ。この過失は民造にとつては幸いだった。

初代が髪を揺すぶり続けたので、むせるような女の匂いを民造は痛く胸に感じた。「櫛も何も持つていないから、こんなに油気がなくなつて……」

初代は指先で髪をすくようにして云つたふと、民造は戸口の方を振返つて、清吉の気配を確かめながら、煙草を出して立上つた。そして、ランプで煙草に火を点ける風

をしてランプの火を消した。

隙間から入ってくる光だけが微かに残つた。

「アラ、消してはだめよ。こわい。早く点けて……」

民造は足許で、こういう初代を見降してニツタリと笑つた。

「しまつた！ マッチありませんか」

「ないわ。どこにあるか民造さん憶えていない」

「あいにく、こう暗くては一寸分りませんよ。弱つた」

そう云いながら民造は上から初代の位置を計つた。丁度、初代は民造の右横で壁を背にして坐つてしていると分つた。民造は上着をそつと脱いだ。初代はかさとも音をたてない。民造は脱いだ上着を掛け、初代の頭をねらつて、いきなり、かぶせ、横に倒れた初代の上へ乗り掛つた。初代は手足を必死に振廻した。が、頭をくるまれているので目標がつかず、それはたゞ、空を打つばかりであつた。民造は片腕で首を締めるようにして、片腕を素早くスカートの走らせると、力一杯ひききいた。初代は上衣の中で首を振り、悲痛な声をたてた。そして、両足を勢よく躍らせた。が、それで却つてシミーズがめくれた。

乾草が四方へ散つた。

民造は初代の顔から上衣を脱がせて、顔をふせ、何かを堪えるように、民造の頭に両手の爪を立てゝいる。初代の耳に口をあてた。

「毎晩、お前さん達はわしの横でわしが空を飛んでいるとは知らずにお楽しみだつたな。わしはうらんでいたよ。随分お前さんは罪人だとネ」

三

永い間の鬱積を一度に放出した民造は、流石に暫く初代を抱いたまま離れなかつたやがて、清吉がもう帰つて来るだろうとポケットからマッチを出して、ランプの火を点けた。

初代は苦々しそりに、民造のその横顔を見つめた。

のつそり、清吉が入つて来た。

「ごころうだつたな」

声をかけて、民造は煙草を一本抜いて渡した。

それを、旨そうに一口二口吸つて、清吉は部屋を見廻し、思い出したように、初代に

「喜三郎さんはどおした」と訊いた。民造は横から

「喜三郎さんか、喜三郎さんはまだだから今二人で心配していたところだ。いや、ひよつとしたら、清吉さんと一緒だと思つていた」

清吉は大きく首を振つて

「いや、見掛けねえ」

「そいじゃあ、迷つてゐるのかも知れん」

民造は初代を見て

「探しに行こうか」

初代は黙つて頷つた。

「早く探さないと、谷に落ちるかも知れないぞ」

清吉が不意に云つたので、民造はぎくりとして、思わず初代の顔を見た。しかし、初代は破れたスカートを気にして、顔をふせていた。

（喜三郎は俺が殺したのではない。慾を出したから落ちたのだ。俺はびく／＼すること

とはないじゃないか」

自分にそう云い聞かせた民造は、わざと「サア、行こう」と、先に外へ出た。

しかし、民造は一体これからどうしたものか一寸迷った。が、先にどん／＼歩き出した。すぐ、清吉と初代がついて来た。

月のない、星だけが冷くまた／＼いっている空を時々見上げて、民造はたゞ山を登つた不意にあたり不起る初鳥の羽ばたきや啼声に三人は何度も驚かされた。

民造はその啼声が喜三郎の呪いに聞えてともすれば足がすくみそうだった。

ふと、民造は後の聲音の消えているのに気が付いて、振り返ると、初代と清吉の姿が見えなかつた。慌てゝ、山路を引返した。

丁度、山路が二又に別れる所まで来たとき民造は路の真中に黒い影がニユツと立っているのを見て思わず、無気味な気持ちに襲われたが、それが喜三郎の亡霊でなく、清吉と初代であると知つて、胸が怒りにかつと燃えた。

「清吉！」

怒号に近い声がついて出た。

その影はつと二つに別れた。

民造は近寄つていつていきなり初代の手をとると、怒りを押えてどん／＼狭い山路を登り始めた。

清吉は黙つてついて来た。しかし、だんだん距離が出来た。

初代は民造に手をひかれながら、仔牛のように歩いていった。が、やがて、微かにすゝり泣き始めた。

「大丈夫だよ、すぐ喜三郎さんは見つかるよ」

民造は胸の中がにくくり返りそうになるのをこらえて、そんなことをいつた。

その時

「喜三郎さん」

遙か下の方で、喜三郎を呼ぶ、清吉の太い声が始つた。

ぎくりと、身震いして民造が振り返ると、反対の方で

「キサブローサーン」

と、山彦が返つて来た。

すると、それにならうように、やにわに

「喜三郎さん」

と、初代が叫んだ。

思わず民造は初代の手を離した。

初代の声にも山彦が返つて来た。

初代は今度は自由になつた両手を口にあてゝ叫ぼうとした。が、それをさえぎるよ

うに民造は

「さア、行こう」

荒つぽく手を執つて、小走るように歩き出した。民造はこの初代を清吉も狙つてい

るのかと、思うと、無精に腹が立つた。よ

し、清吉も殺してしまわなければならな

と思つた。今まで、清吉を不具者扱いにし

ていたのは甘かつたようだ。しかし、初代

は何故あんなにすのろに抱れていたのだろ

う。それが気になつた。

「初代さん、清吉はどんないたづらをしま

した」

「いえ、何もしないわ」

「でも、抱合つていたじゃないか」

「……突然、草叢から何か出て来たので、

夢中でしがみついただけよ」

「うそだ。そんなことがあるものか」

「本当よ」

「初代さん、わたしは、あなたが好きだ」

民造は初代を引寄せて云つた。

「だから、本当のことをいつて呉れ」

「苦しい、離して……何もしなかつたからね、離して」

この女は、ひよつとすると、大変な淫婦ではないだろうか。彼はいきなり、かつとした。

「初代さん。あなたが、本当のことを云わなければ、わたしも、その積りをするよ」

「積りつて……」

「喜三郎さんに、本当のことをうち明けてやる。清吉と抱合つていたことも、それから、先程のことも……」

初代は微かに声を上げて、民造の腕からのがれようと身もだえした。民造は一層腕に力を入れて、闇の中で野獣のような眼を光らせた。

「初代さん！」顔を近づけた。

「離して、お願い」

「離すものか、本当のことを云わない限りわたしは……」

すると、初代はひきつゝた声で

「清吉さんをどうする積りなの」

「殺してやる」

「アッ！」

「ハハッ、わたしはお前さんに手を出す奴は皆殺してやる」

「いや／＼」

「お前さんに手を出すものは、誰がなんといつても殺すのだ」

「喜三郎さんも？」

民造は急に、初代を力一杯抱

しめた。

「初代さん……喜三郎さんはいないよ」

「エッ！」

「死んだよ。崖から足をすべらせて落ちてしまつた」

初代は瞬間、ぐつたりしたが、顔を挙げると、民造を睨みつけるような眼で

「いつ！何時なの、嘘でしょ」

「風間、崖下の草を採ろうとして……」

と、民造はき捨てるように云つたが、

今度はうわつゝた声で

「もう、お前さんは誰にもやらないぞ、わ

しのものだ」

「いや、私も死ぬ、離して」

顔をふりたてゝ、初代は民造の頬をびち

びち打つた。民造は、怒つたように、いき



なり、初代をその場へ押倒した。
狭い山路の土が崩れて、さざつと、音をたて、谷底へすべつて行つた。

今度の初代は、悪魔、鬼、獸と叫びながら死にも狂いで抵抗した。

「おとなしくしろよ。喜三郎の替りにこれからわしがうんと可愛がつてやる。乙女草さえ探し出せば、たんまり金儲け出来るんだ。何もそんなにいやがらなくともいゝじやないか。喜三郎はどうせ、一度死んでい

た男だ」
「死ぬ。わたしは死ぬ。生きていられないわ。離して、ア、わたしは何んとおそろしい女なんだろう」
民造は強く初代の体を押えつけて、胸を

開こうとした。初代はその手にかみついた死を賭しての抵抗だつた。

その時、

「くそ、何をする」

民造の体が、突然強い力でもぎとられた男は消吉だつた。

「民造さん、お前さんは恐しい人だ。人の女房を横取りするなんて。まるで、獸だ。人間じやない。喜三郎さんはよく云つていた、お前さんは初代さんをねらつていて、だから、いつ殺されるかわからないつてよ……」

「そ、そんなでたらめを……清吉、離せ」
しかし、清吉は民造の胸ぐらを両手でとらえて、尙も云つた。

「……それに、乙女草なんて、あるものでたらめはお前さんの方だ。わしは頭がのろいのでうっかりひつかゝつて、お前さんの云うなりになつていたが、でも、これだけ探して無いのはやはり嘘だからだ。喜三郎さんはたえず疑つていた。そしてな、こ

うもいつていた。乙女草をお前さんに教えた男は、麻薬で頭が変になつていたんだらうつて……でも、わしは、なか／＼信じなかつた。が、やつと、此頃分つて来た」
「清吉、とにかく離せ、話せば分る」
「離すものか、喜三郎さんを殺しておいてよくも、お前さんは初代さんに……お前さんなんか、このわしが殺してやる」
「清吉、わしの……」

民造の声は途中でかき消えた。土砂がざゝゝとなつた。

怒りに狂つた清吉が、いきなり民造を谷へつき落したからである。

民造は悲鳴を挙げながら、闇の底へもんどり打つて落下して行つた。

それに驚いたのであろう。すぐそばの木立で、夜鳥がけたゝましく啼いた。

民造の姿を追うように清吉は頬をこわばらせて闇の底を見つめていたが、急にニツタリ笑つて、初代を振返つた。

しかし、初代の姿はもう、そこにはなかつた。

——了——

うちの隣りは競輪娘、丸いお尻をむくむくさせて、今日も朝からペタル踏む

一

「ほんまにこまりますねん、競輪に出てお金を儲けてくれるのはよろしおますけど、あれで、嫁さんにもろうてくれはる人がおまつしやらかわてはそれが心配で心配で」

僕のお隣りのマサちゃんのおふくろば、僕の家のお父に大きなお尻を下すが早いかさつそくいつものグチを並べはじめた。お隣りは母と娘の二人暮らし、もとは大阪の船場の相いい綿布問屋の奥さんだつたらしいが、戦災で店は丸焼け、主人は四十越えた第二国民兵役で、終戦まぎわにシベリアかどつかへひつばられたままだに消息がない。同じ大阪の焼出され組の僕等夫婦がこの西宮郊外のちよいとした文化住宅街に軒を並べているから仲は至つてよい。

「それでマサちゃんはどうしてはりますのん？、昨夜おそう帰らりましたやろお宅の呼鈴がえらい派手に鳴つてましたわ」
応待している僕の女房が、ちよいと皮肉のある返事をした。郊外に住めば、夕飯がすむとラヂオが終つたあとはなんにもすることがない。それに、ちようど待ちに待つた女房の日の丸が終つた晩だから、僕も女房も、にやにやとほくそ笑んで早くから風呂へ入つて、布団を敷いておいたのである。しかるに、さて、寝巻に着換えたお隣りに、デイ、デイ、デイとけたたましい、お隣りの呼鈴が鳴りはじめ、おまけに留守番のおふくろはツンボ同然に耳が遠いんだから、こつちはゆつくり楽しめるどころじやなかつた。それが夜中に一時間も鳴りつづいたのだから女房がむくれるのもむりはない。

「さいな、それがまだ寝てますのやがな、なんば巡業で疲れたさかいいうたかて、若い娘が、掛布団を蹴飛ばして、お乳も太股もほり出して大の字で寝てますのやがな、もうお尻もとりにすぎてまんのになあ」
僕は知らん顔して台所へ立つた。台所の窓からはお隣りの奥座敷が丸見えだ。トホッ、なるほど……、こりや、おばさんの嘆くのもむりはないわいとよだれを垂らしてのぞいていたら、だしぬけに

「あんだ！、なにしていますのん？、いやらしい」
と女房が尻をつねつた。

「見たかつたら、晩に得心のいくほど、あたしの見たらえゝわ、それより畑のさつまいもを掘つてちようだい！、たまの日曜日から、男が家庭サービスするものよ」
女房は二の句をつがせない。逆鱗にふれたら最後の助、今夜は僕に背中をむけて寝るにきまつている。僕はしぶしぶ歟をかつ

いで菜園へ降りた。僕はさつまいもなんか大きらいだ。いも焼酎としてなら好物中の好物だが、蒸いもだの焼いもだのつてやつは子供のとき以外かつて口にしたことがない、しかし愛する女房の好物とあれば仕方がない。ぶつぶつボヤきながら畑をひつくり返していると、

「ハロー能登さん！」

と垣根越しにサツカリンみたいにあまい若々しい女の声がした。

「ようマサちゃん、よく寝られたかい」
「あら、白ばくれなくていいわ、さつきさんさんのぞいてらつしやつたくせに」
くつくつ笑いながら、マサ子はバラの垣根越しにきゅつと片眼をつぶつてウインクした。

軽そうな毛糸編みのブラウスに、下はゆつたりした空色のズボン、素足にサンダル

をひっかけて、いま起きたばかりの少しふくれた顔。乱れたパーマネントにブラシをあてながら、いもと格闘する僕の不細工な手つきをおかしそうに見ている。このごろの若い娘は十ぐらい年上の男なんか軽く友達扱だ。

「だめねえ、能登さんたら、そう、そんなに深く鉄を入れたら、おれもがみんな切れちゃうじゃないの、あたし、やつたげるわ」

ひらりと垣をとびこえと、マサ子はこちらの畑へずかずか入りこんできた。年は満十九才、背丈は五尺四寸はたつぶりあるし、きゅつと引きしまった肉づきのいゝ身体だ。ブラウスの胸にぶつくりと二つのお乳がもりあがり、ズボンに締められたふとい腰まわりは、たしかに僕より一まわりぐらゐ大きい。それに胴より脚の方がながい。

「マサちゃん、こんどの巡業はどつちの方だつたんだい」

「名古屋から岐阜、大垣、静岡、横浜、東京が一番しまいだつたのちやうど二ヶ月かゝつたわ」

「お客の入りは？」

「たいへんな人気だつたわ、競馬よりずっと賞金の率がいゝでしよだからどの競輪場も大入り満員だつたわ」

「マサちゃんの成績はどうだつたの？」

「そうねえ、あたし、たいてい本命が狂わずに、一着が六回、二着が三回、三着が一回きりだつたのよ」

「ふうん、そりやすばらしい！、じゃあ、稼ぎもすてきに多いだろ？」



うちの隣人は競輪娘

能登一三

田中比呂志

「さあ、合計で二十万円ぐらゐいじやないかしら、でもその度に税金が天引きだし、いろんな費用の控除なんか全然税務署が認めてくれないんだもの、手取りにしたらその三分の一ぐらゐいじやないかしら」

「うーん、それにしたつて七万円二ヶ月の稼ぎでねえ、で、いつたい、マサちゃんのような女子選手は全国で何人ぐらゐ居るんだい」

「そうねえ、くわしくはわからないけれど六百人を越えてるらしいわよ、登録してある男子選手が五千五六百人で、その約一割ぐらゐが女子なんですつて」

「こりやいかん、大の男の僕が女房をかゝえて、会社からもらう月給がやつとこまで

税込一万二千元、なんやかんやと差引かれて手取り一万円そこそこ、それが、十九才のシヨンペンタレのアブレ娘がアルバイトに毛の生えたぐらゐの仕事で二ヶ月で七万円、一ヶ月で三万五千円とは、なんたらこ

「こと！」
女子と子供は養いがたし。僕の気持を知らんくせに、女子競輪選手のマサちゃん畑からころがり出たさつまいもの山に眼を丸くしている。びち／＼と手ごたえのあつそうな小麦色に日焼したマサちゃんの身体の方が、さつまいもよりよつぽど食慾をそゝる。

「マサちゃん、えゝオツパイになつたな」
「いやア、さわつちやくすぐつたいわ」とたんにビリリとひびき渡つた声。
「あんた！」

あつ、いけねえ、女房が物干場から監視してやがる！

たつて、せい／＼一千円か二千円の昇給か一ヶ月分のなんとか資金にありつくのが関の山。
ほんまにこんなアホな殺生なことがあるかいな。たとえば家からそりやがな。僕等の住みたいマツチ箱ほどの庶民住宅は抽籤の度に数十人に一人の当選率なのに、キヤバレーだの、ダンスホールだのは、だいいじ／＼鉄やらセメントやら材木をふんだんに使つて、じやん／＼建ちよる。吉田の白足袋首相もなんとかせなあかんで、ほんまに。

こんな涙のちよ／＼切れるみたいなデタラメ政治やつてたら、共産党が増えるばかりやで。他人事やないで、ほんまに心配やがな。
「能登さん、なにをアウ／＼おこつてらつしやるの、アラ、まあすばらしいわ、このおれもの大き

マサちやんを一ぺんなんとか誘い出して抱いて寝てみたいものだが、あいにく女房の眼はピカ／＼光つとるし、女房に見つけられんように、恋しいとしのマサちやんのすばらしい身体を充分に拝見するには、どうしたつて、競輪場へ行つて、見物にまぎれる他はない。ところが、僕はどうも競輪場つてやつが虫が好かん。国営の競馬ならまんざらきらいでもないし、行く連中のガラもそう悪くない。たいがいは、パリツとした背広の肩から双眼鏡でもぶら下げ、きれいな女房か、アダな若い女性をつれとるリンコロンとかナツシュとかセダンとかいう高級自動車で、すーつと滑りこんでくるブルヂョア連中も多い。グリーンといふにほいのする葉巻をくゆらせ、すれちがえばフ／＼とするいゝ香水をつけている。

ところが競輪の客とくれば、いやはや僕
同然か僕以下の連中ばかり。人相もわるい
し、服装も、ガラも、競馬の連中に比べて
ひどいもひどい。むん／＼汗くさい電車に
押しあいへしあい乗つたときから足を踏ん
だの踏まれたのと早速のケンカをやつてや
がる。

電車がめざす駅につくが早いのか、ウワツと動物園の猛獣みたいに唸つてわれ勝ちのマラソン競走だ。その中を泳ぎまわつてゐるさくつきまとうのが、予想屋のアンチャン連中だ。

「トヤ、一枚！」

「ワイとこのんは確実やぞ」

「本命はこれやで、おつさん、買うとけ」

るも要らぬも問答無益、インクだらけのガリ版刷りの予想表を、手あたり次第、すれちがい次第、こつちの手に押しつけ、ポケットにねじこみ、十円札三四枚をうむを云わさずまきあげる。そんなに確実に一着がわかるぐらいなら、わざわざ赤の他人に押しつけないで自分で車券を買い占めれば大儲けができるのに、どうも妙な親切を押しつけるやつが多すぎる。

なんしろ、僕の家から目と鼻の先にある西宮競輪場じや、一回四日間で四万から五万人が殺到して車券の売上げが一億五六千万円、ちよいと離れた園田で、二万四五千入、八千二三百万円というんだから、なん

ぼ世間で競輪をやめろとさわいでも、押し
 かけるバカの方がダンゼン多いんだから手
 のつけようがない。それをあてこんで、有
 名無名の何十種かの予想表がバラまかれる
 たいがいにはタヨリないハツタリ予想で、買
 うやつがアンボンタンだが、中には山田と
 か安田とかいう当籤率百パーセントという
 確実なものもある。そのかわり、普通のが一
 枚二十なのに、山田のは一枚四十円、安田
 のは一枚百円、それがどつちも一ぺんに二
 百枚ぐらいペロリと売れちまう。それも朝
 九時からお昼前まで正味三時間足らずとい
 う盛況だ。

その安田や山田の予想表にだつて、わが



愛するマサちやんの名はたいてい本命か、それに近いところに乗つてゐるから凄い。内じや、お乳や太股をほり出して大の字に寝て、おふくろさんに嫁の売れ口があるかいなと心配させてるけど、競輪の方じや、女王様みたいにもてはやされてるらしい。どうも世間の評判つてやつはあてにならない声をからして群集の中をリスのように駆けまわる予想屋のアンチャン連中と別に、もう一つ、汗だらけで眼の色かえて逃げまわるアンチャン連中がある。追つかけてるのは、私服と制服いりみだれての警察の旦那方。つまり競輪名物の車券屋検査の実況だ。車券の場外売りも御法度になつてゐるがうまい汗が吸えるからなか／＼根絶しにならない。車券一枚で十円か二十円の手数料をとつて、サービスするだけならまだしもひどい車券屋となると、客から頼まれた金で車券なんか買わず、そつくりポツポヘナイナイしちやうんだから、立派な詐欺横領だ。これをノミ屋というんだそうだ。

そうかとおもうと、ノボセあがつてゐるカモのふところを黙つて頂戴するスリ連中もワンサと活躍している。警察も頭痛ハチマキだ。

キだ。

とにかく客種のガラもわるければ、それにタカル蛆虫みたいなやつも多い。どつちにころんでも競輪つてやつはこまる。こまるけれど、貧乏世帯のやりくりに苦労さんたんの市や町では、ころつと大金がころがりこむ競輪のアブク銭で息をついてるんだから、やめるにやめられない。わあわあ、ぎやあぎやあと豚小屋が台風でこわれたような競輪場のさわぎの中で、僕はポケットに車券をねじこんだまゝ、マサちゃんの出走するのをいまや遅しと眼をむいて待つて

いる。

レースといったつて早く云えば、人間が自然の二本の足で、自転車、馬の足を踏んで競走するだけのことだ。大枚の賞金でも賭けてなきや、こんなアホらしいものを誰が血眼で見物しに来るもんか。競馬なら、サラブレッド種だのなんのというすばらしい馬を見せられるだけでも値打がある。騎手だつて、きりつとスマートな小柄な男前が、拍車のついた長靴をはいて、鞭をふり乍ら出てくるんだから、なか／＼感じがいい。いくら騎手がうまくつても馬がだめなら負けるし、又、いくら優秀な名馬でも、騎手がへぼなら勝ちつこない。人と馬の呼吸がぴたり合つて、砂煙をあげてゴールへ殺到する……馬と馬の鼻が並んでせりあるときなんか、なんとも云えぬ昂奮で、われをわすれる。この面白さは競馬でなきや味わえない。インチキや八百長をやる隙もない。正々堂々たる勝負だから実に気持ちいい。

さて……スタート！

七人の選手の並んだ真中がわがマサちゃんだ。蹴球のときのような皮の帽子に袖の短いセーターに半ズボン、マサちゃんの背番号は15号、パンと出発の合図もろとも滑り出した銀輪のトップだ！。ダッシュ、ダッシュ、うわーつと広い競輪場が破れるような喚声の中で、マサちゃんは必死にペダルを踏んでいる。

泥除けもブレーキもない競走用の自転車は見るからに軽快だ。ひゅつと風を切つて眼の前を燕のように飛び去る七台の自転車予想表ではマサちゃんより強い選手が二人も居る。

二周目、ぐん／＼スピードの出た6の背

番号の一台がマサちゃんを軽く追いぬいた三周目次の一台がマサちゃんと肩を比べた背番号は8、このレースの本命の選手だ！

ところが、どうしたのか、8がマサちゃんを十メートルもひき放したとたんに、ぶつんとするどい響がすると、チェーンが外れて吹つとんだ。みる／＼落ちるスピードその間に6がトップを独走する。

「うわあつ、インチキだ、八百長だ！」満場総立ち、役員席から真青に顔色を変えた四五人が蝗のようにバラ／＼と駆けつけてきた。瞬間のことだが、もう拾収がつかない。

いきり立つ観衆のためにレースはめちやめちやになつてしまつた。

三

「どうしたんだらうね、昨日のさわざは」翌朝、裏庭に出てラヂオ体操をしているマサちゃんに、僕は声をかけた。朝寝坊だから歯ブラシをくわえたまゝだ。

「え……、まだ警察で調べられてるわ、どうもインチキ臭いんですつて、あの8番の人本命確実だつたんですもの、車券を買った人が承知しませんわ、なんだか、あのレースにはからくりがあつたらしいの」「だつてチェーンが外れるのは不可抗力じゃないか」

「ええ、本人も不可抗力だと言ひ張つてるんですけれどね、レース前には車体の検査をするはずだわ、どうやら、あの二着の6番の選手を一着にするために、わざとチェーンを切つたんじゃないかと疑われてるのよ」

「でも、それじゃせつかく一着の確実な自

分が大枚の賞金を逃しちまうじゃないか」

「そうよ、でもね、競輪の選手というものは、主催の自転車振興会の役員にかゝつたら弱いもの……、いくら八百長やインチキがいやだとおもつても、役員がこうしろと強要したら泣きの涙で従うより仕方がないのよ」

「は……あ、つまり、マサちゃんを追いぬいた6番の選手を一着にして、番狂わせの賞金をせしめる八百長だつたのかい、」

「ええ、私をあのレースへ割りこむように手配したのもそのインチキを見破られないトリックらしいの、昨日あれから私も参考人として警察へよばれたけど」

「マサちゃんはむろん青天白日じゃないか」

「もちろんよ、でも見えすいたインチキの道具に使われたのに気がつかないで一生けんめい走つたかとおもうと續にさわつて仕方がないわ」

「いやな世界だなあ」

「そうよ、こんなことでゴテるのは始終なの、なんだつて自転車振興会つてのは、結局自転車屋のおやじさんの組合だし、役員のなんのといばつても結局二十二三才の自転車屋の番頭や小僧だし、第一競輪の選手そのものだつて、十七八から二十四五、そんなに教育のあるものなんていやしないもの」

「マサちゃんもいゝかげんに競輪の選手なんか辞めちまへよ」

「そうねえ、いやになつてるんだけど、けれど、他に何か毎月二三万円私にとれるお仕事があるかしら」

「事務員はどう？ソロバンや簿記ぐらい出来るだらう」

「だめよ、お給料が五六千円でしよう」

「それじゃ他に」

「まあ、パンパンぐらいいかしら、いやだわねあたしこゝろ見えたつてまだ処女なのよ」

「ふうん、まさか」

「あら、嘘じゃないわ、アプレ娘だつて貞操の意味は知つてゐるのよ」

「だつて、マサちゃんも、始終巡業に出るじゃないか、若い男と女の選手が一緒に旅に出て、合宿すること多いんだから、恋愛なんかよくあるとおもうがねえ」

「だめ、競輪の選手同志が恋愛しちゃ、レースに全然自信がなくなるの、結婚したらもうだめよ」

「どうして？」

「うふふ、競輪の勝負は結局心臓と腰のねばりが物をいうのよ、もしも、たいせつなレースの前の晩に、アレをしたら、心臓もつかないし、腰の力も抜けてしまいますもの」

「ほんとかい、そりあ？」

「うそじゃないの、だから、いゝ選手ときたら、お酒やタバコも決して近づけないわ身体だけが資本ですものね」

「ふうん、不自由なものだなあ」

「能登さんなんかは競輪の選手になれつこなし！お酒は強いし、タバコはお尻から煙が出るほど吸つてゐるし、奥さんにはあまいし」

「おい、こら！」

すつと手を伸ばしてマサちゃんの手を握ろうとしたら、

「奥さんが見てらつしやるわよ」

マサちゃんはにつこり笑うと、塀にたてかけてあつた愛用の自転車にひらりとまたがった。

(終)

あけぼの 曙は湖に似たり



井村幸男
森あきら

日本敗戦前夜のシンガポールに起つた奇怪な將校殺人事件。その蔭にはフランス詩人ルネ・ギルの詩集「ル・パントウン・デ・パントン」を奇縁とする日華馬人の友情の物語があつた。

カセイ・ビルは前の芝生に細く長く影を落して、大理石の玄関の片隅にオラン・ジヤガ(番人)がスツポリ頭からサロンをひつかぶり小気味よくいびきをたてている。ついさつきまで騒々しかつた街々も、シンガポール唯一の大繁華街大世界の閉門と同時にビタリとうそのように静まり返り、国際都市シンガポールは深い眠りに落ちていた。

昭和二十年八月、敗戦前夜のことである。パタ、パタと、ありなし風にはためく機帆船の帆の音と、ざわめく椰子風の絶え間をぬつて、キィ、キィと、ろの音を忍ばせながら一隻のブラウ(土人舟)が鮮やかな夜光虫の水脈を残して、静かに本港から程遠い焼けただれたある華商の倉庫裏の岸壁にたどりついた。

やがて——そのブラウから息をはずませて一つの影が岸壁をよじ登り岸に突ッ立つた。そして、ホッと大きく一息つく、その影はしばらく点滅する燈台の光を放心したようにじつと見つめていたが、思わず手落したクリス(短剣)のとよめきに驚き急にかがみ腰になると周囲を見渡し、素早く倉庫裏を抜けて小走りに港本通りを横断して街に出ていった。

霧の深い夜更けだ。ポーッと外燈に照し出された影は青いイ

ゲタ模様のサロンに赤茶けたバジュ(上衣)をひっかけ、頭に白いソニコ(トルコ帽)をかぶつていた。目の大きい、ほりの深い鼻筋の通つたみるからに精かんそのものの顔立ち。無難作に腰に突きさしたクリス。どう見ても土地の人間とは思えない足の運び振り。ジャワ人でもなさそうだ。年恰好は二十五、六か——。

間もなくその影は、民家の軒下を伝わつていつか霧の中へひよう然と消えていつたあれから十分もたつたらうか。カセイビルの真正面にある中華ホテルのベルを何者がかがしきりに押している。

しばらくして、二階の北隅の部屋に電燈が灯つた。スリッパをひっかけて階段を降りてくる人の気配。

「今時分誰だい? 朝来りやあいいに」
眼をしばたき、ぶつぶつこぼしながら「誰だい?」

さびついた鉄の鉄子扉を開いてのぞいた顔。どじようひげのひようきんな丸顔のマレー人。

「俺だ、サム!」

「?.....」

「俺だよ! 山崎だ!」

「ヤマザキ? おおトアン・ヤマザキ!」

山崎と聞いたとたん、眠たげな顔が急に一变、驚きとも喜びともつかない表情になつてひげをビクリと動かせ、

「サア入つて下さい、待つていたのです!」



手をとつて、ひつぱりこむように内へ招
じ入れた。

今宵は何故か霧が深い。シンガポールに
しては昨今にない珍しい濃霧だ。それで
も、明けやらぬ夜のとばりに一ツ、二ツ、
星のきらめきが木の間に鈍い光を放つてい
た。

中華ホテルの二階の北隅の灯は一こうに
消えようとしな。時折長い余いんを残し
て鳴くトツケイの音が、かすかに耳に入る
カセイ・ビルの表玄関に寝そべっているオ
ラン・ジャガは相も変らずおだやかな寝息
をたてていた。

二

「私も、英蘭も、もうあなたは亡くなられ
たものばかり思つていましたよ」
「どうして、またそんな……」

「便りはこないし、それに中井大尉がトア
ン・山崎らの転属部隊の乗った艦は、シン
ガ・ポールを発つてすぐアメリカの潜水艦

に出くわし、魚雷を喰われ成仏してしま
つた、あきらめるんだなどと、しきりに英
蘭にいつていたそうだから……」

「そうか、そうだったのか、どこまで中井
大尉のやつは非道なことをしやがるんだ、
手紙だつて毎日のように出した、しかし、
どうせ検閲の際に中井のやつが破り捨てて
いたんだらう」

ワヤン・サラサ（影絵を織りこんだジャ
ワのしゅう布）が、すすけた壁に一枚張ら
れ、窓際にわら寝台が一つ、窓のちやうど
上には、今にも落ちそうな棚がかかつてい
る。たつたそれつきりの粗末な四畳ばかり
の部屋。

二人は寝台に腰かけたまま何から話し出
していいのか思いまどつてゐるふうであつ
た。

「この部屋は以前物置だったな……」

「そうですよ、榮林大人の死後、このホテ
ルを買収したのはアラビヤ人ですが、こい
つがとんだ守銭奴でしてね、ジョン・ゴス
（下男）なんぞは物置で結構だといふとな
ろへ押し込まれてしまつたんですよ……そ
うそう熱いコーヒーでも入れまじようか」
サムはうろたえながら部屋を出ていつた
何という静かな夜だらう——。

つかれも忘れて山崎は、じつと窓に映る
カセイ・ビルの屋上をなつかしげに仰ぎみ
ていた。その眼にはいいしれない熱い涙が
光つていた。

しばらくしてサムが、どこでどうして手
に入れてきたのか、サントリーを右わきに
かかえこみ、両手にピーサン・アンボンへ
アンボン島種の小さいバナナをぶらさげ
て帰つてきた。
「コーヒーがサントリーに化けたじやない

か」

「この方が温りますよ、夜明けは冷えます
からね」

二人は杯を重ねるうちにいつか心の平静
さをとりもどしていつた。

「覚えていますかトアン、〃曙は湖に似た
り〃を——」

「覚えていゝとも、どうして忘れよう、サ
ム久し振りで一つ唄つてくれないか」

軽くうなずいたサムは、棚からはこりの
かぶつた古びたギターをとり出した。

あけぼのは、湖に似たり

こゝろ、かしこ、鼓の響き

朝の日の、昇る洲より

来し友の、我が門をたたく

面伏せて聞き入る山崎、ギターを手にむ
せぶように唄うサム。語尾がかすれて声に
ならない、二人は云いあわしたようにあふ
れ出る涙をおさえた。

旅に出るのか、夜明けが迫つたのか、コ
ブラ師（コブラを笛にあわして踊らしなが
ら転々と流浪する露天商人）の吹く奇妙な
笛の音が、二人の胸底にいい知れない哀愁
をさらに深くきざみこんでいつた。

三

話は三年前にさかのぼる——。

昭和十七年の七月であつた。帝大から学
徒出陣の一員として軍籍に身を置き、陸軍
少尉に任官すると同時に南方戦線に追いや
られ、シンガポールに上陸した山崎は、あ
る日の夕暮、街中で思わぬスコールに出合
い、ちやうど通りかかった中華ホテルの軒
下に飛びこんだところ、明け放たれたホテ

ルの二階窓から「ル・パントウン・デ・パ
ントウン」を朗読する静かな声に思わず耳
をとめた。

「ル・パントウン・デ・パントウン」はフ
ランス詩壇にあつて最も難物といわれ、一
種独特の詩風を以て知られた詩人ルネ・ギ
ルの詩集だ。

しばし山崎は、ともすると雨音にさえぎ
られようとするその声に耳傾けていた。眼
を閉じれば、かつての大学に居た頃、ルネ
・ギルについて聞かされた辰野監教授の顔
が臉に大きく浮びあがつてくる——。

雨は一こうに止みそうもなかつた。カセ
イビルの前の芝生は快く雨水を含み、並木
路のパパイアの葉が、黄昏のひととき、し
たたるような新緑をあざやかに描きだして
いた。

「もうやがて止むでしょう、一休みしてゆ
きませんか」

不意にうしろで声がした。驚いて振り返
えると、古風なねずみ色の支那服のよく似
合つた白髪中国人が一人葉巻をくゆらし
ながら笑つていた。

聞けば、この中華ホテルの経営者吳榮林
とのことであつた。和とやうな慈愛に満ち
た眼差し——それはちやうど徳川夢声さん
を偲ばせるやうな風ほうだ。

「さつき二階でル・パントウン・デ・パ
ントウン」を朗読されていた人がありまし
たが、どなたなんですか？」

「聞かれましたが、こりやあどうも——」

「ではあなたが——」
「ええ、ギルの詩が好きでしてね、若い頃
フランスにいましたが、その当時よくギル
を訪ねたものです。ある時漢詩を教えると
いわれたことがありましたが、フランス語

にも自信がなく、どう説明していいのか迷つてしまつて困りましたよ」

「私もギルの詩は度々読んでみました、が非常に難しくつて閉口しました」

「ほうギルをご存じでしたか、こりやあいい友達が出来た、そんな軒下でおられずまあ中へ入りませんか」

云われるままに山崎は、呉榮林に従つて二階の中央の応接室に通された。

そう広くもないが、ロタンテーブルにかけられた純白の布、壁にかけられたジョーホルの風景画、黒たんの飾机の上には孫文の肖像画が立てかけられている。天井にはゆるゆると扇風機が舞い、窓のカーテンをはためかせていた。

「マレー半島もそろそろ雨期に入りますよこれからは四六時中今日のような雨が降ります、いやですね雨は……それはそうと日本でフランス文学にぞうけいの深い、何とおしやつたかな……そうそう思い出ししました辰野大人は今なお元気でですか？」

「ええ、ご健在です、辰野さんは私の大学時代の恩師です」

「そうでしたか、道理でよくギルをご存知なのですね」

「それじゃあ吳大人は辰野さんとはお知り合いなのですか？」

「いやいや直接はお会いしたことはないのですが、ギルから度々うかがっていましたから……」

「そういえば辰野さんも一度ギルを訪ねられたように聞いていました」

「辰野大人とは同じ頃に私フランスにいましたが、親しくお話しする機会を得ませんでした立派な方だそうですね、ギルが非常に讀えていました、この戦争さえなければ

★會とまこと神道★宗教キエロインチに玉槍

女學生集團裸体寫眞事件

伊勢神宮を舞台として、多くの無垢の處女を集めて素ツ裸にした上、自分らは酒氣を帯びて此の裸体群像を思うまゝに鑑賞し、寫眞まで撮映する惡趣味に堪能した男達が神道という假面で巧妙に偽装されたまゝ世間から少しも怪しまれなかつた事件が、闇から闇に葬り去られようとしている。私はその辱しめを受けた一人として、こゝにその實情を暴いて、敢て世間に公表したいと思う。

忘れもせぬ昭和十八年十月の末秋も一しお深まつた頃私の在學していたK女專は他校に率先して勤勞動員隊を組織することになりました。

私たち最上級生四十一名の級主任青木先生は生れながらにして軍閥と同じ思想を持つた人かと思われるほどで、神道「まこと會」というインチキ宗教の熱心な信者でした。

「まこと會」の香山布教師の言うことは神の命令のように少しも疑わず信賴していました。動員隊組織の提唱者も青木先生で、いよく講義打ち切りという日、香山布教師を講義室に案内して「まこと會」の教義を説明させました。この時始めて一同は香山師を見たのでしたが、思つたより若い色白の柔らかな顔付、弁舌が巧みで多分に入をひきつける力をもつていまし

た。彼は慎み深く講壇に上り静かに口を開きました。

教義の説明をするにも古事記や中国の古典を引用するかと思えば、バイブルの一節まで引合いに出したり、ドイツ青少年の精神運動など紹介して一見豊かな教養ぶりを思わせるのでした。

青木先生は頬を紅潮させながら私たちの集團入会を勧誘しました。みんな香山師の講演に魅せられたらしく、誰も異議を唱えるものもなく私たちは一斉に入会することになりました。

入会式も学生のことだから、一般の場合とは違つて、香山師が司祭となり青木先生が信者代表として「トギミタマ」と称する儀式をとり行い、私たちが見學するだけで済ますという略式が採用されました。

午後八時から運動場で香山師の唱える呪文に合わせて、青木先生がバケツに汲んだ冷水を浴び、両者の気合は漆黒の闇にこだまして冷たい空気を震わせました。私たちはこの光景を固睡をのんで見守つていまし

まきの加代

たが、やがて香山師の發言で唱文の一節を教えられ、意味は解らぬながらも「トギミタマウマシ神の御子、タマサヤカマデアキラ、今日よりはウマデ御子」と全員唱和して儀式を終りました。

動員は近くの計器工場に割当てられましたが、通勤の出来る十名ほどを除いて、他の者は青木先生の指揮で狭い寄宿舎の一室を借り雑魚寝をして毎日働くことになりました。休日は月に二回、食事も宿舎も極めて不便な上に仕事もなか／＼楽ではありませんでした。

この工場の寄宿舎に香山師が訪れて講話を行い、私たちを励ましてくれたのは動員後二十日目の頃でした。

私たちが相当熱心な信者となつたのを見た香山師は満足そうに喜び、休日を利用して、全員伊勢神宮へ感謝旅行をする計画を発表しました。私たちはこんな多忙な時期でも參宮旅行が出来るということを子供のように躍り上つて喜びました。中には「ま

一度日本へ行つてみたいと念願していたのですが」

夕闇の迫るにつれて雨は次第に小降りになつていった。窓から流れこむさわやかな雨あがりの風が紅潮した二人の頬を撫ぜる。二人は、こうしてウイスキーをくみかわしながらルネ、ギルの詩を中心に時の移るのも忘れ語らい続けるのだつた。

四

以来、山崎は毎日のようにホテルを訪ねた。そして、ルネ・ギル独特の畳いん法とか、唯一制作などについて呉榮林と楽しく論議し合い親交を重ねていったのである。

山崎には両親がなく、それに大学までやつてくれたたつた一人きりの叔父も、大学を卒業するとすぐ病死、まつたくの天涯孤獨の身であつた。そういった環境からか、呉榮林をいつか、まるで父親のように思うようになつていた、と、同時に、呉榮林には十八になる一人の娘があつたが、その娘英蘭ともやがて結ばれ相思相愛の間柄になつていた。

サムは呉榮林のジョンゴスだつた。英蘭が生れる以前からこの中華ホテルに住込み英蘭の母が産後死去して後は、乳母同様に何くれとなくめんどろをみてきていた。生れはセレベス島のマカッサルでブギス族の血を引いたマレー人であつたが、勤勉で正直な人柄が買われ、呉一家の一員として好かれていた。

サムはギターが得意であつた。誰に教えられたものでもないが、音楽的な天分に恵まれ、ちよつとした作曲にも自信をもち、特にマレーのパンタウン（四行詩）の即興曲はうまかつた。年はもう三十五、六にも

こと会」の信者なるが故にこの幸せがもたらせられたと信じ込んでいたものもあるという仕末で、香山師に対する信頼は「まこと会」の布教師に対する信頼以上に純な乙女心をひきつけて行くようでした。香山師は救世主のような尊敬を受けるようになりました。

祖国心勝の祈願旅行だといふので当日は午前中に作業を切上げ、打ち揃つたモンベ姿も勇ましく青木先生の同僚森教官も同行して工場の門をトラツクで乗出すという景氣のよさ。香山師は旅館から直行して駅で待合わせ、宇治山田まで三時間半、心も晴々と車中の人となりました。

外宮を経て内宮に到着したのは暮れやすい秋の陽もとつぷり落ちて夕闇迫る頃、境内は幽玄の極み、千古の森は咳音一つ聞えぬ静けさ、肅々と玉砂利を踏んで大廟の御前にぬかづきました。参拝を終えて感極まり心は無念の清々しさ、一時間後には世にも汚らしいストリップショウが行われるとは誰が想像し得たでしょう。

宇治橋を渡つて神苑を去るのが惜しまれるような気がしました。そこから二十分程で私たちはいよいよ「まこと会」の本部に招じ入れられました。

何という素晴らしい建物でしょう。木の香りも真新しく、一かかえも二かかえもある大きな白木が積重ねられ外見は清楚な神殿

作りの風格をそのままに、規模は豪壮雄大な浅廊様式、内部は宮殿のような善美が施されてありました。地上に出現した神の国か、龍宮か。

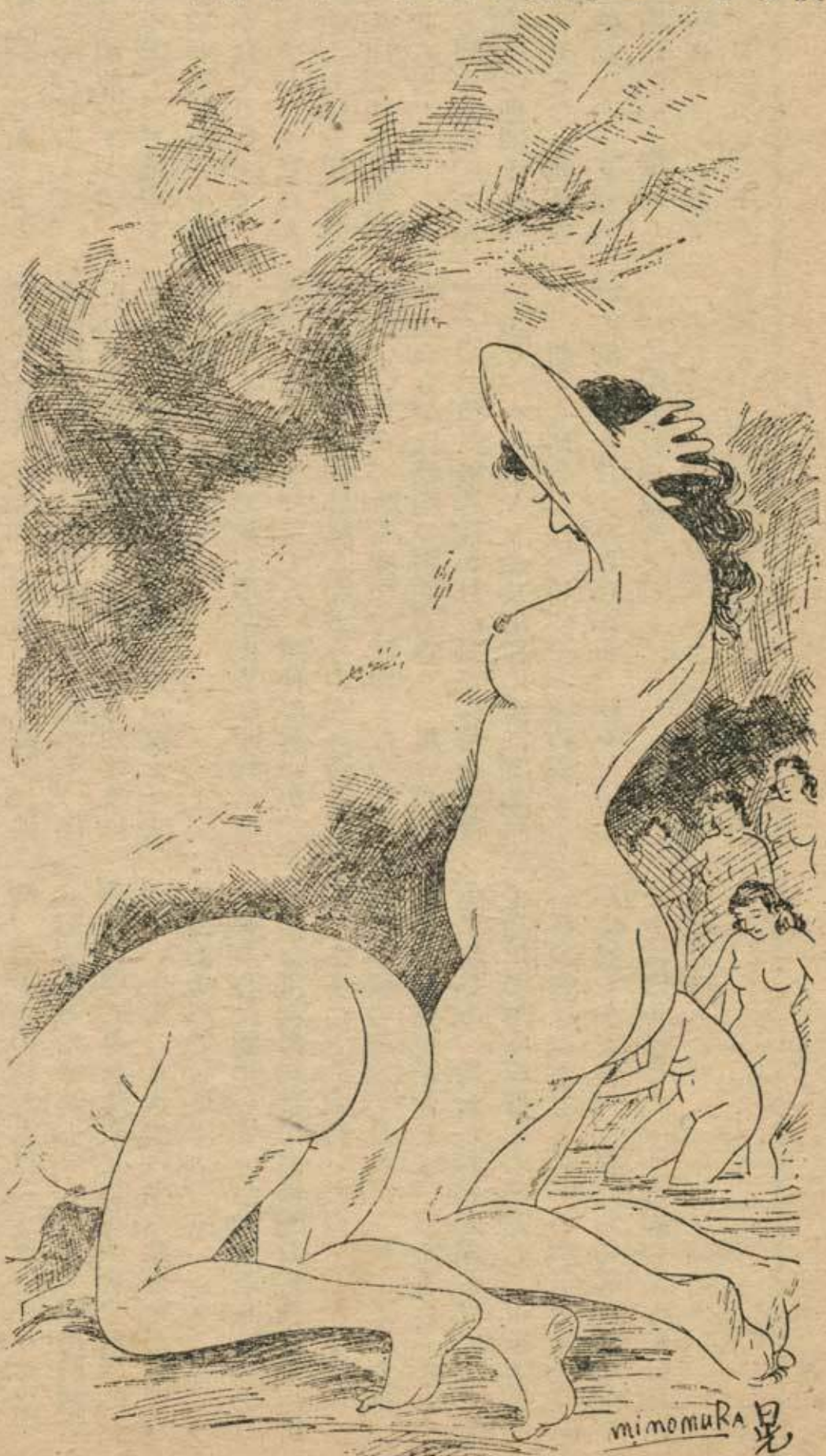
「ここは正面本館ですが、大講堂、資料館、総理公館などは明日ゆつくり参観して頂きます」

香山師の言葉に私たちの見たところはほんの一部でしかないことが解り、さらに驚きを重ねるばかりでした。香山師の役柄は地区総務で高級幹部の一人ということ、まるで勝手知つたわが家の様に無遠慮に歩き回り、緑色の袴を着けた私たちと同年輩の女性を下女のように厳しく言付けたり、知合いの幹部らしい人と大声を挙げて笑い合つたりしていました。

私たちは神宮参拝の感激をそのままに、

ここも神苑の中であるような感じでしたので、香山師のあまりにもくだけた態度が神靈を冒瀆はしないかと思われるほどでした。しかし、それよりも彼の快活な態度がかえつて、大神の使い、神とともにある者に見え、神の御子はあんなにもおおろかで不必要な緊張はしないのだと感心してしまつたのは、信仰に捕われた者の錯覚とでもいうのでしょうが。

と、見る間に香山師は衣冠束帯神主姿となつて現われ、厳かにしかも簡単に呪文を唱え、私たちに唱和させた後、おもむろに「皆さんはすでに神道の道に進まれた人たちばかりで、一般参詣人と違つた手厚い取扱いを受ける資格があります。しかし皆さんが学校で入会せられたのは仮入会で儀式も略式でした。当夜はまこと会で最も格式



なつていたが、呉榮林が再三嫁を世話するからといつても、

「私の女房はこのギターですよ大人、それよりも早く戦が終わつてトアン・山崎と英蘭さんに結婚してもらわなくては……」

と、拒むのである。

サムはまた唄が上手だった。

Din hari sama-dionga tasiki

Disinisana ghendang di-palon...

Darinagrl, mata-hari naik

Di-poukoulaiak awan sana pintou

「囀は湖に似たり……」——これはルネ・ギルが逸興として愛謡していたジャワ語のバントウンで、サムがこれに自ら即興曲を付してギター片手にマレー語で唄えば、

あけぼのは、湖に似たり

ここ、かしこ、鼓の響き

朝の日の、昇る洲より

来し友の、我が門をたたく

と、山崎は日本語に訳して合わせる。

L'aurore Pareilleanniae: ici,

la-bas, FontaPeda Tambour...

Venu du Paya Soleil-Levant,

un Ami frappe ama porae.

父榮林に仕こまれて、フランス語の達者は英蘭がこのあとをつぎ、フランス語でさらに唄い続けるのだった。

「ル・バントウン・デ・バントウン」によつて結ばれたこの四人の明け暮れは、戦争などまつたく忘れ去り、まこと平和そのものであった。

が——山崎が呉一家と知りあつて半年ばかり経たころ、港近くにシンガポール在住の一部の華僑たちの経営で、日本軍慰安のため「コロンドン」や「シンガポール」というバーができたその折ミス・シンガポールとまでいわれ評

の高いトギミタマの儀をとり行い、心身ともに神の御子として清浄な人生を送つて頂きます。これにまさる幸福がありません。か。式場は神苑に接した五十鈴川に設けてあります。大分時間も遅くなりましたから直ちに本館講堂で弁当を召上りなさい。これも皆さんのため事務当局の特別の許可を得ておきました」

と言つて、青木、森岡先生と何事か打合せている様子でしたが、間もなく両先生を伴つて事務室へ入つて行きました。

弁当もほぼ終りかけたころ、私は同級生二名とお茶の手配をするため、事務室へ行き青木先生を呼出し、「お茶を頂きたいのですが」と依頼しました。

お茶は「まこと会」の流儀で白湯を用いるとのこと、木桶に熱湯がナミ／＼と入れられ、手洗杓子で汲み出すのでした。この時香山師と両先生は神酒を頂いておりましたが、両先生が正座しているのに反して、香山師は冗談など飛ばして胡座のまゝで、ぐい／＼杯を傾けているのです。ご馳走もどつさり小机の上に並んでいました。もはや香山師は神官の礼装をかなぐり捨てて、白給の下着だけになつていました。私はお茶桶を運んで来て、同級生たちにお湯を分けてやつている時も、「香山師はお酒を飲んでいたらよ」とは言えませんでした。

食事と休憩で一時間ほど経つた後、こんどは山伏のような水色の帷子に鳥帽子姿の香山師に引率され、星一つ見えない密林の中の細道をたどつて五十鈴川辺に下り立ちました。使丁さんが二カ所に松明を燃やしたので暗さに慣れた眼はまぶしい程でした。香山師は一段高い所に立つて「トギ

ミタマ」の儀式の順序を説明しました。周囲のあまりにも神々しさに魂を奪われていた私たちは、それがどんな異様な行事であろうと、何一つ不審がる気も起らなかったのです。香山師は「衣服を脱ぎ手拭い一本だけ持つて浅瀬へ下りなさい」と命じました。

頃は十一月の末、さなだきに冷え／＼とした溪谷を流れる風の寒さ。今、神の国の扉を開けるのです。香山師の声は人間の声でなく神の声と聞える。上衣を脱げば清冽な神国の気流が背筋を洗い、モンペをはずせばスーツと夜の国の陰気が素脚を撫でる。現世界の肉体に一顧の価値をも認めなくなつた、迷える小羊たちの白く柔い腕にも股のあたりにも、粟粒をばら撒いたように鳥肌が立つて血の気をさらう。松明は永劫の御神火と見、いよ／＼赤々と燃え盛り、遠慮会釈なく青白い肉体を照らし始める。恥らしいの五体は否応なしに神の命令のままにまとえるものは何一つ余さじと一枚々々がされて行く。

最早この過程で脱ぐ手を止めなければならぬところまで来ても、魔神の誘いか、処女ばかりの個体は人間並みの羞恥心を奪われている。一物も身につけなくなつた四十個の立像は松明の照明で赤く、星の光で青く、二色に染め抜かれた妖奇裸形の悪魔の如く、さら／＼とせせらぎの音に導かれて、何人も命令しないのに、「神の御子よ神の御子」と口ずさみながら、膝を没する水流の中に身を進めて行く。

折しも、香川師は燃えさかる松明を一本抜取り、水流の中程に露頭した小岩の下に

立ち、私たちを呼び寄せました。松明で大きく輪を描きながら唱える呪文に合せて、六、七人ずつ小岩の上に立たせられた女たちは東西南北、天神地神合せて六回の祈りを捧げ、その度ごとに右手を頭上にさしあげて狭い小岩の上を立回り最後に髪を清流で洗いました。洗髪は岩の上で四つに這いならなければならぬので一番苦勞でした。香山師が松明を振回しながら唱える呪文は一刻の猶予なく、この期に及んでは躊躇する心のゆとりも消え失せている。全員は見すべからざるものを香山師に充分見せてしましました。最後の七人が今しも小岩の上に色々なポーズをとつて必死に洗髪している時……

突！あたりに異様な爆発音と閃光がひらめきました。香山師が写真を撮らせたのだ二回目フラッシュが稲妻のように光つた時、岩の上の裸たちは「イヤ」「キヤッ」「写真撮るのやめて」と叫んで寒冷肌刺す清流の中に身を沈めました。せせらぎに立つていたものも水流の中へ身をかがめざるを得ませんでした。

神の心に同化していた乙女たちは、この神聖な別世界が実は俗世間を偽装した一場面であることを気付いたのでした。この場の空気が乱れたと見てとつた香山師は狼狽の色をなして、自らもざぶんと水中に躍込み、裸女たちの先頭に立つて、五十鈴川の深みを探して突進して行きました。香山師は「まこと会」の唱文を音吐高らかに発しましたが、私たちの唱和は以前のように澄みきつた一つの声のようには揃いませんでした。(終)

判であつた英蘭は、華僑連合会の推せんで歌手として出る事になつた。はじめは、蓬らつてなかなか応じなかつたが、山崎のすすめでようやく舞台に立つ氣になつたのだつた。

唄は「テラン・ブーラン」月光が得意であつたが、サムの指導よろしく何でもよく唄いこなし、それに山崎から日本歌謡も二、三教えられて知つていたから、たちまちシンガポールに在住している日本人たちの間に人気はあふれ、誰一人知らぬ者はなくなつた。

ろうのようなキメのこまやかな肌、整つた目鼻立ち、はちきれそうな胸の線——椰子油臭いマレーの女ばかりを常日頃見かけている日本人たちにとつて、美しい、白ばらにも似たこの英蘭の出現がうわさの焦点になつたのは当然であらう。



「英蘭を誰が一番好きにおさえつけるかな？」

こんな会話が、口きかない兵隊たちの間にかわされるようになつた。

そうこうするうち、特にこの英蘭に目をつけはじめたのは山崎と同部隊の中井大尉であつた。

中井大尉は部隊でも折紙つきの横暴な将校で、誰からも好感はもたれていなかった。また非常な好色家で陸士出の職業軍人ではあつたが、中国各地を転戦していた間、さらにシンガポールに上陸して以来も、将校という肩書にものをいわせて幾多の女を手ごめにかけて泣かせてきていた。

そんな彼であつたから、英蘭を見逃すわけはなく、夜毎「バー・コロンチヨン」へ

出かけて、ひつこくつきまとい口説くのにわれを忘れるようになつた。

ところが、英蘭が部下の山崎少尉と許婚の仲であるという事を知つた彼は、山崎さえこのシンガポールに居なければと、しつとに燃え、もつて生れた悪らつた性根をむきだしにして、何かにつけ山崎に難くせをつけ、果ては部隊長にたくみに喰ひ入り山崎と英蘭との関係に、ありもしないスキヤンダルを飛ばし、いや応なしにジャワ島へ転属させてしまつたのであつた。

五

山崎が転属命令をうけて赴任したのは、ジャワ島のバンドンであつた。この町はバ

あきら

イテンゾルフ植物園を背景にした古色蒼然たる詩的な古都だ。

命令には絶対服従しなければならぬという軍規にしばられ、中井大尉に対する復讐もならず即日、英蘭とも、榮林ともまたサムとも一言も交し合うことなく、そのまゝシンガポールを後にしただけに、山崎の心は日夜千々に乱れ、いても立つてもおられない焦燥にかられるのだつた。

かくて——昭和二十年も六月に入つたある日、山崎は、六カ月余り行商のためシンガポールへ密航していたというバンド

ンの華商、黄源盛という男から思いがけなくサムからの手紙をうけとつたのである

あなたの転属地は兵隊たちのうわさでバンドンと知つていましたが、いくら便りをしても返事がなく心を痛めています。若しこの手紙があなたの手許にとどけばこんな嬉しいことはありません。

しかし私はあなたに悲しい報せをせねばなりません。それはあなたがシンガポールを去られて間もなく、呉大尉と英蘭さんはフランス語に詳しいという、ただそれだけの理由でスパイ嫌疑をうけ逮捕され、呉大尉は昭和十九年の暮に獄死されたといふことです。

英蘭さんは今もなお冷たく暗い獄窓にあつて、あなたのみをただ一途に慕ひながら苦悶し続けているのです。呉大尉が大事にしておられた数冊のルネ・ギルの詩集も日本憲兵のために焼き捨てられました。

これはすべて中井大尉のさしがねですがあなただけは呉大尉一家がスパイでも何でもないことを信じていただけのものとします。

どうかふびんな英蘭さんを一日も早く助けてあげて下さい。——サムより——

この手紙をとどけた黄源盛は、呉榮林とは遠い親戚関係にあり、共にフランスに留学するとともに、聞けば、故郷福建に帰省した後もお互に遼南の志を立て、一人はジャワへ、一人はシンガポールへと旅立ち二十年振りの再会を楽しみにしていたといふ。

「それなのに、スパイなどと疑われ獄死したと聞かされた時は失心しました。その上一人娘の英蘭までが今もつてつながれの身

女闘美 隨筆 四股を踏む娘ら

土俵四股平

「美しいなア」私は座を立つて「桃の花」のあとを追った。

「先生、足違つてゐる？」桃の花こと山上正子は踊りをやめて振りかへつた。

「君の足がスゴク美しいからだ、おどろいたナ」

「こんな黒い足……」

「黒いよ、黒いから美しくないとはいえない、踊つていておくれバリ／＼と」

「でも調子がくずれちやつたワ、先生の罪よ……」正子は又踊り出した。

舞踊といえば大抵は白足袋をはいてゐるそれも裾からチラリ／＼と見せる程度だ、肌といえば顔と手だけだ、よく人三化七というが、これじや肌が一で衣裳が九だ、衣裳が悪いというのではないホド／＼にして欲しいのだ。

我が「相撲舞踊」は、白地に派手な蕨の模様をあしらつた浴衣に葡萄茶の兵子帯といつたいでたちで、足は素足であるのだ。最初の本誌でおなじみの北海千珠子に黒襦子の帯をしめさせてやらせてみたが、これでは落語家が寄席でやる余興／＼独り相撲／＼になつてしまふ、演出者は何といつても花も恥ろふ娘共なのだから……。

私は加茂三千彦のペンネームで小説に「みかえりの性愛云々」をかいた、このみかえりの心こそすべての芸術に必要な影であり香である。好きなればこそ、随分と女に相撲も取らせてみた、メトミ的な演出にはマキシマムに追込んでみた、しかしギリ／＼一杯が必ずしも美しいものでないことは、いつもそのあと味の悪さとあじきなさに、我と我が行きすぎに唾したい氣持になるのであつた。

夢は途中で覚めてこそ美しいのであつてエビログをキヤツチしては如何にざんないことであらう。ところが誰もおぼえのあることだが、サテ其現場に臨むと、ジリ／＼と終局を追つて一歩々々醜態をもいとわず無我夢中で喰下ろうとするものであるこれはメトミを絵に描く場合や文章にする場合に露骨化することにかゝる場の経験の少ない人に限つて、好奇心から一層その弊におちいりやすい、そこに変態が生じサジヤマゾが胚胎するのである。かくいふ私とて青年時代にはかかる氣持に拍車をかけた経験がなかつたとはいえないのだが、多年斯道を友として暮してくると、他人にたのまれ／＼ば凄いいものも書くものの、自分自身

として探求するメトミの「美の王国」には春風駘蕩な世界が現出するのである。とはいつても、お多福がゲラ／＼笑つて相撲を取つてゐる世界を想像して貰つちや困る、柳眉をさかだて、爪紅血走る闘いもある、しかし見ていて美でないものは其一瞬に「ノーグッド」として成層圏外へ放逐である私のモデル小説に登場する娘共、八重樫八重樫、恋衣の諸嬢も悪くはない、だが私としては講和後の日本人として、自称メトミ宗開山上人土俵四股平として、その歩みも部分的ではあるが時直しをやらうかと思つてゐる。東京都や九州のメトミ・フアンが読者がジャン／＼けしかけて下さつてゐる、そこで既に其スタートを去九月九日菊の節句に切つたのである。全国に散在する五百の教え子（妙齡の女子であるぞよ）に檄を飛ばして新メトミーズを募集中である読者でも女ヘンのついてゐる方は応募下さつてよろしい。

「先生！私どうなるの？」

しまつた。桃の花正子は踊つてゐるのだつた、芳紀十七、十四貫八百の健康体から生娘特有の芳香が汗ばんだ肌に渦を巻いてただよう、伴奏は相変らず「春雨の」和洋

これらすべてが中井という将校の英蘭をわがものにしようとする悪だくみが真相のこと。くやし／＼くつてなりませんよ」

一伍一什を涙ながらに語る黄源盛、英蘭の身を案じ切々と訴えるサムの手紙——。

山崎の心は憤怒に燃えたぎつた。

その夜更け——。ひどい嵐の夜だつた。

ごうごうと鳴りわめく椰子林、耳をつんざく雷光、肌うつ石のような雨、灯はうち消え、町はうるしのように暗い。このような闇と騒音に乗じて山崎は遂に兵舎を脱走した。

バンドンを下り、シンガポールへシンガポールへ——憲兵の捜査網をくぐつて、まる一カ月飲まず食わずでパンジェル・マシンからプラウに生死をかけて海上の人となつたのである。

このようにして——敗戦前夜、幸運にも順風に乗る、宿望のシンガポール海岸にたどりつくことが出来たのだつた。

六

ペンをここで再びもとへ戻さねばならぬ

中華ホテル階上、ジョンゴス・サムの部屋もう夜明けが近い。

「サム英蘭は今一体何処にゐるんだい？」

トツケイの鳴声に沈黙を破つて山崎が静かに口を割つた。

「カセイ・ピルの地下です。父榮林の亡くなつたのも知らずに」

サムは一たん見開いた眼を再び閉じてうなだれた。

ホテルは客もないのか、未だに物音一つ聞えない。主のアラビヤ人はセレターの妾

合奏だ、何といつてもこれが一番いいのだ
ピタリとくる、私が振付を最初この曲でや
つたのが悪縁？となつたんだ。其処へトン
／＼と階段に足音がして、昔左様をとつて
いた春奴サンこと岡島豊子さんが来る、つ
づいて若柳流の師匠福田一江さんが来る。
大入り札どめである。桃の花は多少かた
なつたが、でも度胸のある娘だ。お互に顔
見知りの間柄だし、一江さんが気軽に相
差しで唄い出すと一層元気が出てきた。

何といつても相撲舞踊で美しいのは塵切
りと四股踏みと仕切だ。片足を上げて廻
り投げを打つところもよいが、ここは精一
ばいで技にあとがない、力を出しきつてい
るので味がないのだ。桃の花もこの辺へく
ると、息苦しいと見えて胸乳のはずむのが
ツキリと分る。それでなくても動作が烈し
いので、襟は乱れて肉ずきのよい鎖骨がの
ぞく、ときには乳房の溪谷が美しい影をつ
くる。腕の動作も大げさなので、腕はつね
に二の腕までまくれ上り、毛深い正子の腋
毛が痛いほど私の眼をうる。裾はズロース
の上に白い股引がはかせてあるが、投をう
つ型を踊ると、掘んでみたい欲望をそそ
る小麦肌の太股が隠見する、紅潮した双頬に
パーマがゆれて、汗で項におくれ毛がから
むのも風情があるし、バツと開いた手の甲
のエクボはキスしてやりたいほど可愛い。
そう一々讚美讃嘆していちやきりがないが
健康な娘の相撲舞踊ほど、見ていて男の心
身を昇天せしむるものはなからう、ウソだ
と思う人は見ないからだ。

藤娘、潮汲や供奴なども美しい、私も舞
踊は好きだから各流の発表会は見に行くが
それ等は一口にいえば衣裳の踊りであつて



人は従のように見える、重い衣裳を動か
している動力が人間なのだ、人間が労働者
で衣裳が主人なのだ、だから労働者の代りに
精巧なロボットが出来たら、ロボット嬢に
衣裳をきかせて舞台で演出させて御覽、遠
目にはそれで充分なのではあるまいか、其
点当分はストリップのバレエはロボットとい
う訳にはいくまい、人肌の躍動は機械じや
出来ない、以上は極言であることは承知だ
が、せめて人間の舞踊なら、日本舞踊にし
ても今少し肌の感覚を肉体の露出高を増加
させてはどうかと思うのである。顔も手も
白粉の層で硬化している、生きた血の気が
どこにあるのだ。桃の花正子は小野小町で
もなければ、歌麿描くところのオキタでも
ない、其素顔にはもぎたての水蜜桃を見る
ような新鮮さがある、甘酢っぱい香りがた
だよつている、うぶ毛がある、頬ずりする
と何ともいえない野生的な肌の快感がある
相撲舞踊、それは女相撲が私にくれたボ
ーナスだ、計算すると本給より優るんじや

ないかと思つたりする、女闘美と「責め
」をこつちやにして
いる人がある、女闘
美の「極め手」が「
しかめ面」であつた
り忿怒相である場合
もあつたしかし底を
ついたものにはもう
出る一瞬の味もない
じやないか、伸びき
つたゴム紐は、切れ
るより外に約束はな
い筈だ、だから私は
中仕切に構えた娘が
ニツと仰月型に口を
いがめて、どこからでもかかつて来いとい
つたユトリのある表情で、自分の心の緊張
をカバーして、背筋胸筋、腹筋臀筋から無
数の微筋肉に至るまで、すべてを総動員し
て寸分の隙も見せまいとしている心と肉体
の戒厳令を、目と口で誤魔化そうとする
ところに女心の色があり、荒海に一輪の菊花
が投げられたような、硬軟緩急のコントラ
ストの妙が味わえて愉快である
「先生いらつしやい、お相手するわ」
こ奴なめていやがると思ひながらも、若
さと肉体にものをいわせて、男の私を自由
にあしらえると思つているところが可愛い
こんな場合ワザとらしくなく負けてやると
相手は大喜びだ。
「先生！先生！もう休んでいい？」
又しまった。ペンを握るとそのたびに可
愛い娘桃の花を忘れるようでは、桃の花に
もきらわれることだらう、じやシトロンの
一本もぬいて彼女ののどを潤すことしよ
うか。

(完)

宅へ出かけて留守とのことであつた。
ツト山崎は腰をあげた。そしてしばし窓
ごしにカセイ・ビルをみつめていたが、何
思つたのか急に、いたわるようにサムの肩
を軽くたたいて無言のまま部屋を出てい
た。

「トアンノトアンノ山崎大人ノ」
サムがあわてて後を追つたが、すでに人
影はなかつた。

十分後——カセイ・ビル地下二十六号室
は鮮血にいろどられ、鋭利なクリスであつ
た斬りにされた中井大尉の見るも無惨な死
体が純白のベットに横たわつていた。と、
ともに同室にかくまわれ、中井大尉の夜毎
の迫害に苦しみ続けていた英蘭の姿はな
かつた。

間もなく朝が明け染めようとしている。
敗戦の日の朝が——。

カセイ・ビルの玄関のオラン・ジャガは
変りなく安らかな眠りに落ちていた。

うす明りのシンガポールの沖合には、そ
の頃、山崎と英蘭の二人が強く抱き合つた
まま小さなプラウの上に、あてない南海の
潮路に乗つて流されていった。

朝明けとともに夜光虫のきらめきは消え
失せいつかそのプラウは、遠く小さく水平
線の彼方に吸いこまれていつた。

空には灰色の雲が低く垂れこめ、明方出
ははじめた風は次第に強まり、波のうねり
が飛沫をあげてどつと押しよせ、岸壁に碎
けては散り、散つては碎けわめき狂つてい
た。が、しかし、シンガポールの街々は、
まだ深い眠りの底に、死の静寂を守り続け
ていた。

女性週波數

一、愛憎錄音

寒々とした隙間風が、市電の揺れる度に幾子の襟元を襲う。目を閉じていると、一週間前に見合した男の顔が、仄かに臉に泛び上る。平凡な真面目らしい若者——決して厭だとも嫌いだとも想えな

「私の愛情を受けて下さるでしょうか？」
眞面の木立の中で、不意に立花に抱締められた幾子だった。抵抗——だが、腰と背中に廻された立花の腕の力の強さ。息が詰りそうになり思わずのけぞるように身を反らすと、のしかかってくるように男の顔が被さつた。薄すら開いた彼女の眼に、山桜の花の色が灰色に写つた。僅かな油断の為に唇を盗まれた幾子は、憎悪に燃えて立花を睨み

つけ、唇を震わしてその無礼を罵つてみた。だが、頬に涙が伝わる時、彼女は自分の感情をどう処理していいのかわからなくなつた。キザな男とは承知の上で、フト、お転婆気取りで振舞つた自分の軽率さを恥じ乍ら、生れて初めて身を感じた男の暴力と感

触に戸迷つていた。
「本当の愛情の証を見せて頂くまでは、妾はこれ以上の貴方の勝手は御免だわ」
霞んだような夕方の山路を下り乍ら、二度目の接吻の誘いを、彼女はキツパリと否定した。にやつ、にやつと不敵な微笑を続ける立花の顔に、幾子は男というものに対する不安と焦燥を感じた。

「僕は未来のラジオスターを夢見ているんだよ。自分で台本を書き、演出しながら出演する——幾子さん、素晴らしいじゃないか」
唯一度とはいえ、初めて唇を接した男——幾子には唇の貞操じみた気持で、立花に対する愛情があつた。自分でも割切れない気持のまゝ、現在以上は決して進まない

吉暢水新 子玲君花絵

と云う自戒

を持ちつゝ、ずるずるべつたりの交際が継続されていった。

卒業後、級友達のグループと一夜キャンブに行つた時、思い思いのコンビに分れて夏の夜を愉しんだ。その時、幾子は立花と海に向つて寄添い乍ら語りあつた。

「僕はね、放送研究所で養成中の生徒の中では、一番優秀だと折紙がつけられたんだぜ」
「本当？ 羨ましいわ——妾もあの時思いきつて応募しときやよかつたわ」
研究所入りを極力反対した母を心の中で

「いゝさ、その裡に何処かの放送会社へ勤めるから、僕が巧く君の一人位入社させてやるよ。そしてねえ幾子さん」
何気ない様子で幾子の背へ腕を廻して抱きかゝえ、まるで台本でも朗読するような調子で囁いた。

「一日も早く君と結婚しようよ。今夜のうちに大きな月が昇り、打寄せる波の音を聴き乍ら、君と僕は語り明かすんだ。ね、耳を澄してごらん、おメメを瞑つて……」
薄い海水着一重の肌へ、熱い男の体温がピッタリと接している。耳を櫂る男の甘い

声音が、ともすると、固く身を引緊めて警戒している幾子の、心の紐を緩めそうになる。

例え相手が誰であらうともロマンな感情の浪にゆすられ、砂原に影を落す月影に濡れる時、乙女の胸は切なくあえぎ出す。何時となくずるつと崩れた肩……軀が男の胸の辺りに倒れかゝり軽い溜息と共に眼を閉じる。と、汐風にうるんだ柔肌へ灼つくような男の唇が押しつけられた。同時に、乳房が急に圧迫を失なつたのは、知らぬ間に肩のボタンを外され、海水着の肩帯がだら



りと前に落ちた為だつた。

男の掌が、双丘の間を伝つて迂り込んだ瞬間、幾子は頭の中の甘美なメロデーが破られ、全身に冷たい海水を浴びた心地で、さつと身を屈めて逃れようと藻掻いた。

「離して！ 叫んでも無駄と知ると、幾子は矢庭に砂を掴んだ。

男の怒声をうしろに幾子は駆けつけた。足の裏に砂の感覚はなく、泥田を走っている気がした。キャンブへ飛込むと、不意を衝かれて狼狽する男女の顔も眼に入らず、急いでその儘服を着ると、バックを提げて飛出した。

男の掌の感触がまだ下腹部の肌の上を、ムズムズと這い廻っているような錯覚が、断えず彼女の神経を刺激し続けた。所詮男女の間とは、あゝした事になるのか——と今更らのように暢気な自分の構え方に、深い失望と後悔を持つた——

——その時の不愉快さを、北風の吹きぬける電車の中で、幾子は寒々と追憶していた（何か妾も仕事したい——）

その気持は毎日家にあつて仕事もなく、凡々と暮している彼女の胸に、絶えることなく沸々としていた。矢張り一度は諦めてはみたが、マイクへの愛着が毎日に騰まつてくる。各地の民間放送が活潑な活動を始めたとなつては、もはや我慢が出来なかつた。

家の者には内密で、何枚か書損じた掌句に、やつと履歴書を清書し、何時、何処へでも提出出来るようにハンドバッグの中へ忍ばせていた。ぶいと家を出た時、幾子は自分の計画を実行しようと覚悟した。がしかし、何処へという当はなく、厭ではあつたが結局は、立花が勤めていると噂に

聞いた郊外にある広告放送プロ製作所へ、不本意乍ら足が向いた。

二、オトコと男

「冗談じゃないや。君のようなズブ素をいきなり入社させられるもんかい——僕らに、あんな赤ッ恥を掻かせておいて、都合のいい時だけ現るなんて君も現金すぎるぜ僕アもう、君が誰かのマダムになつてると思つてたのにさ、まだお一人かい。僕ア忙しいんだよ。用事つてえのはそれだけかい云々とくがね、用事なら電話にしてくれよあまり此処へ出入をされちゃ、何かと人の口も喧いしさ、会議だ打合せだと、僕ア跡が幾つあつたつて足りない有様なんだから——」

余りにも冷たい立花の声だつた。がらつと人柄まで変つてゐる。自分の馬鹿さ加減に口惜しくなつて、席を外そうとした時、ノックもなしにドアから顔を覗かせた若い女が、ジョロツと幾子を睨んでから、身をくねらせて立花の傍に寄ると、耳元に口を当て、淫らな声で何か囁いた。

「莫迦ッそんなじゃないや」

立花が唇を歪めて女の尻を叩く。ターンした女が振向きざまに立花の腕をつめる。ルージューの濃い唇を尖らせ、派手なウインクを残すと、細目に開いたドアから外へ消えた。

幾子は、瞬間に起つたその出来事に呆然として立上つた。立花は乱暴に真を灰皿の中に突込むと、忙しげに身を起して舌打をした。さあ出て行け——と云わんばかりの態度だつた。

幾子は、それでも何かと挨拶して辞した

いと思ひ、適当な言葉が見つからぬので、暫くの間もじもじとした。すると立花が、「なんだい、君は僕の事が忘れられなかつたんだね。ね、そうなんだろう？」

自信たつぷりのゼスチュアで、急に優しい声で云つた。幾子が、口惜しさに身震して面を伏せると、如何にも物慣れた身のことなし方で立花は、すうつと幾子の頸に腕を巻き、例の小馬鹿にしたような微笑をたゝえた顔を近づけてきた——

× × × × × × ×

「あのう、どなた様の御紹介で？」

「いえ、別に妾は……」

幾子はやゝ頬を赤らめた。

「折角ではございますが、新規採用は当分致しませんし、いづれに致しなくても紹介状のないお方は……何とも——」

気の毒そうに云う若い受付の娘の聲に、幾子はハツとして顔を上げた。着物の裾から、京都特有の冷々とした寒さが忍び込む「すこしに勝手なお願ひですけど、ほんの少しの間で結構ですから、人事の係のお方にご面会したいのですが——」

思ひきつて足を延して来た以上、自分が駄目な人間か、どうか、誰にでもいゝから教えて欲しかつた。縋るように眼鏡の奥の娘の眼を見詰めた。

「はあ……では暫くお待ち下さいませ」

明らかに当惑した顔で、娘はデスクの間を縫つて、二三人の男達へ小声で話しかけた。十数名の事務員が一斉に幾子の方に注目している。彼女は、紹介状も持たずにやつてきた自分の無謀さを後悔した。

半ば諦め乍らハンドバッグをいじつていと、軽い靴音がして、

「兎に角お会い致しましたよう、どうぞ——」

慌てゝ顔を上げると、苦い顔をした三十位の男が、無表情に横手の応接間を指差していた。幾子は自分の容貌に多少の自信を持つていたが、素知らぬ態度でいる男に、何となく最初から氣を吞まれた恰好だつた「僕は放送部の真木です。何を志望してこられたのですか。生憎と人事課長が留守なものですから、僕が一応お聴きしめしう。履歴書を拝見します」

クツシヨンの深い椅子の前端へ、腰を下すか下さない間に、男は早口に云つた。

幾子の顔も見ないで履歴書を取り上げると、真の煙を避けるようにして頭を傾けた「放送会社つては決して面白い処じゃありませんよ。苦勞ばかりで、重労働で、實際辛い事だらけの仕事です。新しいからとか、面白そうだからなんていう、好奇心でやれる仕事じゃなく、余程しつかりした覚悟が必要なんです。その点を充分にご承知の上でしうか——失礼ですが、まだ独身ですか」

「は、はア……」

幾子は周章で、返事をした。うつかり返事をせずに黙つてゐると、何時の間にか自分が置き去りにされ、男だけがサッサと結論を出して、何処かへ行つてしまひそうな感じだつた。

「学校で芸術グループに入つてられたんですね。で——芸術つて一体どんなものかお判りになりましたか。要約して云つて下さい」

思いがけぬ質問に幾子はたじろいた。

「あの……芸術とは……」

「芸術とは、どうにも巧く説明のなし得ないもの——でしう」

男が、直ぐ自分で答えてから、初めて白い歯を見せて笑った。

(いゝ人だ——)

男の笑顔に対して彼女は、直感的にそう信じた。ぐつと接近した感じで、幾子もつい微笑した。和やかな気持だった。

だが、次の瞬間には男は無表情に還つていた。眞をゆつくり灰皿で消してから、

「では、貴方の御希望は……」

すつと向き直つて正面から幾子を見据え「それよりもですね。果してこの世界の苦しさに耐えられずか——お住居が大阪ですね。すると通勤なさる訳ですね。近々結婚なさいますか。収入の点とか、条件とか具体的意見なぞお持ちですか」

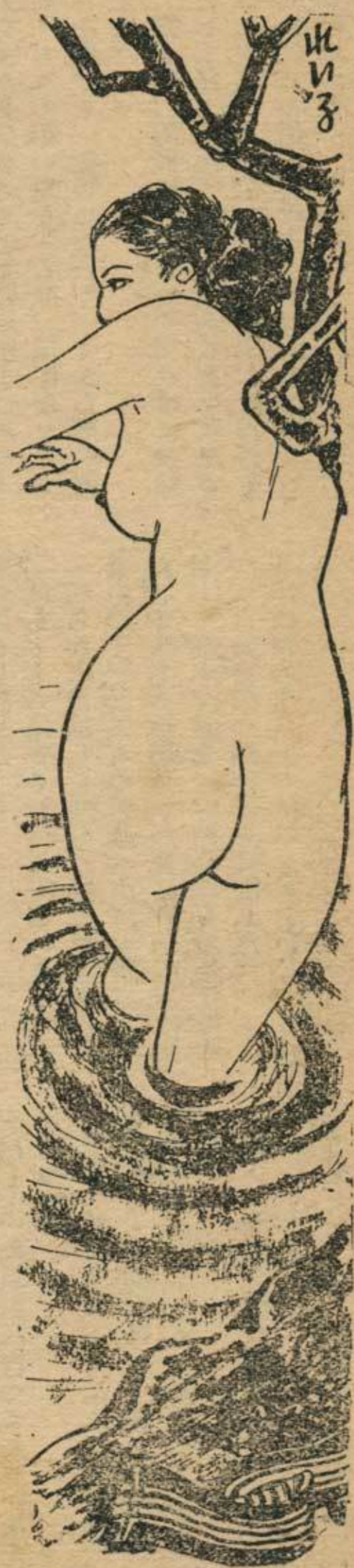
「は、はい——」

質問が直ぐ重なるので幾子は間誤ついた。鋭い太刀先のような問い方だが、芯に優しい男の温さが耳に感じとれる。

幾子は、暫くの間黙つて男の顔を見た。男も注目した儘で眼を逸らさない。彼女にはこんな経験はかつてなかった。幾子の網膜に男の澄んだ眼の色が印象的に写つていた。

やがて、二本目の眞に火をつけた男は、文学に關することや、音楽、演劇等の簡単だが、鋭く探るような質問を放つた、彼女は一生懸命で応答した。声が巧く出なかつたが案外スラスラと配んだ。男の表情が次第に生々し、何処かに輝きをさえ帯びてきた。

「卒直に僕の感想を云いますと、貴女はいゝ素質を持つてられる。残念乍ら放送部長が外出中なので紹介出来ず、大変お気の毒です。只、私流な注文かも知れませんが、貴女の声がもう少し素直であつてくれたら



童貞始末記

足利 喜多 玲子 画

河鹿温泉の巻

そこは奥伊豆の名も無い温泉村で、都会の湯治客などは稀にしか泊らなかつた。殆どが近在の百姓が自炊を兼ねての湯治客で村には定つた宿もなかつた。百姓達は、思ひ思いに知辺を頼つて、近在の農家や納屋で自炊していた。

唯一つ在る村宿も平生は荒物や日用品を商つていた。泊り客があれば泊めると云う程度で、その客も極く稀にしかなかつた。農家が暇になり、近在の百姓が手鍋を提げて湯治に来る折が、僅かに宿らしい雰囲気を保つた。その宿が、彼の生家であつた。或年の夏、近在の村から若い百姓の嫁が母親に附添つて療治に来ていた。その嫁はお綾さんと云つた。母親は五十歳余りの根からの百姓女であつたが、お綾さんは母親とは似もつかない、大柄で精悍な軀をしていた。肌が栗色に陽焼して肌理がすべすべ

と美しかった。お綾さんは、一日に一度、母親に附添つて岩の湯に通つて来た。

岩の湯は山添の窪地に自然の岩石を切拓いた野天の温泉で、僅かに雨露を覆う掛小屋が傍に建つてゐるだけにすぎなかつた。湯質は柔らかく濃い無機温泉で、胃病、呼吸器、神経痛に良く効くと云つて、毎年農閑期になると、近在の村から百姓が湯治に集つて来た。

お綾さんの母親も胃病らしかつた。瘦せた胸に胃の辺りだけが重く垂下つて、何時も物倦い動作で、湯もゆつくりと長湯してゐた。そうして後は何をする気力もないらしく、ぐつたりと座敷に横臥してゐた。健康なお綾さんは、そんな母親に四六時附添つてゐるのが苦痛らしく、よく出歩いた。彼の母や、村の百姓は、そんなお綾さんを好くは云わなかつた。面と向つては愛想

笑いで氣さくに話しているが、蔭では浮氣な女だとか、出戻り女だとか云つてよく噂をしてゐた。それでもお綾さんは、何かと用を作つてはよく出歩いた。

そうして、お綾さんが出歩く時は、きまつて彼が供をさされた。お綾さんの母親や彼の母や、百姓達の邪推を避けるには、子供の彼は実に調法だつたに違いない。

そうして彼を連出すと、段々畑を登つて岡から海を眺めるとか、買物をするとか、ただ何となくお綾さんは若い軀を持て余していたらしかつた。そのうちお綾さんは、彼を湯泉にまで誘うようになった。親しい隔てのない気持からであつたが、彼ももう十四歳である、何となく氣恥しい年頃で、若いお綾さんと一つ温壺の温泉に浸るのは彼には恥しく氣が差した。それで、温泉に誘われても、其度に彼は何かと逃げ手を

或いは今日の声は本物でないかも知れませんがね」

「妾、あまり人様の前で話した事がありませぬものですから」

幾子は咽喉の渴きを意識し乍ら云った。

「御家族は？高田定次郎さん」と云えば、あの高田貿易の高田さんですか」

「はい、現在家には両親と兄夫婦と五人暮しでございます」

「そうでしたか——しかし、御両親は賛成されていきますか？噂に聞く高田氏は相当の昔氣質のわからず屋とか……」

ずつぱりと云つてのけ、さりとて別段豪商のお嬢さんと判つても、態度を改める様子もなかった。

幾子は、恰るで鏡の前で裸で立つて居るような気がした。この人には嘘がつけなと心の中で呟やいた。

いづれ近い裡に、採否のご通知を致しすすということ、幾子ホッとはして表に出た。何時の間にか黄昏ていて、鋭い寒気が心良く彼女の熱い頬を撫ぜた。急に、疲労と空腹が襲いぐつたりとなつた。

どうやら仕事をやれそうだという自信と採用になりそうという期待、そして又、今会つた男に対する好感が、より以上に彼女の心を浮々したものにした。

三、赤い豆球

幾子は次の日から、ラジオに関する文書を買漁り、本腰を入れて勉強を始めた。

断えず真木の声と眼が、彼女の傍に現れるような錯覚と、急に現実から飛躍したロマンな幻を幾子は描いたりした。

立花が、あの日、色男振つた自信で近づ

うつていたが、何故かお綾さんは執拗に彼を誘つた。

或晩、彼は夜更けて独り温泉を浴びに行つた。風呂間は泊り客や、近在の百姓が集り静かに伸び伸びと湯に浸る気分をそがれるので、何時もこうして夜更けて百姓家の灯が落ちると、そつと抜け出るのであつた。

その夜は、月の美しい晩だつた。遠く海に潮騒いが聞え、四囲は暗く森閑と静りかえつて、畑道を歩く彼の影法師が、月の光り淡く影を曳いていた。

岩の湯は、湯壺の上を樹木が枝を蔽つて其処だけが暗く月の光も射さなかつた。出湯は乳色に浅く沈み、湯の香が強く鼻をうつた。

静かに湯壺の底に沈むと、柔らかな湯肌がか心好く一骨一節を解き緩くして行つた。そうして凝つと湯に浸つて居ると、四囲の氣配が一層静々と感じられた。

樹の葉の微きもない。村全体が一つの底に沈んで、一切の物音から隔離されて、ただ在るものは、淡く隈どる月の光だけが、その真空な地上を鈍い一色に塗り潰していた。

彼が、凝つと地上の氣配を抱き締め、独り湯壺の底に沈んで居ると、何処からともなく微かな物音が伝つて来た。ヒタヒタと細道を歩む人の足音が聞えて来た。

そうして、はつきりとその音が確められるようになると、彼はドキリとした若しやと云う期待と、それに抵抗する羞恥心で、何時か知らず識らず軀が細かく震えていた。

足音が近くなり、樹木の小道にその影が朧けながら判り始めると、その足

音の主が誰であるか、直ぐと解つた。矢張り、それはお綾さんであつた。

お綾さんは、するすると帯を解き始めた。着物が肩から地に滑り落ちた。豊満な肉体が淡い月光に冴え、すべすべと濡れたように光つた。

彼は、岩陰の窪みで、凝つと軀を堅くしていた。声も出せなかつた。自然に、お綾さんが氣付いて呉れるのを待つより仕方なかつた。

湯壺に片足を入れたお綾さんは、そこで始めて彼に氣付いた。いや、氣付いた振りをし、彼を見て微笑んだ。その微かな妖しい笑いが、不思議と彼に、お綾さんは彼がいる事を知つていたんだなと領せた。それで、彼の心も幾分楽になつた。

お綾さんは幽かに湯をみだして、彼の傍に寄つて来た。淡い月光と、湯を透して見

るお綾さんの豊かな肉体、むつちりと肥えた猪肉の疼き、丸く盛上つた胸の盛り、その強烈な体臭は、彼にクラクラと息も吐がせなかつた。

とお綾さんの二つ腕が、不意に蛇のように彼の軀に纏いついた。

「あッ」

彼がもがけばもがくほど柔やかな腕は、柔軟さと弾力とで彼の軀を締め来て来た。

「あ……あ……」

「ふふ……怖い……」

妖しく微笑むお綾さんの眸が、ちかじかと彼の顔の上に蔽つたかと思つと、何か叫んだ彼の口は、ヒタとお綾さんの熱い唇に蓋をされていた。

全ての力が爪先から麻痺してゆく虚脱感、彼はグツタリとその豊かな弾力に息づく、お綾さんの胸の中に全身を任せて了つた。



けてきた唇を、思いきりハンドバックでひつぱたいた時、幾子の甘い人生観は一転して建直された。

子供の頃、病弱だった幾子は、岡崎公園の上の方に在る別荘で生長した。母替りの親切な乳母の居る京の町は、乳母の死後に至つても心の故郷だった。自分の生きる支えを自ら打倒した彼女は、ふと誘われるように京都に来て、体当りの平安放送を訪れたのだつた。

新しい幾子の人生が、プラタナスの枯葉を踏んで、建物の玄関に入つた瞬間に始まつた。思いがけない情熱が、今彼女の胸の中に燃え抜がつて行つた。

だが、五日、七日——日が経つにつれて何の通知もこないという事が、もしや不採用では……と云ふ不安に変わり、次第に濃霧のように幾子を包み始めた。漸く彼女が焦燥に駆られ始めた或る日、分厚い封書が彼女に届いた。だが、それは待兼ねた真木からではなくて、民間放送陣に参加を希望する人々へ——と題するパンフレットだった。東京に本社を置き、全国的な組織網を持つて新人養成に当る会社設立の知らせと、誰もが知つていそうな有名演劇人、映画人一流の芸能家に歌手達の名が指導陣に連記されている。我々は、今般各民間放送局からの依頼と協力に依つて、世の埋れた天才の発見と育成指導に努力する旨が印刷されてあつた。

渺しでも巧くなりた。又、その方面の智識に飢えてゐる者達にとつては、直ぐに飛びつかずにはいられぬような文句が、麗々しく書立てられてあつた。

幾子は、何故、何の連絡をした覚えもないのに、自分宛にこんな文書が来たかに就

それからどの位経つたか、気がつく、彼は湯壺の傍に物倦い軀を横えている自分を見出した。蒼白い月光が樹の間隙に透けて見え、あの生々しい肉情と蕩酔感が、遠い夢の中の出来事のように思えた。

その夜の事があつてから、彼は真面目にお綾さんを見る事が出来なかつた。お綾さんと連立つて気軽に村を出歩く事も出来なかつた。何かその夜の秘密を人に知られてゐる気がして、気が差した。しかし、お綾さんは露ほどもその夜の事は素振りにも見せない計りか、相変らず彼を誘つて出歩いていた。

湯浴みにも、毎夜のように誘つた。誘われると、彼は嫌やとは云えず、また何かに惹かれて、この交情はその夏中続いた。聴て、夏も終り、農繁期をひかえて、お綾さん達が近在の村に返つてしまふと、村はまた寂れた。

彼は、ぼんやりと日を送つていた。少年の軀に植ゑられた肉慾の刺激と蕩酔感、直ぐに拭ぐい去つて了えるものでなかつた彼は毎日空虚な気分を過し、眠られぬ夜が続いた。そうしてその虚脱した想いを自らの行為で慰めて見たが、一度お綾さんの栗色の肌を知つた彼に到底満足出来るものでなかつた。

「お綾さん……」
切ない思慕と、本能の疼きに、彼は何度か泣いた。そうして自らの軀をさいなんだ

て、深く考えようとはしなかつた。むしろこれは真木の匿れた好意であらうと解し、早速入会を希望すると返事した。

三、四日すると、その会社からパンフレットと謄写版刷の案内状が添付されてきた二度目のパンフレットには、すでに養成所

或日、彼はそれまでの自制を棄て、お綾さんをその村に訪ねて行つた。お綾さんの村は、彼の村から二つ計り離れた山間の盆地で、その峠に立つと、村は一望の下に見下された。彼は疲れた軀を樹の蔭に憩つていた。何処がお綾さんの家か、此処からは皆目見当もつかなかつた。しかし、彼は村に這入つてお綾さんの家を聞く事は気が差した。それで彼は根よく峠に坐つて、お綾さんらしい人影が峠に登つて来るのを待つた。しかし、それらしい人影は一向に峠に登つて来なかつた。そのうち彼は疲れの為にウトウト其処に眠つて了つた。

彼が眼を覚した時は、太陽は既に彼方の山に落ちていた。四囲は昏く山の冷氣が冷々と周りに漂つていた。彼はお綾さんを訪ねて来た思慕も空しく、今は自らの村に帰らねばならなかつた。これは彼には切なかつた。そこで彼は村の方に向つてお綾さんの名を呼んだ。

「お綾さん……」
その声は四囲の山に響いて、村の方に流れて行つた。しかし、その声の響が、一層彼を淋しくした。寂寥が彼の心を浸した。すると、峠の中程から、彼の声に應えて幽かに声が返つて来た。

声は段々と峠に登つて来た。
「お綾さん……」
そうして黄昏の中にその笑つてゐる顔が現われた。

を卒業した人達の写真と、現在何処で如何に働いてゐる——といった通信文が掲載されていた。

幾子はもはや疑ふことをしなかつた。素直な声になりなさい——そう云つた真木の声が耳に残つてゐる。あの方の前に出るま

彼がお綾さんの側に飛んで行くと、お綾さんは驚いた様子で、マジマジと彼を見詰めた。

「あんただつたの」
そうして、今迄笑つてた顔を、不機嫌なもののよう引き締めた。

「何故こんな所へ来たの……」
「何故つて……」

「兎に角、其処へお坐り……」
お綾さんは草刈籠を地に置いた。

「あんた何時から此処にゐるの」
「お屋から……」

「それで、今まで何をしていたの」
「此処で憩ひる中に眠つてしまつたの」

「じゃ、お腹すいてゐるの……」
「お腹なんか空かない……」

「わたしの家が近いと、連れて行つてご馳走するのだけれど、村へ行つては遅くなるから、もうお帰り今度から来るでないよ」
お綾さんは引き締めた顔を幾分和らげた

それから、銀貨を一枚彼の掌に握らせた
「お腹空いたら、何か買つておあがり」
そうして、お綾さんは昏くなり始めた峠

徑を村の方に降りて行つた。彼は、独り其処に残されて、だんだん自分がみじめになつて来た。その気持が、お綾さんに対する憤りに変つた。彼は握らされた銀貨を力一杯、村の方に向つて投げた。

「こんなものゐるかい、こんなものゐるかい、馬鹿、馬鹿、お綾さんの馬鹿……」
四囲は既に昏く闇が漂い始めていた。お

綾さんの村にも灯が入つた。

でに少しでも勉強して……声になりた……
彼女は唯そう考えるだけで幸福だつた。

梅田の喫茶店ダイヤルへ集合して欲しいという案内状を持つて、幾子は誰にも告げずに指定された当日こつそりと出掛けて行つた。

× × ×

「私達の希望とし理想とする所は、皆さ
んの中から、将来ラジオ界の人気者を送り
出すことです。どうか大いに学びとられて
一日も早く立派な放送人となつて下さるよ
う、心から祈つて居ります」

二階の会議室めいた一室で、社長と名乗
る五十位の男が挨拶をした。五人程の男や
中年の女を混えた講師が、交々ラジオ界の
消息話をやり、有名人を友達扱いの話し振
りで、集まつてきた七十名余の若い男女を
煙に巻いた。結局、入会金、五百円を即納
する事目下関西分校の校舎を、大阪郊外に
建設中なので、毎週講義録のようなパンフ
レットを郵送するから、その書籍代として
五百円。合計千円を納入された方は、新校
舎完成の暁には、特別待遇生として、卒業
迄の間一切月謝は頂かない——と、社長が
申渡した。熱心に聴入っていた誰かが、急
に変な顔になつて四辺を見廻し、明らかに
動揺が起つた。

すると、先ず一人の学生らしい男が起上
つて、嵩が千円位の金何だ。諸君、僕達
は情熱に燃えている。と、大声を上げて叫
んだ。学生が座ると今度は、余り上品でな
い娘が、私達は一日も早くマイクの前に立
つ為ならば、どんな犠牲も条件だつてOK
よ——とそれに和した。場内の数カ所から
拍手が湧き、二人、五人と千円札を手にし
て、会計係の机の前に立つ者が現れ、やが
て皆は前納金の受領書を手に持った。それ
が終ると、コピーに菓子が配られ雑談に入
った。時折り質問も飛出した。幾子は何と
なく落付かぬ氣持だつた。何処か腑におち
ぬ成り行きに、軽い失望を感じて椅子から
起上つた時

「高田さんでしたね。」

校長先生が貴女に御面
接致したいそうです」

近づいた私服の女が
低い声で彼女に告げこ
ちらへと云う風に先に
立つた。

別の室に通された幾
子はボックスに坐らさ
れて待たされた。彼女
を含めて七人の娘が、
私服の女によつて案内
され終つた時、先刻の
社長が、にこやかに笑
い乍ら現れ、

「特に七人のお方にお
越しを願つたのはね」

こゝで急に声を落とす
彼はさも秘密話らしい
声で、実は、貴女方を
悦ばせるニュースがあ
る。それは、スポンサ

ーつまり広告主の方で
直接自分の会社の宣伝
の為のアナウンサーを
求めているから、一

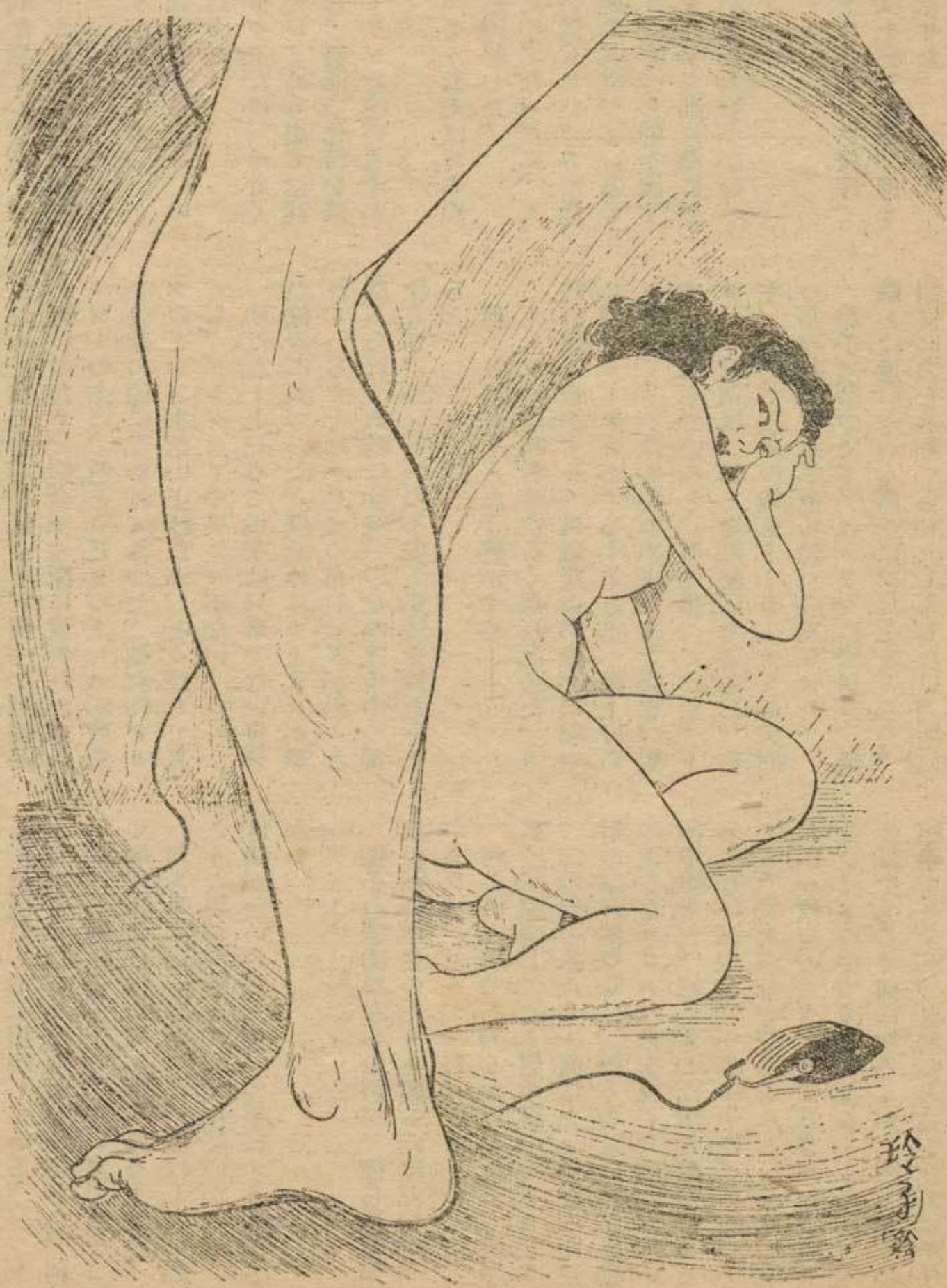
つこれからその採用試
験に出席して頂きた
い。巧く行けばその日
から、研究費の名目

で月一万円の手当が貰
えるし、衣服支給の
上自由に勉強すること
が許される。履歴書
審査に貴女方が合格
したので、只今から試
験会場へ車で案内す
る——と語つた。

娘達は一様に顔を輝
やかさせた。希つても
ない幸運だ、良い条件
だわと口々に叫んだ

幾子も急に興味を覚
え、六人の娘達と一緒
に用意された車に分
乗した。

車がやがて相当山手
の方に在る、古びた



ホテルに着いたのは、もう陽が冬山に落ち
た頃だつた。一人、一人の点検が終ると、
先づ発声テストをやることになり、まるで
写真用の暗室じみた小部屋に通され、旧式
のカーボン式マイクの前で、黒い事務服を
着た女から、この脚本を朗読して下さいと
薄いプリントを渡された。何処かの撮影所
の脚本らしいもので、図畫が、乱暴な線の
鉛筆で消されてあつた。

「赤いランプがつけば始めて下さい」
女が云い残して室を出ると、小机の上に
赤い豆球が灯いた。幾子が十分位かゝつて

朗読を終つても、尙赤い豆球は消えなかつ
た。

四、カメラとマイク

「すると真木君。君はその履歴書綴の盗難
事件の背後に、何か糸をひく者が居ると睨
んだつて訳だな」

「そうなんだ。いや、そんな氣がするんだ
と云うのはね、何もそれが僕の会社だけじ
やなく、日出放送やチニワ放送、それに尾
張放送も被害を受けている様子なんだ」

「それで君は、僕の応援を求めに大阪までやつて来たのか。だが今の処何処も騒いじやいないよ。どうも各社共、用のない履歴書なんだらう。新規に公募した処は何処もないんだから——とすれば、そんなものが一体何の役に立つんだい？」

「確つかりしろよ佐藤君。そんな頼馬な觀察しか出来ないから、君のこの週刊民放新報の発行部数がふえないんだよ」

「へーエ：仰云つたネ」

佐藤記者はグツとウイスキーを呑干すと流石に真剣な顔付きで開き直つた。

「問題はこれなんだ」

真木は鞆から、パンフレットや申込用紙を机の上に取出して、ちよつと四辺に気を配つてから、声をひそめると熱心に佐藤へ説明を始めた。

丁度、梅田のダイヤル喫茶店の筋向いの狭い喫茶室の中である。陽が昏くなつてくるのも忘れ、佐藤記者はノートへしきりにメモをとり乍ら頷き、時折り成る程なアと短かい嘆声を放つた。

「よし、アウトラインは判つた。社の車には我社自慢のFM式超短波が据えてあるんだ。さあと云えば、直ぐにパトロールカーと連絡をとり……」

思はず調子づいた高声を、真木はぐつと睨んで抑えた。佐藤記者は急に口を噤ぐと慌て、空になつたグラスをもう一度吸つた。向い側のバア・シグナルの軒下に、赤い豆球が明滅し始めた。真木はそれをじつと見て鼻を吸い乍ら、ひよいと腕時計を見た。「佐藤君、もう六時を廻つたよ。まだ電話がかゝらないとは変だなア——」

赤い豆球がどうも気になる。幾子はそつ

と腕時計を覗いた。空腹だと思つたら六時半である。テストの結果がどうなのか、一向に何の沙汰もない。仕方なくドアに近づいた時、黒い事務服の女がドアを開けた。

「録音を致しておきましたので……」

女はギクンとしたが直ぐにそう云つて、外から笑いかけた。幾子も不自然に笑つた

「次は、あちらの方で……」

女が指差すので、幾子は何気なく実当りの室に入つた。小さな浴室だつた。室を間違えたと思つて出ようとする

「写真を撮りますから入浴して下さい」

四十過ぎらしい中性的な感じの女が、まるで命令するように冷やかに云つた。事務服の女の姿はなかつた。

「何の為の写真でしょうか？」

一緒に来た六人の娘達の姿が見えないのも、幾子には増々不安だつた。

「勿論、これからはスタジオだけじゃなく舞台にも、映画にも、テレビにも出て活躍する必要がありますから、普通の化粧を洗い落して下さい。ドーランを使いますから——」

表情のない声である。そう云えば判らぬ話でもない。幾子は一応理解した。

清らかな湯をたぐえた小さなバスに、入つて延々と浸つてみたい氣もした。さて湯に浸ると、女がドアの処に突立つているので、一向に氣も落付かず、ざつと水を流す程度で済めた。水を拭き終つて乱れ簪に手を延すと、確かに脱ぎ捨てた着物が無い。

「アラッ？ 妾の着物が——」

「こちらです」

ボイツと目の前へ湯上りタオルを投げて寄すと、女は幾子の着物を抱えた儘、向うの方を顎でしやくつて見せた。

冷厳な女の態度に圧迫された幾子は、黙つて湯上りタオルで下半身を巻き、細い廊下を小走りに女のあとを追つた。

「この室で洋服に着換えて下さい」

彼女が中に入ると、平凡な四角の室だつた。奇妙なことに窓が一つもなかつた。螢光燈だけの光りも薄暗かつた。

「どれでも勝手に撰んで下さい」

女の声が終ると同時に、幾子の背後のドアが、ガチャリと音をたて、閉じられた。振向くとそのドアには、大きな鏡が板の替りに嵌込まれている。

改めて室の中を見廻すと、何一つ調度品が置いてなく、室全部の床に敷かれた赤いマットの上に、色とりどりのドレスが数着中央部の辺に置かれてあつた。彼女はグリンのドレスを拾い上げたが、どう搜して見ても、ブラジャーやブルマがない。

変だな——初めて幾子は只事でない自分の位置に氣づいた。壁全体にカーテンが垂れている。そのグレイの布のヒダが黒々と感じられ、次第に物音一つせぬ室の中の静けさが、云いしれぬ不安と恐怖を掻き立てる。

何かと起りそうな予感がする——

カーテンが時折りゆるく揺れ始めた。天井で鈍い音がする。異様な音が微かに起つた時、カーテンがするすると上へ捲上げられて行く。ハツと室の中央で膝を突き、幾子が身構えていると、壁と思つていたカーテンの背後は、何と全部鏡張りである。右左、そして後ろの方も……カーテンの仮面の影の跡に、水銀色の鏡が姿を見せた。

幾子は夢中でドアのノックに飛び付き、無駄とは思ひ乍らも懸命に逃れようとした。如何に力を置めてもビクともしない。他に

出口はないかと、ドアを離れた瞬間「ア、ツ……」

幾子はグラツと眼がくらんだ。眩むというよりも何も一瞬見えなくなつた。今迄薄暗かつた螢光燈が、一時にバツと輝き冴えて煌々たるスポットライトに変じた。

四面の鏡にバスタオル一枚の自分の姿が写つている。あらゆる角度の自分の姿が、且て目らの裸体をこれ程明瞭に見た事がない程、夢の中の幻のように踊つている。幾子は呆然として床の上に身を縮めた。次に何が起るのか？ 息吐く間もなかつた。すでにそれは目の前に出現している。

しかも、思いがけぬ天井の方から、何時の間にか繩梯子が下り、荒い息の音をさせて無気味な裸体の男が床へ降り上つた。

何も叫ぶ間もなかつた。素ばしこい獣のような男が間髪を入れずに襲いかゝる。逃げ場がないのだ。何一つ手にする武器さえない。

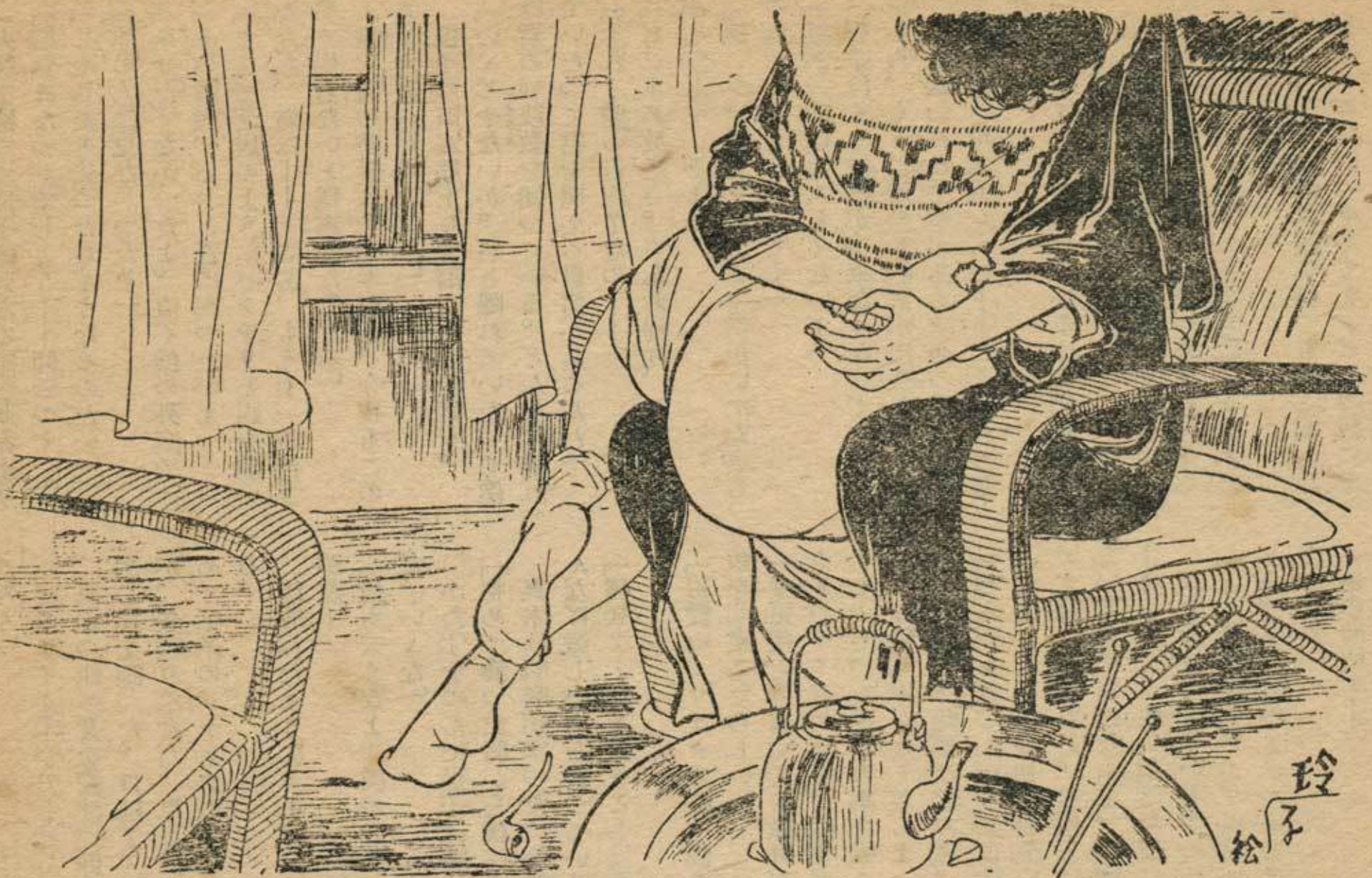
「ア、……」

幾子の悲鳴にならぬ声が、徒らに四角な鏡の箱の中をのたうち廻るだけだつた。

「クウツ、くうつ、ひイツヒ」

何という声であらうか。そして、大手を

掲げて肉薄してくる男の眼のすさまじさ……二の腕のあたり一面にシミのような注射針の跡が無気味さ、締りのない口から動物のようなヨダレが糸を曳く。魔物に近い麻薬中毒者だ。飢えきつた獣と何等変るところのない淫獣が、一步一步幾子に近づいてくる。彼女が身を守るものといえ、唯僅かに一枚のバスタオルに過ぎない。煌々たるライトの中で全裸となる……だが、今、それを恥じて何になろうか。汚されるか、相手を仆すか、其何れの道を撰ぶのか？



玲子

「ヒッ。フ、ツ、ふ、ツ」

男は身を曲げてその鋭い孤を避け、妖しい姿態に崩れて踊る幾子の、白く輝く裸身に目を一層光らせる。

飛かゝる……

振払う腕が延びる……飛退る。

四辺の壁に、複敷になつた二つの肉体が、狂い迫る、暴れまくる——

男はタオルを三度、四度と牀に受けた。が、却つてその痛みが猶更に淫情を煽るらしく、奇怪な歓声を上げて挑みかゝる。

幾子はしかし攻勢をゆるめなかつた。全裸であることも忘れ、懸命に男へタオルの矢を放ち続けた。流石の淫獣もやゝ疲労が見え、次第に肩

ビシッ！ 激しい怒りが光の海を二つに切つた。白い孤を描いてバスタオルが躍る

が上下し吐く息が長くなつてきた。手強い相手だと思ひ直し、一息入れる風だつた。

その僅かな男の隙を看破つた幾子は、素早く天井から垂れている、リボン式マイクを見上げた。何の目的でマイクが吊られているかは、ほど彼女にも想像がついた。明る過ぎる照明とマイク——考えるまでもなく自分達の姿が撮影され、物音が、声が、叫びが同時録音されていくに違いないのだ。鏡に写る此の光景——それは、どんなにか素晴らしい商品になるだろう。Y映画製作者の新しいアイデアに相違ない。幸いにも幾子は漸く冷静さを取戻してきた。男に一撃を加える武器は、あのマイクローホン以外にないと考えた。

「ひいッ、ひッひッひ……」

再び眼を輝やかした獣は、蓄積した勢いを爆発させるかのように、歪んだ口から火とも思える笑い声をあげ、曲つた指先の爪を揃えて執拗に彼女を狙う。その毒爪にかゝれば最後、幾子の柔肌は破れて血に染るに違いない。

じりッ、じりッ、と、ゆるく回り乍ら幾子は慎重に好機を待った。たアッ！男が床を蹴つて飛込む瞬間、思ひきつたポーズで彼女はタオルを振上げ、力の限りをこめて横撲りに払つた。それが男の足に絡んだか、男は悲鳴を上げて横に転り、両掌で眼を押えた。タオルの先端が眼を叩いたのらしい。

今だッ。幾子はマイクへ両手を伸べて飛

ついた。ずるつとコードが延びて、一度宙にあつた牀が静かに床へ降りた。と同時に、盲めつぽうにそこらを捜し廻つた男の手が、彼女の脚へ触れ、掻き抱くように二本の腕はその脚に纏みついてきた。

重なつて倒れた。鈍い音が二度程して、もつれた二つの肉体の内の一つが、やがて動かなくなつた。幾子は次第に意識の遠く霞むのを覚えた。こゝで汚されては死にきれぬ——右手に重いマイクを握り締めつゝ、眼の前が暗くなつて行くのを感じた。

五、二つのアンテナ

夜のバトロールカー活躍

ラジオスターを夢見る若き娘へ警備民間放送を種に暗躍する詐欺団と大仕掛な桃色映画製作団同時に捕わる

朝刊の三面トップに大きく事件が扱われていた。記事の内容をビクアッとする平安放送の真木が、履歴書綴の盗難事件から、背後に何かと介在すると睨み、秘かに近畿地区の各放送会社に照会した処、各所で同様のケースが起きている事を知つて、愈々疑念を深めている矢先、ラジオスター養成会社の噂を耳に入れ、その本拠が大阪なることを探知した。単身その全貌を掴む努力を傾けていたが、たまたま友人の佐藤記者と会議、その協力を求めて情報を集めている最中、彼の助手の一人が七人の女性の行動を怪んでそのあとを尾行、前記した事件を発見直ちにエリアホテルを脱出して真木へ連絡した。いち早く佐藤記者は巡回中のバトロールカーに急報、危く毒牙にかゝらんとする女性達は救出され、併せて十数名に準る一味も捕縛するに至つた。

※

夜のアパートの窓を木枯し風が叩く。

「真木さん。……貴方は妾を助けて下さつた時の話、何故して下さらないの——」

「接吻のおねだりは諦めたのかい」

「ねえ、妾、本当にまる裸で……」

「さあ、知らなかつたよ僕は……」

火鉢を廻つて幾子は真木の傍へ進み寄り

「御覧になつたでしょう——仰云つて……」

「じゃ見たと云つたらどうなるのだい」

「他の人は見なかつた？」

「見せたくなかつたよ。直ぐ僕の外套で」

「その時妾、ハッと吾に還つたのよ」

「まるで芝居のようにバツチリと眼を開い

たなあ、君は——。さあ、もう十一時だよ

早く帰らないと電車がなくなる」

「嘘、妾の時計は十時半だわ。今夜もこの

まゝ大阪へ帰らす気？」

幾子の声が尻上りで涙ぐんで仕舞う。

「いゝじゃないか。君と離れていたつて僕

は君の周波数を知っている。どんなに離れ

ていたつて君を掴める自信があるんだ」

「それ……愛の告白？なの——」

「ビジネス放送さ。さあお帰り、お母さん

が心配しているよ」

「嫌いッ。貴方まで妾を子供扱いになさる

のね。妾はもう大人です」

「処が一向に大人しくくないよ」

幾子はもう我慢が出来なくなっている。

母から、もう結婚のお約束が出来たの？と

今朝も云われた手前がある。命の恩人であ

り命を賭けた恋人だもの——こうなれば必

死だ。

「妾のサイクルを知っているつて先刻仰云

つたけど本当？」

真木はにつこり笑っている。実は今朝高

田貿易の支配人が来て、さかさ頼み乍ら

どうかお嬢さんを貰つて頂きたいと云われ

ているのである。

「云つたよ。君が大阪に居ても僕は困らな

いと云うのはだ、やがてテレビの時代にな

るから、何時だつて会えるし語り会える。
だから君のサイクルを知つていりやいゝ訳
だらう」

「妾のサイクルつて……どんな意味ですの」

真木の膝へ身を投げ、仰向になつて唇を

閉じ眼を瞑つた。口はアブレ振つた調子だ

が、矢張り乙女だ。見る間に顔が少し蒼ざ

め、毛糸のジャケツの下の双峰が揺れてい

る。

待兼ねたようにカーテンの隙間から月光

が差す。

「何も云うなよ。僕の云うことだけ聞くん

だ。いゝな」

かたずをのんで幾子は頑く。

「初めて逢つた時から僕は……」

真木は咽喉が塞つた。が細い女の腕がこ

んなに激しい力を持つてゐるとは——

「倅せよ……何も云うことはないわ……」

「可愛い……マイクさん。僕はどうかやら周波

数を間違えたらしい」

「今更何と仰有つても駄目だわ。妾のサイ

クルのサービスイアはまだまだ拡大よ。

そしてつと多くの事を囁くわ」

「もう終電車がなくなるよ」

「平気だわ。此処は妾の家ですもの」

「飛んだお嬢さんだ。君は実際変つたよ」

「貴方こそ——最初にお会いした時、とつ

ても怖しかつたわ。芸術とは巧く説明出来

ないものの事だなんて、真面目な顔をして

——そして、君、素直な声になつて……」

真木はほの明るい月影の中で赤面した。

「もうその録音テープは捨てることにしよ

うや。あの時のフィルムとテープを焼いた

ようにね」

「あの時の——」

突然幾子は激しく身震した。何よりも厭
な記録——だが、その場で真木が火をつけ
てくれた。

「嫌だわ。あれは煙になつて当然だわ。し

かし妾の録音盤は一生われもしなけりや、

消えもしません。妾の周波数のある限り、

アラツ、妾のサイクルつて、まあ、一体何

の意味でしたの？」

「多分君の何処かにあるアンテナから流れ

出る、凡そ人騒がせな電波の事だろうね」

「そんな云い方は卑怯よ。何処にそれがあ

るか教えて頂戴、妾のアンテナは」

雲が流れたのか、室に差込む月の光りが

翳つて来たので、真木は少し大胆になつた

幾子の双丘へ掌を寄せると、その上から熱

い女の掌がぐつと押えつけた。

「君のは旧式だよ。二本アンテナだから此

頃のアンテナタワーは一本なのに——」

「じゃ、貴方のアンテナは？」

うっかりと幾子が訊いた。

「僕の？……僕のは……一本だよ」

急に幾子は鼻が燃えた。

「知らない。意地悪ッ。訊くのじゃなかつ

たわ。悪い方本当に酷い方だわ」

拗ねて見せて甘えた。

I・L・O・V・E・Y・O・U

夜星の涯に、二人の電波が一つになつて

消えて行く。

長い時間だつた。永遠の失なわれざる幸

福の時間——。やつと幾子の腕の力がゆる

んだ。「愛して来たわ、苦しい位だつたの……

貴方の為にあの男と闘つたわ、死ぬのが惜

しかつたのよ、でも……今は……」

真木は苦笑して幾子の肩を叩いた。

(おわり)

ハナヲタカクスル

(問) 私は鼻が低くて悩んでいます

最近隆鼻術というのをよく聞きますが効

果があるものでしょうか。

(答) 先づ特殊薬注入法があります。

本法は従来のパラフィン系の欠点を一掃

した劃期的な新法です。最近これが永久

不変のものであることが認められ、希望

者が増えています。一回ですみ、入院、

通院の必要なく無痛で遠方の方でも、す

ぐ帰れます。

次に象牙挿入法があります。本法は古来

から使用されいまだに使用されている方

法ですが、施行者の技術の良否による点

が多いので医師も患者も仲々危惧の念に

かられていたのですが、最近では進歩し

た独創的な器具の使用により簡単に手術

が出来ます。やはり捨てられない方法で

す。

更に合成樹脂挿入法があります。

本法は以前から歯科医が使用していたも

のを、最近、隆鼻用に使用しています。

御希望の方には施行して居ります。

次に肉質法があります。少しづつ高くし

たい方にはこれも良い方です。

(費用約六千円)

大阪市北区梅田新道交差点

東一丁電車道 三山医院内

三山隆鼻法研究所長談

(広告)

妊まされた女學生

小宮 浩

画・志乃田よしろう

問題實話

學園秘聞

一

緑ヶ丘女子高校の校庭である。紅だすきで鉢巻をした女生徒たちが、素足のまゝでバレーのトレーニング

にいそしんでいた。

彼女たちの髪と云わず肌と言わず八月の灼熱の太陽が激しく照りつけていた。

コート南側のAクラスのサーヴが、鋭い弧をえがいて、ネット際すれすれにBクラスの中衛の前に見事決つた瞬間、主将の志摩啓子は審判台の上から右手を高く上げて、ピリピリと笛を吹いた。

「今日はこれで終つて置きましょう、Bクラスのの方も大分よくなつたワ」

彼女は早口にそれだけを云うと手拭で額をこすり上げ乍ら台から飛び下りた。

ガツチリとした胸部から腹部への肉線は女性らしい、ふくよかさの上に幾分日焼けした小麦色の肌は、男性的な魅力をさえ兼ね備えていた。

彼女達は、黄色い埃の立つ校庭を横切つて、疲れ切つた体を脱衣室へ運んだ。

緑ヶ丘高校は私立の女子ばかりの学校で別館の作法室を宿舍に、バレー部総勢十六名が主将志摩を中心、秋の県下大会を目指して夏期の休暇返上の猛練習を続けていた。

脱衣室と云うのは、運動場の片隅にある板囲いの洗面所で水泳部と共同で使用している四坪ばかりの薄暗いバラックである。

高い所に引窓が三つ、そこから洩れるかな光線で見渡した所、シャワーが四つ、鏡が三面、後は洗濯用の手洗いが数個、セメントの冷たい土間に散らばっている。半分仕切られた入口には板張の脱衣室があり生徒達はこゝで脱衣してから水で体を洗う様になつて居り、全校中에서도特にこゝは女だけの部屋なのである。

汗に汚れたトレーニングシャツやパンツは病氣や、具合が悪くて欠場している下級生がすべて洗濯を引きうけて、石鹼の泡を土間一面に立てゝいた。

手拭で一才前を隠して啓子はシャワーの下に立つていた。

まだ十八才になつたばかりとはいへ彼女達は、自分の肉体がすでに成熟の域に達していることをよく知っていた。忽ちシャワーを浴びて水滴の玉をつけてゆく、ふくよかな乳房、脂肪のよく入つた四肢他の娘達のそれと比べて、一段と素晴らしい肉体をつくゝと眺めてみた。その時一つしかない扉を開けて、マネーヅヤの

松井玲子が声をかけた。

「啓子さん、新聞部の勝又さんが御用つて見えてるわよ」

「うるさいわね、何よ馳け出し記者気どりでメモなんか持つてさ。もうこれで五回目じゃないの、そういふこつちだつて抱負ばかり語らされたんじややりきれないわ」

啓子は髪をかき上げ乍ら舌うちした。折角の夢心地をこわされたと思うと少々腹が立つた。「あのねえ、千恵子さんと三人で座談的にお話しして頂きたいんですつてよお伝えしたわよ」

扉から松井の姿が消えた瞬間に、啓子はハツとして持つた櫛を、不覚にも足許に転してしまつた。

千恵子―清原千恵子とは、バレー部の新人の一年生で、部の中でも只一人、啓子と個人的行動まで共にしている可愛い意識の中の妹なのだ。

「うふ、あの人達同性愛ね」

「勿論よ、同性愛でなくて何よ、夜は一しよよ、洋服だつてお揃いじゃないの、体の具合の悪い時は下着のお洗濯までし合つてさ。只じゃないわ、完全も完全、度を越したSよ」

「そんなに好きなら、結婚すりやいゝんだわ」

啓子の出て行つた後、櫛を拾つて、裸の彼女らの弁舌の焦点は、啓子と千恵子に集中していた。

新聞部の勝又記者は、涼しいポプラの木蔭で啓子を待つていた。

相手も同じ三年生ではあるが強敵なりと見て啓子はいさゝか下から出ることにした「何か御用でしよるか」

「今日は何時ものようにバレーのみのお話

YOSHIRO

で同つたんじや御座いませんのよ」

勝又の目が、何とはなしに好奇的に啓子
を頭の頂から足先まで見まわしている様に
思えて啓子は目を伏せた。

「実はね。私個人的にも少々研究したいと
思う事が御座いましたね」

いかにも気取つて、相手を輕蔑するよう
な勝又のゴザアマス口調が啓子には癪に
さわつて仕様がなすが勝又は隙を与えず、
ポン／＼駒を推めて来た。

「清原千恵子さんも、お願いしたんですけ
どお見えになりませんわね」

勝又は一寸背のびして脱衣室の方を見乍
ら云つた。

「千恵ちゃんも病気で部屋にいるんです」

啓子は吐き出す様にこう云うと

「御病氣、そうでしたか、一寸も存じませ
んでしたわ、それでどこが悪いの？」

飽くまで相手は食い下つて来る

「何処でも構わないじやありませんか、練
習にも出ると云うんですけど今日は私が止
めさせたのよ。」

「では……」

「そうよ、今日はあれなのよ」

啓子は真向から切つてかゝる事にした。
そしてこう云うトカゲ見たいな相手は、
早々に追い払うべきだと考えた。

「それで、それはお大事に」

「お話しの内容はどんなのでしうか」

「実は当今校内で話題のSと云うものにつ
いて、お二人の御意見を頂きたいと思いま
して」

もう啓子は驚いては居なかつた。

「私達、お氣の毒ですけれど、そんなのじ
やありませんわ。それに此れと云つた意
見もありませんし、急ぎますからこれで失

礼します」

それだけ一気に云うと、ツム立つて居る
勝又を残して、啓子は作法室の玄関へ向つ
て走つていた。

二

「お姉様！」

千恵子は床の中で小さく呼びかけた。

「何よ？」

「もう寝たら」

と云うと布団を一方、持ち上げて見た、
時計は九時一寸廻つて居る。

「いゝわ、だけど、私一寸宿直室へ行つて
来るわ、この書類今日中に届けなけなら
ないのた忘れていたんですもの」

「私も行くわ」

「いいの、すぐそこですもの、今日の宿
直誰？」

「井上先生よ」

「井上先生」

啓子がガツかりした、英語教師で主任で
ある。試合と練習の爲、特に成績が悪く、急
所を把まれて居る、まずいナとは思つたが

「行つて来るわよ」

とそつと千恵子の額に唇を当てゝ立ち上
つた。

「早くね」

「えゝ」

彼女は懷中電燈をつけると、廊下へ出て
小使室に居る担任の女教師二人に用向きを
話して校舎を出た。

宿直室には井上が膝枕のまゝでまだ本を
読んでいた。

「今晚は。バレエの提出書類を、持参しま
した。」

彼女は慎重に頭を下げた。井上は黙つて

見ていたが、その書類をポンと投げ出すと
ふり返つて、
「そんな事より君は落第したいのかね、君
の外国語は成つちやいやないね、とうてい単
位は上げれんよ、来年もう一年やるんだな
あ」

その一言を聞いて啓子は真暗闇に突き落
された様な氣がした。真逆そんなに悪いと
は、吾々知らなかつたのである。

「布団敷いてくれないか？」

井上はそう云つて背を向けた。

「ハイ」

啓子は力無く襖を開けて、布団を伸べた

「卒業したいかね、皆と一しよに」

「えゝ」

彼女は泣きじやくり乍ら答えた。

「魚心あらば水心つてね、つまり僕さえ黙
つていたりや君はパスして卒業出来る、そう
するかい。えゝ？」

何時の間にか井上の左手は彼女の腰を抱
き、右手はスタンドのスイッチを捻つてい
た。月光が、カーテン隙間から冷く二人を
照らしていた。

啓子は迷
げ様とした
が無駄だつ
た、すべて
は道具立て
が出来てい
る芝居を、
井上が演出
し、自ら主
役を演じて
いるに過ぎ
ないのだ。
「静かにし



給え、まだあるよ、バレエ部の部費千二百
円ね、そのうちの五百円、あれはボールの
修繕つて事になつて居るが、何処へ行つた
か知つて居るのは僕だけだよ、清原千恵子
に何を贈つたんだ？」

「靴下です」

「それから」

「スリッパ」

「それから」

「もう聞かないで」

「よし聞かないで、その代り静かにするんだ
新聞部の勝又がね、その事実をほのかに感
づいたらしいんだ、問題にして見るかね？」
特ダネだよ、こりや」

勝又の名前を聞くと、彼女はボーツと視
野がかすんで来て、腰が力なくヘナ／＼と
井上の膝の上に坐つてしまつた。

「やがて」

冷く白く月の光にぬれて、取りちらされ
たものを着けると、彼女は逃げる様に室か
らすべり出ていた。

その夜に限つて啓子は汗グツしよになる
まで千恵子を抱いて寝た。そして雨の様に
接吻をくりかえしていた。井上がした様に
千恵子を抱いて見た、そして愛撫した。せ
めて男の体液が全身に満たぬまに、彼女は
純な女として、姉として千恵子を可愛がつ
て置きたかつたのである。

三

秋も終りに近づいた頃、県下大会の幕
は切つて落された。緑ヶ丘高校は初日から
サーズの切れ味よく、新人清原と志摩のコ
ムビは、特に素晴しく光つて人目を呼んだ
一回戦は江東高校を二回戦には南陶高校を
破り三回戦の準決勝に進んだ。

その日は風が強かつたが前半は相手の青山
高校もよく戦い、二対二の対スコアで接
戦した、後半チェンジコートして風向にな
つた緑ヶ丘一時苦戦に見えたが、青山高校
のサーズを、当然受けるべき啓子が、突然

腹部をおさえて倒れた、早速選手交代した
が結局前衛の不備から緑ヶ丘は惜敗した、

啓子は、暑さの為と診断されて、木蔭で
頭を冷していたが、彼女は知つていた。

妊娠したのだ、もう半月ほど前から気付い
て居た。今までの様に浴場の中でも、裸を
さらす気にはなれなかつた乳房のふくらみ
腰から脚への曲線は、千恵子にも他の誰
にもない豊満さをもつて居た。メンスの無
い事は千恵子も知つていたが、子供っぽい
彼女は、真逆妊娠とは考えてもいない様だ
つた。

宿舎へ帰り、布団へ入つても彼女は口も
利かずにただじつと天井を睨めていた。千
恵子に云おうか、そして今後の策を立てな
きやとは、思うのだが何とも云いだし難い
のである。

「姉さん、気分どう」

千恵子はいく／＼しく氷嚢をとりかえ乍
ら云つた。

「勝又さんが、見えてますけど、どうする
？」

室の外から松井マネージャーの声がした
「もう十分もしたら来る様にと、云つて頂
戴」

彼女はとつさにそう返事をした。そして
千恵子の手をとると、あまえる様に

「抱いて頂戴、そして接吻して」

とせがんだ。

「私の話す事を聞いたら、貴女は私が嫌い
になるわ、汚く見えるかもしれないわ、そ
して私から離れて行くかも知れないの、だ
からその前にもう一度キスして」

千恵子は周囲に人の居ないの見定めて、
盗む様に唇を合わせた、そして
「さあ云つて御覧なさい、どうしたの」

と聞いたが、その時ドアをノックして勝
又が入つて来た。

啓子は勝又の速記するノートの前で、ポ
ツリ／＼と井上との関係を千恵子に語つた。

そして話し終ると、ワツと泣き伏した。
「復讐して頂戴、新聞に刷つて頂戴、もし
て皆に知らせてよ、再び私みたいな犠牲者
が出ないとは限らないのよ。私、退学にな
つても構わない。でも千恵ちゃんだけは、
信じてくれるわね」

千恵子はほとんど目を開いたまま、すぐ
に返事も出なかつた。

四

この特ダネは校内新聞の下書きの原稿に
なつて、学校当局へ提出された。勿論記事
にならぬ事は百も承知で、せめてこれだけ
でもと云うので、部長以下一同、クビを覚
悟で提出したのだつた。

見出しは「I先生と女生徒の醜聞」であ
つたが、I先生は校内で三人、井上を除い
ては二人共女性なのである。

井上が其の後、如何なる名目で退職し、
処刑されたか知らぬが、金銭や職権を濫用
し、教え子の処女の肉体を奪つた余罪は次
々と暴露されて行き、学園を追放されたの
は確かである。

そして千恵子は、下宿に謹慎する啓子を
介抱し続けた。

「千恵ちゃん、嫌い私を」

「いゝえ、いつまでもお姉様よ」

「有難う千恵ちゃん」

「しつかりして頂戴ね、来春になれば、決
つと登校許可だつて下りるし、立派に卒業
出来わよ、それまでもう少し辛抱してね」

千恵子は啓子の秘貝の様な、うす紅色の
唇にそつと、なぐさめの接吻を送るのだつ
た。

此れは今年の夏某女子高校に起つた実話か
ら取材したものです。作中の人物はすべて
實在の人がモデルですので特に仮名しまし
た。

作者

面白さ天下無類

川上未夫著

新篇 水滸傳

定價 160
円 20

中国奇書中の白眉！

雲を呼び風を巻く

波瀾万丈の物語

涯しなき黄土大陸に、梁山伯の

俊豪が驚天動地の活躍を繰り出す

彩を極める戦国絵巻各頁挿絵入

と相俟つて一読忽ち息もつかせ

ぬ一大雄篇

書店品切の節は

発行所 近畿図書株式会社

大阪市内南区生玉町一〇番地

振替大阪一二二六三一番

入院・分娩・手術

中井産婦人科

大阪市阿部野区晴明通一丁目八〇

（南海上町線天下茶屋下車）
電話天下茶屋〇三一八七番

元禄浪花やくざ

後篇



天王寺 星七
絵・今 幾久藏

穩密變化の巻

一

行燈二つに百奴蠟燭五本。
風みたいに明るい入畳の間で盆ゴザを取り巻いたまま、みんな寂として静まり返っていた。多葉粉屋七兵衛の二階である。
どうもおかしい。壺ふりの儀兵衛、不審でもならなかった。
車座のみんなが喰われ、孔雀のように着飾った色若衆一人がさつきから勝ちつづけ

だ。これでは胴元がつぶれる。
兄貴分の雁金がやかましく止めているイカサマ賽にすり代えたが、やつぱり駄目。当然出る筈の目がどうしても出来ない。自然と空気が険悪になる。
殺気——。
ピンと緊迫した凍りつくような殺気が静まり返った部屋一杯にみなぎってきた。
一筆がきの達磨の掛軸を背に床の前へ片膝崩し、炭火を盛った火鉢に左肘をのせ右

師走の夕暮、謎の色若衆笠塚由之丞の幻術を眺めていた浪花やくざ雁金文七は、突如、少年スリ兎吉から二の腕の背ての恋人菊川太夫と交した菊命の刺青の一字をそぎとられた。
兎吉が由之丞から百両の手間賃で引受けた仕事だと聞くと、文七は半分の五十両を寄せと迫る。その時、「大変だッ」と輩下のゴロツキが居酒屋へとび込んできた。

鞘を抜いた。

「やつてしまえッ」

これも毛だらけの太腕で大脇差の鯉口を切った胴元の神鳴り庄九郎。

「そうや、バラしてしまえ、こいつ」

他の五人も一度に長ドス、七口を抜きつれて斬りかかろうとしたが、

「ふん、見えねえかい、これがよ」

低い冷たい声でいう色若衆、由之丞の懐の中で右手が一寸動く。彼の女めいた若紫の縮緬肌着の襟もとを分けて黒く光った短筒が徐々に筒口を現わしていた。

「ドンとこいつをブツ放しや七分板でもブチ抜くぜ、そこの餡細工みてえな体は一発で将棋倒しに通り返けらあ」

口惜しかつたが喧嘩屋一家、思わず立ちすくんだ。

二

そのころ居酒屋「なるみや」の平土間では「勘兵衛、賭場のメモごとくも急ぐだろうがこつちも早いところチをつけにやソロバンが合はん取引きの最中や、一寸待つとれ」とび込んできた庚申の勘兵衛へ押さえるように言つて文七、再び兎吉の方へ向き直つた。大脇差を片胡座の太腿にすりよせ刺青の傷口を突きつけたまま、

「どうや、し残した仕事の五十両、ワシに出したつて文句はないやろ」

突きつけられた左腕、百両で請負った仕事の跡を兎吉は灼きつく腫で見すえた。

剃刀で斬った皮膚が、カンナを当てたように「お菊命」の「お」の字全部と「菊」

の字の草冠だけを削り取り、削がれた部分は切り離れず舌みたいにタラリと未練がましく垂れ下っている。兎吉の狙いは正確だった。着物の上から刃を入れた途端、相手に暴れられ手もとが狂ったらしい。

「雁金の親分、殺されたところで文句の言えねえところだから出せと言われりや百両全部でも差上げますが、これでも江戸スリ

の端くれ、一つ納得のいくように差上げねばならぬ理由をお伺いしたいもんで——」

兎吉、居直ったように太々しく訊いた「理由か?——、知れたこつちや宵薬代よ

お前かて半分仕事して丸つぽの手間賃は厚かましすぎるやろが」

横あいから庚申の勘兵衛が、

「兄貴、ツベコベ喋らんと早う腕の一本もへし折つて持つとる金みんな取つてしまえ」

「やかましい、お前さきに帰つとれ」

横つとびに逃げ返る勘兵衛に目もくれず

「兎公、よう聞け、ワシらは喧嘩屋とかゴロツキとか言われるけど筋の通らぬ金は取



らんのや、お前もえゝ加減で筋の通る商売に足洗えよ」

「さあ、足は洗いてえが——とにかくお話の五十両、今ふところに持つてねえんで、

明晩までに必ずお手許へ差し上げます。江戸スリの名前にかけて嘘は吐かねえ」

「ご大層にぬかすな、まあその目の色に嘘はないやろ、約束の盃や一杯呑んで帰れ」

熱帯をついだ盃を兎吉の前へ押しやつた文七、片手で巾着のヒモをくるくろほどき

「姐やん、勘定——」

河豚鍋の下を団扇であおいでる小女の尻へ豆板銀一枚ボンと投げるが早い大脇差を片袖のちぎれた左腕で鷲掴みに風の出だした往来へ飛出して行つた。

三

とん／＼と階段を駆け上つてくる足音に來てくれたか文七の兄貴——、一斉にそちらを見たホンの一瞬に由之の着ている鷲色の羽織がなくなり、彼の傍から鉄火鉢が消えたことには取りのぼせてる喧嘩屋の七名、夢にも気づかなかつた。

階段から吹き上げてくる風に百匁蠟燭の火がゆら／＼おののく。

段梯子を踏み鳴らし、やつと現われた文七。

「モメごとて一体どないしたんや?」

寂として声のない一座。おやじの三郎、

カラクリ儀兵衛、貝立の吉、神鳴庄九郎、取手の市右衛門、イホリの兵平、庚申の勘

兵衛——、それ／＼得物を握つたまゝ動かぬ顎下の顔を順々に見廻してゆく文七の眼は

象牙のように冷たい由之の顔と合つた。

「文七、夕方は思わぬ災難でケガをしたとか、傷はどうだった?」

「貴様か、モメごとは——、おい皆、だまされるな、あの短筒は子供だましの幻術やぞ、役にもたたん冬の扇子や」

文七の一声に庚申はじめ一同、半信半疑で若衆侍の短筒を見直せば、アラ不思議、

いつの間にやら小さな扇子に変わっている。

彼としては宵に見た幻術の手口から想像して好い加減な事を言つたのが運よく当つたまでのこと。急に威勢よくなつた七人の喧嘩屋、一斉にとびかかろうとした時にはもう、

「どギツネめ!」

いきなり文七の長剣が抜き打ちに躍つて行燈の光を斜めに弾じき虹を描いて由之の肩へ袈裟がけに伸びていた。

「ヤア——ッ」

間髪を入れず裂帛の気合と共に部屋一杯に黒雲が湧き、相手の優姿は宙を飛んで文七の長剣をかわし北側の障子と雨戸へ凄まじい体当たりをくれたか、ガラガラ大きな音をたてて雨戸障子諸共、はるか下の西横堀の水面へざぶ／＼と真逆様に落ちて行つた

「逃がした——」

いまいましげに舌うちして窓から見下す文七の後から子分や弟分の喧嘩屋ども、

「ザマ見くされ、ぬれ鼠」

「凍え死んでまえ化け狐」

口々は罵り寒い月あかりの水面を見下したが、「あッ?」と一度に声を呑んだ。奇妙なことに、その水面には鷲色の羽織が空気をはらんでふくれ漂い、その傍からブクブクジューンと灰神樂が立ちのぼっているばかり。

気がつけば部屋の中の黒雲も灰神樂に過ぎない。どこへ消えたか化け狐め?——ひよいと振り返り、てんでにもう一度部屋の

中を改めて見直そうとした瞬間。床の掛軸の後から音もなく飛んでくる二十本ばかりの手裏剣が光の雨となつて襲いかかった。部屋の四隅へ逃げ散る子分を尻目に、掛軸の裏から人間業とも思えぬ身軽さで、さつき雨戸の落ちた窓へ一足とびに立つた笠塚由之丞。それへ素早く文七の剛刀が物も言わず横なぐりに走つたけれども、

「早く此方へお出でなさいませ、お風邪を召したらどうなさるの」
「お前の部屋は客が泊つてゐるんだらう？」
「いいえ、あなた様以外に何処の誰をお泊めするもんですか」
「嘘ぬかせ、いま一番やつて雪隠の帰りじやねえのか」
「まあひどい、何でもそんな焼餅ばかりおやきなさいませ」
「そんなら先に部屋へ行つてゐるぜ」

稲妻みたいな刀影をかくぐり息も乱れぬ一声、すでに花のような若衆姿は軒裏の隅に、しなやかな両手をかけ、くるり一廻転、二階の屋根へ尾を引ける山鳥のあざやかさで消え去つていた。物の美事にきまつた伊賀流忍びの術、水龍遁と鼠行変。
「覚えとれ、今度はこつちから行つたる」
咳やき乍ら身を伸ばし屋根の上を覗んだ文七の眼に寒々と剃刀いろの月が一つ。

四

「おい菊川、足を拭くものを頼む」
手燭を持った禿を連れ、お不淨から帰りの廻り廊下で呼びとめられた菊川太夫、鈴張りの眼を見はつてあたりを見たが誰も居ない。空耳だつたかしら、どうも笠塚様の声に似ていたけど。思ひなほして歩きかけた禿が、
「あれ、太夫さま、聞こえまへん？」
耳をすますと、
「おい此処だ、ピカ／＼みがき込んだ廊下に泥足は氣の毒と氣を利かしてゐるんだぜ、これでも」
声のする方へ手燭をかざして禿の少女はびつくりした。
「まあ、あんなとこに居やはる」
禿の指さす表座敷の大屋根に腰をおろし

てゐる由之丞の姿を菊川もやつと見つけた
「早く此方へお出でなさいませ、お風邪を召したらどうなさるの」
「お前の部屋は客が泊つてゐるんだらう？」
「いいえ、あなた様以外に何処の誰をお泊めするもんですか」
「嘘ぬかせ、いま一番やつて雪隠の帰りじやねえのか」
「まあひどい、何でもそんな焼餅ばかりおやきなさいませ」
「そんなら先に部屋へ行つてゐるぜ」
菊川が自分の部屋へ帰つたときはもう笠塚由之丞、ぬくぬくとやぐら炬燵に身を埋め、腹這いのまま枕もとの絹行燈の油皿へ朱ヲオの煙管で一服吸いつけていた。
禿を遠ざけ二人きりになると菊川の言葉つきが急に打ちとけてゾンザイになる。
「いつたい何ごとでんの、この寒い夜空に泥棒猫やあるまいし、屋根から来るなんて」
うちかけを脱ぎ着物を脱ぎ緋縮緬の長襦袢一枚になつて、
「お寒う」鼻声で甘え、由之丞の横へもぐり込んできた。プウンと丁字香の匂いがむせるようだ。
「それがさ、俺だつて堂々と入口から這入りてえが、まさか履物なしの足袋ハダシじや、いくら夜でも町なかには歩けねえ」
「そやから何でもせなせんならんようになつたか聞いてゐるんやないの」
「それかい、お前の昔の色男、文七の奴に小僧を使つてカラカイ半分ちよつと悪戯をやつたのよ、何しろ他人まかせじや悪戯の跡がうまくいづつてゐるかどうか知れねえから喧嘩屋の集へ寄つてみたら何とか噂で分るだらうと考へたが大間違、いやサンザン

のていたらくさ——」
「あんな上手に何やら言いくるめてるけどまさか強盗に行つたんやないやろねえ」
「強盗？、そう見えるか、俺の懐もある時まかせで使いすぎ、そろ／＼底をついてきたからなあ」
「意地わる、誰が貴方をお金なしと思ひますかいな、一寸言うてみただけ」
「ところが有るやうにみえて無いのが金とくらあ——と言つたらどうする？」
「じゃあ、あんな本当にもうお金ないの」
菊川太夫の胸に悲しくも以前の想ひ人の顔が浮んできた。スネて勝手に来なくなつた文七、男はみんな金が無くなると姿も心も妙に変わる。決してお金が欲しいわけではないが金のない人間には魅力が失せる。彼女は貧乏人は嫌だつた。
この人との縁もつづかない——つい、さつきまで好きでたまらなかつた笠塚への思慕が儚く崩れかけ、焼きコテで刺青まで消した痛さが悔まれてくる。その顔を由之丞はありありと読み取つた。
「まだここが痛むのよ」
「どれ見てやろう」
むつちり白い菊川の腕に巻いた紅絹の布をほどきかけたがそのまゝ手を止め彼女の股へ割り込むやうに体をおとしていつた。

五

その翌夜も更けたところ。
文七は一人で御堂筋を歩いてゐた。力にもならぬ子分共には内緒で単身淀屋の屋敷へ由之丞を討ちに行く腹である。宵から淀屋の邸では腰折れを詠む会があり、由之丞もその一座に連なると小耳にはさんでいたひよいと町角の小料理屋から出て来た男

がある。北大阪の私娼窟を根城にする酒癖の悪い無法者、極印千右衛門だつた。四尺に余る赤鞘の大脇差を腰に酒臭い息を吐きながら文七に話しかけた。
酔つた眼がすわつてゐる。常に荒事を好み無類の兇暴性を発揮する男だ。からまれては小ウルサイ。
「淀屋へ顔を一寸のぞけるだけの用や」と言つたのが悪かつた。

「何、淀屋——ワシも連れて行け、どうせボロロやろ、あそここの邸ならユスリ甲斐があるで」
「ボロロどころか、下手をやつたら生きて帰れん用事やで」
「なお面白いがな、従いて行くせ」
くるなと言えは余計来たがらう、勝手にしろと思つた。

「それほど来たけりや、ええようにせえ、その代りどないなつても知らんぞ」
二人の無頼がようやく大川町の淀屋辰五郎の邸宅に着いたときは八ツ半（午前三時）に近い。閉つてゐる見上げるような大門の乳鉄千右衛門が石をぶつけて怒鳴つた。
「やいこら、開けんかい、開けん門たたき割つてしまふぞ」
「何や今ごろ、酔つばらいか、やかましい堂島川へ泳がしたろうか」
内側からカンヌキはづして覗いたイナセな職人風の横面を一杯氣憤の千右衛門、ボカリ拳骨でなぐりとばした。

「わあ、強盗やア」
引つくり返つて叫んだ声に、藏の横の奉公人長屋で夜通し花札をめぐつてた二十人ばかりの印半天腹掛井の喧嘩早い連中が鎌天秤棒、鎖と大分銅のついた六尺もある米俵用の棒棒り、各自勝手な得物を手に手に



ネジ鉢巻で門口へ押し出した。

「何や、ゴロツキやないか、此奴ら」

無造作に先頭の一人が棒杵りをびゅうんと一振りふつた。まさかと思つて文七の肩へ、ボキッと骨が鳴るほど分銅が当り一瞬ジーンと体中が痺れる。

「何くそ！」

いつべんに猛牛みたいに怒りを発した文七、いきなり大脇差を鞘走らせ棒杵りの相手の肩先へ抜き打ちに浴せた。さつと血が噴く。

「さあ、死にたい奴は皆こい」

極印千右衛門も長ドスを引き抜き、天秤棒と鎌と分銅の渦巻く人波へ躍り込んで行った。

六

奥座敷で始まつた辰五郎を取り巻く連歌の会が酒宴にくづれ、集つた五六人の文七雅客が呑み足らぬ主人の辰五郎と共に何処かの茶屋へ駕籠を飛ばしたあと、同行をこ

とわつた酒に弱い由之丞、やつと彼の居間である数寄屋造りの離れに引き上げた。

のべてある絹夜具へ寝まろび、行燈の燈が円く映る節なし槍の天井へ目を向けると、いろ／＼の想念がとりとめもなく去来する。

京の島原の太夫夕霧、浮橋の顔それを相手に秋ごろまで居つづけ遊びをしていた大石内藏助の茫洋とした小肥りの顔——。それらが現われては消えた後、自分に隠密を命じた上杉家の家老千坂兵部の「裏切り者ッ」ハッタと自分を睨みつけた怖い顔が大きく天井一杯に拡がってくる。

深酔いに青白く牙たえ神経が彼の眉に針の縦皺を刻む。赤穂の田舎家老が京に居るころは四十男の色ボケと小馬鹿にしていたが今おもえば乱痴気さわぎの評判が高すぎたのも不審。もしや——？しかし仇討は理に合ふぬ、斬られたのは吉良義央公であり浅野の殿は公儀から切腹を命ぜられ勝手に自刃したのだ。だが武士道の意地という奴で赤穂のヤセ浪人共が江戸本所松坂町のお屋敷へなぐり込みをかけたらどうなる？。

おそろく好い子になるのは田舎浪人ばかりで自分ら吉良家のために働く武士は幾ら勤めても世間からは憎まれ口をたたかれるがのオチだらう——。割が悪いや全く——、い加減に身を引く汐どきだつたと言える。ふと菊川の顔が惱ましく浮んできた。何だか不安だつた。女の身も心も完全に握るため柔い腕から過去の刺青まで消させたが果して俺は菊川の心を握るだらうか？今に金がなくなつたら俺も文七の二の舞かも

知れん。大石 京を去つてからの夕霧や浮橋の噂に照らしても女心は頼りないのが多い。

空虚なさみしさに沈んで目を閉じた。

それから物の半刻たたぬ間に泉水と土蔵を隔てた表門の方で異様な騒ぎ声が起つたハツと本能的に青貝散らしの刀架へ手が行く。主家から命ぜられた隠密の役目を怠り気ままに姿をくらましてる由之丞、何時主家から追討がくるか知れない身である。忍びの術も小手先の幻術も術者に精神の統一が出来ねば行い難い。今夜のように深酒のときは心の乱れが不安だつた。

「もし、笠塚様、お目ざめでしたら、ちよつとお出まし願ひとうございます。ウルサイ喧嘩屋が来りましたので」

小町垣の庭木戸から母屋の下男が呼びかける。文七め、昨夜の返礼に來たなと思ひ乍ら細身の刀を取り庭下駄を履いた。

表門を一步出てみると勢み肌若者が五六人、頭や手を血みどろにして唸つてゐる。暴れ者を別々に取り囲んだ二つの人ごみの輪へ近づき、

「おい皆、店の若い者は退け、あとは俺が引き受けた」

さつと崩れる人垣から暴れ出た文七が

「こら笠塚、今夜は迷さんぞ」

「さわぐねえ、それほど斬られたけりやあ斬つてやるから従いて来い」

ゆつくり、千鳥足の庭下駄をカラコロン引きずつて、つい目の前の木橋を渡り中之島の枯草原に下り立つた。

「何や、あの生意氣なおカマ侍、用人棒か」

一步遅れてとび出した極印千右衛門、流石にヘトヘトに疲れていたが、これも後を

追つて河原へ下りつて行つた。ボロ口の方は駄目らしいからせめて侍でも斬つて自慢の種にしようと思つたのか知れぬ。

「来るか文七」

静かに月へ向つて細身の刀を抜いた。深酔いの青白い顔に妖冶な微笑がゆがんでる「行くとも」

ぐんと身をかがめた文七、刀を低く構えて地を這うようにジリジリ爪先にじりに間を詰めて行つた。後年、国定忠治が得意とした皮を斬らして肉を斬り、肉を斬らして骨を斬る剣法俗に蛙の構えという奴。

「ヤッ！」

躍り上つて真向から打ち下した必殺の剣ゆらり、横へ一步よろめいて身をかわした由之丞、相変らず底知れぬ微笑を冷たく口許にただよわせてる。焦つた文七が、

「くたばれ！」

今度は喉もと狙つた捨身の諸手突き。

「ムッ！」

声のない気合と共に細身の刀身が鋭く太刀風を巻きおこし文七の剛刀を巻きかえした。そのときまで草むらに隠れていた千右衛門が後からコッソリ忍び寄り「エイッ」風に唸つた四尺の大刀。伸びは充分、鋸もとで割りつける勢だつたが由之丞の振り向きもせず後へ凭れるような姿勢で突き上げた鞘のゴジリの当身を喰らい他愛なく案山子みたいにころけてしまつた。巷間、噂に聞く剣は下手クソどころか段違いの腕だつた。

七

由之丞に軽くあしらわれて、ようやく淀屋の屋敷を脱した文七は、乳色に明けそめた河原の上に立つていた。不思議と寒さは

忘れていた。河原の上の木橋を足早に通
りかかつて、ふと立ち止つた小さな人影が
ある。

霜の白い欄干から河原を見おろし、
「雁金の親分、江戸巾着切りの面目も骨が
折れたぜ、何処を探しても雲隠れとはヒデ
エヤ——そら、お約束のものの受取つてく
な」

バリリ、欄干から落ちてくる二十五両包
の切餅四つ。

「多すぎるぜ兎公」

下から文七が怒鳴つた。

「親分、手間賃仕事はスリの邪道だ、俺も
筋の通らぬ金は貰わねえことにしたんだ。
江戸の兎はやつぱり江戸が恋しいや、これ
から真直ぐ江戸へ帰りますんで、ご縁があ
つたらまた江戸で——」

手甲脚絆旅支度の兎吉、ちよいと三度笠
を傾けるが早い、みる／＼夜明けの街道
を駆け走つた。

兎吉がスツ飛んで行く江戸の空は、ちよ
らどその時刻、赤穂の浪士が一年九ヵ月ぶ
りの望みを果して泉岳寺へ引き上げる蟹の
朝明けだつたとは二人ともまだ知らない。

(終)

二俣志津子さん宛 お便りを頂きまし
た愛読者へ

早速転送致しておきました故、同嬢より直
接御返事が参つた事です。編集部

地方記者募集

各地の新鮮な探訪記事の蒐集を担当する敏
腕記者を募集します。各種取材に自信のあ
る努力家。略歴及び十枚程度の自作文を御
送付下さい。詳細御返事いたします。

◆懸賞詰將棋新題

1	持駒	飛角金銀
2	星王	
3	歩角	
4	二歩	

○本局ハ中々妙
味深イ作品デス
大橋虚士担当

○正解者全部に記念品贈呈

○ハガキに詰手順を記し将棋係宛へ

○締切は十一月末迄、発表は二月号

次号は大橋虚士先生の 大道将棋の詰
ませ方の 秘法公開を掲載致します。

讀者文藝

【川柳】

矢車草詩

思い切り泣きたい夜なり女の夜
妻若くいそ／＼夜を待ちきれず
聞いてきた知恵で一夜を妻リード
二人して読む本別にマンガ本
あきらめてしまえと次のいゝ話

【短歌】

ヌードフォトに寄せて

二俣志津子

この脚のこののびやかこの肌の君いつ
くしめわれもいとむ
もののおもふ心は松の樹肌さえふと思出の
ありてかなしき
口づけを柔毛のきわにするを待つこの間
心のわれはふるえぬ

大村美郎

夕づけば銀の胸毛をふるはせて

闇まつ鳥の瞳かなしも

☆川柳、俳句、短歌、其の他短文芸をお寄
せ下さい

讀者通信

讀者の交際機関に
御利用下さい

晩秋の候益々御健闘の御様子毎号貴誌に
より拝見致し御喜び申し上げます。唯今発売
中の十一月号のメトミ・ヌードは例の土俵
四股平先生の御指導のもとに写されたもの
でしようか。今後もドシ／＼色々な角度よ
り見たメトミの姿を写真にして頂けたら我
K・Kファンとして大変な喜びです。

(神戸・増田四郎)

小生は奇譚クラブ愛読者の一人ですが、
その内容又はグラビヤは断然他の雑誌を抜
いて美事なものです。それで今度一度ヌー
ド写真の代りに現代美人刺青競集とでも
銘打たれて、幾多美人の真白き肌刺青を
画かれて載せられては如何、腕、肩、背、
乳房、太股とその性の象徴とも言われる刺
青は何をおいても魅惑的なものです。是非
一度このような企画をして頂きたいもので
す。

(長田秀夫)

二俣志津子さん、——この世をばわが世
とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思え
ば、という歌がありますが、私の眼から見
ればあなたは小説を発表して宇頂天になり
友を求めて誇りを分ちたがるうぬぼれの強
い女性としか思えない。知らぬ人々との文
通を好まれるあなたの胸中は知る由もない
が前に書いたような心持での青春期の娘が
するいたづら心でないよう祈りたい

(岐阜 安田金峰)

交際御希望の方は、ドシ／＼遠慮なく通信
をお寄せ下さい。有力結婚交際媒介業者と
提携の上愛読者サービスとして、斡旋致す
予定です。

(讀者係)

裸体美人寫真実費分譲

送料共 一枚 五十円
(切手可) 十枚 三百五十円

好事家垂涎のいろ／＼のポーズを取揃えて
ありますから御申越下さい。
プロマイド紙に焼付けた鮮明なる写真で必
ず御満足されると思います。(代理部)

應募原稿掲載外佳作発表

○油虫の戦慄(神山栄三) ○宿命の糸(尾
上六歩) ○こんと・えろちつく(笹田豊)
○淫囃(津田文吉) ○血に濡れる裸像(湯
裸風太郎) ○せむしと裸女(上村甚吉) ○
長崎の丘(美戸都進) ○終列車の女(杜香
繁) ○乳房地獄(桂川風太郎) ○宿命の女
(南条薫) ○肉体の復讐(泉春樹) ○盛遠
と袈裟御前(高垣栄市) ○怪盗浜千鳥(保
田数馬)

●今後毎月引續いて発表致します。原稿は
原則として御返却申し上げません故御諒承
下さい。

直接購讀者募集

半年分 六冊(送料共) 五百円

(定価値上げの際も据え)

右御支払込の愛読者の方々には特別景品と
して鮮明な裸婦写真三枚一組贈呈します
◎振替又は小替為にて御送金下さい。

奇譚クラブ

第五巻 第十二号
毎月一回 一日発行
定価九拾円

昭和二十六年十一月三十日印刷

昭和二十六年十二月一日発行

編集人 上田庄之助
印刷人 大坂府堺区内菅原通四丁目三〇

發行所 曙書房

振替口座大坂第三四九五六番
電話 堺一七四六番